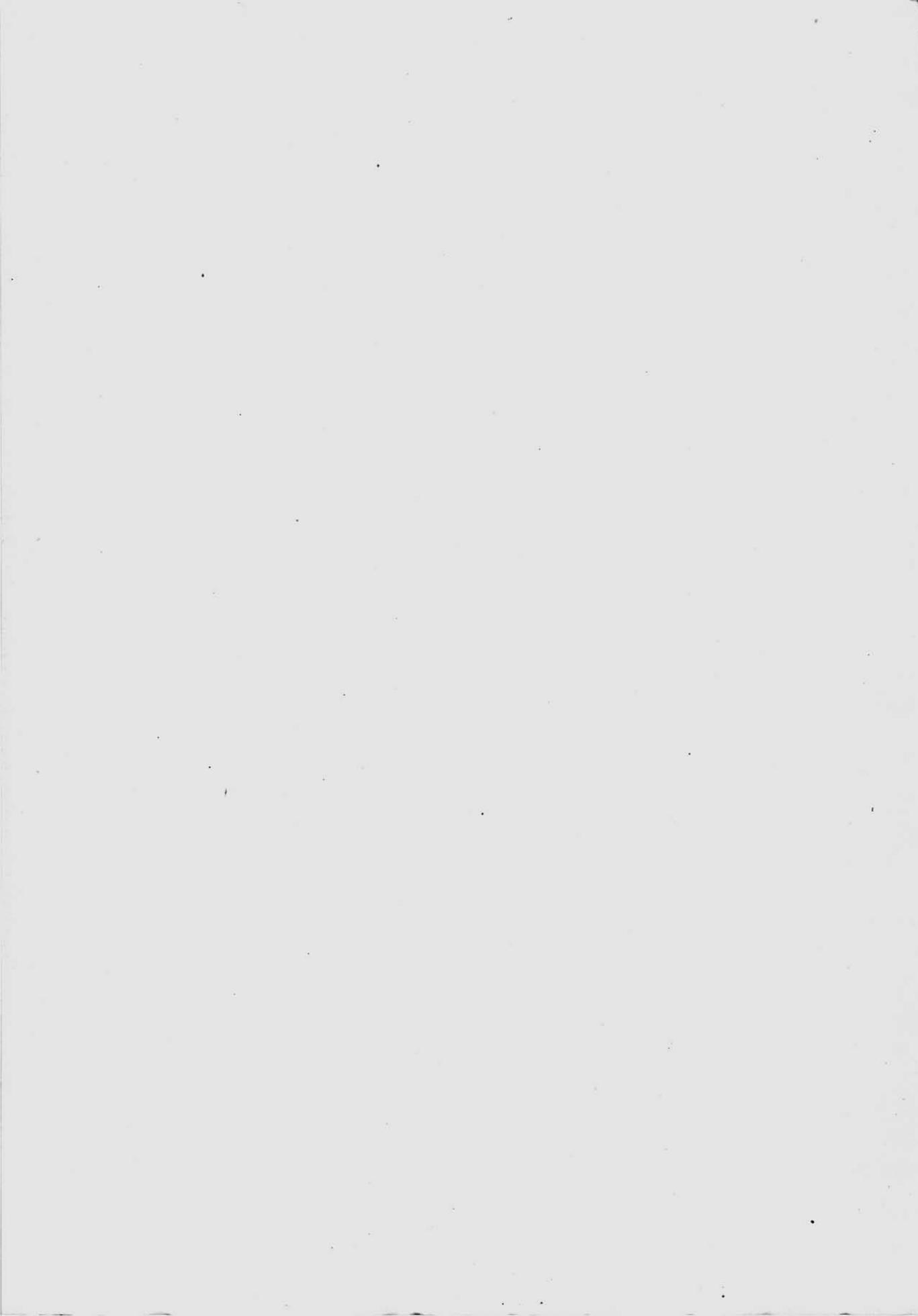


昭和二十六年十月

天理
圖書館

稀書目錄

和漢書之部
第二



天理圖書館叢書第十五輯

天理
圖書館

稀書目錄

和漢書之部 第二

天理圖書館

序

本輯は稀書目録第一輯の刊行後十年をへて成つたものだが、十年といふこの區ざりは、殊更本目録編纂の上に意味をもつものではない。本教の教學施設がその誕生日を十年目ごとにとりたてゝ祝賀するといふ規定にしたがつて、昨秋十月十八日に開館二十周年の祝賀式を行ひ、その際各界恩顧知友の方々にご來館をお願ひし、その席で第二輯の計畫を申しあげたに端を發してゐる。尤も館の本旨からいへば稀書目録の刊行は主たる事業の一つではあるが、ほかにまだ一般書目録、特殊文庫目録の主部がひかへてゐる際本目録を選定したのは上記の事情によるところ——他の主要目録も逐次具體化の途上にあることをこの際お斷り申上げておく。

おもへば比類なき大戦争と、曾て見ない敗戦の鬼哭叫喚の轟きは、あたかもその時期を同じうした本目録内容のあらゆる頁ににじみわたつてゐる。いろいろな意味で、これは歴史的記録ともいへば言へる。だがその滄桑の溷迷も、終戦とともにやうやく落着し、幸ひにして一切が無傷でこゝに所期の内容を収録することをえたの

は、かぎりなきご守護と館内外諸氏の念願の賜にほかならないと思はしていただくことに、昨今南半球のご巡教途上にあられる眞柱さまの一方ならぬご關心とご庇護、それから教内各層のご支援に對し、本目録がいさゝかでも應へるところがあり、且つ江湖の便に資するならば大きな仕合せである。

本目録は昭和廿五年九月末の登録書を最後として九二二點を収録した。様式その他に關してはほゞ第一輯を踏襲したが所收書の分量、目録法の技術においてやゝ第一輯と軌を異にするものがあるのは現下の世情に鑑みたるところで、しかく目録の眞價にたち入るものでないと信ずる。

昭和二十六年孟夏

天理圖書館長 富 永 牧 太

凡 例

一、所收書は日本十進分類法に準じて分類配列し、分類綱目は適宜省略、小分類は改まる毎に○印を挿入す。尙索引に便じて書名の下に追番號を附す。

一、説明は書名・成立様式・卷數冊數・人的關係・裝釘體裁・書名參考・藏書印記・刊記・奥書・識語・見返し・備考の順を追ひ、藏書印記は句點を、刊記以下は改行を以て區別す。但し該當する項を缺きたる場合はもとより、不要と認めたる場合は之を記せず。

一、書名は内題により、内題なき時は外題に従ひ、通稱あるものは専らこれを用ふ。假に題せしは「ハ」印をほどこす。

一、成立様式は書名の下にしるし、刊寫の別、更に勅版・古活字本・五山版・宋版・奈良繪本・丹綠本・朝鮮活字本等に細別す。但し一般整版本には表記せず。

一、卷數冊數は書名の下に記し、刷本落丁ある時は闕の文字を以て表はす。

一、人的關係の項には、著者・筆者・序者・跋者・題辭者・畫者等を含む。之を各著・筆・序・跋・畫等と略し、著者自ら他の目に關する時は、自の文字を加ふるに止む。

一、裝釘體裁の項には、裝釘表紙・見返し・用紙・縦横寸法・巨郭寸法・丁數・行字・畫數を含む。丁數は二冊以上にわたる時は之を省略す。

凡 例

一、書名參考の項には題簽・外題・内題・柱心を含む。題簽は原替の別・所在・體裁・外題の順に述ぶ。外題は寫本・替題簽にありては墨朱等の料を註し、寫本にして墨書の場合は之を略す。内題は書名と相違ある場合のみ之を掲ぐ。題簽・柱心の無きものは全くこの目を缺除し、特に無しと斷はらず。

一、人的關係・裝釘・體裁・書名・參考の各項の各目はその間に空白を置きて區分す。

一、藏書印記は代表的、二に止めて他は掲げざる事あり。

一、刊記・奥書・識語・見返し及びそれに類せしものにして、書誌的關係のものは悉く之を掲ぐ。變體假名は現在通用假名に改める外誤字脱字等すべてもとのままにして改行は「」印を以て之を示し努めて原姿を存せんことを期す。墨書の場合、寫本にありては他に朱青を交へるなど特に必要ある場合の外註せず。

一、以上各項説明の要約又は補足を備考とし、更に本館における請求番號を加へて「ハ」印に括結、末に附す。

一、索引は書名・著者・筆者・刊行者を主に、他は適宜採擇、表音式假名遣五十音順に配列し、書名の下に追番號を以て索搜にあつ。尙書名の下に括弧に入れるは請求番號なり。

一、本目錄の編纂は本館和漢書部において行ひ、主として研究員金井寅之助、中村幸彦、大谷篤藏、木村三四吾これを主導せり。

目次

序
凡例
目次
圖版

總記

圖書及圖書館……………一

百科事彙・類書……………二

叢書・全集……………五

隨筆・雜書……………一七

精神科學……………一九

日本哲學・國學……………一九

中國哲學……………二二

倫理・教訓……………二六

宗教……………二六

神道……………二六

歷史科學

佛 教……………三三

キリスト教……………三三

日本……………三三

上古史……………三三

中古史……………三三

平安時代……………三三

近古史……………三三

室町及安土桃山時代……………三三

近世史……………三三

現代史……………三三

地方史……………三三

朝鮮……………三三

中國……………三三

傳記・叢傳……………三三

日本人叢傳……………三三

中國人叢傳……………三三

皇室—日本	六
姓氏	六
各傳	六
地誌及紀行	六
萬國地誌	六
日本地誌	六
中國地誌	六
南アメリカ地誌	六
社會科學	七
政治	七
古代法制	七
經濟	七
社會事業	七
教育	七
風俗及習慣	七
軍事	七
自然科學	六

工藝	九二
美術	九三
總記	九四
書道	九五
版畫	九七
邦樂及中國樂	九六
演藝・演劇	九八
蹴鞠	一〇一
遊藝・娛樂	一〇二
國語	一〇三
中國語	一〇三
アジャ諸國語	一〇三
英語	一〇四
文學	一〇五

日本文學……………	一〇五
總記……………	一〇五
文學者傳記……………	一〇五
和歌……………	一〇五
上古及奈良時代和歌……………	一一九
平安時代和歌……………	一二五
鎌倉時代和歌……………	一二九
室町時代和歌……………	一三四
江戸時代和歌……………	一四四
現代和歌……………	一四六
歌合……………	一五五
歌謠……………	一五五
謠曲・舞曲……………	一五九
淨瑠璃……………	一六三
俗曲・俚謠……………	一六四
戲曲……………	一六五
平安朝物語……………	一六五
鎌倉時代物語……………	一七五

室町時代物語・小説……………	一七七
江戸小説……………	一八四
現代小説……………	一九〇
文集……………	一九一
書翰文……………	一九六
狂歌……………	一九七
笑話……………	一九七
琉球文學……………	一九九
中國文學……………	一九九
ギリシヤ文學……………	二〇四
索引……………	

圖 版 目 次

第一頁	光嚴院三十六番歌合……………	配列番号 六六九	第九頁	狹衣物語……………	七〇
第二頁	三教指歸……………	一六		あかしの三郎……………	七六
	弘福寺大和國衙宛牒並國判……………	一八〇	第十頁	伊曾保物語……………	九〇
第三頁	おらしよの翻譯(吉利支丹版)……………	一四		日本記素戔鳴尊……………	七五
第四頁	扶桑略記(金勝院本)……………	二〇〇		高屏風くだ物かたり……………	八三
	日本後紀(天文本)……………	三九		嵐無常物語……………	八六
第五頁	後漢書(宋版)……………	三五			
	三遂平妖傳(明版)……………	九〇五			
第六頁	本朝古今銘盡(古活字本)……………	三九			
	野中兼山書帖……………	四〇			
	睡餘墨戲帖……………	四六			
第七頁	古今和歌集……………	五四			
	新古今和歌集(烏丸本)……………	六三			
第八頁	古今和歌集注……………	五九			
	外宮北御門歌合……………	六八			
	源注拾遺……………	七五			
	花鳥風月……………	九			

哥合 題

春風 夏雨
 煉雲 於日
 恩月 誰煙

作者

講師

判者

泉談 漢

一番 養

右 権大納言

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

古 一條

右 一條

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

二番

右 小官相

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

右 権大納言

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

三番

右 春播大納言

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

右 大実女

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

四番

右 女房

しうららねんりうりうりうり
 をれりうりうりうりうり

三教指歸卷上
 乞之起必存由天朗則雲散人感
 則含筆是故錄卦誦篇詞詩楚賦
 動乎中書于紙雖云允聖珠貫古
 今異時人之篤讀何不言志余年
 志學就外氏阿二帝右文學賢伏
 爾鑽仰二九遊聽振而空靈於
 稍息怒絕雖之不勤後有一沙門
 呈余虛空藏開持法其經說若人
 依誦誦此真言一百萬遍即得一
 切教法文義語記神考信大聖之
 誠言望聖誕於鐘磬阿闍大
 龍嶽勤念五州靈河谷不惟嘗
 明星來影遠乃朝帝靈華念一厥
 之巖教煙霞日夕此之者經此流
 米則電幻之欺意起見支離惡賤
 則因果之來不休朕自初我誰能
 係風爰有一步親與轉我以立常
 素新我以靜思孝念思物情不一
 能究異性是故聖者驅大救綱三
 種所謂釋李孔也孰深有謂生
 皆聖說若入一羅河非忠孝復有
 一表錫性則俱成廣大酒色晝夜
 為樂傳戲遊使以三常事願其定
 性陶染所致之彼此而事各自起

三 教 指 歸 一 二 八

神護國寺仍勸奉火以隨
 寬弘三年五月廿日都律師法
 檢校大律師
 判當之法師
 寺主大律師
 上座大律師
 小別當法師
 佛言慈白鳥圖者行換依讚勤以
 个下慈民初有番志以相連結而
 昔家可慈依常年之久依事
 加德令提被勸之文後施入者
 為善代國和已明白也何可
 慈白鳥不倫依不卷一為才
 依他見依法檢武可法依法
 朴步之中為印法以法武依法
 依法步十市印法以法武依法
 心常印武於深山極武於極步
 激仰空於深山極武於極步
 無而天念元影依在空印定法依
 必回空印武於極步隨手可見之
 理入依國和印色依法步日不
 依法步

扶桑略記

朝四家藏書一

神武天皇... 入海... 一校在... 代于... 廿二年... 此北...

五十七年丁... 廿六年... 神武天皇... 其子... 有智... 武德天皇... 存...

扶桑略記 (本院勝金) 二〇〇

日本後紀卷第八

皇紀... 十八年... 廿五年... 廿六年... 廿七年... 廿八年... 廿九年... 三十一年... 三十二年... 三十三年... 三十四年... 三十五年... 三十六年... 三十七年... 三十八年... 三十九年... 四十年... 四十一年... 四十二年... 四十三年... 四十四年... 四十五年... 四十六年... 四十七年... 四十八年... 四十九年... 五十年... 五十一年... 五十二年... 五十三年... 五十四年... 五十五年... 五十六年... 五十七年... 五十八年... 五十九年... 六十年... 六十一年... 六十二年... 六十三年... 六十四年... 六十五年... 六十六年... 六十七年... 六十八年... 六十九年... 七十年... 七十一年... 七十二年... 七十三年... 七十四年... 七十五年... 七十六年... 七十七年... 七十八年... 七十九年... 八十年... 八十一年... 八十二年... 八十三年... 八十四年... 八十五年... 八十六年... 八十七年... 八十八年... 八十九年... 九十年... 九十一年... 九十二年... 九十三年... 九十四年... 九十五年... 九十六年... 九十七年... 九十八年... 九十九年... 第一百年...

日本後紀卷第五... 從心... 給之... 廿六年... 廿七年... 廿八年... 廿九年... 三十一年... 三十二年... 三十三年... 三十四年... 三十五年... 三十六年... 三十七年... 三十八年... 三十九年... 四十年... 四十一年... 四十二年... 四十三年... 四十四年... 四十五年... 四十六年... 四十七年... 四十八年... 四十九年... 五十年... 五十一年... 五十二年... 五十三年... 五十四年... 五十五年... 五十六年... 五十七年... 五十八年... 五十九年... 六十年... 六十一年... 六十二年... 六十三年... 六十四年... 六十五年... 六十六年... 六十七年... 六十八年... 六十九年... 七十年... 七十一年... 七十二年... 七十三年... 七十四年... 七十五年... 七十六年... 七十七年... 七十八年... 七十九年... 八十年... 八十一年... 八十二年... 八十三年... 八十四年... 八十五年... 八十六年... 八十七年... 八十八年... 八十九年... 九十年... 九十一年... 九十二年... 九十三年... 九十四年... 九十五年... 九十六年... 九十七年... 九十八年... 九十九年... 第一百年...

日本後紀 (本文天) 紀後本日 九二二

神人其... 神人以... 神人以... 神人以...

光武帝紀第一下 范曄 後漢書一下
六年春正月丙辰改春陵縣為章陵縣世復
俗役比豐節無有所豫前朝豐節品之被代也辛
酉詔曰佳歲水旱蝗蟲為災散價騰躍言物人
用困之朕惟百姓無以自贖惻然愍之其命郡
國有穀者給粟說文豐節品也易牛蠲算孤獨及篤
癯無家餉貧不能自存者如律人賦律曰六十無
妻律曰無妻者蠲算也律令二千石勉加
循撫無令失職常指揚武將軍馬成等拔奇獲
李憲二月大司馬吳漢拔胸獲董憲龐萌山東

對取七增翰
取善行曰翰
行也五七

贊曰肅宗濟濟天性留情於積石德誠慎體
左丘執文典酌律禮漢書禮志曰禮者
天之經也地之義也民之行也思服帝道弘此長
樹佛館獻歌及章虛寂獻歌謂樂也承訓時
後憲平人富

後漢書紀第三

後正二十字

和帝紀第四 范曄 後漢書四
孝和皇帝諱肇諱法曰肇不與和字同肅宗第四子也
母梁貴人為竇皇后所譖憂卒竇太后養帝以為
己子建初七年立為皇太子章和二年二月壬
辰即皇帝位年十歲尊皇后曰皇太后太后臨
朝三月丁酉改淮陽為陳國楚郡為彭城
國今魯州西平并汝南郡西平縣在州西九里六安
復為廬江郡廬江郡在州西遺詔從西平王美為
陳王六安王恭為彭城王癸卯葬孝章皇帝于

五五二 (版 宋) 書 漢 後

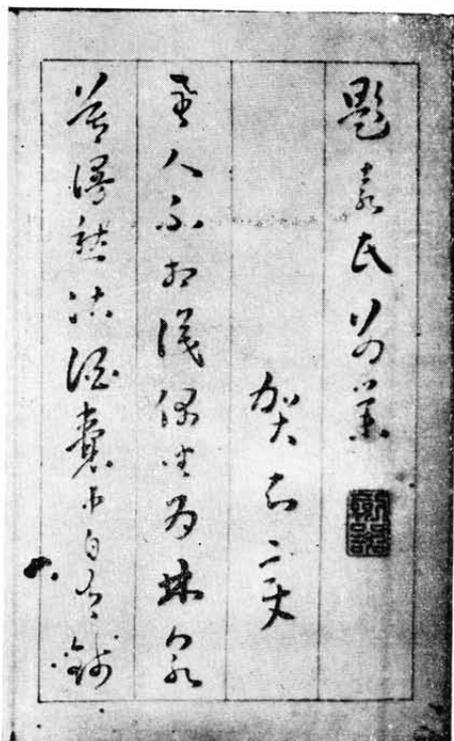


得具州在的人雁肩廣背但兒

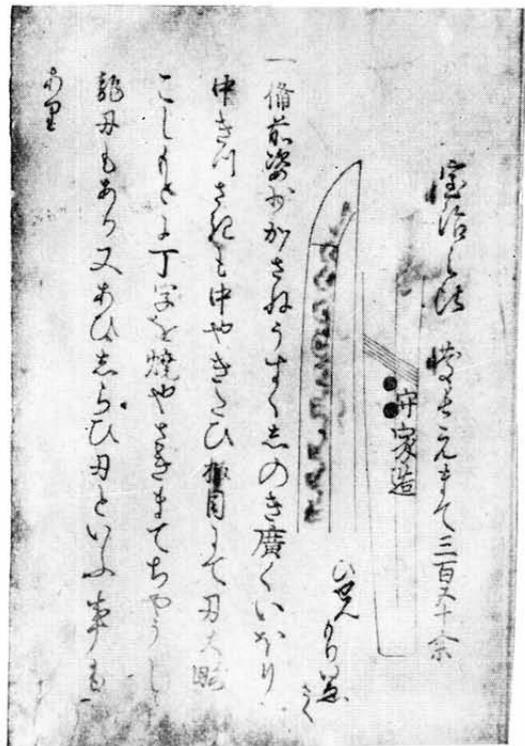
兩臂破鼓响一棹碎鐘鳴是畫照得在云云
禁鈔交加仰雪兒由四合人上此書之可回
白磁花叢登都西日自歷兵行休飯疾一
春未別西日中心高頭馬上破法長一
西蜀皇刀七加行州劍子有史進命是

讀三遷平狀傳題跋
平狀傳一書相傳云元人羅貫中所手
集其書二十四回明王慎備校梓之自馮
猶龍增補四十回本出于也和漢好率
者以舊刻本難得不為憾清張無咎增
補平狀傳引曰王維山先生每稱羅貫
中三遷平狀傳堪與水滸頡頏無咎昔

五〇九 (版 明) 傳 妖 平 遂 三



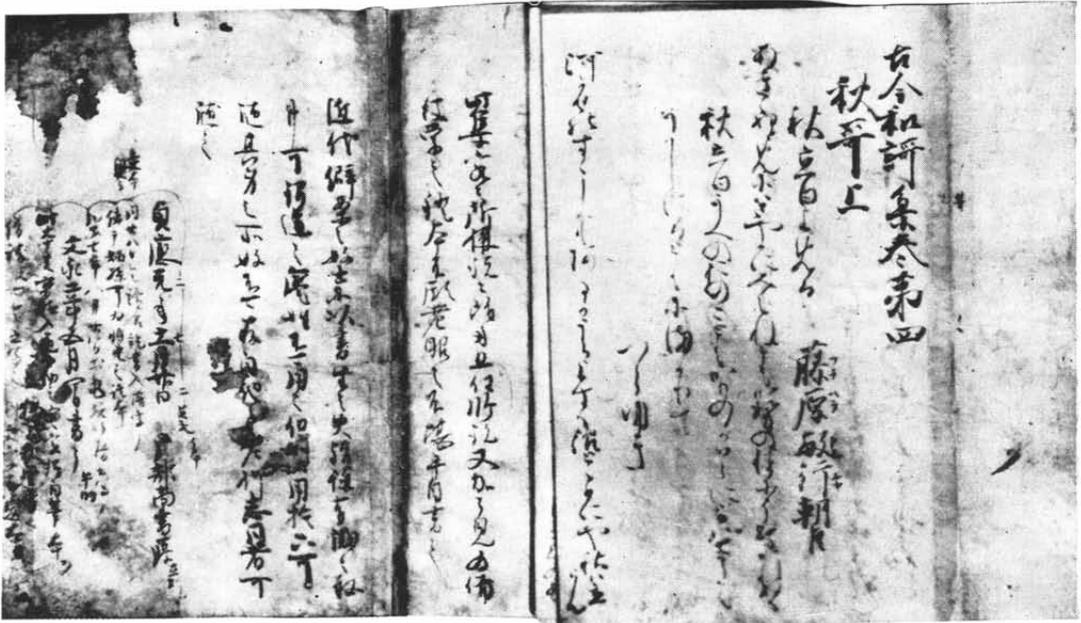
○三四 帖書山兼中野



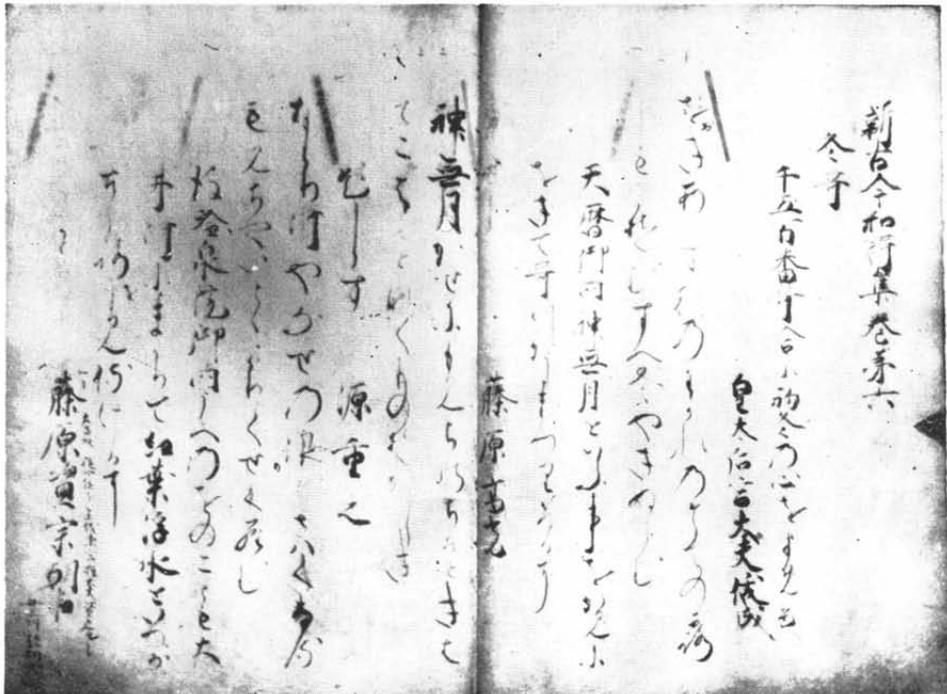
九九三 (本字活古) 畫銘今古軒本



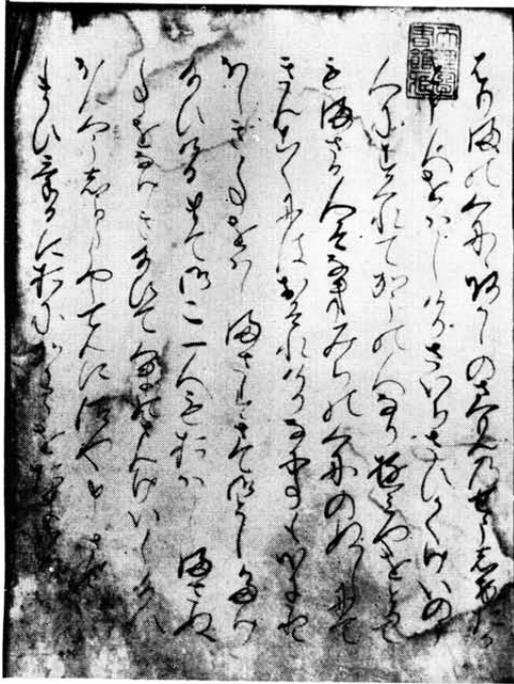
六二四 帖 戲 墨 餘 睡



四七五 集歌和今古



三二六 (木丸鳥) 集歌和今古新



Handwritten Japanese text in a vertical column, written in a cursive style. A red square seal is visible at the top right of the page.

六八七 郎三のしかあ



Handwritten Japanese text in a vertical column, written in a cursive style. A red square seal is visible at the bottom right of the page.

〇七七 語物衣狭



Handwritten Japanese text in a vertical column, written in a cursive style.

〇二九 語物保曾伊



五三七 尊 鳴 菱 素 記 本 日



二三八 り た か 物 だ く 風 屏 高



六三八 語 物 情 無 嵐

總記

圖書及圖書館

奎章閣志 朝鮮活字本 二卷一冊

朝鮮正宗命編 踐阼之八年甲辰仲夏下濬御製序 李福源跋 李徽之跋

黃景源跋 徐命膺跋 金鐘秀跋 袋綴黃色表紙 一尺一寸八分七寸七分

八十丁 四周單邊(但し序は雙邊) 八寸三分五寸九分 有界十行十八字

註雙行 外題左肩墨書名同

第一丁裏(淺葱色刷) 甲辰新編「奎章閣志」内閣活字

識語(表見返しに墨) 同治元年四月日「待教趙成夏」内賜「奎章閣志

一件」命除謝「恩」 直閣臣李□(一字不明)

(甲辰は西曆一七八四年、序の部分に「奎章之寶」の大印あり、銅活字

なり 〇一六一一)

羽田文庫文書 寫 三冊

羽田野(常陸)敬雄著自筆 和袋綴共表紙 八寸三分五寸七分 題簽なし

し 外題中央第一冊「羽田八幡宮文庫奉納書籍勸進帳」第二冊「幡太

文庫奉納書籍受納證書稿 書籍勸進牒端文稿 中外額字出所考稿 合

冊」第三冊「文庫奉納書籍受納請文之控」内題なし、(第一冊)「參河國

羽田八幡宮文庫」(第二冊)「榮樹園」(第三冊)「羽田塾」

赤坂文庫書目土代稿本 寫 四冊

(羽田野敬雄が羽田八幡宮文庫に書籍寄贈の事を諸方に募りし時の文書及び案なり 〇一六一一三)

塙忠韶編自筆 和袋綴 八寸二分六寸八分 溫故堂書室用原稿用紙を用

ふ 四周單邊五寸七分四寸一分 二十行二十二字詰 外題左肩書名同

内題「赤坂文庫書目」

識語(各冊裏表紙墨) チャンブレン氏書籍目錄 豊田吉三郎

(國史雜史等の部見返し) 本書各部門ヲ記スルモ各部ニ配置セス他部

混入ス」ルモノ不少ソハ都合アルニ依レハナリ一時在來ノ」儘ニ書寫

シ不日各部ヲ區別テ順次ヲ改ルモノトス 廿七年十二月

(チャンバルンの藏書志にして塙保己一の孫忠韶に囑して作製せるも

の、欄外に朱筆を以て新に分類を記入す、各冊表紙に收載書目の分類を

掲ぐ 佐佐木信綱「竹柏園藏書志」参照 〇一七一イ)

聖堂書籍目錄附聖堂祭器目錄

寫 四冊(中附錄一冊) 四

和袋綴澁引表紙 八寸八分六寸二分 九行 外題左肩墨「聖堂書籍目

錄」第四冊「聖堂祭器目錄」内題第一冊「拜領書目」第二冊なし第三冊

「聖堂書目録」第四冊なし、「樂亭文庫」「白河」「桑名」「篁園文庫」

(祭器目錄は、諸侯の寄進にかゝるものにして、天明八年を以て終りと

せり、思ふに寛政の頃の藏書目錄なるべし、表紙に朱印「第十文書」と

あり 〇一七一イ五)

浴恩園文庫書籍目錄 寫 四冊

五

和袋綴鶯色表紙 一尺六寸七分 四周單邊七寸七分五分 有界每半葉六行「集古堂」の桂刻ある用紙 題簽左肩白紙「(書名同)上(中、下)」第四冊題簽なし外題なし 内題「浴恩園文庫書籍」第四冊「浴恩園文庫集古堂法帖目錄」

(松平定信の藏書目錄にして天文地理より儒書外夷に至る二十七に分類せり、ま、「老公御筆表題」などある老公は定信なり ○一七一三)

書籍目錄 一冊

六

和袋綴紺色表紙 五寸二分七寸一分 百四十六丁 四周單邊三寸二分五寸五分 有界十一行 外題なし 内題なし

識語 (表紙の貼紙に小山源治筆) 書籍目錄?「寛文九年刊?」延寶初?從吾所好「日本圖書館雜誌」二十号二十八頁参照

(表見返し同筆)有界十一行本「本書ハ寛文十年版ナラザル証ハ」俳家大系圖ニ書籍目錄を擧げて「若竹集幸和著述とあり寛文十年 印行」本書ニハ其書目見エザレバ恐クハ其以前ノ」出版ニ係ルモノナラム」

寛文末延寶初板從吾所好四十八丁林若樹君本ニ同シ (圖書館雜誌第二十號井上和雄「江戸時代的一般書目に就いて」は本版を寛文九年頃刊とせり、書中小山源治筆朱書補添書目多し ○一九一七)

百科事彙・類書

伊呂波字類抄 寫 十卷十冊

七

和袋綴肌色表紙 九寸六寸四分 八行 題簽左肩書名同但し一冊目判脱、「桑名」「樂亭文庫」

奥書 (第十冊) 右字類抄十冊以正本寫之「一校了皆享保十九年甲寅歲」仲夏上旬玉碎奥平廣業

(奥平廣業筆本の轉寫、御手文庫十卷本と大差なし、集古十種の反古を以て表紙の裏打をなせり ○三一七一)

下學集 寫 二卷二冊

八

文安元稔關逢因敦閨朱明林鐘下濼東麓破衲序 和袋綴改裝栗皮色表紙 上九寸二分五寸九分 下八寸八分五寸七分 上五行註雙行 下六行註雙行 外題なし「本主豊久」(上、墨)「東大寺□□院」(上、墨)「山邊梅窓豊重(花押)」(上、墨)「重祐」(下、墨)「朝倉藏書」「光日」

奥書 (上卷末) 明應八年己九月十一日山城國相樂「郡於當尾中殿書寫之 右筆五十七(以下一行墨消)

(取合本、上は奥書の明應八年寫なれど下はや、後の寫なり、刊本に比して語彙少く順序を違ひふり假名の差異も多し、原姿を察し得べし ○三一—一四五)

古事類苑目錄編次愚案 寫 一冊

九

横須賀安枝著自筆 和袋綴改裝替表紙 用紙裏添紙あり 九寸五寸七分 原表紙共十二丁 八行 外題なし 原表紙外題中央書名同 内題なし

(編纂員安枝が明治十四年に主宰小中村清矩、佐藤誠實及び同僚松岡明義、石井小太郎、野瀬胤正、佐野卓に對して示したるもの、小中村返答二丁、佐野同三丁あり、他の諸家も附箋を以て意見を加へあり、返答には又安枝の考へを附箋す ○三一—一—一九)

節用集 草書本 二卷二冊

一〇

和袋綴改装柿澁色表紙 九寸六分六寸九分 上卷六十九丁下卷七十二丁 三周單邊縱七寸 七行草體約十三四字 題簽左肩紙外題なし 柱刻「節用集上(下)(丁數)」

(上卷「伊」乾字に初まり「久」、下卷「也」より「南瞻部州大日本國正統圖」に至る、下卷五十六丁より六十三丁ウ三行「分毫字樣、證疑ノ部」まで楷書、慶長頃刊にして覆刻版、下卷欠丁の如く見ゆるも他本も同様故原形なるべし ○三一—一—一三)

丹鶴類書 寫 二卷二冊 闕

一一

和袋綴改装替表紙 九寸二分六寸二分 四周單邊六寸四分四寸二分 有界十行 題簽左肩外題なし 原表紙外題左肩「丹鶴類書卷一(三)天地部一」

(卷一天部一・卷三地部一のみ、日本古典の用語を天部にては日月蝕星雲の如くに分類してその用例をあげたるもの、丹鶴とあれば紀州新宮水野家に於ける編なるべし、ま、朱筆追加あり ○三一—一—二一)

二 鉢節用集 三卷三冊

一二

和袋綴憲法色表紙 四寸七分七寸一分 四周單邊三寸八分六寸二分 有

界十二行 外題朱書「節用集」(下に貼紙ありて「一」「二」「三」) 柱心「節用集上(中、下)(丁數)」

刊記 (卷三末) 寛永三年六月日 嘉久開板

識語 (卷三裏見返し) 朔菴 [玄岫] (黒印)

(各冊裏見返し) 尾州犬山下大和町「小寺氏」三冊之内

梅香にのつと日の出る山路哉

(上卷「乾」字に初り伊より禮、中卷曾より左、下卷幾より「廿四節并漏刻」に至る ○三一—一—一)

一 中曆 寫 五卷五冊 闕

一三

和袋綴澁引表紙 九寸五寸八分 七行 外題中央原表紙左肩 「一中歴

二(一六)」 扉左背書名同下に内容の目を掲ぐ、「南都二条家文書寄贈

者柳生彦藏」

奥書(卷二) 弘治三年丁十二月六七日兩日際写之寫本」修南院許可也廣

橋一位兼秀卿任槐以後」九月初比被入道云々 近年不慮被所持云々於京都

毛」他本一向不流布云々仍作者不知云々披見之処」每事爲大切之秘抄之間

任初一念勵遲筆功者也」自見之外曾不可許他見矣」權僧正實曉廿九

(卷三) 弘治三年丁十二月九日之際写之本書者」廣橋家之本從修南

院被借下之年内可」返之由被相談之条一見之処爲大切之秘抄之間以」

惡筆兩日写之定而書写之誤可有之者也写本又不審」非一愚昧之際每事

任本書畢重而可勘直之」 權僧正實曉廿九

(卷四) 弘治三年丁十二月十一二兩日之間頓書寫之」云惡筆云燈下

旁以透写本之事可爲繁多者也」写本廣橋家不慮被感得之由被申云」修

南院」借下之旨物語不願憚令借写之秘藏」と」權僧正實曉廿九

(卷五) 弘治三年^巳十二月十三日写之廣橋家之本^令電覽之條不願

惡筆頓寫之早定而越度巨多^{可在之者也}享祿之一乱諸記令失墜之間大

切至極之也写本則修南院江返之記^{權僧正實曉} 廿九

(卷六) 弘治三年^巳十二月十五日廣橋家之本修南院江^{借被下之間令}

借用写之急速仁可返上之由被申條^{以惡筆令頓書定而謬可有端多者}

也^{權僧正實曉} 廿九

(二一六)の五卷、「寶永二年二條家舊記目錄」に「二中歴第二、第三、

第四、第五、第六、同人(實曉)筆 五冊」と見ゆ、室町末期の轉寫、實

曉は藤原季孝の子にして興福寺光明院主 ○三一—一三三)

和名類聚鈔 二十卷五冊

源順著 和袋綴縹色表紙 八寸七分六寸四分 四周單邊七寸五分五寸七

分 十行 題簽左肩雙邊「和名類聚鈔二(一九十)一(一五)〔冊數を示

す一—五は朱〕内題「倭名類聚鈔」柱刻「和名卷之一(一廿)〔丁數)」

刊記 書林大阪心齋橋筋願慶町澁川清右衛門

奥書 (第一冊裏見返し朱) 文政九年二月廿八日校合早 豊村

(第二冊末朱) 文化三歲次甲寅年以鈴屋本比校了 伴信友(花押)

(第三冊末朱) 文政九年借我友伴州五郎信友之校書「自四月十六日至

七月十九日書寫校正終」中山彌助美石

(第四冊裏見返し朱) 文政九年^丙三月ノ末ヨリ四月十五日マテニ終

此居入ノ中ニ信友ヲ伯友ト作ルハ美石カシワサ也伯ハ信ノ「古字ナレ

ハカキヤスキニ從ヘル也」中山美石

(第五冊末朱) 安永二年癸巳十二月十二日以活版本校合之附異是也同

八年己亥十二月十日以古写本再校合畢 木居宣長(花押)

寛政元年己酉九月十日伊勢松坂於旅宿以本居大人本校合畢

同十月九日校合畢 小國秀穂

同二年戊戌十月三日校合畢 石塚龍鷹

文政六年^癸正月二十日校合畢 高林道秋良

同九年^丙四月十日以伴州五郎信友本校合畢 中山豊村

識語 (第一冊見返し) 三河國吉田藩 中山氏

(補紙附箋等にて朱墨の書入多し) ○三一—一五)

新編事文類聚 古活字本 二百二十一卷目六卷 六十二冊 一五

祝穆(宋)編 富大用(元)補 淳祐丙午臘月望日祝穆自序 和袋綴香色

表紙 九寸五厘五寸六分 四周雙邊六寸九分五寸四分 有界十二行十九

字 外題左肩墨「事文類聚一(一六)」「事文類聚一之三(一—二百廿之二

百廿一大尾)」内題「新編古今事文類聚總目」「新編古今事文類從目錄一

(一六)」「新編古今事文類聚卷之一(一—二百二十一)」柱刻「事文目錄

一(一六)(丁附)」「事文一(一—二百二十一)(丁附)」「柳外園藏書印」

(元和中古活字本にして活字は勅版皇朝事實類苑に類す、表紙右側に内

容卷數の見出し墨書あり) ○三一—一五)

新刊明解音釋校正書言故事大全

明版 十卷五冊 一六

胡繼宗(宋)編 陳玩直(明)明解 唐袋綴改裝丹色行成表紙 七寸七分四

寸五分 四周單邊六寸四分四寸 有界十三行二十七字註雙行 替題簽左

肩白紙墨「書言故事」二(三之四―九之十) 目錄之内題「新刊註解

標題書言故事大全」柱刻「校正書言」(一十)卷(丁附)「京極之印」

「九窩秘玩」「原田貞雄」

刊記 皇明歲次甲戌黃氏仁和堂校正重刊

(仁和堂は卷頭に書林「黃衢亭重刊」ともあり、墨朱藍などの點あり

〇三二―一三)

新補彙語

朝鮮活字本 五十九卷付目錄 十五冊

一七

金指(朝鮮)編 癸巳自序 歲在甲子首夏序に關する識語 袋綴九寸五寸

七分 四周單邊六寸九分四寸八分 有界十一行三十字註雙行 外題左肩

墨「彙語」柱刻「彙語目錄(丁附)」「彙語卷之一(一五十九)(丁附)」、

「洪文容印」「洪良厚印」

(癸巳は孝宗四年―西曆一六五三―なり甲子は西曆一七四四年か 〇三二―一四)

太平廣記

明版 五百卷附目錄十卷 四十七冊

一八

李昉(宋)等奉勅撰 談愷(明)校刊 秦汴・強仕・唐詩校 李昉太平興國

三年八月十三日上表 嘉靖丙寅正月上元日談愷序 唐檜皮色表紙 八寸

六分五寸六分 四周單邊六寸五分四寸九分 有界十二行二十二字 題簽

左肩雙邊書名同下に墨にて冊數及び卷數を示す 目錄は書名のみ 柱刻

「太平廣記表」「太平廣記目錄一(一十)卷」「太平廣記卷第一(一五百)」、

「高井田百濟山長榮寺藏」

(目錄、卷百五十一―百六十、百六十五、百六十七―百七十五、四百六十一―四百七十、四百八十一―四百八十五、以上補寫たゞし補寫も新

舊二通りあり「日本訪書志」卷八參照 〇三二―一七)

叢書・全集

橘守部稿本集

(第一輯所載橘守部稿本集の追加たるべきもの七部を收む)

〔古今和歌集註〕

寫 二卷 二冊

一九

橘守部著自筆 文化十四年九月七日自序 和袋綴黃色表紙用紙薄様 八

寸八分六寸三分 外題左肩「古今倭調集上」「古今倭歌集下」内題なし

「椎本文庫」等

(序に云ふ所によれば數回斷續して古今集を淨書し、契沖の餘材抄真淵の打聽宣長の遠鏡の説を上部及び行間に抄寫し、なほあきたらぬは「庭云」として自説を加へたるものなり、書名は守部全集首卷小傳に題する所による 〇八一―一三)

三十六歌仙歌

寫 一帖

二〇

橘守部筆 折本白茶色布表紙 九寸七分四寸一分 每半葉二行 題簽左

肩白紙自筆書名同 内題なし

奥書 (末に)此三十六歌仙のうたは中「むかしの人の探めるなり今」

世に記せるとは異なるうた「これかれ見ゆ其歌必ずみな」よしとも

あらされと古きニ」よるかた正しからんとてしたかひ」てしるす

天保十三年四月 守部

(法帖として書せるものなり 〇八一―一三)

待問雜記 寫 二卷一冊

二

橘守部著自筆 和袋綴深縹色表紙用紙薄様 八寸四分六寸 百五丁 題簽中央短冊外題なし 内題書名同、「椎本文庫」

(上下合冊、内容橘守部全集卷十二所收 ○八一—一三)

長歌撰格稿本上 寫 一冊 闕

三

橘守部著自筆 和袋綴縹色表紙用紙手習故紙の裏 九寸三分六寸五分 四十二丁 十行 外題なし 内題書名同

(橘守部全集第十一所收長歌撰格には上卷五十頁第十二行までに相當する部分にして以下を闕く、「長歌撰格」一五〇七参照 ○八一—一三)

當用新撰往來 寫 一帖

三

橘守部筆 折本薄焦茶色布表紙 七寸五分四寸六分 每半葉三行 題簽左肩白紙外題なし

(法帖として草體に書せしもの、末に「字日元輔」「池庵」の二印あり ○八一—一三)

花笥箋 寫 一冊

四

橘守部編自筆 和袋綴薄勝色表紙 七寸九分五寸七分 四十八丁内墨付三十九丁 十三行 外題左肩「花笥箋 古葉」内題なし、(唐獅子の印)記あり

(守部の雜記帖にして本居氏答問錄・久老病床漫筆などの抄記もあり ○八一—一三)

蒙古諸軍記辨疑 寫 五冊

二五

橘守部著自筆 和袋綴白茶色表紙 八寸九分六寸四分 十行 外題左肩「蒙古軍記辨疑」内題第一冊「蒙古諸軍記辨義」第二冊「辨義」を「辨疑」に訂し以下の冊「辨疑」に従ふ

奥書 天保十年正月十九日

(第一冊内題の下に「橘守部草」とあり橘守部全集第六所收 ○八一—一三)

栗田土滿雜集

(土滿手録本稿本二部を収めて第一輯栗田土滿雜集の追加となす)

古本催馬樂 寫 一冊

二六

栗田土滿筆 和袋綴砥粉色表紙 九寸二分六寸四分 三十一丁 六行 題簽左肩剝落外題なし 原表紙外題左肩書名同 内題「催馬樂抄」、「三階酒屋藏書之印」「栢園私印」

奥書 安永十辛 丑二月廿二日 栗麻須計寫

(初丁「催馬樂譜 堀川右大臣殿流 不可他見藤大納言寫之」「堀川右大臣殿大宮太臣殿按察使大納言皆此人々次第所傳也」本文末「天治二年春三月付家説移野了口傳已秘藏也不可有外見歟(下略)」とあるもの、寫し ○八一—一五)

玉鉾百首解 寫 一冊 闕

二七

栗田土滿著自筆 和袋綴改裝澁紙表紙 九寸四分六寸三分 十七丁 題

發後補左肩「玉銚百首」内題なし

(本居宣長著「玉銚百首」の註解書、その第三十五首までありて以下缺
〇八一―イ五)

南浦文集

古活字本 三卷 一冊

二八

文之著 和袋綴澁紙表紙 九寸五分六寸五分 四周雙邊七寸四分五寸二分
十行三十字 柱刻「南浦文集上(中・下)(丁數)」外題なし、「牽舟文庫」外一印

刊記 寛永乙丑仲秋四條寺町校正刊行

(〇八一―イ七)

木村正辭雜稿

(木村正辭稿本手録本書入本等を收む)

愛猫ノ説

寫 一冊

二九

木村正辭著書入 和袋綴丹色表紙 九寸一分六寸五分 四周雙邊六寸八分
五分七分「民法編纂局」の十行罫紙 三丁 題簽左肩雙邊書名同
識語 (表紙右肩) 木村博士手澤本

(小右記枕草紙を引きて猫の事を記す、朱筆訂正あり 〇八一―イ九)

おふおほす考

寫 一冊

三〇

木村正辭著自筆 和袋綴改装堅紙表紙 八寸二分五寸八分 四丁 十行
外題中央書名同 内題なし
識語 (表紙右肩) 木村博士自筆稿本

(生・令生、負、仰、課につき記す 〇八一―イ九)

女郎花及蘭考

寫 一冊

三一

木村正辭著自筆 和袋綴改装堅紙表紙 八寸二分五寸五分 三丁 十行
外題中央書名同 内題(朱)「七草考」
識語 (表紙右肩) 木村博士手澤本

(卷頭朱)七種考承前 文學博士木村正辭十一月三十一日朝送

(朱筆訂正多し 〇八一―イ九)

蠶貝考

寫 一冊

三二

木村正辭著自筆 和袋綴改装堅紙表紙 八寸三分五寸九分 四丁 十行
外題中央書名同 内題(朱書)「蠶貝」
識語 (表紙右肩) 木村博士手澤本

(卷首右上、朱)別録ニ寫

(古事記蠶貝比賣の蠶字につき考證せり、文中朱の書入訂正多し 〇八一―イ九)

刻本續日本後紀復舊

寫 一冊

三三

木村正辭著自筆 和袋綴縹色表紙 二寸五分五寸三分 十二行 題簽左
肩書名同 内題なし

奥書 右續日本後記溫故堂所藏以立野春節原本一一比較焉

(右奥書の次に「書續日本後紀後」として明曆戊戌孟陬穀旦立春節の跋
を附す 〇八一―イ九)

胡互説 寫 一冊

三四

岡本保孝著 木村正辭筆 和袋綴堅紙表紙 八寸四分五寸八分二丁十行 柱刻「大學校」とある片面五行罫紙 外題中央書名同 内題「互」識語 (表紙右肩) 木村博士手澤本

(胡互の文字學的論考、卷末「岡本保孝」とあり 〇八一—イ九)

上古史綱要 寫 一冊

三五

木村正辭著自筆 和袋綴堅紙表紙用紙「文部省」の十行罫紙 八寸二分五寸六分 二十七丁 外題中央墨「上古史講話」の「講話」を「綱要」とペン書訂正せり 内題「上古之史」

(表紙右肩「木村博士自筆稿本」本文首「上古之史 第二世期」とあり 神武天皇東征より垂仁天皇崩御に至る、次て文學度量姓氏官位外交の目を立て、述べ、朱書加筆附箋多し 〇八一—イ九)

轉用字訓例 寫 一冊

三六

木村正辭著自筆 和袋綴共表紙 八寸五寸五分 十四丁 外題左肩書名同

識語 (包袋左肩) 木村正辭博士稿本轉用字訓例「洋々社誌艸」(地名に於ける轉音の例を集録せしもの、包紙右下の「雜考説叢」とある四字を抹消す 〇八一—イ九)

孟子攷 寫 一冊

三七

木村正辭書入 和袋綴茶色表紙 七寸九分五寸五分 三丁 四周單邊五

寸六分三寸九分 十行 題簽雙邊左肩書名同 内題「孟子ヲ經ニ列シタルハ宋以來ノナナル事」

識語 (表紙左肩) 木村博士手澤本

(朱書を以て木村正辭の書入訂正あり 〇八一—イ九)

呼名考 寫 一冊

三八

木村正辭著自筆 和袋綴改装堅紙表紙用紙西洋紙 七寸九分五寸四分 八丁 七行 外題中央書名同 内題朱「人の呼名に就て」

識語 (表紙右肩) 木村博士自筆稿本

(本文朱書訂正書入多し 〇八一—イ九)

清水光房雜稿

(光房の稿本手録本及び稿本の寫など五部を收む)

九曲折考 寫 一冊

三九

清水光房著 和袋綴堅紙表紙 八寸四分五寸八分 二丁 十行 外題左肩書名同 内題「つゝらをり」、「竹柏園文庫」

奥書 (本文末) 天保十三年寅五月十三日

この九曲折考は清水光房の考也井上淑蔭にかりえて寫置く 嘉永三戊年六月 (〇八一—イ二)

信實朝臣事跡考 寫 一冊

四〇

日下部百枝著 清水光房筆 和袋綴堅紙表紙 八寸二分五寸七分 十行

罫紙二丁 外題左肩書名同 内題「嘉永三戊のとし夏四月源寂棗に信實朝臣の卒年をとはれしに答ふるの記」下に「目下部百枝」とあり

識語 (表紙右肩) 清水光房稿本 (「稿」をペンにて「手寫」と訂正す)
(〇八一—一—)

まくりでまふりで考 寫 一冊

清水光房著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸二分五寸六分 七丁 十行 外
題左肩書名同 内題「まくりでまふりで」

奥書 弘化四年八月十日 清水光房
識語 (表紙右肩) 清水光房稿本
(〇八一—一—)

若駒考 寫 一冊

清水光房著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸二分五寸八分 十行 罫紙三丁
外題左肩書名同 内題「若駒赤駒我駒」、「竹柏園文庫」

奥書 嘉永二年五月十日夜稿
識語 (表紙右肩) 清水光房稿本
(〇八一—一—)

和歌無底抄考 寫 一冊

清水光房著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸三分五寸八分 五丁 十行 外
題左肩書名同

(和歌無底抄の偽書なる事をいふ 〇八一—一—)

佐佐木弘綱手録本集

(弘訓の編著にして佐佐木弘綱の手録にかゝるもの五部を収む)

足代弘訓著書目録 寫 一冊

佐佐木弘綱編自筆 和袋綴堅紙表紙 九寸五分六寸七分 二十四丁 外
題左肩書名同 内題なし 三部を合綴す内容次の如し
第一冊 表紙なし 「宮内省」の柱刻ある十行二十字詰原稿用紙二丁
巻頭に「足代翁著書目録」とあり

第二冊 共表紙 表紙共十二丁 外題中央「足代先生著述」左傍に「国
史類聚目録 萬葉集類語目録 歌集類語目録」右下に「驛居藏」とあり

第三冊 共表紙 表紙共十一丁 外題左肩「拙著目録」右下に「弘綱
藏」中央朱にて「〇わが寫しもてる印也」表見返しに「新見伊賀守正
路朝臣御傍御取次の節御尋によりてさし出ひ書目也」とあり
(第三冊巻首に著述目録を新見正路に呈する由の弘訓口上書、巻末に正
路の臣村尾良治より弘訓宛書狀を録し更に「此目録以後之著述」を附記
す 〇八一—一—)

源氏物語類語 寫 一冊 闕

足代弘訓著 佐佐木弘綱筆 和袋綴共表紙 八寸三分五寸八分 表紙共
十六丁 八行 外題左肩書名同 内題なし、「竹柏園文庫」「先君子手録
本男信綱藏」

(表紙に「らりるれる 弘綱藏」の文字あり、源氏物語のその行に屬す
る語の用例をあつめしものなり 〇八一—一—)

續日本紀稱呼之事 寫 一冊

四六

足代弘訓著 佐佐木弘綱筆 和袋綴堅紙表紙 八寸二分五寸八分 原表紙共九丁 外題左肩書名同 原表紙外題左肩弘綱筆「續日本紀に前代の天皇を稱し奉る種々の例」内題なし、「竹柏園文庫」「先君子手録本男信綱藏」

(原表紙に「竹柏園雜錄」又「時(弘に改む)綱藏」と墨書あり) ○八一—一三三

新葉集伊勢祠官作者略傳 寫 一冊 四七

足代弘訓著〔佐佐木弘綱〕筆 和袋綴共表紙 八寸二分五寸七分 表紙共十一丁 七行 外題左肩書名同 内題なし、「竹柏園文庫」

奥書 (本文奥墨) 後醍醐天皇の御宇以後都鄙兵乱伊勢兩宮も度々兵火の災にかゝり舊「記焼失仕ひ故元弘建武より明德」應永の頃迄の儀はすへて闕疑仕「ゆ事のみ御座ひ」 足代權大夫弘訓

(裏見返しに朱) 右西丸御側御用御取次新見伊賀「守正路朝臣の御間によりて草稿」せり于時天保四年癸巳六月「なり」足代權太夫弘訓

(○八一—一三三)

南朝公卿補任偽撰考 寫 一冊 四八

足代弘訓著 佐佐木弘綱筆 和假綴共表紙 八寸三分五寸八分 表紙共六丁 八行 外題左肩書名同 内題「南朝公卿補任偽書たる證據とも」

「竹柏園文庫」「先君子手録本男信綱藏」

(文政四年七月弘訓著のうつしなり) ○八一—一三三

横山由清雜稿

(横山由清の稿本手録本書入本等三十六部を收む)

赤染衛門集 寫 二冊 四九

赤染衛門著 横山由清筆 和袋綴空色表紙 七寸八分五寸四分 十行 題簽左肩書名同、「月の舎」「竹柏園文庫」

奥書 弘化四年四月廿八日書寫終業 由清

識語 (表紙右肩) 横山由清手録本

(「貞享五戊辰年孟秋吉旦 武陽書堂 松葉清兵衛開板」本を底本として書入校異せり) ○八一—一三五

朝忠集 寫 一冊 五〇

藤原朝忠著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 八寸六寸五分 七丁 十行

外題左肩書名同、「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 借請右大弁入道之本「建長六年十二月廿四日申刻書写之同夜」於

燈下校了 在判

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本

(○八一—一三五)

海人手古良集 寫 一冊 五一

藤原師氏著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙用紙薄様 八寸六寸七分 八

丁 九行 外題左肩書名同、「竹柏園文庫」

奥書 (墨) 右一冊以定家卿自筆写之本「或假字眞字不逮一字或行數」

等如本令書兩度令校合早雖「然猶不審之事多之可尋證本有哉
安永十年丑春三月以江田氏本令一校早

天明壬寅秋九月以江田氏本令再校早

(朱) 慶應二年九月廿九日以一写本校合了 横山由清(花押)

識語 (表紙右肩) 横山由清翁校本

(「右一帖以御文庫之本書寫之畢可備證本者也 文明二年六月 大外記

中原 正保四年霜月下旬書寫之畢 藤原朝臣」と終丁上欄に由清朱書せ

る奥書を有する一本によりて朱書校合す ○八一—一五)

右大臣師輔集 寫 一冊

五二

藤原師輔著 横山由清書入 和袋綴沓色地葵唐草模様雲母引表紙用紙薄

様 八寸六寸六分 十三丁 九行 外題左肩「右大臣師輔集」内題「右

大臣師輔公集」「竹柏園文庫」外一印

奥書 嘉永癸丑秋以丹鶴叢書本一校了

横山由清

同年初冬念二日以井上文雄藏本校合了

識語 (表紙右肩) 横山由清翁校本

(近世中期の寫本に丹鶴叢書本、井上文雄本との校合を書入す ○八一

—一五)

うつば物語目安 寫 一冊 闕

五三

横山由清著自筆 和袋綴縹色表紙 二寸八分六寸 空色十三行野紙五十

一丁 外題左肩書名同 内題なし、「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁稿本

(阿行より佐行までの零本 ○八一—一五)

櫻雲記 寫 一冊

五四

横山由清筆 和袋綴黄色表紙 七寸七分五厘五寸五分 八十八丁 十一

行二十四字 題簽左肩書名同、「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 (櫻雲記下卷) 一本奥書云「櫻雲記三冊者南朝三部書之」其一也

以藤原美樹藏本臨模「焉尋以平朝臣古筆本校訂」一過畢

寶曆九年己卯二月廿八日「梅橋散人俊判

右櫻雲記得山岡俊明之校本」写之畢

明和七年庚寅正月十一日

伊勢平藏貞丈識

弘化戊申陽月既望書寫卒業 回回

嘉永三年十月以一本校合了

同 五年八月以南方紀傳校了

(次に南方紀傳卷第三、南帝系圖、異本朝皇胤譜、南朝勤仕交名を合
綴す巻尾に)

書南方紀傳後「南方紀傳五卷不知何人之所著也不佞所閱在二本」一則

此本也一則題曰南朝紀事書以平假名分爲二「冊從元弘元年至弘和二年

爲上卷從弘和三年至長祿二年爲下卷而皇譜載在卷首異本南朝皇胤譜

及「南朝勤仕人名不載之而此本天授元年同二年有闕」文今以彼本補之

且文字間有異同者參互而訂正之」當以此本爲全書矣

昔」 已上南方傳第五卷未所載校合之次寫了

歌仙集補 寫 三冊

五五

横山由清著自筆 山川眞清校合 和袋綴濃緑表紙 九寸六寸三分 三周

雙邊一周單邊六寸八分四寸九分「垂柳園」の柱刻ある十一行罫紙 題簽
右肩色紙書名同 所收歌仙の名を題名に併記せり 内題なし、「月の屋」

「竹柏園」外一印

奥書 (中卷墨) 安政六とせ卯月十五日黒川春村の藏本をかりて校合す

横川由清

春村本奥書寛政享和元年八月九日夜亥刻燈下写畢 行年六十八歳 橋
長純書

(朱書) 弘化二年五月廿一日一校了 眞清

本願寺本 難波家本

安政二年六月十九日廿日「再校了同廿三日三校了

識語 (上册卷頭朱)。本願寺本 水野越州所藏。難波家本 眞清藏

(同表返し朱) 眞清矣夫木抄に三十六人家集に引たるに今の世の本
ともにもれたるかおほしいま所見おの／＼この本に補ふ 未訂

(正保刊本・古本・江田世恭・豊前本・所藏家本等を以て校合せり) 〇八一—イ
一五)

賀茂保憲女集 寫 一冊

五六

賀茂保憲女著 横山由清筆 和袋綴苔色表紙 七寸八分五寸五分 二十

八丁 扉一丁 十行 題簽左肩書名同、「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 (墨) 賀茂女保憲女

私云哥員數百十六首^{云々}而二百餘首在之如何」以他本可校合哉

(墨) 弘化四年六月廿七日書寫早

(朱) 同廿八日一校之次注付愚意

(〇八一—イ一五)

唐錦八寫繪 寫 一冊

五七

藤原維佐著 横山由清筆 和袋綴縹色表紙 七寸八分五寸五分 三十一

丁 十行 題簽左肩「うつしゑ唐錦八之卷全」「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 右唐錦十三卷(中略)は黄裳閣の喬松子か妻藤原の維佐女の撰

へる書也」(中略)此ころ或所の「本を借得て披閱の次第八うつし繪
一卷中にも」めつらしう覺えてやかてかうはものしつるになむ

嘉永四とせといふ年の神無月三日」横山由清

(〇八一—イ一五)

紀記歌集 二冊

五八

林諸鳥編 横山由清書入 和袋綴水色表紙 八寸七分五寸七分 四周單

邊六寸六分四寸五分 十行 題簽左肩雙邊書名同 内題なし、「曲刀屋

圖書記」「月の屋」

刊記 寛政十戊午年三月求板」東都新橋」富谷徳右衛門版

識語 (表紙右肩墨) 横山由清翁手澤本

(横山由清朱墨を以て校合頭記せり) 〇八一—イ一五)

蛛のいかき 寫 一冊

五九

横山由清編自筆 和袋綴共表紙 五寸七分四寸三分 三十四丁 十行

外題左肩書名同 内題なし、「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本(その下に)玉兔之堂

(女流歌人の集なり) 〇八一—イ一五)

群書類從二百五十 横山由清書入本 一冊 六〇

「月の屋」「竹柏園文庫」

(群書類從本大中臣能宣朝臣集・清原元輔集・平兼盛集・藤原爲頼朝臣集に校異註記を施し、元輔集の後に四丁を加へて他本に見ゆる歌を補記す〇八一―一五)

群書類從二百七十八 横山由清校合本 一冊 六一

「月の屋」「竹柏文庫」

(群書類從本伊勢大輔集・康資王母集・辨乳母集・出羽辨集・祐子内親王家紀伊集の諸集に朱書校合註記を施す 〇八一―一五)

群書類從二百五十 横山由清書入本 一冊 六二

「月の屋」「竹柏園文庫」外一印

(群書類從本東遊歌・風俗歌・郢曲抄に朱書校異加註せり 〇八一―一五)

現存卅六人詩歌 寫 一冊 六三

横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 八寸一分六寸 七丁 十一行 外題左

肩書名同 内題「現存卅六人詩歌建治二年」「竹柏園文庫」

奥書 此詩歌者建治二年春閏三月關東相州時宗所被「結構之屏風詩歌也 圖作者伊信入道詩者藤中納言資宣撰之哥者右大弁入道真觀撰之也以當世能」書令書色紙形云々

識語 (表紙右肩) 横山由清翁手録本

(右の奥書を有する本の寫 〇八一―一五)

古歌類聚 寫 一冊 六四

横山由清著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸五寸五分 三周單邊一周雙邊六寸二分四寸二分「雅語便覽」「月舍梓」の刻ある十行罫紙三十四丁 外題左肩「上代の歌のぬきほ」とあるをペン書にて「古歌類聚」に訂正す 内題なし

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆

(所々朱墨を以て註記せり 〇八一―一五)

國學の説 寫 一冊 六五

横山由清著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸五寸五分 三周單邊一周雙邊六寸三分四寸二分「雅語便覽」「月舍梓」の刻ある十行罫紙十四丁 外題左肩書名同 内題なし、「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁稿本

(一丁裏) 妙法院宮在府御家來森莊之助厄介 浪人國學者 横山保三

(〇八一―一五)

古語拾遺 一冊 六六

忌部廣成著 横山由清書入 和袋綴縹色表紙 八寸八分六寸二分 二十四丁 四周單邊六寸六分四寸九分 七行 題簽左肩單邊「新古語拾遺全」「月の屋」「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁書入本

(明治三年渡邊重石丸序、氣吹舍藏、伊勢大西小太郎刻版本に横山由清

朱筆加訓書入す ○八一―一五

猿丸太夫集 寫 一冊

六七

猿丸太夫著 横山由清筆 和袋綴荅色表紙 八寸七分五寸九分 四丁

十一行 外題左肩書名同、「月の屋」「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁手録本

(異本との校合あり) ○八一―一五

寂蓮集 寫 一冊

六八

寂蓮著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 八寸五寸五分 十一丁 十行

外題左肩「寂蓮集由清校本」、「竹柏園」

奥書 (墨) 本ニ云「右一冊以常徳院殿御本文明年中」書写之本書畢之

者也」文龜三年大呂下旬日

此一冊加藤家之本也僕有故暫借預之間爲一女子」與於番丘之假寓令書

写早」于時寶曆三年仲春下完 澁園齋

右寂蓮法師集一卷 嘉永癸丑十月十一日書写了」横山由清

(朱) 扨集月詣集類從本家集一校了 嘉永 七七廿八

(朱書校合あり) ○八一―一五

掌中源氏物語年立 寫 一冊

六九

横山由清著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸七分六寸一分 「耕霞堂」の柱

刻ある十行野紙五丁 外題左肩名同、「竹柏園文庫」

奥書 山田常典か著せる此物語の系圖にならひて年立をもと安岡良正か

乞ふまゝに」玉の小櫛すみれくさなどによりてかくものしつるは

慶應四歳といふとしのむつきはつかばかり」月舎のあるし

横山由清

識語 (表紙右肩) 由清翁稿本

(○八一―一五)

續紀目安 寫 一冊

七〇

横山由清著自筆 和袋綴縹色表紙 二寸八分六寸 空色十三行野紙四十

八丁 外題左肩書名同 内題「續紀目録」、「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁稿本

(續日本紀の事項索引なり) ○八一―一五

新撰六帖索引 寫 一冊

七一

横山由清著自筆 和袋綴荅色表紙 六寸七分四寸四分 十行野紙五十六

丁 外題左肩書名同

(六帖中の語句を伊呂波別にして板本の丁數を示す) ○八一―一五

信明集 寫 一冊

七二

藤原信明著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 九寸六寸五分 十三丁 十

一行 外題左肩書名同、「竹柏園文庫」

奥書 以相傳之本書寫校合了」消字等如本也

建長元年八月日」藤原朝臣^在

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本

(○八一―一五)

素性集 寫 一冊

七三

素性著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 九寸六寸五分 七丁 十一行
外題左肩書名同、「竹柏園文庫」
奥書 以院御本行家朝臣筆書寫之

建長三年七月日

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本

(〇八一—一五)

清慎公集 寫 一冊

七四

小野宮實賴著 横山由清筆 和袋綴銀鼠色表紙 七寸八分五寸四分 二
十二丁 十行 題簽左肩紅紙「清慎公御集 全」内題「清慎公集 小野宮
太政大臣實賴公」、「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 嘉永二年閏四月十八日書寫之 横山由清 (「月舍」の印)

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本

(永亨二年孟夏下旬尋阿在判文明五年三月日藤在判とある本を底本とし
て所々勅撰集等との校合あり 〇八一—一五)

大納言經信卿集 寫 一冊

七五

藤原經信著 横山由清筆 和袋綴珊瑚珠色表紙 七寸八分五寸四分 十
七丁 十行 題簽左肩「大納言經信卿集」 内題の下に「久敬本 宮崎
御文庫本也」、「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 (朱) 已上夫木抄万代集校合増補

(墨) 原本瀬戸久敬所藏そのものは光枝柳塘にて買得者也 常典語也

(墨) 右經信卿集一卷以山川正份所藏之本書寫了
安政二年四月廿八日 (花押「由清」)

(〇八一—一五)

平忠盛集 寫 一冊

七六

平忠盛著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 八寸五寸四分 五丁 十行
外題左肩書名同 内題「故刑部卿詠」、「竹柏園文庫」
奥書 右平忠盛朝臣集一卷以井上文雄之藏本書寫了

嘉永六年六月廿日 横山由清

識語 (表紙右肩) 横山由清翁手録本

(〇八一—一五)

月の雫 寫 二冊 闕

七七

横山由清著自筆 和袋綴縹色表紙 二寸八分五寸六分 第二卷用紙空色
十三行野紙 外題左肩書名同 内題なし

(竹柏園藏書志に五冊とあり、その巻一卷二に當る 〇八一—一五)

月舍雜筆 寫 一冊

七八

横山由清著自筆 和袋綴卵色表紙(群書類從二百五十四下の表紙を轉用)
六寸一分四寸二分 四周單邊四寸五分三寸一分 薄様九行野紙二十六丁
外題左肩書名同下に「一」とあり 内題なし

識語 (表紙右肩) 由清翁手録本

(〇八一—一五)

經衡集 寫 一冊

七九

藤原經衡著 横山由清筆 和袋綴薄紫色表紙 七寸八分五寸四分 三十丁 十行 題簽左肩「藤原經衡集全」、「月の屋」「竹柏園文庫」

奥書 (墨) 這一卷雇達賢書寫之畢 元文二年己十月(中完) 樋口氏宗武 井本 元文二年丁巳十二月以樋口氏寫本 小 重好

(墨) 嘉永二年三月廿五日書寫卒業 横山由清 同閏四月中旬以一本校合

(朱) 同五月廿五日再校之次注付愚意了 同五年十一月廿三日以歌堂藏本校合并符

△延久四六廿一卒

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本 (〇八一—一五)

登蓮法師集 寫 一冊

八〇

登蓮著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 八寸六分六寸六分 三丁 十一行 外題左肩書名同、「竹柏園文庫」

奥書 右登蓮法師集一卷以無類本不能校正矣 識語 (表紙右肩) 横山由清手錄本 (卷末「東國紀行 宗牧八十三ウ」の記事を抄記せり 〇八一—一五)

匡衡集 寫 一冊

八一

大江匡衡著 横山由清筆 和袋綴薄卵色地花鳥模様表紙 七寸八分五寸四分 十三丁 十行 題簽左肩剝落の跡あり 外題書名同、「月の屋」

「竹柏園文庫」

奥書 右大江匡衡朝臣集一卷以歌堂藏本寫之 嘉永六年六月晦日 横山由清

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本 (朱墨を以て異本校合書入あり 〇八一—一五)

御堂關白集 寫 一冊

八二

藤原道長著 横山由清筆 和袋綴堅紙表紙用紙薄様 九寸六寸六分 一丁 九行 外題左肩書名同、「竹柏園文庫」 奥書 若冲本奥書云

宝永七年孟春以今井氏校合畢 千之齋 慶應二年十月五日以丹鶴叢書本一校了」 横山由清

識語 (表紙右肩) 横山由清翁校本 (〇八一—一五)

源順集 寫 一冊

八三

源順著 横山由清筆 和袋綴苔色表紙 八寸六分五寸九分 二十七丁 十一行 外題左肩書名同、「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩) 由清翁自筆本 (朱筆書入あり 〇八一—一五)

類聚歌苑卷第十三 寫 一冊

八四

横山由清筆 和袋綴堅紙表紙 八寸二分五寸七分 「雅語便覽」「月舍梓」の刻ある十行罫紙十三丁 外題左肩「類聚歌苑殘缺」「竹柏園文庫」

奥書 右類聚歌苑殘缺卷第十三 赤松鑿二所藏

慶應三年三月三日書寫了 横山由清(花押)

識語 (表紙右肩) 由清翁手録本

(卷第十三の初葉を謄寫し「本書如此以下略 古筆了伸云爲氏卿筆云」とあり ○八一—一五)

欽定四庫全書恭收存目 寫 一冊

八五

唐袋假綴共表紙用紙黄色唐紙 一尺六寸五分 八十六丁 八行 外題なし 内題書名同、「杭州府印」(滿漢二體)

(杭州文瀾閣所藏の四庫全書の目録ならん、刊行の稿本か訂正校合を墨朱にてしるしまだ殆んど各行頭に對の印あり、末尾に古今圖書集成の概數と附零總目を附す、裏に同治十年の年號を記せる識語ありこれ以後の書寫なり ○八一—一三)

隨筆・雜書

篤好隨筆 寫 二冊・闕

八六

五十嵐篤好著自筆 和美濃紙四ツ折共表紙 六寸四寸二分 九行 外題中央 第一冊「隨筆」(「草紙」を消して「隨筆」と傍書す) 第二冊「隨筆 四篤好」 内題なし

識語 (第一冊表紙) ○さし置△可用卯 (第二冊表紙) ○さし置寅 (諸書より珍らしき語句を抄出して一考を書きつけたり ○九一—一三)

圓珠庵雜記 寫 一冊

八七

契沖著自筆 和袋綴檜皮色布表紙用紙厚手美濃紙 五寸三分七寸四分

墨付十六丁 約十三行 外題なし 内題なし

識語 (表紙右下) 圓珠庵

(歌學書の裏に書す、文化九年刊本とは記事の順序一致せず文字の異同多く項目の出入また少からず、題雪竹の七言絶句貫之が新撰和歌集の漢文等の記載あり、また伊勢人の項に日本後紀等の註を三項増加す、契沖全集第八卷凡例参照 ○九一—一五)

奥州はなし・いそつたひ 寫 一冊

八八

只野眞葛著 和袋綴卵色表紙 九寸六寸四分 はなし五十二丁 いそ

つたひ十五丁 馬琴附記二丁十一行 題簽左肩雙邊 (刊) 瀧澤馬琴筆

「奥州波奈志 磯通多比合本」 内題なし 扉夫々書名同、「瀧澤文庫」「千葉文庫」

「中川氏藏」「山下藏書」

奥書 (奥州はなしの末馬琴朱) 天保壬辰歲抄立春後五日以原本比較異

養笠漁隱

(いそつたひ末馬琴朱筆) 天保四稔玄默執除二陽月立春後六日校干「神田岱下東坊著作堂之南軒早梅開處今夜」又薄雪寒風射紙門搦管下便至四鼓方卒業

識語 (裏見返し墨) 明治十三年四月二十夜購求同二十「二日夜雨讀了(馬琴書入多く末に「天保三年壬辰冬閏月既望驚齋陳人燈下識」とせる)と「壬辰歲抄稔一六十六翁解又しるす」とせる眞葛の略傳と自己との關係などを記せる馬琴の附語あり ○九一—一九)

海録

寫 九冊

八九

山崎美成著自筆 和袋綴檜皮色表紙 七寸八分五寸五分 十一行野紙
題簽左肩單邊(刊)書名同 内題なし 内容左の如し

第一冊 笈埃隨筆 諸國奇人談 諸國里人談 本朝俗諺志 諸國奇遊談
北國巡杖記 長崎紀行 東奥紀行 輜軒小録の件目を抄寫す

第二冊 旅宿問答 文祿清談 塵塚物語 富士人穴草子 似我蜂物語
老話集 妙法寺記 茶窓問話 破評鐵記 俗説辨 俗説贅辨の件目を
抄寫す

第三冊 祝詞考 大祓詞後尺 出雲國造神壽後尺 古事記傳 續紀歷朝
詔詞解 南山巡狩録の件目を抄寫す

第四冊 保元物語 平治物語 皇朝史略 扶桑畧記 室町殿日記 室町
殿物語 相州兵乱記 大友記 信長記 天正記 理源大師行實 菊地
佐々傳記の件目を抄寫す

第五冊 六諭衍義 文中子中説 江南經略 難經 兼明書 山居四要
剪燈新話 小草齋詩話 注維摩經 數珠功德經 五燈會元 天祿識餘
の件目を抄寫す

第六冊 古人物語 寛延奇談 武野俗談 邊要分界圖考 談海を抄記す

第七冊 劉氏鴻書 廣博物志を抄記す

第八冊 知不足齋叢書を抄記す

第九冊 秘笈を抄記す

奥書(第二冊文祿清談、老話集末)乙酉春日(同富士人穴草子末)乙一
中秋前一日(同茶窓問話末)丁亥春日抄(同俗説辨末)癸巳季冬(同
俗説贅辨末)癸巳抄冬

(第三冊祝詞考、大祓詞後釋、出雲國造神壽後釋各末)乙酉春日(同古
事記傳末)右始于文政癸未九月未卒于甲申三月十二日(同續歷朝詔
詞解末)甲申仲冬晦卒業

(第四冊平治物語末)丙戌仲冬二日抄(同皇朝史略末)丙戌十二月十
一日抄(同扶桑畧記、室町殿物語、相州兵亂記、大友記各末)丁亥春
日抄(同信長記、天正記各末)丁亥夏日抄

(第五冊文中子中説末)丙戌初夏十日抄(同兼明書末)乙酉七月廿二
(小草齋詩話末)甲申八ノ十七

(第六冊古人物語末)甲申閏八月十二日(同邊要分界圖考末)丙戌十
一月二十日抄

(第九冊奥)文政六年癸未秋七月朔抄録卒業 山崎美成
(國書刊行會本所收とは別本 ○九一—一五)

歌堂醉語 寫 一冊 闕

九〇

井上文雄著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸五寸六分 「攷證閣」の柱刻ある
十一行野紙五十九丁 外題左肩「歌堂醉語二」「漫筆」と記せしを「醉
語」と訂す) 内題なし

(歌文の用語に關する考證的隨筆 ○九一—一七)

古記拔粹 寫 一冊

九一

青木信寅筆 和袋綴海老茶色表紙 七寸九分五寸四分 四十六丁 十一
行 外題左肩書名同 内題なし、「青木印」(表紙右下附箋)

奥書 岢安政四年歲次丁巳秋八月綴合之(花押)
識語 (見返しに所收目次を記す) 日本書記 十七憲法 性靈集 紫式

部日記 枕草子 大和物語 徒然草 拾芥抄 舍人親王御末譜
(後良本を得るに従ひて右諸本の抄寫本に朱藍を以て更に校異を施す
○九一—イ九)

〔蜀山雜稿〕 寫 一冊

九二

大田南畝著自筆 和袋綴改装藍鼠色表紙 七寸八分五寸五分 四周單邊
六寸四分四寸二分の十行罫紙(裏に白紙一丁宛を加ふ)十一丁 外題な
し内題なし 書名は帙題簽に後人の加へしものによる

〔戴斗子三體畫法序〕「後水長記」「竹垣君惠政の碑」及び狂歌等を録
す、すべて文化十二年冬の手記によれるもの、如し、「後水長記」は塗抹
訂正多く「一話一言」に出づるものと小異あり ○九一—イ一七)

丙午雜纂 寫 一冊

九三

足代弘訓著 足代弘長編自筆 和袋綴共表紙 九寸四分六寸八分 表紙
共四十八丁 十行 外題左肩書名同 内題なし

跋 寛居老人われ若きほとよりかきあつめたる物「若干卷あり各に托す
へし淨寫して著述に」せらるへしといはるゝによりて匣底をさくりて

此一冊をかきつゝ、れり」 弘化三年丙午十二月 足代弘長
識語 (表紙弘訓筆) 未校合にて誤寫し直し申さす」かなつけなともつ

けおとしの所お」ほくの外至極の悪本をやうく尋出し申ひ
(○九一—イ一一)

精神科學

日本哲學・國學

赤心錄 寫 一冊

九四

鶴峯戊申著「安政四年季秋征夷朝散大夫藤原泰從識」の序 本居豐頼序
和袋綴改装澁引表紙 九寸九分六寸二分 四周單邊六寸九分四寸七分
八行罫紙三十三丁 外題なし

識語 (原表紙裏) 近世西洋人「ケムフル」といふもの我「神國に參渡來
て、その見聞する所を記」す、但し上古の紀事に於てハ傳聞の誤」い
と多し、甚だ憾べしとす、故今外國の「人にも知らせまほしく、正しき
古傳説」の最要たるところを抄録して、赤心錄」と名く、最も山崎先
生の漢様の説改ま」りて、古學となりたる其上をまた一段「くハしく
論 定たる書なれば、謠もの其」心をくみてよみ給ふべし
鶴峯海西門人等しるす

(原本冊額に水戸烈公赤心の二字を書せりといふ、卷末に「愛國頌四十
八韻并序」及び戸田氏武・折井正邑・久保季茲・小中村清矩の題歌を載
す 一一二—イ一一)

本居一門筆跡 寫 一卷

九五

卷子本丁子茶色緞子表紙 見返し紺地金梨地紙 八寸八分六寸七分 題

簽左肩銀短冊外題なし 内題なし

所收筆者名 大平 建正 清島 有郷 内遠 豊頼 飛彈女 壹岐女

奥書 (五鈴筆) ひと日眞木國のあるしとひ「きましてこの巻をとと

り」いて給へりうちのへつ、見る」にわか遠つおやそのう「まことも

か筆のあとにしてその」わさよにゆるされぬ人ともう「ちまちりたり

か、る名」もなき艸をたにつみは「やしたまふあるしか心よ」いかは

かり小鈴のひ、きをしの」ひませるにかと今しもう「けはりて家のわ

さうけ」つくものもなきにことに「うれしくて一ことかきそ」ふるは

松坂の家つける」五鈴

(本居家一門の書簡詠草などを收む、五鈴は本居清造 一二一・一三)

本居兩大人門人姓名錄

寫 二卷一冊

九六

羽田野敬雄筆 和袋綴白紙表紙裏表紙脱落 八寸五寸四分 三十六丁

十行 外題中央 本居宣長 兩大人門人姓名錄 内題「授業門人姓名錄」

「藤垣内門人姓名錄」、「幡太文庫」、「羽田埜」、「榮樹園」

(宣長と大平の門人姓名錄を合綴せしもの、扉には夫々書名の左に「三

川國人源阿曾美敬雄謹寫」とあり、朱にて加筆あり 一二一・一五)

賀茂眞淵書翰

寫 一軸

九七

賀茂眞淵自筆 掛軸 二尺二分 外題なし 内題なし

(門人お辯の婚儀と、のひし時に與へし一通と同人にあたへしなるべし

くやみの文等を作りやりしもの一通とを表裝す 一二一・三一・一)

直毘靈

寫 一冊

九八

本居宣長著 本居春庭筆 和袋綴水色表紙 九寸二分六寸三分 四周單

邊(刻)七寸四分五寸八分 二十六丁 十行 題簽左肩白紙「直毘靈春庭

手筆」 内題「直毘靈」(ナホビシタ)、「深田氏印」「号ハ楯園姓ハ藤原名ハ秀業字ハ子

靜氏を松本といふ家は奈良西街にあり」

(附一丁ありて「後鈴屋先生眞筆」と朱書せり 一二一・四一・一)

秘本玉くしげ

寫 二卷一冊

九九

本居宣長著自筆 和袋綴落葉色表紙 九寸一分六寸二分 上三十七丁

下三十二丁 十行 外題左肩「玉匣上下」 内題「玉くしげ上(下)」

「号可醒性藤原名秀業字子靜東雲やといふ通称松本利助居ハ奈良大橋の

邊ニあり」

奥書 天明七年十二月

(蕨園藏板活字板本と漢字假名の配合相違あり 一二一・四一・三)

本居大人遺墨展觀錄草稿

寫 一冊

一〇〇

和袋綴共表紙 八寸一分五寸八分 四十丁 外題左肩 文久元年九月

本居大人遺墨展觀錄草稿 内題なし、「鈴屋社中」「堀内文庫」

(文久元年本居宣長歿六十一年目に鈴屋社中にて宣長及び春庭の遺墨展

を松坂愛宕山に催せし時の目錄、その折のちらし文一葉をも合せ載す

一二一・四一・五)

古學要 寫 一冊

一〇一

本居大平著自筆 和袋綴淺綠色表紙 九寸六寸三分 十四丁 十行 題簽左肩外題別筆「古學要本居大平翁真筆」 内題「古學乃要」、「向峯文庫」号ハ楮園姓は藤原名は秀業字ハ子靜氏を松本といふ家は奈良西街にあり」奥書 文化六年巳春のころかく書つ、れりかゝる事は猶いくらも思ひよる事あれば猶此つきくにも書つ、くへし」 大平
(版本と本文小異あり初期稿本の一か 一一一・六一一)

天地初發之圖附經緯畧弁歌之五級

寫 一冊 一〇二

富士谷御杖著 五十嵐篤好筆 和袋綴丁字茶色行成表紙 八寸七分六寸三分 八丁 題簽左肩白紙雙邊書名同 内題「天地初發三段心法」附録は書名同
奥書 天地初發之圖ハ板行のものありそれを一ひら給はりしを「かくうつしたるなり」
歌之五級は小杉新町今江靜シヅカがもたりけるをうつして猶大人ニ「いか、ととひやりしかはこはたかへる所とありとてあらため書て給はりし也」經緯畧弁は經緯の事おのれおもひえたりしことともありて」とひまゐらせたりしかは遠田眞拆マサキに畧弁といふもの傳おきたり」それを見へしとの給ひおこされたりしによりて遠田にこひて是を「うつしたるなり猶遠田には口授し給ひしこと、もあり」 文政六年二月 篤好
(一一一・六一三)

扶桑皇典 寫 五冊

一〇三

物集高見著自筆 和袋綴共表紙 九寸二分六寸五分 外題左肩「書名同」一(一五)」
識語(各冊表紙に内容目次を記する他に)
(第一冊表紙朱) 未定稿大正十二年六月稿
(第五冊表紙墨) 大正十二年八月十三日稿
(内題の下に「文學博士物集高見著」とあり 一一一・七一)

周易 寫 六卷一冊

一〇四

王弼(魏)註 和袋綴六冊合綴新表紙黒色に梅花刺繡模様表紙 原表紙各冊にありて共表紙 九寸九分六寸五分 四周單邊六寸九分四寸九分 八行註雙行 原表紙共百六十一丁 題簽右肩金泥雲形入白紙佐佐木信綱筆「周易」原表紙外題左肩「周易一之三(卷之二一卷之五)」 内題「周易上(下)經乾(泰、噬嗑、咸、尺、豐)傳第一(二一六)」 原表紙外題下に「九叔之(墨書)末に「三 上藏(墨書)」「源徴恕印(朱印)」とある冊あり
(室町期寫、第一冊以外の原表紙には所收卦の名あり、朱墨の書入多く、正義・經傳・傳義等によれり、本文には訓點をほどこす 一一一・一一三)

周易 寫 六卷二冊

一〇五

王弼(魏)註 文祿二年祖秀筆 和袋綴媚茶色替表紙 八寸八分六寸三分
四周單邊五寸九分四寸九分 有界八行十六字 上欄餘白ありて上部一線
あり 外題左肩「易古註乾(坤)」、内題「周易上經乾」(卷、噬嗑) 傳第
一(一三三)「周易下經咸(尺、豐) 傳第四(五、六)」、「吉祥」(各表紙に)
奥書 北州叟祖秀拜辰(花押)

正覺山光嚴寺於正光庵窓下而妙存讀誦之云、

文祿二年癸巳四月初五如意珠日昼寫

(卷初には易の卦の名を書き出しあり、朱による句讀點は後人か、同筆に
て訓點及び補註、行間及び上欄に他書による書入あり、本文は末に本文
及び註の字數を示せば宋元の古版本をもとにせるものによりしなるべし
一二二・一—一九)

周易

古活字本伏見版 六卷三冊

一〇六

王弼(魏)註 和袋綴繪皮色表紙 九寸五分六寸五分 四周雙邊七寸五寸
有界八行十七字註雙行同字數 外題中央墨書名同 内題「周易上經乾傳
第一(一六)」柱「周易(卷數)(丁數)」、「高木家藏」外磨消せる二印
あり

跋 (一丁ありて末に) 慶長十年星集乙巳孟夏初五日鹿苑西笑叟承兌

(本書附綴の承兌の跋文一丁は書賈の後に原跋を模刻したるものなるべ
しと川瀬一馬氏の書附あり、朱墨二點を附す 一二二・一—一)

周易傳義

古活字版 二十四卷十冊

一〇七

程頤(宋)傳 朱熹(宋)義 和袋綴納戸鼠色改装表紙 九寸四分六寸五分
四周雙邊六寸八分五寸二分 十一行二十一字 外題なし 内題「周易

卷之一(二、五—二十四) 程朱傳義」「周易經傳第三(四) 卷程朱傳
義」

刊記 寛永二年南呂下旬「二條觀音町中嶋久兵衛開之
識語(第八・九冊を除く各冊終丁) 持主加藤道達拾貳札之内

(卷三卷四闕を附調整版本にて補ふ、朱墨の書入多し 一二二・一—
一七)

附釋音尙書註疏

宋版 二十卷八冊

一〇八

孔安國(漢)傳 孔穎達(唐)等疏 孔穎達序 唐袋綴改装納戸鼠色表紙
八寸四分五寸 四周單邊六寸四分四寸三分 有界十行 序十五字本文十
七字註雙行二十三字 外題左肩金泥「尙書一(一八)」 内題「附釋音尙
書註疏卷第一(一二十)」 柱刻「書疏」、「本田家藏」、「漢委奴國王」

「天地自我萬有豈在佗」

箱書 宋槧明脩本尙書註疏 内藤虎署

(宋版を明正徳十二年に一度修補して更に修補を加へて刊行せるもの、
宋版を用ひたる部は柱刻に書名の外大小の字數と刻者の名及び丁數ある
もの多けれど消滅して讀み難し、讀み得る刻者名に「徳山」「君錫」「英
國」などあり、明修の部分には「正徳十二年」「正徳十一年重刊」など
とし書名丁數刻者名を柱刻に存するものと「閩何校」「林重校」「郷林重
校」などありて書名丁數刻者名を柱刻に存するものとあり 一二二・二
—一)

欽定詩經樂譜全書

三十卷附一卷十九冊

一〇九

鄒奕孝(清)等奉勅撰 唐裝袋綴白茶表紙 九寸四分六寸 雙邊六寸五分

四寸一分 每半葉有界九行二十一字 題簽左肩雙邊書名同 柱書名同

卷首に「命諸皇及樂部大臣定詩經全部樂譜論」「御製編訂詩經樂譜全書

竟因題八韻」を、附録樂律正俗の始めに「御製再題樂律全書」を附す

(附録は樂律正俗一卷、乾隆五十三年奉勅撰譜は朱色にて印刷されあり

各卷末に校者の名を存せり、欽定四庫全書總目第三十八卷參照 一二二

・三一(一)

四書

今關版 九冊

一一〇

和袋綴栗皮色無地表紙 九寸六寸五分 四周雙邊七寸四寸九分 七行十

七字 外題なし 内題は夫々所收書名 柱には書名卷數丁數を刻す

大學一冊 中庸一冊 論語二冊 孟子五冊

刊記 (中庸奥)關東上総住今關正運刊

奥書 (中庸)永正八年六月廿日以唐本遂書寫之(マ)功同加朱墨」訖加点点以

證本校合了少納言清原朝臣在判

(論語卷一)永正九年正月十五日以累家秘本書寫之即加朱墨訖

少納言清原朝臣判

文字増減年來不審以數多家本雖令校合共以不一揆爰「唐本不慮感得之

間即校正之処相違非一但古本之躰令非」可改易仍脇注之兩存焉就家說

於無害之文字者以朱」消之是又非憶說黃表紙家本如此後來以此本可爲

證」者乎(欄外上に「宣賢一一一一」)

永正十七年九月廿三日 給事中清原宣賢

(卷二) 永正九年正月廿日以累家秘本書寫之即朱墨訖

少納言清原朝臣判

(卷五) 永正九年正月卅日以累家秘本書寫之加朱墨兩点訖

少納言清原朝臣判

(卷六) 永正九年二月三日以累家秘本書寫之加朱墨訖

少納言清原朝臣判

(卷七) 永正九年二月五日(以下同前)

(卷八) 永正九年二月六日以累家秘本書寫之即加朱墨点訖

少納言清原朝臣判(欄外上に「宣賢一一一一」)

(卷九) 永正九年二月七日(以下同前但し罵を置と訂す欄外上に「宣

賢一一一一」)

(卷十) 此書文増減字異同多本共以不同以唐本欲決之未求得之」專

以當家古本取準の書寫之卒終朱墨功訖

永正九年二月九日 少納言清原朝臣判

文字増減年來不審以數多家本雖令校合共以不一揆爰唐」本不慮感得之

間即校正之処相違非一但古本之躰法令」非可改易仍脇注之兩存焉就表

紙家本如此類有之」後來以此本可爲證者乎

永正十七年九月廿三日給夏中清原宣賢(欄外上に「宣賢一一一一」)

大永三年十月三日始筆

同十一月十三日子尅加朱墨了一字一点不可相違以奥書信之」林安盛判

(孟子卷一)文龜癸亥中呂甲子披覽之処兩点几無子」細者哉深納函底

敢勿出欄外矣」侍從三位入道常益

以累家秘本書寫之加朱墨訖爲後葉申請家君」御證明而已給事中宣賢判」

宣賢一一一

(卷二) 以累家祕本書寫之加朱墨訖爲後鑒於一之「卷申家君御證明」而已

給仕中清原判

(卷三) (同上但し「申家君」を「申請家君とす」)

宣賢一一

(卷四) (同上) 少納言清原判

宣賢一

(卷五) 以累家祕說加朱墨訖 清給事中宣賢判

(卷六) 以家傳加朱墨兩点訖 清原宣賢判

(欄外上に「宣賢一一」)

(卷七) 以累家祕本寫之加朱墨訖 給事中清原判

(卷八) 以累家祕本書寫之

(卷九但し卷十の初に) 以累家祕本書寫之加朱墨訖爲後鑒於一之卷申

家君御奧書者也 宜賢一一 給事中清原判

(卷十) 以累代祕本寫之

(卷十一) 以累家祕本書寫了 (欄外上に「宣賢一一」)

(卷十二) 以累家祕本書寫之 給事中清原在判

(卷十三) 以累家祕本書寫之加朱墨 給事中清原在判

(卷十四) (「孟子篇叙」と稱する漢文一枚餘ありて) 御奧書云

孟子篇叙人と本無之仍先達等未加點又不讀之 余至德三歲講談之次僻案加點本經點多以透 義理之間又以改之而已

嘉吉元年八月廿五日以曾祖父之御說授嫡男主 水正勇講宗了此本御奧書如斯可爲證本矣 環卒軒言翁業忠

以累代祕本書寫之加朱墨訖爲後鑒於一之卷 申請家君御奧書而已 給

事中清原在判

永正九年十一月於親王御方全部奉傳授之訖 (行頭に「宣賢一一」)

(要法寺版論語の後異版、清原宣賢が永正年中附したる系統の朱墨訓點を有す 一二三—一)

四書集註

活字本 二十六卷十冊

朱熹(宋)著 和袋綴栗皮色表紙 八寸四分五分二分 四周單邊六寸二分

四寸八分 九行十七字註雙行 題簽左肩雙邊「大學章句」「中庸章句」

「論語集註」「孟子集註」たゞし論孟には下部所收篇名をかゝぐ 内題所收書名に同じ、「洒竹文庫」「黃龍窟」「ト」(徳永惠常)

(近世末期の活字本にして無訓本 一二三—一三)

四書集註大全

三十六卷十九冊

胡廣(明)等奉勅編 永樂十三年十月初一御製序 永樂十三年九月十五日

胡廣等上表 同凡例 宣德二年歲丁未秋七月甲辰楊榮後序 和袋綴丹表

紙 一尺一寸七寸六分 四周雙邊七寸二分五分七分 題簽左肩白紙「大

學」「大學或問」「中庸」「中庸或問」「論語」「孟子」たゞし論語孟子

には所收卷番號を記す 柱刻「四書大全」下部に外題と同じく細目を示

す、「古川桐山」

刊記 (論語集註序説の末) 弘治癸丑秋 清江書堂

(宣德二年跋朝鮮版による和刻、近世初期の刊なる本書はその特製、刊行直後と思はる書入多し、各冊表紙に墨書「共十九」とあり 一二三—四五)

大學章句 寫 一冊

一一三

朱熹(宋)著 淳熙己酉二月甲子自序 永正十三年秀歌筆 和袋綴改裝裏

打納戸鼠色表紙 九寸一分六寸八分 原物八寸七分六寸五分 十一丁

十行十六字 外題左肩室町期頃の後筆「大學」

奧書 永正十三年六月廿六日書寫畢

寫點本之奥云

此書加一見朱墨兩點無相違頗可謂證本矣

文龜第三卯月初十 桑門隱徒判

借本點等可明謂由奥書之間「書寫畢

永正十四年二月廿九日 秀歌

(永正十三年之寫本に墨朱にて訓點を附せるは同十四年文龜三年奥書本によつてなり 一二三・一〇一)

論語 寫 十卷五冊

一一四

何晏(魏)集解 自序 和袋綴灰汁色表紙 九寸一分六寸四分 四周單邊

六寸一分五寸二分 有界九行十六字註雙行 外題左肩「論語」卷一一

(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)(十)、「石明圖書之記」「秋葉義之之印」「成立寺(花

押)」「(墨書)」「如白所持(印)」「(墨書)等

(室町時代寫、全卷句讀訓點をほどこす 一二三・三一・九)

論語 十卷二冊

一一五

何晏(魏)集解 自序「天文癸巳八月乙亥金紫光祿大夫拾遺清原朝臣宣賢

法名宗尤」の跋 和袋綴茶色表紙 八寸八分六寸六分 三周單邊六寸七分六寸 有界七行十四字 外題なし

(天文版論語の後刷なり 一二三・三一・三)

論語 正平版無跋本 四卷二冊 闕

一一六

何晏(魏)集解 和袋綴改裝檜皮色表紙裁斷あり 八寸九分六寸七分 四

周單邊七寸一分六寸一分 有界六行十三字註雙行 外題左肩墨「論語七

八(九十)」、「清岡藏書記」「菅原長親」「江風山月莊」

(子路等十三以下を收む、末に「慶長八癸卯秋八月蒙 豊臣内大臣秀頼公

蒙 命於大坂御城中奉教授 鹿苑□□」と墨書して消せるは後人のわざ

くれなるべし、甚しき後刷と思はる 一二三・三一・一)

論語 天文版 十卷二冊

一一七

何晏(魏)集解 自序 「天文癸巳八月乙亥金紫光祿大夫拾遺清原朝臣宣

賢法名宗尤」の跋 和袋綴改裝裁斷あり縹色表紙 八寸五分六寸 九分

四周單邊七寸六寸 有界七行 外題なし、「桂窓」「西莊文庫」(小津

桂窓)

(阿佐井野梓の所謂天文版論語なれど後刷なり、朱印にて句讀を切りた

り 一二三・三一・七)

論語 要法寺版 十卷三冊

一一八

何晏(魏)集解 同序 和袋綴毘沙門格子入丹表紙 九寸六寸二分 四周

雙邊六寸九分五寸 有界七行十七字 外題なし 内題「論語學而第一

(一子張第十九)」 柱心「論語(卷數)(丁數)」、「葆光書記」

刊記 慈眼刊 正運刊 洛澗要法寺内開板

(何晏集解、朱墨にて異本校合あり墨にて返點訓點を施す、本書籍書に足利本とあり 一二三・三一―一)

論語抄

寫 一冊

一一九

周超世譽筆 和袋綴代赭色表紙 九寸七寸 五十二丁 十六行 外題左

肩「論語 序」(「序」を消して「抄」に改む)

奥書 (本文同筆) 永祿九 八 廿四 周超世譽

(初めに論語につきての解題と講義の態度をのべて以下何晏集解により序より三章の末にいたる抄物なり朱の句讀合點あり 一二三・三一―一五)

孟子

寫 十卷五冊 闕

一一〇

趙岐(漢)注 天正十九、廿年快真筆 和袋綴代赭色表紙 八寸八分六寸

六分 四周單邊七寸五寸四分 七行十六字註雙行 初冊題簽なく外題左

肩後入筆 他は題簽左肩本文同筆書名同下に「一之二」「三之四」「五之六」

「七之八」「九之十」と注す、「有不爲齋」「快興」(墨筆二、四、六、七、

八、十の末)

奥書

(卷第一) 文龜癸亥中呂甲子披覽之處兩点凡無子細者哉深「納响底敢勿出闕外矣」侍從三位入道常益

以累家秘本書寫之加朱墨訖爲後葉申請家君御「證明而已」給事中宣賢判宣賢一一一

天正十九年卯七月廿二日書写訖

(卷第二) 以累家秘本書寫之加朱墨訖爲後葉於一之卷申家君「御證明而已」天正十九年辛卯八月十九日辰写訖快真六十二

(別筆) 慶長十九甲寅三月吉日始見之

(卷第三) 以累家秘本書寫之加朱墨訖爲後葉於一之卷申「請家君御證明而」給事中清原判

宣賢一一

天正十九年卯五月廿七日辰写訖

(卷第四) 以累家秘本書寫之加朱墨訖爲後葉於一之卷申請家君御「證明而已」

宣賢一

天正十九年卯六月十八日辰写訖

(卷第五) 以累家秘說加朱墨記 清給事中宣賢判

天正廿年壬辰卯月廿三日辰写訖

(卷第六) 以家傳加朱墨兩点記 清原宣賢判

天正廿年壬辰五月十一日辰写訖

(卷第七及卷第八) 以累家秘本書寫之

天正二十年壬辰三月廿四日書写之畢

(卷第九) 以累家秘本書寫之加朱墨訖爲後鑑於一之卷申家君「御奥書者也」給事中清原判

宣賢一一一

天正貳拾年壬辰五月廿八日 書写訖

(卷第十) 以累代秘本書寫之

天正貳拾年壬辰六月八日 書写訖六五

(朱のオコト點墨の訓點及び振假名を附し欄外その他に正義による補註ありこれ清家の本の写しなるべし、第一冊見返しに附箋あり同冊外題と同筆にて「孟子写本全五冊快興ト有之ハ清水家先代の内ニモ可有之新築師寺之住職之者歟 冊末に快興写と有之」と見ゆ、末四卷を缺けり 一二三・四一―一)

孔子通紀

古活字本 八卷四冊

一三二

潘府校著 潘正刊行 弘治辛酉歲七月朔謝鐸序 弘治十四年辛酉歲秋八月上旬吉劉瑞序 弘治癸亥歲五月朔潘府自序 弘治甲子仲夏羅僑跋 嘉靖壬戌秋八月李楨跋 嘉靖癸亥正月許暉跋 和袋綴淺藍色行成表紙 九寸三分六寸五分 四周單邊七寸八分五寸六分 九行十六字註部十八行十六字 題簽左肩墨書名同下に「壹」「貳」「參」「肆」 内題「孔子通紀卷之一(一八)」、「高木家藏」

(古活字本慶長中刊 一二四・一―一)

時習新知抄

寫 一卷一冊

一三三

郝敬(明)著 貝原益軒筆 和袋綴改裝瓶覗色空摺模様表紙 原表紙は共表紙 用紙裏打補修 九寸三分六寸九分 二十一丁 十行 外題表紙左肩「時習新智」 原表紙左肩書名同 内題「時習新知」 奥書 元祿十二年二月二於日京都抄之 (益軒の元祿十一年三月より翌六月まで夫人東軒と共に京都滞在中に抄せしもの、六枚目より十枚目まで及び一枚目表の一行目「京山郝敬大明

崇禎時人七十四歳字仲興」並に二十一枚目裏は益軒筆、一枚目より五枚目までと十三枚目裏七行目より二十一枚目表までは別筆、恐らくは東軒筆か、十一枚目より十三枚裏六行目までは他一人の別筆、朱墨にて加點す原表紙右肩に自筆にて「卯九月一〇覽申六月又一覽了丑二月又見」と書し墨にて抹消す、卯は元祿十二年 一二四・七一―一)

纂圖互註南華真經

元版 十卷五冊

一三三

莊周(周)著 郭象(晉)註 陸德明(唐)音義 郭象序 唐改裝袋綴花色布表紙裁斷あり 八寸五分五寸二分 上下單邊左右雙邊六寸一分四寸 有界每半葉十一行二十一字註雙行二十五字 外題なし 内題「老子道經上」「老子德經下」 柱「莊一(一十一)」

(初め莊子大極說周子太極圖をか、ぐ、鐵琴銅劍樓宋元本書影に見ゆる守時書肆本の重刻なり、末六丁別本による補寫あり 一二六―一)

纂圖互註老子道德經

元版 二卷一冊

一三四

老聃(周)著 河上公章句註釋 景定改元石廬鵝序 葛洪(太極左仙公葛玄)序 唐袋綴改裝花色布表紙裁斷あり 八寸五分五寸二分 序老氏聖紀圖目錄等八丁 卷上十六丁 卷下十八丁 四周雙邊六寸二分三寸九分 有界半葉十一行註雙行 外題なし 内題(目錄)「老子道德經篇目(上)」 「纂圖互註老子道德卷上」(下) 「纂圖互註老子道德經下」 柱刻「老上(下)」、「茂枝」外一印あり

(序に次いで老子聖紀圖として三圖ありて鐵琴銅劍樓宋元本書影に南宋兔園冊子本重刻と見ゆるものの重刻とおぼし、唐土人朱書入あり 一二六

一四一

慈恩會問答講草 寫 一軸

一二五

正治元年英弘筆 卷子本栗皮色表紙 一尺一寸 有界九寸一分 外題なし 内題なし

奥書 于時正治元年九月十一日於相巖房抄此題了」當年慈恩會堅義用意了」願以此功德順次生内院」四恩及法界同生都吏官」行道沙門英弘識語 (卷頭部裏書別筆) □□已卅冊草傳覺融傳領孝傳隆範□□ (一一九—一一)

倫理・教訓

初潭集 明版 三十卷五冊

一二六

李贄(明)著 唐改裝袋綴代赭色表紙 用紙裁斷あり 八寸八分五寸六分 四周單邊六寸九分四寸五分 無界九行二十字 題簽左肩後補水色雙邊墨「初譚集一之(廿四之) 柱刻」序(丁附)」「初譚集總目(總論)(丁附)」「初譚集卷之一(一—三十)(合婚の如く題目を刻す)(丁附)」(巻初に二序あり朱筆にて句讀を附す 一五四—一五五)

西洋品行論十一編 寫 一冊

一二七

Smiles, Samuel (斯万爾斯)著 中村敬字譯述自筆 和袋綴記録表紙用紙中國印刷書の裏を用ふ 八寸四分四寸七分 三十丁 八行 題簽左肩白紙「西洋品行論自筆」 内題なし

奥書 右中村敬字先生原稿一卷」佐々木竹柏園大人ニ贈呈

大正二年十月十七日 狩野亨吉

(初めに朱にて十一編とあり、明治十三年二月出版されし同書の譯稿にして十一編廿四「良妻ヲ擇ブベキヲ論ズ」よりほゞ最終にいたる、刊本と相違甚しく本書の方甚詳密なるが如し 一五四—一五三)

宗 教

三教指歸卷上 寫 一軸

一二八

空海著 延暦十六年臘月之一日自序 卷子本薄栗皮色替表紙 九寸四分 一尺三寸八分の紙十三葉をつなぐ 烏絲欄七寸六分八分 一行十三字詰 外題なし 内題「三教指歸卷上并序」 (鎌倉期の寫か、墨筆送假名及び朱筆オコト點あり 一六〇・四—一一)

神 道

大少記 寫 二卷一冊

一二九

宇真志義道著自筆 自序 和袋綴澁表紙 八寸二分六寸 十七丁 八行 外題書名同 内題「大少記上卷(下卷)」オホスカタフミキミツマキ シモツマキ 奥書 文政五年書著者也 宇真志義道之士 (大穴牟遲と少名毘古那の神の事を記す 一七〇—一一)

東家秘傳 寫 一冊

一三〇

北畠親房著 永享六年寫 和袋綴改裝朱色表紙 九寸六寸五分 十六丁
八行 外題なし、「上重藏書」

奧書 東家秘傳 北畠准后述作也云々

永享六年甲二月廿四日神道長上（兼右の花押）

（豊葦原神風和記一三一—と同筆と思はるその頃の寫なるべし、奥書の「神道長上」以下のみ別筆 一七一—一七五）

豊葦原神風和記 寫 三卷一冊 一三二

慈遍著 天文十三年寫 和袋綴藍漉込表紙 用紙鳥の子 九寸八分七寸

四分 三十四丁 十一行乃至十六行 題簽左肩「神風記」、「上野藏書」

奧書（本文別筆）龜山大宮司左亮清原隆所 以累家之秘本書寫之仍

文字「讀傳之了」

天文十三年六月日 神道長上下部（兼右の花押）

（朱墨を以て句讀訓點送假名を附す、續々群書類從第一所收と異る所多

し 一七一—一七七）

豊葦原神風和紀 寫 三冊 一三三

慈遍著 和袋綴縹色表紙 八寸三分六寸 八行 題簽左肩白紙墨「神風

和紀上（中、下）、「茂木實記」

（近世初期寫、續々群書類從第一所收 一七一—一七九）

直靈考 寫 五冊 一三三

賀嶋正根著自筆 和袋綴共表紙 八寸六寸二分 四周單邊（刻）六寸八分

四寸七分 題簽左肩紅紙「草直靈考一（一五）」 柱心「直靈考」 内題

「直靈考」上（下）之卷」

奧書（第一冊末）此草稿書きをへぬるは文化十四年といふ」としの九月

七日の日なり（朱にて「是はかくに不及」とあり）

（第二冊末）此草稿は文化十四年九月廿八日に書をへぬ（白にて帶す以下同）

（第三冊末）此草稿は丑の十月十七日書きをへぬ

（第四冊末）此草稿文化十四年十二月廿八日かき畢

（第五冊末）此草稿文政元年十二月九日書きをへぬ

識語（第一冊表紙）此紙ハ無用也

（第二冊表紙）先達而ノ本へかき續べし」合本と成ル也又壹卷かき續キ」

三卷合シテ壹卷と成り夫を上卷トスル

（第二冊卷頭朱）先達の本へかき續べし

（第三冊同朱）二ノ卷へカキツグヘシ

（第五冊同朱）四ノ卷へツグベシ

（本居宣長著直靈を註釋せるもの、所々訂正附筆あり、内題の右下に

「阿波人賀嶋源正根著」と 一七一—一七三）

佛足石之記 寫 一冊 一三四

不學著自筆 和袋綴共表紙 三十五丁 十行 外題右肩書名同 内題

「佛足石記」

奧書（内題の下に）嘉永六年癸丑八月十一日始 聰悟不學記

（卷末）嘉永六年癸丑八月二十日夜功竟 佛子不學記

識語（表紙左肩）嘉永六年 丑八月廿日記早

（中國における佛足石につきて述ぶ 一七一・一七三）

神宣解 寫 一冊

一三五

大我著自筆 寶曆三年秋九月自序 寶曆三年十月圓中跋 和袋綴記錄表紙 九寸一分六寸三分 四十三丁 十行十九字 題簽左肩書名同、「不忍文庫」「阿波國文庫」「渡部文庫珍藏書印」
(伊勢神道五部之書中寶基本紀中の神宣を釋したるもの、漢文にして訓點をほどこす 一七一・二一—)

祝詞考 寫 三卷三冊

一三六

賀茂真淵著 和袋綴深川鼠色表紙 八寸八分六寸三分 十行 題簽左肩金箔散らし短冊 内題「延喜式卷八祝詞考 上卷(中卷、卷之下)」、「野田氏藏典」

奥書 明和五年夏東都御子家文學賀茂真淵七十二齡にして此考を竟つ
安永四とせの五日門人荒木田久老写をへぬ

(青)上の件もろくの祝詞はすでに師の考有てくはしく解れたり
今はたゞそれにもれたる事又たがへりとおぼしきことなどをいさ、かつみ出てるせりなほいはまほしき事どもはおほかれ」といとまなくてさしもくはしくはえ物せず多くはもらしつ」 本居宣長

識語 (上巻貼紙) 版本以前ノ寫本カ異同アリ

(下巻裏見返し) 大前尔今母請且羹賜倍「綾尔貴伎許礼乃吉詞乎」
(刊行以前の本によりて寫せるもの、版本と異同あり、久老の頭註及び宣長の青にての書入を轉寫す 一七三—一七四)

御蔭參雜綴 寫 一冊

一三七

細野要齋編自筆 和袋綴鳶色表紙 八寸五寸五分 十八枚 題簽左肩雙邊書名同 内題なし、「要齋珍藏」
奥書 要齋識

識語 (表紙右肩色紙形貼紙) 寶永二年乙酉奇瑞錄「同參宮施行人數」
明和二年辛卯奇瑞錄「同參宮施行次第」文政十三年庚寅「御蔭まいり二冊、同二篇二冊抄畧」おかけ參 三寶荒神三冊抄畧

(識語に掲ぐる諸書を影寫合綴せるもの、見返しに慶長自記 桑名船馬町記 より慶長十九年甲寅の條を青筆にて寫す 一七四—一七五) 太田吉清所記

外宮儀式帳私考 寫 三冊

一三八

石崎文雅著 和袋綴記錄表紙 八寸八分六寸四分 十行外題左肩荒木田久守筆「書名同」上(中、下)、「五十槻園」「月の屋」「竹柏園文庫」等
奥書 寛政十一年己未正月廿日成業 石崎文雅
識語 (各冊表紙) 荒木田久守藏

(註釋書、文雅の説は文雅曰としてかゝぐ、思ふに荒木田久老等の説を文雅のおきなひしものにあらざるか 一七四—一七五)

外宮子良館祭奠式 寫 二卷二冊

一三九

度會(黒瀨)益弘著 度會(松木)智彦寫 和袋綴記錄表紙 九寸四分六寸二分 八行註雙行 題簽中央本文同筆「外宮子良館祭奠式 前(後)」外題左傍に朱書前冊「從一月五月迄」後冊「從六月十二月迄」と、「度會智彦」

奥書 此書者以荒木田盛直神主本謄寫之以宮原」由頼本校合之畢

寶永元年龍集申五月十一日」 禰宜正五位下度會神主智彦(花押)

(署名の上に「禰宜度會神主」「智彦之印」の朱印を捺す)

(貞享四年成りし本の寫し、朱の校正あり、前冊題簽下に貼紙ありて

「千」と、本文は太神宮叢書神主年中行事大成後篇所收 一七四—一

二)

春日權現驗記

寫 二十卷一冊

一四〇

宗禪筆 和袋綴落葉色金銀箔散らし表紙 九寸六寸八分 八十八丁 九

行 題簽左肩「春日社御^(汚損)□記」 内題なし

奥書 右此一冊雖惡筆憚存爲仰大明神值遇」如願奉写者也

于時天文三年六月二日

宗禪謹書

(題簽の汚損せる一字は「驗」と讀むべきか、延慶二年「春日權現驗記

繪卷」の詞書なり、別筆にて異本校合あり 一七五—一四一)

加茂のみあれ考

寫 一冊

一四一

荒木田久老著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸五分五寸六分 瓶覗色半葉十

行罝紙四丁 外題中央書名同、「竹柏園文庫」

(末に「極月十六日宇治久於喩 村田春海ぬし」とありて書簡様のもの

なり 一七五—一四二)

石和見聞志

寫 一冊

一四二

大串元善著 栗田寛筆 和袋綴落葉色表紙 八寸九分六寸一分 十六丁

十行 題簽左肩雙邊(刊)書名同、「栗田氏藏」

奥書 我」黃門閣下一日在西山聞人道和州石上社振古不」火其殿廊體式

特異今制社前有画版画往古祭」儀亦古物也又同州大和社華表下有方石

一銘」刻具存好古之深欲悉其狀時善適在京師命圖」而上之遂將畫工而

于石上于大和留宿數日」事竣而還因哀其間所見聞者爲一冊子名石和」

見聞志隨圖以上 元祿乙亥秋九月 彰考館臣大串善上

(大串元善の石上大和兩社見聞記を栗田寛の寫せるもの 一七五—一四三)

天滿社官居考ノ辨

寫 一冊

一四三

岡本眞古著自筆 和袋假綴表紙なし 七寸七分五寸七分 二十七丁 九

行、「竹柏園文庫」

奥書 癸丑三月 水莖垂白山人識

(奥にいふ癸丑は嘉永六年、土佐潮江郷の天滿宮につきて述べ、先人の

著を駁し鹿持雅澄の評を請へり、雅澄の附箋あり 一七五—一四四)

藤原能季藤原基通宛申文案

寫 一通 闕

一四四

一尺二分三寸五分 一行二十二字 全十八行

事書 春日御供預散位藤原能季重解申進殿下政所裁事

差出書 壽永二年四月十一日散位藤原能季申文

(大和辰市の惣追捕使職に補せられ神事を勤行せんことを請ひしもの、

案、紙つぎの所中間數行缺、裏は曼陀羅の圖と説明あり、佐佐木信綱

「百代草」参照 一七五—一四七)

洛陽東五條松豊八幡宮草創記

寫 一卷

一四五

卷子本表紙なし 用紙裏打 九寸二分

(室町期寫、助辭を宣命書にしたる同社の縁起、末に「承久元己卯年五月朔日於尾陽熱田白鳥書之畢」とあり内容よりしても熱田神宮關係のものと思はる、全文朱の振假名あり 一七五—一七五)

神祇講式 寫 一軸

一四六

證海筆 卷子本表紙なし 一尺四分 上下單邊九寸八分 有界八寸 十字詰

奥書 下總國香取郡大須賀保奈土昌福寺常住薩摩實名證海書之「後覽之人」拙筆躰憚入候于時命祿三年_{壬卯}月廿五日

(命祿は僞年號にしてその三年は天文十一年なり、朱にて訓點を附す 一七六—一七三)

神祇講之式 寫 一帖

一四七

宥榮筆 折本紺表紙 六寸八分二寸七分 四行十五字内外 題簽左肩白紙「神祇講心式」

奥書 (講式末に) 文錄五年_{丙申}八月十四日書早筆者宥榮之 (釜神之祭文末に) 八月廿二日書畢

(表より裏へ廻りて書かる、先づ神祇講之式は大部にして文祿五年寫振假名及び訓點を施す、次に同筆にて釜神之祭文、同年八月廿二日寫なるべし同じく振假名及び訓點あり、この祭文末三首の和歌あり次いで日光山のつとめ夏等の祭文ありこれ別筆か、舊會津附近の修驗者圓覺院佐々木氏の藏なりと 一七六—一七一)

佛 教

寺々五人組判形帳 寫 一冊

一四八

和袋綴堅紙表紙 一尺二分八寸 七十三丁 外題中央「大坂町中江出寺請狀諸宗寺々五人組判形帳」 内題なし、「篋圖文庫」外一印

本文初 指上申一札「先年大坂天滿諸宗寺々五人組之帳差上候」今度茂五人組を相改致連判上可申旨「被仰渡(中略)」元祿八年_{乙亥}九月

識語 (表紙外題左下) 南組農人橋材木町 (後に宗旨手形の書式雛形を附記す、大阪市史卷三、八〇頁参照 一八〇・二一—一八一)

觀經正宗分散善楷定記附觀經正宗分定善義楷定記六

古活字本 十一卷十一冊附一冊 一四九

顯意著 和袋綴鶯色表紙 九寸四分六寸五分 四周雙邊七寸五分五寸三分 九行十九字 外題左肩白書「散一(一十二)」「定六」 柱刻「散善楷定記」「定善楷定記」

刊記 寛永十七年_{庚辰}八月吉日

洛陽三條於寶藏寺令印判之者也」比丘來譽林香

識語 (第八冊を除く各冊裏見返し) 滿空教圓之(之)は「判」とも (一八三—一八九)

觀心玄樞 寫 一冊

一五〇

延壽(智覺禪師)著 和胡蝶裝澁引表紙 八寸七分五寸八分 百十二枚
七行 内題「觀心言樞一卷」下に「智覺禪師延壽述」とあり
識語(表紙右下) 無量光院

(見返し右下別筆) 傳得良尊(同左下別筆) 無量光院雄胤 傳与玄昌
(本文末) 無量光院

(卷中別筆にて送假名句讀點を施し異本校合あり 一八三―一七二)

最勝王經音義 寫 一冊

一五一

和袋綴奉書表紙 九寸一分七寸三分 十二丁 六行 外題左肩書名同
書名の右肩に「古鈔」とあり、「由清之印」「月の屋」

奥書 承曆三年^巳四月十六日抄了「音訓等用借字大底付之仍只今」無清
書歎追と引勘字書可一定之」所入之紙十二枚

附箋(卷末) 貞觀九年十一月紀命七大寺講演仁王」般若云と与專寺僧
綱及別當三綱五」師等相共勒加檢察云と」五師大法師名^草

識語(表紙右下) 月舍藏

(右の奥書本の近世寫、紙魚の跡をもそのまゝに寫す 一八三―一七七)

三部經音義 寫 二葉 闕

一五二

八寸五寸四分 五行六字詰

(室町時代寫、一葉は石、第三食米麥田歹とある部又一葉は糸、示の部、
片假名にて音訓を附し四聲を記す、部首は朱書 一八三―一七五)

續一切經音義 高麗板 五卷一冊 闕

一五三

希麟(唐)編 唐袋綴薄代赭色表紙 一尺三寸五分一尺五分 九十五丁
上下單邊七寸二分 無界十一行十四字 註雙行 外題左肩墨雙邊「續一
切經音義卷第六之十雜」 内題「續一切經音義卷第六(一十)」 柱刻書
名同、「徳富護持」

刊記(各卷末) 丁未歲高麗國大藏都監奉勅雕造

識語(見返し墨)是書大正六年四月十九日「予訪朝鮮海印寺搜其」塔頭
弘濟院架上於故帙」狼藉久埃陳堆之裡感得」焉今割愛以寄贈」佐佐木
博士云尔 壬戌臘月二」 於青山艸堂繡峯迂生(印「蘇峰」)

(内題の下に「雜」とあり函名なり十卷の中六より十の卷迄なり 一八
三―一六七)

大般若波羅密多經卷第二百七 寫 一帖 一五四

折本改装表紙黃麻紙 用紙裏打あり 八寸四分 天地單邊六寸六分有界
六分 替題竅中央雙邊「大般若波羅密多經二百七」(刷、但し「二百七」
のみ墨)

奥書(朱) 句切了 般然
(奈良朝時代寫、もと卷子本を五行つゝの折本に改む、朱點の句切若干
あり 一八三―一四九)

大般若波羅密多經卷第三百九十九 寫 一帖 一五五

折改装替代赭色表紙 用紙黃楮紙 八寸二分二寸九分 天地單邊六寸七

分有界六分 五行十七字 替題簽中央金紙破損「卷第三百九十九」のみ
讀み得、「錦竹舎」等

奧書 正平廿三年申六月日爲現當二世所願成就加修復了源盛

元仁二年五月四日 以春日御社之直本於院校點畢了俊

大乘院御門跡正徳六申年三月日被加修復早

大正十五歲次丙寅三月日獲之(花押)

(元仁二年の寫にして初に「春日御社經也」とあり 一八三—一五七)

大般若波羅密多經卷第五百一十一

寫 一帖 一五六

折本改装紅柿色地紋布表紙 用紙黃色穀紙 八寸四分二寸九分 天地單
邊六寸六分有界五分 六行十七字 外題なし

奧書 (墨) 天平二年歲康午三月上旬始寫大般若經一部

右平羣郷都菩臣足嶋 時年六十七

檀越解信

(朱)貞永二年巳正月十九日於上階付□□(缺世)當徒氏人永恩時年六十七

(全部朱句點あり全五百十六行完備、狩谷棧齋舊藏にして「尙古圖錄」

二編にあり、佐佐木信綱「百代草」、田中槐堂「古寫經綜覽」興福寺

永恩具經の條参照 一八三—一六三)

西藏蒙古對譯經

一冊 一五七

折本黃表紙 八寸八分三寸五分 上下雙邊七寸一分上欄二寸五分 題簽

中央雙邊西藏蒙古兩語を刻す

(上部に佛像を圖し下部に上に西藏語下に蒙古語を配し全部赤色刷なり

包紙に「西藏蒙古對譯經 梵字咒經幢梵字牒 本邦所傳存候 常眞護
持」と 一八三—一八三)

百萬塔陀羅尼附百萬塔攷

二葉附一軸 一五八

表紙なし裏打あり 一寸九分六寸 及び一寸九分七寸五分 内題なし

(百萬塔中に納めし天平寶字八年印刻の陀羅尼、共に相輪陀羅尼にして

一は卷末より十行を存し一は十五行を存す虫喰多し)

百萬塔攷 一軸

狩谷望之著 卷子本表紙なし 八寸七分三寸三寸 外題なし 内題

「稱徳天皇百萬塔」「塔中安置經本」

刊記 寛政十年八月十二日 眞末謹識 藤原茂利書

(眞末は望之の前名なり、右下隅に一印あり 一八三—一八一)

佛說一切如來眞實攝大乘現證三昧大教

王經卷十四

寫 一帖 一五九

靜意書 慧超校合 折本 原表紙砥粉色 包表紙黃綠茶組紐付 用紙裏

打 九寸三分三寸九分 天地單邊七寸二分有界六分 六行十七字 外題

表紙左端中央「攝大乘現證三昧大教主王經卷十四 勒」

奧書 謹奉大擅那鈎命所終書校也

淨光明律寺寓住比丘靜意敬書 住持比丘慧超校合

(奧書末に版刻の發願文八行ありてその末に「文和三年甲午歲正月廿三

日征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌」とあり、尊氏の二字は彼の自筆

一八三—一六一)

佛說衆許摩訶帝經卷第十三 宋版 一卷 一六〇

法賢譯 折本表紙なし 九寸八分三寸七分 上下單邊八寸一分無界 六行十七字 外題なし

奧書 (墨) 奉渡唐本一切經内

建長七年卯十一月九日於鹿嶋社遂供養

常州前長門守從五位上行藤原朝臣時朝

發智論卷第十四にも同じ奥書を有し古筆了伴の極ありしと 一八三—イ八五)

佛說佛母出生三法藏般若波羅密多經卷

第二十一 宋版 一帖 一六一

折本表紙なし 一尺三寸七分 上下界八寸 六行十七字

奧書 (墨) 奉渡唐本一切經内

建長七年卯十一月九日於鹿嶋社遂供養 常州前長門守從五位^(中)行藤原朝

臣時朝

(所謂笠間經又は時朝經と稱さるゝものゝ、一 一八三—イ五九)

法華疏私記 古活字本叡山版 十卷十冊 一六二

證真撰 和袋綴改裝灰色表紙 八寸八分六寸五分天地裁斷 十行二十字 外題なし 内題「法華疏私記卷第一」柱「文私記(卷數)(三、四、八、九、十卷各「本、末」に分る)(丁數)」

(叡山活字本元寛中刊と思はる 一八三—イ五五)

梵網經古迹記科 春日版 一帖 一六三

叡尊著 折本表紙缺 九寸三分 外題左肩墨書「古迹科」

奧記 文永十一年^{甲戌}二月二十四日再治畢 西大寺沙門叡尊

刊記 比丘尼真慧勸内外之知識施數貫之錢「財開此印版冀流通遐代導利

群生矣」

建治元年六月 日 幹縁比丘嚴秀謹記

(後刷 一八三—イ七三)

摩訶吠室羅末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀

軌 寫 一軸 一六四

卷子本表紙なし 用紙鳥の子 八寸九分 天地單邊七寸二分 有界六分

十九字 外題なし 内題書名同下に「一卷」卷末に「吠室羅末那經

一卷」「請來内」

奧書 (朱) 此經處々有不同意事後哲可糺察 賢尊

(鎌倉期寫、賢尊は海住山寺具經などに見え正平頃の人、朱筆にて乎古

止點及び振假名本文の校合を加へしも彼ならん 一八三—イ六五)

妙法蓮華經安樂行品第十三 寫 一軸 一六五

卷子本表紙なし 八寸五分 天地六寸二分有界六分 十七字

卷末 妙法蓮華經卷第六

(隋代寫、「大正新脩大藏經」には卷第五安樂行品第十四とあり 一八三—イ

五三)

妙法蓮華經玄贊 寫 一軸 闕

一六六

親基(唐)著 淳智筆 卷子本青朽葉色織物表紙 九寸 上下單邊七寸七分半有界五分 三十一行 每行約廿二三字 外題なし 内題なし、

(用紙裏に)「金澤文庫」「尙友堂藏弄」

識語 右唐慈恩大師撰法華經玄贊零本係「北條越後守顯時所置金澤文庫

舊」藏」紙背縫上有金澤文庫之印卷尾有天「平寶字二年戊戌八月七日執

筆淳智十六字淳智」兩都秋篠寺僧云距今「一千八百七十七年矣不知其間經喪

亂兵變」幾何苟非神物爲之加護焉傳久遠其能若斯乎此雖殘簡之餘實希

世之珍」也余三年前遊金澤探文庫之遺址訪」其遺書於稱名寺隻字不存

慨歎而歸」矣頃一書買持來以求貨余覽而狂喜」雖欲獲之心甚切而重價

殆不可辨乃」與同好謀而購之斷割爲廿二枚相俱」各寶藏一枚蓋是舉本

雖出於不得已」而既已爲零本矣藏之一家或罹」水火之災厄不如分析多

喜好古者而」益傳久遠也覽者幸勿以斷割之故罪」余

天保十五年甲辰十月丹羽惠跋

陽津篤書年六十又六干時弘化二」年乙巳七月□□師令造之於小」卷

以爲家藏時と愛翫回」

(丹羽惠は號思亭、越後新發田藩儒 一八三一—一五一)

瑜伽師地論附太唐三藏聖教序 寫 一軸 一六七

卷子本 黄色和經紙表紙 八寸七分 天地單邊六寸五分 有界五分 約

十七字 外題左肩(本文に別筆奈良中期筆)「瑜伽師地論卷第一」一」卷

初内題 「大唐三藏聖教序 御製」

(大唐三藏聖教序の本文終りて次に同紙同筆にて「瑜伽師地論卷第一

弥勒菩薩說沙門女契奉 詔譯」とあり、書風唐代の氣あり筆致頗る稚拙、瑜伽師地論本文朱の句讀點あり 一八三一—一八七七)

六字呪王經 明版 一冊 一六八

唐袋綴改裝表紙 八寸八分五寸八分 六丁 四周雙邊七寸八分四寸九分

有界十行 外題なし 柱心上部「經」中部「六字呪王經」その下に丁數

を刻み下部「能十」、「久昌寺經藏開山檀那源光因置」

奥記 浙江嘉興府平湖縣善信陶應孝損皆刻此「六字呪王經一卷專祈先靈

早生蓮界夫婦諸老」百年子嗣智慧日增計字一千九百六十三該銀一兩六

錢一分裂板三塊該」銀二錢四分

順治丙申仲春 費元英募 曙升子鄒煒較

(明版大藏經なり 一八三一—一七九九)

法花山寺緣起 寫 一卷 闕 一六九

慶政著 卷子本用紙改裝栗皮色紙裏打 一尺一寸三分 一行約二十字

外題なし 内題なし 函裏佐佐木信綱筆「法花山寺緣起」

奥書 嘉祿二年丁亥八月十一日 沙門慶政記之

(前部缺、竹柏園藏書志五四五頁によれば京都法花山寺の緣起なるべし

と、嘉祿を下る還からざる頃の寫 一八五一—一三)

魚山薑芥集 寫 二卷二冊 一七〇

長惠著 和綴葉裝共表紙 八寸五分五寸三分 八行 外題左肩(書名

同(上)(下)「内題「魚山私鈔」

奧書 此本云「初心者爲指南注之大部分案記爲本雖然當世相違之儀不載之」後讀雖多憚弟子分解迷勸誘之爲勝計認之愚拙弟子」之外不可及披讀雖以法備後輩之誇人謗法之過失不可起發用心也將又長惠法印可預御迴向者也此書造」異明應五年丙辰五月十二日也 春秋卅九才

今書写、永正十二年丁丑四月廿九日書之春秋滿六十

標陲勢遍 丙深房 春秋廿六

師資契諾吳他故爲形見拭老眼書之了芳恩」高從菴迷懇志深自溟海於後世者當以可被訪菩提者也」 左學頭法印權大僧都長惠在判

(室町末期寫、聲明の譜本なり 一八六一一五)

要集染汗意事 寫 一冊

舜清著自筆 和袋綴表紙なし 八寸五分五寸五分 墨付六丁白紙一丁

八行

奧書 于皆永祿十一年戊辰正月十三日書之來廿四日金藏院」四季講題也爲

用意問者也扱此十ヶ年之間者兵亂終」不靜謐今日三人衆霜臺取相眞最

中也物恠々々 南無三寶々々々 天下泰平國家安全 舜清敬白

(法相宗の教理を問答體に記す 一八八・一一一)

華嚴法界圖 寫 一軸

義湘(新羅)著 卷子本砥粉色蠟箋表紙 一尺二分 天地單邊八寸三分有

界 外題左肩別筆書名同 内題なし

奧書 (別紙別筆)華嚴宗香鳥大師末葉非人釋顯(不明)法師之執筆也

(右に同紙別筆)建曆二年三月三日始許於高山以法勝寺(全カ)本一校了

賢(不明)法師

(平安朝寫、卷末に「一乘法界圖」とあり 大正新脩大藏經第四十五卷所收華嚴一乘法界圖は本書と同じ奥書を有す 一八八・二一五)

東大寺大佛殿造立勸進帳 一冊

折本表紙なし 一尺四寸三分 上下單邊八寸三分但し寄進書入の部分有

界八分上下二段にわかる 裏つきめに「東大寺」の印あり 内題なし

(初め大佛の圖と豫定の大佛の大きさに「貞享二歲次乙丑五月吉日

東大寺龍松院勸進沙門」と刻し、公慶(印「公慶」と自署す、以下百行

の寄進書入の部ありて百三十五條の書入あり多くは零細の金を出せり、

末に東大寺大佛殿造立の年序及び俊乘房重源像を刻す、なほ裏にも寄進

者の百十三條の名と寄進の額を記す、虫侵甚し 一八八・二一五)

蘭奢薰 寫 一冊

五十嵐雅言編自筆 和袋綴改裝代赭色表紙原表紙は共紙 九寸六寸四分

「宮内省」の柱刻ある紅色十三行罫紙五十二丁 改裝表紙外題左肩

「東大寺蘭奢薰五十嵐雅言手摸本」 原表紙外題左肩 「蘭奢薰」 内題なし

(雅言の正倉院文書整理の際手録せる文書の寫を貼りこみたるものなり

一八八・二一五)

往生至要抄 寫 二卷一軸

寫 二卷一軸

一七五

尊圓親王筆 卷子本紺紙表紙 見返し金紙 八寸一分 水晶軸 題簽左肩剝脱の跡あり 外題なし

奧書 右往生至要抄上下者」大乘院宮尊圓親王芳翰也」披閱之次加證明之畢詞而已

天文廿四年四月十六日 (花押) 記之

(舊粟田口青蓮院の藏にして安永五年摸勒して刊行したるもの、原本なり、刊本跋に云、「實爲欣西之要旨、眞宗之良規焉、蓋其於義、則金符玉律其於書、則鳳翥龍躍、不啻稱念歸依者、獲而寶之、而亦臨池弄筆、所受而重也」と、後人の振假名まゝあり 一八八・三一・一九)

教時諍 寫 一冊

一七六

安然著 和綴葉裝銀鼠色表紙 五寸七分五寸四分 四十八丁 八行 外題左肩書名同

奧書 教時諍一卷 應保三年癸未二月於東禪院」書寫了

(内題の下に「安然和尚所製」と、表紙左肩に別筆「教時諍」同右下に「東禪院」同中央下に「藏廿」とありて藏字の上破損にて不明、文中間々「イ」本校合あり 一八八・三一・一三)

〔鞍馬寺勸進文〕寫 一軸

一七七

卷子本改装山吹茶色金欄表紙 用紙金銀箔を散らせし厚手鳥の子 一尺一寸 題簽の代りに表紙左肩に「惣持院行助法印敬白勸進沙□(印)」の極札を貼る 内題なし

奧書 長祿二年七月 日」勸進沙門

(長祿二年二月十三日鞍馬燒失後の再建勸進文なり、竹柏漫筆・鏡草參

照 一八八・三一・一)

十如是義私記・自行略記 古活字版 二卷一軸 一七八

源信(慧心)著 和袋綴鶯色表紙 九寸三分六寸 私記三十五丁略記十八丁 四周單邊七寸五分五寸一分 無界十行二十字 外題左肩朱書三行

「慧心著 十如是私記 自行略記」 柱題「十如是私記」「自行略記」 (寂山版なるべし、寛永か或はそれよりなほ下る頃の刊、藏印三あれど

讀めず 一八八・三一・一七)

紀伊國根來寺聖天院傳法灌頂雜記

寫 一巻 一七九

隆濟編 文安二年自筆 卷子本白紙表紙 用紙各種具注曆の裏を使用

九寸一分 外題左肩別筆「紀伊國根來寺傳法灌頂記」、表紙右下「報恩院」(墨)

奧書 右祖師前大僧正隆源於彼兩院中性院 聖天院被執行之紀也」謂法會之嚴儀

謂先祖之法德闕悼不傳後藁」大綱注之終但或寫符案或拾御記御自筆集之」錄之一切不載私之詞就中於請定等書様者任彼寺」之例受者方之沙汰也云々彼寺例僧階偏守 戒臘未依宮位云々敢莫爲」本寺之准例抑今度被顯不思議之効

驗之事在之廿五日夜 受職之前 日也賢範法印儀病惱凡四顯八倒云々如今臨者

存」命不定也明日授与之儀不可叶此上者雖不其恐少行明」有光于病席而病者拜尊顏者本望定以之可満足且」御祈念尤湧存之由弟子早範法印參申中性院之御休所可然之由御承諾則入御聖天院直倚病床御祈念」暫令加持之給病者漸蘊息見人皆爲希異云々其後次」第本覆後廿九日無子

細遂其節異不可説々々之御法驗親拜見之由件度共奉之上下於今美談之誠「慕祖德之不耻上代後哲彌可事修其德者哉

于時文安二年乙丑八月四日於釋迦院記之終 末資隆濟
裏文書具注曆は次の四部を継ぎ合す)

永享二年(但し正月は一、二日のみ以下三月二十日まで以下缺、十二月(大)は廿八日迄缺)

嘉吉三年(自一月一日至三月三日以下缺)

長享元年(自一月四日至二月二十八日以下缺)

長享十一年(自七月廿二日至八月十七日外缺)

(應永十六年^{己丑}二月より文安二年に至る灌頂に關する文書を再寫す

一八八・四一・一三)

弘福寺大和國衙宛牒並國判

一軸

一八〇

寛弘三年十一月廿日都維那法師三昧院檢校・大法師嚴々・上座大法師仁滿署名 卷子本改装白茶色表紙 一尺四分 黑色塗木軸 用紙檀紙裏打あり百十四行 外題左肩「弘福寺文書 寛弘三年」 内題なし
事書 欲被任舊例免除寺家所領寺邊并國內庄々收公愁狀
牒の本文のつぎに源頼親の外題ありて「守源朝臣(花押)」の署名あり(巻首を缺きて「勘大判官代あへ」「目代攝津掾爲□(花押)」「遠江介藤原(花押)」「散位麻田(花押)」「小野朝臣(花押)」等の署名ある朱の國衙勘注を僅かに存す、大和弘福寺の所領租税免除に係はるもの、全紙面に「弘福寺」及大和國印らしき方形の朱印を押す、「大日本史料」参照 一八八・四一・一七)

弘傳畧頌抄

寫 一軸

一八一

道範著 乾元二年亮承筆 改装卷子本油色地龜甲紋縹布表紙見返し金泥飛雲模様 八寸四分 八寸四分一尺五分の袋綴本を卷子本に改装せるもの 外題なし 内題「弘法大師略頌」

奥書 文曆元年七月廿一抄之了依仁和寺 二品親王教命就「諸傳略抄之

阿闍梨道範

寫本云

文永八年六月廿七日誂幡磨房増慶寫之了「嚴譽」一了了

寫本云

于時弘安七年五月十七日於白毫寺花藏院草菴書寫之了「同十八日一了了」
金剛佛子于惠

于時正應元年十月五日爲崇大師之貴德爲報高祖之遺恩於内山菴宝房書寫交點了 金剛佛子 聖什

于時乾元二年卯月十二日課于書生令之寫了 亮承卅八

(更に「或書云康和二年三月廿五日」云々の記事ありその奥書に云)

正應三年暮秋下旬以付記傳寫了談義之次密々讀此抄了文字之「訛謬點畫之異差皆以直之而已 讀師正修寺明玄 點者明真云」愚身同在彼席

聞文點之正^(不明)矣 亮承記之

(巻首「弘法大師略頌」として「誕生光仁寶龜五」以下十七行の頌句ありて「已上圓明房上人作云」とあり以下「御誕生事」に續き續群書類從所收本に同じ、但し所々に存する「裏書云」云々の條は類從本に見えず改装の際「御入定事」の條一丁分の各半丁前後錯簡せり、なほ「御入定事」の條の「兼日十个之間」以下「贈大僧正」の條の「遠入大」迄缺葉

し、別筆別紙にして「唐學得秘法」云々に續く、原裝は袋綴二冊なりしなるべし 一八八・四一五

慈尊院傳受日記 寫 一冊

一八二

良濟建武二年及貞和五年筆 折本共表紙 七寸七分六寸二分 外題左肩書名同内題なし 「霞亭文庫」「良濟」(表紙右下墨)

奥書 貞和五年己丑正月五日酉一點中書了良濟三十八歲建武二年亥乙八月廿一日御遺告能實條章已下の間書不清書「関十餘ヶ年自今年正月一日始之五ヶ日清書」

(梵字二字ありて半行缺損) 中書了 良濟 五十二歲

見返し 愛水次第 無障金剛次第師口第二

(卷頭)建武二亥乙六月八日於慈尊院傳受始之 相當緣日藥師法傳受冥法(虫損)「聞之」とあり同年十月廿六日「大元法受了」に至る迄の被傳受記なり、用紙正中二年と覺しき具注曆の裏を使用し消息文を以て全紙裏打を施す 一八八・四一四—一九

諸尊法傳受日記第四 寫 一冊

一八三

仙覺著自筆 和袋綴共表紙 四寸二分六寸一分 用紙消息の裏紙を用ふ表紙共二十二丁 外題中央「諸尊法傳受日記深秘」内題なし 識語 (表紙左下同筆) 第四仙覺

(眞言宗法式諸流系圖先例等を録す、文永十一年、建治二年の記事あり、萬葉學の仙覺とは同名異人 一八八・四一四—一一)

傳法灌頂口傳 寫 二冊

一八四

辨意筆 和綴葉裝白表紙 六寸七分四寸八分 七行 外題左肩一は「傳法灌頂口傳 勸流イ」今一は「具支灌頂口傳 勸流イ」内題とみるべきものなし、「高雄普賢院」「辯意」(表紙墨書) 奥書 (一) 任本校了(朱書)

文明九年丁酉七月廿九以或本念比重校合之誤字直之早

法印弁意受生五十五

文安三年六月廿五日於神護寺「普賢院此上下兩帖以密藏坊之」御本令書寫早 金剛佛子辨意生廿四年

(二) 文安三年六月廿五日於神護寺普賢院此兩帖令書寫之写本密藏坊榮濟「御本可秘々々」 金剛佛子辨意生廿四年

任本點了(朱)

(二の具支灌頂口傳と外題するは具支灌頂、相應經灌頂、小嶋灌頂、許可灌頂、御請來受明灌頂等のことを記し延慶二年榮海の記あるものを轉寫して附したりと思はる、外題イは文明九年用ひし異本をさすなるべし 一八八・四一七)

御文 一冊

一八五

蓮如著 和袋綴黒無地表紙 用紙厚手鳥の子 八寸九分七寸三分 五十五丁 七行 外題なし 内題なし 刊記 釋宣如(花押)

(本文片假名交り文、宣如上人は證如上人より三代目、大谷派二代の祖 一八八・六一一—一三)

御文 一冊

蓮如著 和袋綴紺無地表紙 用紙厚手鳥の子胡粉引 八寸九分七寸三分
六十五丁 七行 外題なし 内題なし
刊記 釋證如(花押)

一八六

識語 (見返しに白紙貼付墨) 初版御文本願寺第拾世證如上人開版

天文六年 去昭和十年三百九十九年版木浪華加藤源左衛門寄進

(本文片假交り 一八八・六一・一五)

御文 實如證判本 寫 一冊

一八七

蓮如著 和袋綴龜甲框葡萄金欄表紙 用紙鳥の子 八寸五分六寸五分

四十六丁 七行 外題なし 内題なし

奥書 實如(花押)

(實如上人は蓮如上人の嗣本願寺九世の祖なり、その入寂は大永二年なるを以て本書帙上に天文年中寫とあるは誤りにて大永二年以前の寫たり
一八八・六一・一七)

御文 證如證判本 寫 一冊

一八八

蓮如著 和袋綴紫地花模様草花縫取金欄表紙見返し金無地 用紙厚手鳥の子胡粉引 八寸五分六寸七分 四十六丁 七行 外題なし 内題なし
奥書 證如(花押)

(別筆) 釋堅信爲菩提
釋妙堅志納之

(室町時代寫 一八八・六一・一九)

御文 證如證判本 寫 一冊

一八九

蓮如著 和袋綴黒無地表紙 用紙鳥の子胡粉引 八寸八分七寸 五十四丁 外題なし 内題なし

奥書 證如(花押)

(天文頃寫か 一八八・六一・一二)

諸神本懷集 寫 一冊

一九〇

和胡蝶裝共表紙 八寸八分六寸五分 三十枚 六行 外題左肩「諸神本懷」、「曼珠圖書之印」

識語 (裏見返し別筆) 高嶋那船木北濱道場也

(室町時代寫、片假名を使用し漢字には振假名を施せり、日本諸神を諸佛に充て本地垂迹を説きたり 一八八・六一・一五)

夢中間答集中 寫 一冊

一九一

夢窓疎石著 禪海筆 和綴葉裝共表紙 八寸八分五寸五分 六十二丁

九行 外題左肩書名同 内題の下に「此集有兩本 此本爲正」とあり

識語 (表紙右下文に同筆) 禪海

(室町末期寫、片假名交り全文讀點を施す 一八八・七一・一二)

御書 寫 八冊 闕

一九二

日蓮著 和胡蝶裝朽葉色金箔散らし表紙 用紙雁皮紙 八寸五分五寸五

分七行 卷四・五夫々四・三丁冒頭缺 外題左肩「御書(卷數)」(但し卷四・五缺) 内題なし 各卷見返しに書名あり 所收左の如し

(第四) 撰時抄上下(第五) 報恩抄上下(第七) 法華取要抄 本尊問答抄 法華題目抄(第十五) 主君耳入此法免与同罪事 爲法華經不可惜所領事 單衣御抄 四條金吾殿御返事 中興入道消息 身延山御抄 月水御書(第二十) 災難對治抄 秀司十勝書(第二十四) 宿屋入道許御狀 良實狀御返事 大小戒事 立正安國論奥書 十章抄 強仁狀御返事 問註之時可存知由事 善无畏抄 大田殿許御書(第二十九) 曾谷殿御返事 大田殿女房御返事 富木殿金珠女事御書 大田殿女房御返事 立正觀抄 御書 立正觀抄送狀 御書 寂蓮房御返事(第三十五) 高橋入道御返事 一念三千理事 新池御消息 念佛者追放宣旨狀 眞言見聞

奥書(撰時抄下) 建治三年^{元イ}大歲^{丁丑} 六月十日於甲州破木井身延山「爲末代後學佛法興隆作畢」 願主 眞如坊日要

(報恩抄) 建治二年^{太才}丙子七月廿一日記之

自甲州波木井郷身延山嶽奉送安房國「東條郡清澄山淨顯坊義淨坊之本願主 眞如坊日要

(以下略)

(室町時代初期の寫、各卷に「願主眞如坊日要」の奥あり、日要是日蓮より十八代、身延山歴代中日朝より十二代に當る 一八八・八一イ三)

日蓮聖人註畫讚

古活字本 五卷一冊

一九三

日澄著 和袋綴綴糸を離したり改装薄茶表紙 八寸八分五寸八分 六十六丁 七行十七字 外題左肩森鷗外筆書名同 内題「註畫讚卷第一」(一

五)「柱心「註畫讚」(序二枚)「註畫讚 目錄一(一一)」「註畫一(一九)」「註畫二(一九)」「註畫三(一十五)」「註畫四(一十八)」「註畫五(一十二)(以下缺)」「觀潮閣文庫」「素舟文庫」見返し (貼附の刷紙) 坐 門外不出 三緣山慧照院常住物 (卷二第九丁以下卷五第十丁までの各丁を森鷗外母上宛書簡を以て裏打す、書簡は岩波版鷗外全集著作篇第二十二卷明治三十四・五年の條に所收 一八八・八一イ一)

キリスト教

おらしよの翻譯

吉利支丹版 一冊 闕

一九四

和袋綴茶色巴模様入綴子附加表紙 見返し金梨地紙 用紙裏打裁斷あり 六寸七分四寸三分 四周單邊五寸六分五厘三寸六分 二十六丁 十二行 二十三字前後 題簽左肩後筆書名同 内題なし 柱刻「一(一二十六)」扉 おらしよの翻譯 慶長五年三月上旬 付きりしたん教の条々

DOCTRINÆ CHRISTI. = anæ rudimenta, cum alijs pijs Orationibus || NAGASAQVI EX OFFICINA || Gotô Thome Sôin typogra || hi Societatis IESV. || C m facultate O di- narij, & Superiorum. || Anno. 1600 ||

(慶長五年長崎後藤登明宗印刊、金屬活字印刷、ラテン原文を平假名に翻譯しその邦譯文と併記せし所あり、十二丁表一部及び同裏全部缺、蟲損多し、所々墨にて二頁大の×の消印あり 一九八・二一イ一七)

歴史科學

日本

國史實錄

寫 七十卷附初卷四十八冊 闕

一九五

林鷲峯編 林鳳岡補 元祿十六年癸未春正月穀旦林復軒序 元祿十六年
 祀服陽協怡建寅之月林確軒後叙 和袋綴改裝原表紙砥粉色 九寸四分六
 寸六分 匡廓なし 六行 題簽左肩雙邊寫書名同下部に所收卷數を記す
 (全七十八卷中一七、三九、四〇、四一、四二、五五、五六、七三の八
 卷を缺く、正續本朝通鑑なるの後鷲峯又本書を思ひ立ち未成にして鳳岡
 之をうけ元祿十五年完成す、この書朱筆にて寫本の誤の校正ある外卷十
 一迄は祭酒本との校合あり、本書に附する正續本朝通鑑の序や條例など
 祭酒本になしなど見えたり、祭酒本とは林家の傳來の本なる事云ふ迄も
 なし、その校合を見るに本書缺ける所甚し、この書は中途稿本よりの寫
 本なるか 二一〇—一一)

國史學要

寫 十六卷八冊

一九六

棚谷元善(桂陰)著自筆 和袋綴薄檜皮色表紙 七寸八分五寸五分 十行
 約二十三字 外題左肩同筆「國史攬要 一二(一十五十六終)」内題外

題に同じ

(神代より明治二年にいたる編年體の國史、片假名まじり、簡略にして
 「元ト竟蒙ノ需ニ應メ一時ノ筆ニスル所」なりと云ふ 二一〇—一一二
 三)

神皇正統記

寫 一冊 闕

一九七

北畠親房著 和袋綴記録表紙 八寸五寸七分 五十六丁 九行 外題中
 央書名同、「南都二条家文書寄贈者柳生彦藏」
 奥書 此記者去延元四年秋爲_レ示_ニ童蒙_ニ所_レ馳_ニ老筆_ニ也_一旅宿之間不_レ蓄_ニ
 一卷之文書纔尋得最略皇代記任_ニ彼篇目_ニ粗_レ勒_ニ子_一細_ニ早_ニ其後不能
 再見_一已及五稔不圖有展轉書寫輩之_一驚而披見之處錯亂多端癸未七月
 聊加修治以此不可爲本以_一前披覽之人甚嘲哂多歎如本
 (室町末天文頃の寫、片假名交り、卷をわかつず最初より廿九代に及ぶ
 以下缺 二一〇—一一七)

善隣國寶記

寫 一冊

一九八

周鳳著 「文正龍集丙戌八月十日泉南臥雪山人周鳳書于萬年北禪堂」の
 序 「文明二年龍集庚寅歲月二十三日臥雲八十翁瑞溪周鳳書于善隣國寶
 記後」の跋 和袋綴改裝栗皮色表紙用紙打裏 九寸八分七寸 七十六丁
 半葉十一行 外題左肩書名同
 (室町末期寫、全體にわたり訓點をつけあるは刊本に従ひて後人の加へ
 しものなるべし 二一〇—一一九)

日本外史俚諺抄

版下本 寫 二卷二冊

一九九

〔味酒清人〕著 川上滔堂筆 和袋綴白紙表紙 九寸六寸五分 四周
 單邊六寸四分四寸七分「賴氏藏板」と柱刻ある薄葉用紙 十行 外題中
 央墨「再改分 外史俚諺抄卷ノ一 四十二丁」「外史俚諺抄 板下二卷 五十
 丁七」 内題「日本外史俚言抄卷之一 (一)」「柱刻内題同
 識語 (卷之一表紙に朱書)

是ハ先年外史俚諺抄ニテ川上滔堂ト申板下書」爲認ひ得共相止候時之
 板下也此位之文字大字ニ成ひハ、」讀ヤスク存御見合之爲ニ封入致ひ
 御覽後御返シ可被下ひ」此板下平氏之所全出來ひ得共相止ひ此時百丁
 斗ニ付」九拾圓之損ニ相成ひ

(附筆墨) 此板下は余り大き過今の世の人には「蟻の目に大佛と申様
 なるべし

(著者は竹柏園藏書志三九頁の記による、日本外史を讀本調にしたるも
 の明治初年のものなるべし 二二〇—一五)

扶桑略記

金勝院本 寫 一冊

二〇〇

皇圓著 和袋綴改装共表紙 用紙裏打楮紙 九寸七寸四分 五十五丁 初
 丁表十行同裏十二行二枚目以下十三行 外題中央書名同、「朝田家藏書」
 奥書 (裏見返し) 于時慶安元年六月廿四日加支覆墨

奥書二曰

書置くも袖こそぬるれもしを草」なかめん跡のかたみともなれ

識語 (表紙左下) 金勝院

(鎌倉時代寫、新井白石舊藏抄本及び官板の所謂拔萃本の原本、白石抄

本を作りし際より稍々破損を加ふ、〔新訂國史大系〕及び「日本古典全集
 狩谷極齋全集第三解題」参照 二二〇—一二一

無二集

寫 一冊

二〇一

和袋綴鶯色表紙 九寸二分六寸八分 百九十六丁墨付百八十八丁 十三
 行 外題左肩「無二集全自神代至人皇」 内題なし

(神代より後櫻町天皇の明和四年迄の年代記、神祇に關しては詳密なる
 註記を加へま、問答體をなす、後水尾天皇寛永五年迄は一筆にして「今
 上皇帝」とあるを消して「後水尾院」と書改めあればこの頃の筆なるべ
 し、以下は別筆にて寶曆の頃補足し書きつきゆきしものと見ゆ、上欄朱
 にて見出しあり 二二〇—一九)

外患通論

寫 一冊

二〇二

飯田年平著自筆 本居豐顯序自筆 和袋綴水色附加表紙 用紙薄様 八
 寸七分六寸一分 七十四丁 十行 題簽左肩單邊書名同 原表紙外題左
 肩書名同 内題なし

奥書 明治十六年五月

飯田年平

(二二〇・〇四—一)

古瓦譜

寫 二冊

二〇三

藤(藤原)貞幹輯自筆 安永五年歲次丙申立秋日自序 和袋綴草色行成表
 紙 九寸五分七寸二分 題簽中央白紙「古瓦譜 乾(坤)」 内題乾「古瓦

譜坤「佛刹古瓦譜」、「神谷圖書」「藤元平(印)」「天香園藏」「無佛齋」
奥書 平安 福千財輯(「千財」の朱印)

識語 (下巻裏見返し) 清遠室藏 [圓圓]

(乾は滋賀宮廢址瓦以下宮衙神社等の瓦の揚九十八面を収め、坤は古佛
刹瓦の揚五十五面を収む 舊藏者小山源治なほ六面を附す 二一〇・〇
七一イ一)

糸割符銀方銀借用文書 寫 二通

二〇四

天明三年十二月和州添下郡山陵村庄屋年寄等十四名連判
本證文初行 預り申上納銀之事

(唐阿蘭陀荷物落札銀之内五百目也の借用證、本紙の首に天明四年三月
糸割符銀方の添證文を貼付す、同じく天明三年十二月和州添下郡山陵村
庄屋外十四名連判糸割符銀方御役人中に差し出しの添證文一札あり 二
一〇・〇八一イ一)

賀茂某私領田賣券 寫 一通

二〇五

用紙堅紙 一尺二分一尺三寸二分、「日野文庫」(裏左下隅)
事書 沽却私領田事

署名 寛喜三年正月十四日

嫡子散位 賀茂(花押)
權禰宜 賀茂(花押)

(上賀茂の神宮某の券文 二二〇・〇八一イ五)

此度肥前長崎客兩人被參候ニ付手續書

一件之扣 寫 一冊

二〇六

和袋假綴表紙なし 八寸一分五寸七分 八丁 九行 内題書名同
(安政六年阿蘭陀貿易輸入荷物に關する一件書類寫し 二一〇・〇八一
イ三)

上 古 史

英譯古事記序說辨明 寫 一冊

二〇七

柿沼廣身著 和袋綴堅紙表紙 八寸一分六寸四分 十三丁 十行 外題
左肩書名同 内題「チヤンハレン氏述 英譯古事記序說辨明」内題の下
に「日本下野國 柿沼廣身」とあり、「英王堂藏書」
(チエンバレン英譯古事記第五章につきての辨明 二一〇・一イ六七)

改正神代紀異同平均 寫 二冊

二〇八

齋藤彦麻呂著自筆 和袋綴卵色地ニツ癸押し出し模様表紙 八寸五寸三
分 七行 題簽左肩「(書名同) 上(下)」、「權陰山房」「牽舟文庫」外
一印

奥書 日本書紀全部三十卷の中分て神代上下は誤落錯乱少からず」その
うへに傳説異同紛らはしければ今誤字を正し一書の傳」によりて足ら
ざるを補ひ本文を異傳と平均して古傳とおぼしき」をたて、異さまな
る傳へを畧き委しきを擧てあらきを」おき天地の初發より神武天皇生

れさせ給へるまで「つらに」つゞけたるなりされど誤落錯乱ありとて
他書の文を加ふる「事更になし況や私に添削する事をやた」この二卷
の中にある「文ならでは補ふことなしは我をしへ子どもが常によみ」
ならして心にうかべむ料にもとよしなき老の筆すさびに斯「は物しつ
るになむ

識語（裏見返し青）此本齋藤彦麻呂主所藏也文政己丑災既水濕」然而
再出於書肆某店」嘉永元戊申孟夏 千莢藏回

（二一〇・一一四七）

藤原朝臣彦麻呂回

古事記

八雲軒本 寫 三卷三冊

二〇九

太安萬侶等著 和銅五年正月廿八日自序 和袋綴緋行成表紙 九寸九分
六寸八分 四周雙邊七寸八分五寸八分 八行十字 題簽左肩媚茶色本文
と別筆書名同 下に上、中、下とあり、「八雲軒」「脇坂淡路守」「藤原」
「安元」「上野藏書」

（近世初期寫、上欄には若干の見出しを本文には朱點朱註を加ふ、本文
は澤瀉久孝濱田敦の古事記諸本概説—帝國學士院紀事四ノ二以下—には
「寛永板本の系統に屬する門」の八雲軒本系として一系を立つ 二一〇
・一一八九）

古事記

村田春海書入本 三卷三冊

二一〇

貞享四年二月二十九日度會神主延住跡 和袋綴改裝表紙 八寸五分六分
四周單邊六寸五分五分 八行 外題左肩墨「古事記上（中、下）」
識語（上卷表見返し墨）△明和元年縣居會集諸友 山岡俊明 藤原美樹
日下部高豐 橘千蔭「藤原福雄 さて我父のみこと、家兄春郷と也

尾張黒生 楫取魚彦「藤原維寧 この三人日を経て加りたり猶五人
六人集へりしがその名を知らねハ」しるさす

（同裏見返し青）明和元年十月十三日縣居にて讀終ぬ

（墨）おなし霜月のなかハ斗また縣居の翁の本をもて「ふた、び考お
はりぬ

（貞享四年刊本三冊の中、上中二卷に朱墨青を以て村田青海の詳細なる
書入あり、下卷殆んど書入なし 二一〇・一一七七）

古事記燈黃泉之件其三 寫 一冊

二一一

富士谷御杖（成元）著自筆 和袋綴栗皮色毘沙門格子地雲龍摺出模様表紙
用紙黒十三行罫紙頭註罫を有す 全紙裏打 七寸七分五分四分 二十四
丁 題簽中央「黃泉之件 其三」 内題外題に同じ下に「天兒屋命庶裔
成元述」と記す

（古事記燈稿本の一部、表扉に「黃泉之件其三伊邪那美命追來より終ま
て」とあり、本文所々塗抹訂正を施す、頭註あり 二一〇・一一六九）

古事記傳

寫 十九卷十九冊 闕

二一二

本居宣長著 荒木田久老筆 和袋綴裏葉色表紙 九寸一分六寸五分 十
行註二行 外題左肩別筆「（書名同）一（一一九）」

奥書（六冊目末） 以上七冊者安永八己亥年寫畢 宇治五十槻荒木田神

主久老（署名墨消）

（十冊目末） 安永三年甲午十一月十日 本居宣長（花押）

（十一冊目末） 安永四年乙未六月十七日 本居宣長（花押）

（十二冊目末） 安永五年丙申十二月十一日 本居信長（花押）

(十三冊目末) 安永六年丁酉十月二十五日 本居信長(花押)

(十六冊目末) 右自七卷至十六卷十冊者從安永九年迄安永十年正月

十一日手自謄寫畢」 宇治五十槻荒木田神主久老(花押)(署名墨消)

(十七冊目末) 天明二年壬寅二月七日 本居宣長(花押)

おなしとしのかみな月にうつしぬ 宇治五十槻久老(花押)(自署名墨消)

墨消)

(十八冊目末) 天明三年癸卯三月二十一日 本居宣長(花押)

おやしとしのはつきにうつしぬ 荒木田久老(花押)(自署名墨消)

(十九冊目末) 天明四年甲辰二月晦 本居宣長(花押)

(宣長の刊行底本以前の稿本によりて卷十九迄を轉寫せしもの、上欄に

墨書にて本文と同時に書入あるは宣長の説、刊行後青筆もて刊本により

補せしもの多く、その後朱筆にての書入も若干あり、朱筆外題同筆と見

ゆ、刊本にては卷二十迄あり 二二〇・一一一六二)

古事記傳

寫 四卷四冊 闕

二二三

本居宣長著 和袋綴改装丹色表紙 九寸八分六寸五分 題箋雙邊(刊)左

肩「古事記傳刊行以前稿本一(二、四、五)」、「麻績之印」

所收 第一卷上(版本卷一) 第二卷(版本卷三) 第四卷(版本卷五)

第五卷(版本卷六)

奥書 (第二卷) 明和四年丁亥五月九日謹考穴可畏」本居宣長(花押)

識語 (第一冊表紙) 零木四冊「轉寫本なれと刊本と異なり珍重すへし

(第二冊同) 八ノウ神の定義」四四ノオ神世云々」四七ノオ奥書注意

すべし」

(未だ版本の形に至らざる以前の未定稿本の轉寫本なり、第一卷末「道

云事之論」と標題のみありて本文を缺く。「皇學」一卷一號岡田米夫論
文參照 二二〇・一一一七五)

神代紀秘解

寫 十七卷十三冊 闕

二二四

源雅胤著 和袋綴澁引表紙 九寸六寸二分 八行 外題左肩「書名同)

(卷數)」 内題「神代紀上秘解卷第一」、三印あり

(各巻頭初に神祇學頭平胤榮奉勅述とあれば雅胤別名胤榮なりしなるべ

し、片假名書き神代紀の注なり、卷二、十四、十五、十六、十七の五卷

を缺く 二二〇・一一一六五)

神書漫錄

寫 一冊

二二五

富士谷御杖(藤原業春)著自筆 和袋綴縹色表紙 七寸五分五寸三分 四

周雙邊六寸四分四寸四分十行野紙全紙裏打五丁 外題なし

(内題の下に藤原業春とあり、天地初發之時といへるにつき詳説し後に

「備忘」九項其の他を附す 二二〇・一一一八七)

日本紀私記

寫 一冊

二二六

和袋綴縹色表紙 用紙薄様 八寸九分六寸 七十二丁 十行 外題なし

内題なし

内容は「聖德皇御廟窟磯長山叡福寺之事實」(五丁)「橘窓自語」(二十

二丁)「玉梓青丹吉之考」(五丁)「日本書紀私記」(四十丁)を合綴す

奥書 (磯長聖德廟)の末)文化二年十月十五日在若狹國小濱之旅寓」

走寫異本書中「慕」古无「益」之文者省「文書」云々「者也 妙玄寺者在若狹立

入伴信友(花押)

(日本書紀私記末藍) 于時應永三十五年戊申正月十五日午時上中下三卷終寫功了上卷者日本紀三十卷待統天皇マデノ註也中下二卷者神代兩卷註者也於此本者平野神主之家ヨリ外他家不可有本也可秘々々云々

朱書 同二月二十一日ニ朱點校畢 髮長吉叟 生年八十一歲

(上略) 翁之朱點ノマニノ大字ニハ朱點を大丸ニシ小字秘訓ニハ朱點ヲ小丸ニシテ見分安カラシムル者也矣

此私記三卷者古來ヨリ日本書紀ニ副テ相傳ル記ニシテ一品舍人親王ノ撰錄シタマヘル真本ノ古傳秘訓ヲ全ク秘記セル者也矣伏乞八十連ノ屬之後裔ニ傳テ慎而勿失吾誠ニ神助ノ冥加ニテ傳來ノ真秘本ヲ以テ敬寫ス(下畧) 于時寶曆六子内十一月朔日 内握覆翁

(墨) 右一編丘脚俊平所藏也錯雜衍誤不一而足再三考訂淨寫成レ功猶未レ免有誤謬而不敢妄改且原訓假字之違者則一依舊元本傍書有標愚直堂按者愚直堂者、之別号然則原出于、之、手乎其考說無可取者今盡省之抑此編所傳之訓多乖古意雖不足爲確據而亦非輒近之書固多可觀者珍重之餘手自繕寫以爲考證云

本編既卒業未數日復得木藩安倍氏所傳本其末曰……比之丘脚本頗無謬善本也然其假字則亦猶乖違蓋原訓既誤乎抑係後人之傳寫乎今不可知也乃以藍錠一、旁書之無毫所遺因再題其後

(應永本を墨書し安倍本を以て藍書校合せり、卷頭凡例の中に「一信友云トテ朱モテ頭書セル考ハ原本ツウナスルニオモヒヨリタル事ヲ一ツ二ツ書タル也今安倍本ヲ以テ校合セル上ハ大方無用ノ更トナリス」とあり

本書は伴信友筆本の寫 二二〇・一一一五七)

日本紀神代口訣 寫 一冊 闕 二二七

忌部正通著 和袋綴深縹色行成表紙 九寸三分六寸五分 四周單邊七寸二分五寸 三十四丁 八行 題簽左肩單邊「神代卷 古寫本」 内題「日本書紀卷第一」

(近世初期寫、日本紀神代口訣の序、第一、第二卷のみ以下の巻缺 二一〇・一一一五三)

日本紀神代卷折紙 寫 一冊 二二八

慈雲著 和袋綴改裝澁引表紙 用紙裏打 九寸二分六寸七分 六十八丁 外題なし

卷末 此神道相傳之式也此等謹慎之者受天之佑若輕忽者福佑日損也(内題の次行に「河内高貴寺菩薩比丘慈雲所傳」とあり、神道入門目錄、開闢、八洲起原書、萬物造化章、瑞珠盟約章、寶鏡圖造章、一章大意等、經營天下章、兄弟易幸章の諸章にわたる折紙の記録なり、慈雲尊者全集卷十「神道折紙類聚」に殆ど同じきも少異あり 二二〇・一一一五二)

日本紀神代卷鈔 寫 二冊 二二九

世雄坊圓智著自筆 和袋綴檜色皮表紙 九寸八分七寸 八行 題簽左肩

藍澁込短冊「日本書紀卷第一神代上(下)」 内題「日本書紀卷第一(第一二)」、「子孫永保雲煙家藏書記二百七十六」

奥書 下卷世雄坊圓智鈔寺門不出書也 (圓智は江戸初期の人、佐佐木信綱「上代文學史」参照 二二〇・一一一

イ八一)

日本紀傍訓部類

寫 二冊

二三〇

和袋綴表紙なし 一は白紙二十五丁 九寸九分七寸六分 一は帳簿の裏十三丁 八寸四分六寸一分 とちたるものに日本紀の傍訓を書きし紙片を貼符す 内題は書名に同じもの他に「書記傍訓部類」「紀訓部類」「類聚紀訓」(十三丁の方)とあり
(傍訓を五十音順に排列せしものにて部類と題する方「アイウ」、類聚と題する方「チツテト」を収む 二一〇・一一イ八五)

日本書紀

寫 二卷二冊

二三一

舍人親王等編 和袋綴共表紙 用紙裏打 九寸一分六寸六分 五行 外題中央「日本書紀卷第一 神代上」「日本書紀卷第二 神代下」、「上野藏書」(室町末期寫、卷第一内題の下に「江家古本点同之」とあり朱點あり 二一〇・一一イ九一)

日本書紀纂疏

寫 六卷三冊

二三二

一條兼良著 和袋綴苳色表紙 九寸四分六寸九分 十一行 外題なし、「曼珠圖書之印」

奥書 校本云「文龜第三季春下瀆以真御本書寫校合」則加朱點者也 從三位藤原俊通

日本紀纂疏一条大間御作 從往昔雖尋求方、終「無所見遺恨之處今度禁裏様御本」一乘院様被仰出ゆ条致懇望全部令書「写者也年來之大望遂本意異凡此御抄」世上流布無之輒勿許他見而已「慶長十二年丁未五月下旬祐範判

慶長十四年己酉五月中旬天以他本校合朱墨之點并「假名首書等記加之異祐範
(右奥書本の近世初期寫、祐範は春日社家 二二〇・一一イ四九)

日本書紀卷第一

宥日本 寫 一冊 闕

二三三

舍人親王等編 宥日筆 和袋綴裝共表紙 用紙裏打 八寸三分五寸七分 本文五十七丁 天地六寸四寸五分白界五行十五字 外題左肩「和書紀第一」
(室町初期寫、表紙右下「宥日」とあり、本文は大字にて一行に一書は小字にて割註に書す、片假名にて附訓し朱筆を以て諸點を施す間々同筆にて頭註を施し愚突或は異本を記す、卷末落丁あり、佐佐木信綱「竹柏園藏書志」二四頁参照 二一〇・一一イ七九)

日本書紀卷第二

下部本 寫 一冊

二三四

舍人親王等編 和袋綴改装記録表紙 墨付三十八丁 八行 外題左肩後筆「日本紀神代卷下」
奥書 文明十三年五月下旬
(別筆)以藏人少制下部兼致自筆本寫之「隨分之秘本也 從二位行民部卿源朝臣忠富

日本書紀卷第一

岡本本 寫 一冊

二三五

舍人親王等編 和袋綴楡皮色表紙 八寸一分七寸 三十五丁 九行 外

題左肩「神代卷下」、「□〇齋藏書」「岡本家」「雪岑」「保加」
(室町中期寫、加茂岡本家舊藏本、異本校合あり、朱筆を以て諸點を施す、
所々弘仁私記を引く、佐佐木信綱「鏡草」参照 二二〇・一一一七三)

みたまのふゆ 寫 一冊

二二六

小杉楹邨著自筆 和袋綴白茶色表紙 用紙薄様 三寸八分六寸一分 墨
付四十丁 外題「御たまのふゆ」 内題なし、「杉園藏」

見返し 古記典等總論一 書紀の論ひ三右 旧事紀といふ書の論六右

記ノ題号の事八右 諸本又注釈の事八右 文体の事六左 假字の事八左

訓法の事十二右 序文解十九右 御系圖二十七左

(古事記を中心として古典研究につきての論 二二〇・一一一八三)

中古史

神人名彙 寫 一冊

二二七

鈴木重胤著自筆 和袋綴縹色表紙 七寸二分五寸 四周單邊五寸八分四
寸四分 十行罫紙四十二丁 題簽左肩書名同 書名の下に「鈴木重胤
本」とあり、「寶文章藏」

(續日本紀に於ける神人名を抄出し、五十音順に部類し所出の卷次丁
數を註す、官位姓等本書のまゝに書しその本書になきものは身分其他の
考と共に上欄に註記せり 二二〇・二一〇一)

平安時代

榮花物語系圖 寫 一軸

二三八

卷子本縹色表紙 見返し銀箔地龜甲模様摺出 一尺二寸二分 外題なし
内題「榮花物語けいつ」

奥書 此物語のうちにもその名あまた侍れとそよそれとしらても聞ゆる」
はもらしぬをろかなる女のしいたせる事なれば後生のくち」をあはせ
かたきのみ」寛永八年未六月ニ作之者也
(奥書に云ふ某女の自筆か 二二〇・三一〇一五)

日本後紀 天文本 寫 六冊 闕

二二九

藤原冬嗣等奉勅撰 三條西實隆・小槻于恒筆 改装袋綴堅紙表紙 原表
紙消息故紙の裏に澁を施せるもの 用紙裏打 九寸二分七寸一分 第一
冊(卷五)十一丁白紙一丁 第二冊(卷八)十二丁白紙一丁 第三冊(卷
十二)十五丁(卷十三)十六丁(卷十四)七丁他に白紙一丁 第四冊(卷
十七)十四丁白紙一丁 第五冊(卷二十)九丁(卷二十一)十三丁(卷二
十二)十五丁他に白紙一丁 第六冊(卷二十四)十三丁白紙一丁 十
三行二十五字 外題左肩「写本日本後紀第五」(第十二、第十七、第二十、
第廿四) 原題簽原表紙左肩白紙一片を下に後補す「日本後紀第八」(第十二、
第十七、第二十、第廿四) 内題「日本後紀卷第五」(八、十二、十三、十
四、十七、廿、廿一、廿四)、「三條西」
奥書 (卷五) 本云延久六年六月廿七日未時比校了
大永四年以中書王御本書写之(「年」の右下に「九月十九日」
と補筆あり)
(卷八、朱) 天文二 廿一 一見加朱点了
(卷十三) 天文二 五月 命大史于恒宿祿書寫 同一校了

(卷十七) 天文元 臘 廿八 書寫了

(卷廿二) 右命于恒宿祿令書之加一見加点点了

于時天文二年九月十日

(卷廿四) 右倩于恒宿祿手令書之

于時天文二年重九之後一日加一見又加朱点了

(全四十卷のうち卷五・八・十二・十三・十四・十七・二十・二十一・二十二・二十四の十卷を存するのみなるも現存最古の鈔本、第十三・二十二・二十四は小槻于恒の書寫にかゝることその奥書によりて明らかなるも卷十二・十四・二十一もまたその書風より于恒筆なるべく他の卷五・八・十七・二十は實隆書寫なるべし、「新訂増補國史大系」本は本書によりて校異を施す 二一〇・三一・一九)

平家物語 寫 十二卷十二冊 二三〇

〔竹中季有〕筆 和葉綴裝共表紙 用紙鳥の子 七寸九分五寸八分十

行 題簽左肩色紙書名同但し卷一のみ缺

(竹中季有筆との折紙あり、平假名まじり、寛永三年整版本系統布本よりの轉寫なり 二一〇・三一・五)

平家物語 瀧頂卷成立楷梯本 寫 十二卷十二冊 二三一

和袋綴茶色表紙 八寸七分六寸六分 十一行 題簽左肩「平家 卷第一

(一十二畢)」 内題「平家」下に卷數

(室町末期寫、片假名まじり、朱の句讀あり、流布諸本に比して瀧頂卷にあたる部分の取扱ひに異色あり一異本とすべし、「竹柏園藏書志」には瀧頂卷成立楷梯本と名づけあり 二一〇・三一・七)

平家物語第十二 東寺執行本 寫 一冊 二三二

和袋綴改裝縹色表紙 八寸三分六寸五分 原表紙共六十丁 九行 外題

なし 原表紙外題左肩「平家十二」

奥書 永享九年十二月朔日悉書寫了

識語 (原表紙右下) 東寺執行法印榮増之

(裏見返し) 東寺執行法印權大僧都榮増之

(片假名書き、所謂東寺執行本の一冊なり、佐佐木信綱「鏡草」高橋貞一「平家物語諸本の研究」一一八頁參照 二一〇・三一・一一)

平家物語卷五 寫 一冊 二二三

和袋綴澁紙表紙 八寸六分六寸五分 九十一丁 八行 外題なし、「和

學講談所」

(近世初期寫、表紙に「國史部第八 共十三本」として「信夫之印」の印記書票を附す、十三冊本の内なるべし、卷初都移より奈良炎上に至る

目錄を附す、高橋貞一「平家物語諸本の研究」二三頁參照 二一〇・三一・九)

近古史

右衛門督寄進狀 一通 二三四

貞治五年八月五日右衛門督差出 用紙檀紙 一尺一寸四分一尺八寸三分

八行

(丹波國瓦屋南北庄を天龍寺金剛院に寄進すといふ證文 二一〇・四一)

イ一七)

櫻雲記

寫 三卷一冊

二三五

林榴岡筆 關松窓校 和袋綴生壁色表紙なりしも殆ど脱落す 八寸三分五寸五分 百五十三丁(上三十五丁 中六十七丁 下五十一丁) 七行 題簽左肩雙邊「櫻雲記」全、「有不爲齋」外一印 奥書 寛保元年辛酉四月小盡之日「從五位下守大學頭林信充寫了」(卷末に「松窓關脩齡校」とあり 二一〇・四一・一五)

愚管記斷簡

寫 一枚

二三六

近衛道嗣(自筆) 用紙鳥の子紙 一尺一分一尺六寸三分 識語(包紙に墨) 文和二九十三和御會記 道嗣御記 (裏端書に「文和二 九 十三」とあるが如く文和二一年—正平八年—九月十三日夜和歌御會の記なり 二一〇・四一・一七)

後嵯峨上皇院宣

一通

二三七

弘長三年三月廿七日中納言藤原某奉 別當前大僧正宛 用紙檀紙 一寸一分一尺七寸八分 十二行 下部缺損す (内容田地に係はる 二一〇・四一・一一)

禪尼慈妙田地處分狀

一通

二三八

建久四年三月廿八日禪尼慈妙・僧某・僧某・中臣仲子花押 用紙檀紙 九寸七分一尺五寸五分 十一行 事書「處分田地事」 裏端書 眞觀房分枚數六枚(花押)

裏書(別筆) 此内□□^(虫損)五段目一段者五郎沽却了

(禪尼慈妙相傳の山邊北堂町の内を僧覺舜に譲ることを證す 二一〇・四一・一九)

〔太平記拔書〕

寫 一冊

二三九

和袋綴白茶色表紙 九寸二分六寸四分 五十六丁 八行 外題なし 内題「太平記」下に卷數、「願庫」「儉堂圖書」「和學講談所」 奥書 延寶己未表則念六偶得島津氏所藏之本謄焉 (表紙右上に「眞年遺書」同右下「國史部第八 共」の書票を貼る、卷首「太平記一部目錄」あり一卷より四十卷に至る目錄を記すも第二十二卷を缺く、文中朱書して板本との異同を記せる所多し、太平記よりの拔書なり 二一〇・四一・一三)

太平記卷一

寫 一冊

二四〇

和袋綴白茶色表紙 一尺五寸七寸四分 三十四丁 十行 題簽中央藍澁込短冊書名同 内題「大へいきくわんだい一」 (近世初期寫、目錄本文共に版本に同じきも版本に比し漢字を假名にて記する所多し 二一〇・四一・一一)

室町及安土桃山時代

玉仲和尚入寺錢納下帳

寫 一冊

二四一

宗受自筆 和袋綴改裝澁引表紙 原裝共表紙 八寸六寸二分 二十四丁 九行 題簽左肩書名同 外題原表紙中央書名同 内題なし

識語 (原表紙右肩本文同筆) 三冊之内 (中央の書名を挟んで左右下部に) 「永祿十三庚午」「二月十三日」(左隅に) 宗受誌之

(第十九丁帳の次に) 「永祿十三季庚午二月十三日典座紹竹 納所宗徳」次に「此外未載帳物色々有之於堺禪通寺開之下行共有之也凡是如此也」云々とあり總勘定高を記したる次に別筆にて「一勘了也」とあり決濟すみの認定なるべし、堺市史本編第二卷二八四頁参照 二一〇・五一(三)

豊國大明神臨時御祭禮記録 寫 一冊 二四二

太田牛一(和泉守)著自筆 和綴裝裝改裝表紙 用紙鳥の子 七寸九分六寸 原表紙共三十八丁 八行 外題中央「豊國大明神臨時御祭日記 太田和泉守筆墨附三十八枚神谷藏」原表紙外題中央書名同

奥書 此書太田和泉守生國尾張國春日郡山田庄安食住人八旬餘頽齡已縮^テ拭^テ澁眼^ニ難^ク尋^ハ老眼之通路不^レ願^ニ愚案^ニ心之浮所染^ニ秃筆^ニ訖^シ予每篇日記之次書^テ載^テ自然成^レ集^ト也曾非^ニ新作私語^ニ直不^レ除^レ有^レ添^レ無事儻^ニ一点^ニ 辱^レ虚則天道如何^ト見^ル人者吾令^ニ笑^ハ見^ル實^ト(下略)

識語 (内題の前に) 慶長^{甲辰}九八月十八日 太田和泉作

(改裝表見返し) 堀田方舊先生ノ護花関隼筆四編之三ニ此事ヲ載スル「如左」一日高力氏古き一小冊を携來りていふ此書至テ古書と見^ルゆと誠に作者の自筆なるへしとて(中略)右今日見出故記置也慶應五年八月廿四日 八十一翁神谷三園

(佐佐木信綱「鏡草」参照 二一〇・五一・五)

近 世 史

嘉永年間日記 寫 六冊 二四三

東久世通禰著自筆 和袋綴共表紙 三寸九分六寸 外題左肩第一冊「嘉永元歲從六月并廻文留」第二冊「嘉永二歲日記」第三冊「嘉永三年日記」第四冊「嘉永四歲日記」第五冊「嘉永五歲日記」第六冊「嘉永六歲日記」卷首に年號を記す

識語 (一、二冊表紙右下) 從五位上源通禰(第三一六冊同) 待從源通禰

(二一〇・六一・一三)

近世紀聞 稿本 寫 十二冊 二四四

條野傳平・染崎延房共著 染崎延房筆 和袋綴共表紙 八寸三分五寸九分第一冊十一行 他は十二行 第一・四・十冊各六圖十一頁分 第六・八冊各三圖六頁分 第二・三・五・十一冊各四圖八頁分 第七冊五圖十一頁分 第九冊二圖四頁分他に挿入繪圖一枚 第十二冊二圖四頁分但し卷二は圖二頁分なほ白紙のみなり 外題中央書名同

(刊本の第一篇より第四篇に當る、初篇は條野傳平の作にして以下染崎延房の繼作なり、書中所々訂正の貼紙を施し繪畫をはさむ、刊本には貼紙の如く訂正さる 二一〇・六一・一七)

滋野井公澄日記 寫 一冊 二四五

滋野井公澄著自筆 和袋綴共表紙更に堅紙覆裝 用紙は反古裏を使用 九寸七寸 表紙共三十五丁 外題原表紙中央「元祿七年日記」^{從正月到六月}覆裝表紙左肩「滋野井公澄元祿七年日記」卷首に年號を起す、「竹柏園文庫」

識語 (原表紙左) 東福門院十七回忌御儀法 (原裏表紙左下) 右近衛權

中將 從四位下藤原公澄廿五才

(二一〇・六一一五)

朝鮮人來朝圖 一冊 闕

二四六

和袋綴改装白茶色表紙 八寸九分六寸三分 二十丁 四周單邊七寸八分

五寸七分 外題左肩墨「天和二年朝鮮人來朝圖」 内題「朝鮮來朝之圖」、

「藤氏家藏」

奥記 此朝鮮和國紀行は高麗ふさん海のみ(以下數字汚損)て日本對州

の城下に舟を寄しばらく滯留し(以下數字汚損)はるか海陸を行列

して武江の御城下本誓寺ニ當^{〔不明〕}せし所を繪つくしにして令板行者也

天和二年戊十一月吉日」本莊材木町二丁目」伊勢屋猪兵衛開板

(菱川風の繪を主として畫面上部に説明の文あり、軸に丁數を刻み、

「上」とあれば本書上卷のみの缺本なり 二一〇・六一一九)

三河物語 寫 三冊

二四七

大久保忠教(彦左衛門)著 和袋綴澁引表紙 用紙鳥の子 一尺四寸七寸

八分 八行 題簽中央金泥草花模様入短冊「(書名同) 上(中、下)」、

「共三卷二百五十五番 子孫永保雲煙家藏書記」(數字は書入)

奥書 (中卷奥)大久保彦左衛門」元和八年^{壬戌}卯月十一日」子ともニ此を

ゆつる」門外いたすへからす

(近世初期書寫、見出しを頭註に記す 二一〇・六一一一)

魯西亞船渡來之節書狀之寫 寫 一冊 二四八

川村庄吉「八月五日」差出「曾根内匠頭様御内」河村傳左衛門宛 河竹

默阿彌筆 和袋綴記錄表紙 八寸二分五寸七分 原表紙共六丁 題簽左

肩雙邊「魯西亞船渡來之節書狀之寫」^{河竹默阿彌手寫本} 原表紙外題中央「嘉永

六癸丑歲七月中旬魯西亞船四艘長崎表渡來之節書狀之寫」 内題「嘉永六

丑年八月五日崎陽在勤の士川村某曾根内匠頭御内河村氏江参りし書翰

の寫、「河竹藏本」

奥書 此書翰者當九月七日長崎歸府之節彼地より」送り候書面ニ而文

章之内難讀所ま、あり一見のま、模寫す」時ニ嘉永六癸丑年菊月中ノ五

日の事なり薩屋萬藏」殿の恩借かもじや主人寫之其惠ニ依而寫所也

(二一〇・六一一二)

現代史

廣島趨會記 寫 一冊 二四九

小中村清矩著自筆 和袋綴飴色表紙原表紙白紙 八寸三分五寸五分「ヤ

スムロ」と柱刻ある飴色七行野紙三十七丁 原表紙題簽左肩「廣島趨會

記」^{廣島臨時議會} 廣島臨時議會 全」替表紙題簽左肩「小中村博士稿本」^{廣島臨時議會日誌} 議會日誌

「春城清玩」

(明治二十七年十月廣島大本營臨時議會招集日の日記、墨朱の訂正しげ

し 二一〇・七一一二)

地方史

伊勢考古錄 寫 二卷二冊 二五〇

津阪東陽著自筆 「文政元年戊寅三月津藩儒學津坂孝綽」自序 和袋綴納
戸鼠色表紙 七寸八分五寸三分 十二行 題簽左肩雙邊(書名同) 乾

(坤)、「川喜田久太夫藏書印」山名氏藏書精虛堂」外一印
識語 (坤冊末)右二卷津坂東陽自筆ニシテ、世間ニ「稀ナル珍書ナリ、

販賣及人ニ貸與スルヲ」有サズ、 津坂孝綽家藏

(箱裏書) 文政十子年」八月吉日

(二一四・八一イ)

○

使琉球記

六卷六冊

二五一

李鼎元(清)著 嘉慶七年季春楊芳燦序 嘉慶七年仲春法式善序 唐袋綴
媚茶色表紙 九寸二分五寸八分 四周雙邊六寸一分四寸六分 有界十行

二十一字 外題なし 柱刻書名同

見返し 使琉球記」師竹齋 (下部破損)

(二一六・九一イ三)

朝鮮

三國史記

朝鮮活字本 五十卷八冊

二五二

金富軾等奉勅撰 金居斗跋 唐袋綴黃表紙 一尺二分六寸六分 四周單
邊七寸七分五寸五分 有界十行十八字 外題左肩墨「三國史」 柱刻「三
國史」、「井上宣文文庫」

(高麗仁宗勅撰、朝鮮太祖の癸酉、甲戌―西曆一三九三、一三九四年―
の間に陳義貴金居斗により刊行せられしもの 二一九一イ五)

靖社原從功臣錄券

朝鮮活字本 一冊

二五三

唐袋綴改裝淺縹色布表紙 一尺一寸七寸二分 四十三丁 四周雙邊八寸
一分五寸五分 有界十行十七字 外題なし 柱刻書名同、「高木家藏」

(末に靖社錄勤都監の名を列記す、天啓五年九月一日即ち朝鮮仁祖三年
李植命をうけて選びし功臣の記 二一九一イ七)

中國

皇明詔制

明版本 八卷八冊

二五四

唐袋綴改裝白茶連鏡模樣表紙 九寸七分五寸五分 四周雙邊六寸五分四
寸八分 十行二十二字 外題左肩墨「皇明詔制」 柱心「皇明詔制」又
は「皇明詔赦」又は「皇明詔諭」下に卷數年號丁數を刻す、一印あり
(嘉靖十八年の駕幸承天免承天等處明年田租詔を最後に載する故、編纂
刊行はこの年以後恐らく嘉靖年間ならん 二二二一イ九)

後漢書

宋版 八十五卷二十三冊 闕

二五五

范曄(劉宋)撰 章懷太子賢(唐)註 司馬彪(晉)補 劉昭(梁)注補 改裝
截斷あり替老竹色表紙 八寸四分五寸三分 四周雙邊六寸四分四寸三分
有界十行十八字 註雙行二十三字 補寫は四周單邊六寸三分四寸三分

無界九行(若干有界もあり)註雙行 題簽左肩墨(ま、矢はれて外題墨書せるあり) 柱「後紀(卷數)」「後紀(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」「後傳(卷數)」(闕卷次の如し、本紀卷六・七・八、志卷一・二、列傳卷一四・一五・一六・一七・二二・二三・二四・二五・二六・二七・三三・三八・三九・四〇・四一・五七・五八・五九・六〇・六一・六二・六三・六四・七一・七二・七三・七四・七五・七六・七七、ま、古き補寫あるは志の卷三より三〇迄なり、經籍訪古志卷三に求古樓所藏としてのる所のものなるべし(二二二一―一三))

後漢書

明版 百二十卷二十四冊

二五六

范曄(劉宋)撰 章懷太子賢(唐)註 司馬彪(晉)補 劉昭(梁)注補 余靖後漢書序 劉昭後漢書注補 志序 本紀 明福建按察使周采提學副使周瑛巡海副使柯喬校刊 志及列傳は明汪文盛高穀傳汝舟校 唐裝白茶色表紙 九寸五分四分 上下單邊左右雙邊六寸三分四分 有界十二行二十二字 註雙行二十八字 外題なし 柱「後漢」「後漢志」などあり下部になほ紀志列傳による卷數や内容を記す、「學呂齋」「高純王氏藏書印」等

刊記(末)嘉靖己酉年孟夏月吉旦「侯官縣儒學署教諭事舉人廖言監脩(朱筆の書入あり 二二二一―一五)」

古今歷代十八史略

元版 二卷二冊 闕

二五七

曾先之(元)編 唐袋綴改裝萌黄色草木模様表紙用紙裏打 六寸六分四分二分 四周單邊五寸五分三分五分 十三行二十六字 外題左肩墨「(書

名同)上(下)、「新宮城書藏」「皎亭改藏」他一印

(通行本と異り卷首に古今歷代十八史略綱目と題して歷代國號歌、歷代世年歌、歷代甲子紀年、歷代國都の記事十七丁を附す、元代の記事には據頭し元版なることを明らかなり、卷上の最後の一丁を缺く、諸處に元時代と思はる、補刻あり 二二二一―一九)

史記

古活字本 百三十卷五十冊

二五八

司馬遷(漢)撰 裴駟(宋)集解 司馬貞(唐)索隱 張守節(唐)正義 和袋綴改裝白茶色表紙 用紙裁斷 九寸九分七寸 四周雙邊七寸五分五厘五寸七分 有界八行十七字但し年表のみ九行十七字 註雙行 外題左肩墨「史記序目錄(一―四十九序目錄共五十冊)」内題「五帝本紀第一 史記一」等柱題「史記」「尾陽文庫」「弗出」

〔古活字版之研究〕に所謂傳嵯峨本なり慶長中刊、朱墨の訓點句讀及び書入あり 二二二一―一〇)

史記

古活字本 百三十卷五十冊

二五九

司馬遷(漢)撰 裴駟(宋)集解 司馬貞(唐)索隱 張守節(唐)正義 和袋綴改裝冬色行成表紙 用紙裁斷 九寸六分六寸八分 四周雙邊七寸六分五分六分 無界八行十七字但年表の分有界九行十七字 註雙行 外題なし 柱心「史記表(書、傳等)」、「高木家藏」「敬事館藏書記章」

(慶長元和刊「古活字版之研究」に所謂第二種なり、朱墨の句讀訓點及び書入あり共にや、年代古し、卷二十五、二十六、三十八、四十三、六十一、六十二の五卷は新しき補寫なり 二二二一―一七)

周書 宋版 二卷一冊 闕

二六〇

令狐德棻(唐)等撰 唐袋綴改裝紺色布表紙 用紙各丁補紙あり 一尺六分七寸四分 原物八寸七分六寸五分 上下單邊左右雙邊七寸六分六寸三分 有界九行十八字 外題なし 内題「列傳第三十六(一三十八)」周書四十四(一四十六)」

(列傳三十六卷末半葉、三十七卷一—十八丁(卷)、三十八卷一—八丁、計二十七丁を収む、柱刻上部に文字の數印刷者名一申佑・長二・施詢など一あるものあり 二二二—一七)

貞觀政要 古活字本 十卷五冊

二六一

吳兢(唐)撰 戈直注 和袋綴媚茶色行成表紙 九寸六分六寸九分 四周雙邊七寸三分五分一分 有界七行十七字 柱刻「貞觀一(一十)(丁數)」題簽左肩墨書名同、「愛宕家世々傳來之書也」「殘花書屋」刊記 元和九_亥初冬吉辰 三條白壁町 忠田吉兵衛開板 (二二二—一五)

新唐書附釋音 宋版 二百二十二卷附二十五卷 百冊 二六二

歐陽修・宋祁(宋)共著 嘉祐五年六月曾公亮上表 唐裝水色表紙 用紙裁斷あり 九寸五分六寸三分 左右雙邊上下單邊七寸五分五寸三分 有界十行二十二字 外題なし 内題「唐書」下に卷數 柱種々あり列傳のみについて見ても「唐書列傳」「唐書傳」「唐傳」「列傳」等あり、「吳氏珍藏」「墨林秘玩」「項子京家珍藏」「吳葆光印」 釋音 董衝(宋)著 崇寧五年十一月序

赤縣太古傳 寫 一冊 闕

二六三

(末に「嘉祐五年六月二十六日准中書劄子奉聖旨下杭州鑄板頒行」として關係した人々の名をかゝぐ、本文全二百二十五卷のうち、志三十四、三十五、三十六の三卷一冊分を缺く、宋版をもとにして數回にわたる補刻と數手にわかれし補寫あり、明代刊なるべし、朱墨の中國人の書入若干あり 二二二—一三三)

平田篤胤著自筆 和袋綴改裝代赭色表紙 用紙裏打 八寸六分五寸七分 十八丁墨付十二丁 十行 外題なし 内題なし (本書は赤縣太古傳のうち盤古真王紀にして二十三、三十一、三十三、三十四、三十五、三十七、四十四、四十五、四十七、五十の葉序あり、朱にて書入、抹削、假名訓點等あり 二二二—一九)

北史 元版 百卷三十二冊

二六四

李延壽(唐)著 唐袋綴茶表紙 九寸三分六寸一分 四周雙邊七寸三分五寸四分 有界十行二十二字 外題墨「北史元板魏本紀一(一)列傳自九十八至百止」柱刻「北史目錄(帝紀、列傳、序傳)」「有不爲齋」「牧氏藏書之記」

(覆宋の元版をもと、して明嘉靖十年その他の補刻の部分あり、明代の刊なるべし 二二二—一七)

傳記・叢傳

日本人叢傳

〔國學者書簡集〕 寫 一軸

二六五

卷子本楡皮色布表紙 五寸九分 題簽左肩剝落 外題なし 内題なし
所収次の如し

賀茂真淵 茲峯宛 九月廿三日

本居宣長 春峯宛 五月晦日

「本居書翰紀伊國人村岡六藏と申家老江之書翰也此事別ニ云フ」と

注あり

加藤千蔭 (飯田)梁宛 二月廿九日

渡邊重石丸 武田郡兵衛 同久米吉宛

加茂季鷹 正月五日

横井千秋 (飯田)百代宛 八月九日

清水濱臣 (飯田)梁宛 閏十一月十七日

同 柳井(勇雄)宛 八月十五日

伴信友 千葉(葛野)宛 九月廿九日

(二八一—イ三)

○

石見偉人傳 寫 一冊

二六六

田村與之助著 明治三十六年一月龜山城下僑居松高水長處天倪自識の自序 和袋綴丹色地網目模様表紙 七寸九分五寸四分 五十三丁 十二行 題簽左肩雙邊書名同、「神木氏藏書印」「高木家藏」

(石見國人古今三十七家の傳、文字裝幀すべて別項「石見國名跡考」一三四八—に同じ 二八一・五—イ一)

中國人叢傳

於雲澤蒙求聞書 寫 一冊

二六七

和袋綴共表紙 八寸六分六寸七分 表紙共十七丁 外題中央書名同 右肩に同筆「永祿三年三月十八日」と 内題なし

識語 (帙に岩橋小彌太書を貼附す)

拜啓蒙求圖書一冊拜見致候「表紙の文字は」永祿元年三月十八日「

於「雲澤」蒙求聞書」と有之其の他の文字は樂書と相「見え申候雲澤と

申候は鎌倉」建長寺の塔頭ニ御座候雲澤庵」ニ於ける蒙求の講義を筆

記し」たるものと存せられ申ゆ(下略)

(永祿元年三月十八日の外、次廿四日次廿八日、卯月二日巳刻などの日付あり 二八二・二—イ九)

標題徐狀元補注蒙求

古活字本 三卷六冊

二六八

李瀚(唐)撰 李良上表 李華序 徐子光(宋)注 和袋綴栗皮色行成表紙 九寸七分七寸三分 三周雙邊七寸二分五分七分 九行十五字 外題左肩

墨「蒙求」内題卷上本末卷下本末書名同「新刊徐狀元補註蒙求卷中本(末)」卷末はすべて卷中の内題と同じく卷名のみ異にす 柱刻「蒙求(卷數)(丁附)」、「俊乘坊藏書」

〔古活字版之研究〕に所謂慶長中刊本一種にあたる、朱墨にて諸點あり 二八二・二一七

名臣言行錄

五十六卷十九冊

二六九

朱熹等撰「寶祐戊午中和節廬陵李居安叙」(前集)「景定辛酉人日浚儀趙崇平翁序」(外集) 唐袋綴改裝茶表紙 八寸四分五分五分 四周單邊

五寸八分四寸三分 有界十二行二十三字 前集後集外題「五朝名臣言行錄」内題左肩墨同 續集外題「皇宋名臣言行錄」内題左肩墨同 別集外題「宋名臣言行錄」内題左肩墨同 外集外題「宋名臣諸老先生道學統宗總目」内題左肩墨同 外集續像二枚 柱刻「言行前(卷數)」「言行後(卷數)」「言行續(卷數)」「言行別(卷數)」「言行外(卷數)」

刊記 (前集及後集總目に、但し前集のみ補寫)

晦庵先生朱熹纂集 太平老圃李衡校正 後學安福張鰲山校正重刊

(續集別集外集各總目に) 後學朋溪李幼武 土英纂集 後學安福張鰲山 校正重刊

(元明の間出版、亂版、前集十卷三冊、後集十四卷四冊、續集八卷二冊、別集十三卷七冊、外集十一卷三冊 二八二・二一五)

皇室—日本

山陵考略

寫 一冊

二七〇

山川正宣著 自筆校正 安政二年ふつき自序 和袋綴記録表紙 七寸七分五寸五分 二十二丁 九行 題簽左肩白紙後人墨書「山陵考略 山川自筆校正」

奧書 (朱)一校了 (花押)

(神武天皇より平城歷朝の陵墓の畧考にして筆者未詳、朱や附箋を以て校正せるは著者なり 二八八・一一一—一九)

山陵叢書

(武田敬孝の書寫せし山陵關係書二冊及陵圖を輯して假に題す)

山陵叢書

寫 一冊

二七一

武田敬孝編自筆 和袋綴縹色表紙 八寸五寸五分 五十八丁 約十行 題簽左肩黄色紙 外題書名同 内題なし

奧書 (朱)文久二壬戌六月廿三日畢業於浪速寓樓武田敬孝 識語 (表紙裏紙) 庶陵叢書 單 壬戌六月於浪華寓樓畢業熱軒田龜拜稿

(庶陵圖說、神護寺鐘銘并序、神武御陵考、仁賢天皇陵、神武帝陵考光孝帝之御陵後田邑山之考へ、元祿享保御陵之記抄本并文化四年書上之記、河内國諸陵公書抄本、庶陵圖補遺等を收む 二八八・一一一—)

無逸樓集

寫 一冊

二七二

武田敬孝編自筆 和袋綴澁引表紙 八寸五寸六分 二十六丁 約十行 題簽左肩白紙外題書名同 内題なし、「武田龜圖書印」

奧書 (朱)武田敬孝輯

(山陵志、好古小録、般若心經抄、秉燭夜話、丹鉛總録、頼山陽の詩等

を録す 二八八・一—一—

〔陵圖〕 寫 三十枚

二七三

九寸三分一尺三寸五分 所收陵名左の如し

神武 綏靖 安寧 懿德 孝昭 孝安 孝靈 孝元 開化 垂仁 景行 成務 神功 安康 顯宗 武烈 宣化 舒明 崇峻 天皇屋敷 齊明 天武 文武 元明 元正 聖武 稱徳 光仁 平城 後醍醐

(一枚に一陵を収む彩色あり、後醍醐帝陵のみ用紙を異にし畧畫にして緑の淡彩をなし武田敬孝自筆にて補ひしものと思はる、寛政二年九月賀茂季鷹寫天保三年十二月賀茂經樹轉寫「陵圖大和國」所收と殆ど同一の圖柄にして更に精細なり、享保以降寛政までの寫なるべし 二八八・一—一—)

聖德太子傳 寫 四冊

二七四

和袋綴茶表紙 用紙鳥の子 八寸九分六寸五分 十行 外題左肩「書名同」一(一四)「内題なし」

(近世初期寫、片假名交り 二八八・一—一—)

竹苑黃花 寫 一軸

二七五

沼田頼輔編 卷子本路考茶色唐草模様裂地表紙 題簽左肩金箔短冊形書名同、内題なし

奥書 昭和五年歲次庚午二月念一日 文學博士沼田頼輔(印)
(宮内省參事官酒卷芳男に乞ひて皇族の紋章を蒐めしものなり 二八八・一—一—)

陵地私考 寫 六卷四冊

二七六

津久井清影編「嘉永五年六月朔日洛西野人津久井清影謹識」の自序 砂川政教校 和袋綴濃縹色空摺模様入表紙 四寸四分六寸一分 十行 題簽左肩白地短冊外題書名同 書名の下に夫々々の註記あり

(第一冊)一序目大和河内和泉 (第二冊)二大和河内攝津 三江丹及邊國補遺諸墓 (第三冊)四山城國之部本 (第四冊)山城國之部末

「書肆村上藏書之印」「竹谿大逸」「二水樓珍藏」 識語 (第一冊見返し)元禁裏御用書肆「平晏津遠堂」 大谷仁兵衛珍藏

(第四冊末)過鳥園木下博士始會「柳井博士酒間談論風發」余頗狂喜傾倒干博士者」多焉登直被惠近著二種「謝々」而一則關山「陵之書也其該博智識」敬服奚勝而這陵地私」考全四冊者余曾所秘藏今將呈博士所謂是蛇」足耳唯願刀圭之餘」賜一瞥眞望外之幸也

丁卯十月念 洛北玄遠莊主 大谷玄道

金杉先生

(帙の表に「津久井漂齋編輯 砂川政教校」「門外不出」「陵地私考五卷全四冊」とあり、帙の裏に「元祿享保文化改濟御普請取掛之分(朱)○○○近年京奈良調之上伺中可再評之分○○諸說異同有論之分◎」の識語あり、各冊内題の次に紙を破りて修補し「砂川政教謹校」と記す、各帝陵毎に史書文書より關係項目を抜萃編輯す 二八八・一—一—)

姓 氏

新撰姓氏錄 寫 一冊

二七七

萬多親王等奉勅撰 弘仁六年七月二十日萬多親王等表 和袋綴改装丹行
成表紙 八寸三分六寸一分 百七十七丁 八行 外題なしたゞし原表紙
の外題を見返しに貼る「姓氏錄全」内題「新撰姓氏錄抄」、「八雲軒」
「脇坂氏淡路守」

奥書 (石川國助等抄者名奥書の次に平朝臣以下追加ありて次に) 此條
と延文五年庚子七月以他本書加之 神祇大副兼豐判

(江戸時代初め所謂延文本系の寫にして群書類従本に比し追加の分數行
多し、所々に本文同筆にて書入あり舊本の書入なるべし 二八八・二一
一)

姓族志 寫 一軸 闕

二七八

蒲生君平著自筆 卷子本改装納戸鼠色布表紙 一尺五分 原物裁斷あり
て七寸五分一尺七分 左右雙邊上下單邊六寸二分九寸四分二十二行界紙
六頁分 題簽左肩白絹佐佐木信綱筆「姓族志蒲生君平自筆稿本」各紙に
番號あり一枚目左半分末端「姓一」二枚目全紙末「姓二」三枚目左半分
「姓三」四枚目右半分「姓四ノ一」五枚目左半分「姓四ノ二」と小さく
墨書す、「高内館福田印」
(卷初の部分にして訂正大いに努めたり 二八八・二一イ三)

各 傳

縣居翁書翰 寫 一軸

二七九

賀茂真淵著自筆 卷子本薄老綠色波形模様布表紙 六寸四分 題簽布書
名同 内題なし 所收左の如し

栗田土滿宛 (明和六年) 九月廿三日附 (眞淵全集書翰續編所收)
おさき宛 (門人錄に内藤備後守殿内宇太夫妻とある人なるべし)
(二八九—イ五七)

梅田雲濱・頼三樹三郎山根文之允宛書簡

寫 一軸 二八〇

卷子本紺地金繡布表紙 五寸三分 外題なし内題なし 所收次の如し
一 山根文之允様 十一日 梅田源二郎(文中「子日する都の野邊にけ
ふはまた我をまつとて妹やひくらん」の自詠歌あり 新春京都客舎よ
りの筆なるべし)

二 山根文之亟様 五月初三 頼三樹三郎(暑中炎毒病臥の狀を報ず)

三 八月初十(丹之會計拂につきての狀)
四 木屋町三條上ル土屋のろじ 山根文之允様 十一日(中略) 頼三樹
三郎(病臥不快のため明日嵐山行きを拒はるの狀)
(二八九—イ二三)

春日潜庵岡本隆藏宛尺牘 寫 一軸

二八一

春日潜庵(讃岐守)自筆 松坡居士題辭 卷子本鶯茶地唐草模様布表紙六
寸九分 原物五寸一分 題簽布金砂子「春日讃岐守」 内題なし
奥書 六月四日 岡本隆藏様 春日讃岐守

識語 (表紙裏) 大正乙丑八月下濬松坡先生入洛掩留「一週日蓋以元博
士罹病也博士者」先生之長子看護之閑登天王山經「黄檗道遙宇治河畔
其夜酌萬碧樓」翌請先生得題辭于時念九」日也
(見返し) 春日仲襄與岡本經迪書

大正乙丑三月初五裝成「石清水丈夫山莊虹村(花押)」

跋(表紙裏) 此翰春日仲襄與門人岡本「隆藏經迪而論立志併而述讀龍溪」全集所感也經迪通稱隆藏其孫大無諱經厚嘗屬我配下爲大阪都新聞記者矣書肆「竹筍樓獲之經厚之嚴君余」以重價購焉文字天嬌雅健頗足見潛庵之面目所以爲拱璧也

大正乙丑春三月初五夜春寒「猶料峭於石清水丈夫山莊

虹村狂生(印)

(二八九一―二九)

花鳥日記

寫 五卷五冊 闕

二八二

村田了阿著自筆 改裝大和綴共表紙 文化十一年の巻を除く四巻用紙裏打補修す (文化十二) 五寸五分八寸 六丁 約二十二行 (文化十三) 五寸八分八寸 七丁 二十二行―十六行 (文化十四) 五寸八分八寸 八丁 二十二行―十五行 (文政改元) 五寸八分八寸 九丁 約二十行 (文政三) 五寸六分八寸 墨附八丁白紙一丁 二十三行―十七行 題簽なし外題中央自筆「戊のとし花鳥日記文化十一」「子のとし花鳥日記文化十三」「丑のとし花鳥日記文化十四」「とらのとし花鳥日記文政改元」「辰の歳花鳥日記文政三」内題なし、「洒竹文庫」(文化十一年の巻のみ)

(草木鳥蟲等自然の景物につきての日記、文化十一年は正月一日―十一月六日、文化十三年は正月九日―十二月廿七日、文化十四年は正月四日―十二月廿五日、文政元年は正月六日―十二月十六日、文政三年は正月元日―十二月廿六日に互る、文化十三年の巻は新燕石十種第二巻に收載すれど誤脱あり、此處になき文化十二年の巻は近世文藝叢書第十二に市

島氏藏了阿自筆本によりて翻刻さる 二八九一―一五五)

茶山・山陽・星巖・竹外與江馬春齡・細香

尺牘 寫 一軸

二八三

卷子本模様入紫紺色布表紙 八寸二分 題簽左肩外題なし内題なし、

「江馬之印」(各紙にあり) 所收五通次の如し

江馬様 晋帥(菅茶山)(畫讚の詩を報す)

江馬老友 四月十八日 襄(頼山陽)(揮毫の一詩を報す)

江馬春齡(蘭齋)様 十一月廿七日梁川新十郎(星巖) (人につかはす書狀につきてのこと)

細香様 十月廿二日 徳太郎(頼山陽)(故郷より歸り倉敷逗留中より送りしもの、文化十一年、贈山陽書翰集上巻一九一頁参照)

細香君 五月廿一日 啓(藤井竹外)(互の詩の評につきてのこと)

(二八九一―一二一)

清正追遠祭讚詞

寫 一軸

二八四

近衛信尹著自筆 卷子本紺紙金泥山水下繪 一尺一寸二分 外題なし内題なし、「箕園文庫」(外箱)

識語 (箱の表に) 清正記 近衛□□

(「杉」と自署して歌二首を記す、本文訂正の跡あり、加藤家に贈りたる草稿か、別に蓬庵の「三藐院殿御記文及歌」一通及び牛庵の極札あり

(二八九一―一五)

契沖石橋新右衛門宛書簡 寫 一軸 二八五

契沖自筆 掛軸 五寸一分一尺六寸の尺牘を幅に仕立てたり 外題なし
内題なし

識語 (箱表)契沖師文(同裏)浪花若山東九郎賜らるゝを装飾す

(「八月廿八日石橋新右衛門様御報」とあり契沖全集第八卷所載のもの、
原本なり 二八九一四七)

西郷南洲與大山綱良尺牘 寫 一軸 二八六

西郷隆盛著自筆 卷子本花鳥織紋表紙 見返し金砂子 用紙裏打 七寸
九分 原物五寸五分 題簽左肩外題なし 内題なし

(「十一月廿九日大山様拜呈 西郷拜」とあり、大西郷全集卷二、明治八
年十一月二十九日の條に載するもの、原本、大山は時の鹿兒島縣令大山
綱良、巻首に犬養木堂筆題辭を貼す 二八九一三一)

山陽翁奉萱尊手簡 寫 一軸 二八七

頼山陽自筆 卷子本深縹色織布表紙 七寸六寸七分 原物五寸一分 題
簽白絹書名同下に「潔題」とあり 内題なし、「上野藏書」「戸田氏藏」
(箱書墨)所收左の如し

餘一同覽 孟夏十八日(春水退隱許されし時)

お阜 みなみ同覽 七月二十日

餘一同覽 八月廿九日(文政七年)

餘一同覽 八月十七日(文政六年)

餘一同覽 十月廿三日(文政六年)

(二八九一六三)

「上奏文案文」 寫 一軸 二八八

朱舜水(明)著自筆 卷子本改装梅松色模様入表紙 一尺四分 原物九寸
五尺二寸九分 題簽左肩外題なし 内題なし

(四枚の唐紙に細楷にした、めしもの、末に「丁酉年貳月拾染日恩貢生臣
朱之瑜具」とあり安南にて魯王の黄綾の勅諭に答へし上書の案、全集所
收本と小異あり 各紙端に「壹 覺改」「式」「參」「四」と朱書せるは
安積澹泊なり 二八九一四九)

小竹先生書翰集 寫 一軸 二八九

篠崎小竹自筆 卷子本褐色雲形模様織出し布表紙 二寸七分四寸五分
原物二寸二分 外題なし内題なし

(皆三島の女婿後藤松陰宛の風雅なる書翰なり、署名も宛名も姓、號、
字、別號種々を用ひあり、日附は「十九日」「十二日」「廿八日」「廿七
日」「廿七日」「(なし)」「廿二日」「廿七日」「臘月十一日」の九通 二
八九一五九)

節翁・又七與義方尺牘 寫 一軸 二九〇

森田節齋・下辻又七自筆 卷子本布表紙 七寸四分 題簽左肩書名同
箱外題「節齋翁又七與山口義方尺牘」内題なし 所收左の如し

山口繁次郎様御家内様 五月五日 節齋

(姪お辰十三歳の御殿奉公の肝入を願ひし文)

山口董治郎義方様 七月廿六日 紙屋又七

(同じくお辰につきて自らも世話すとの事見ゆ)

山口要一郎(義方の父) 八月九日 紙屋又七

(十津川郷につきての願書のこと)

箱書 下辻又七五條の木綿商紙屋の主人節齋の意を受け志士の間を周旋

し「乾十郎と共に十津川郷土を糾合し二隊を組織し王事に盡さしむ後」

の天忠組の素因をなす梅田雲濱等來宿數次其尺牘今猶家に」保存す又

文中ニある辰女は明治天皇侍醫樫田龜一郎の實母也董」次郎の事は國

史ニ詳也 昭和三年戊辰十月初二 後學武岡豐拜識

(山口董治郎は義方、要一郎はその父、繁次郎は董次郎の事か 二八九

—イ二七)

節齋與鐵兜尺牘 寫 一軸

二九一

森田節齋自筆 卷子本白茶色布表紙 九寸四分 原物八寸題簽左肩書名

同 「大正甲子九月初一聞關東震災一周年紀念之警鐘 於須磨茅屋南窓

下樂山逸史武岡豐」の題字

識語 此尺牘は予か生年元治元年甲子の「歳ニなりしものなり文中柴原

生」來快談とあるは明治三名縣令の一「人柴原和之事ニして節齋門ニ

在り」しか此年幕府征長の役あり龍野侯」ニ從ひて戎軒に赴くの途次

ニ在り又」來陽移居の積りと在るは征長役中「節齋の文章時諱ニ觸れ

倉敷の學」塾閉鎖の厄ニ逢ひ舊里五條ニ歸」臥し次て紀州ニ隱匿せし

事情」の起原を語るべきものなり」 樂山逸史(武岡豐太)再識

(十一月十二日節秀野老生即河野鐵兜宛にして子供の教育をたのむこ

と、野口生なる書生の事、林鶴梁の文章の噂、柴原和と天下の形勢を快

談せしなど見ゆ 二八九—イ二五)

高崎正風日記 寫 七冊

二九二

和袋綴改裝栗梅表紙 空色十行野紙 八寸三分五寸二分 題簽左肩外題

なし 第一冊原表紙外題「京都御出張中日記」左に「明治四拾三年十月

九日が起」右に「隨行者扣」 内題なし

(竹柏園藏書志には「高崎正風先生の晩年三年の日記を侍女小泉鶴子の

詳記せるもの」とあり 二八九—イ一三)

武田耕雲齋日記 寫 二帖

二九三

武田耕雲齋自筆 折本橄欖色唐草模様緞子表紙 六寸五分七寸三分 上

帖原物五寸三分四分 匡郭三寸八分二分五分七行の野紙を見開きにして

貼布せり 下帖上下五寸丹色及び白綠色(廿七日以降) 卷紙を折本に改

裝す 題簽左肩金紙外題なし 上帖原裝表紙外題中央「日記」識語

(上帖原裝表紙左肩) 文久元年 辛酉 朔日の

(同見返し) 荷ハ重し行てハ遠し」おほろかにおもひ過す」なますら

をの道

(下帖卷首) 文久元年 庚申 辛酉 四月廿五日 從日記」五月朔日の」白受

堂 (上冊文久元年三月朔日より同四月二十四日に至る、下冊四月二十五日

より五月二十三日に至る、「竹柏園藏書志」参照 二八九—イ一)

逐日功課自實簿 寫 一冊

二九四

朱舜水(明)著自筆 歲次戊申三月上澣自序 正徳貳年壬辰臘月穀旦安積

澹泊(覺)跋 和袋綴黃花色布表紙 八寸五分六寸一分 十六丁 八行

題簽左肩白紙書名同 内題なし

(戊申は寛文八年、安積澹泊の爲にあたへし三月十一日より九月十五日迄の勉學日課の豫定なり、澹泊の跋三丁その事情をつたへて詳かなり)

二八九一(一七)

坪内逍遙翁書翰

寫 一軸

二九五

坪内逍遙自筆 卷子本 白茶色絹表紙 七寸四分 原物一は六寸 一は四寸九分 題簽左肩外題なし 内題なし 書名は外函に貼附せし紙片に書せしによる 所收市島春城宛左の二通なり

春城兄十日(日附)逍遙

桃浪大人四日(日附)臚

奥書 逍遙翁書簡中臚とあるハ翁の書生氣質を「書きし頃のペンネーム桃」浪は余の舊號なり此「號逍遙の嘗つて自」ら撰んで號とせしもの「余奪つて余の號とせ」しもの家ニ若干此號「を刻しぬる印章あり」左に一印を捺して証となす 春城誌

(二八九一(四九))

東藩文獻志稿

寫 一冊

二九六

和袋綴白表紙 九寸六分六寸七分 四周單邊(一邊のみ雙邊)六寸二分四寸五分の野紙 三十一丁半 六行 外題左肩書名同 内題「東藩文獻志卷之一」、「秋齋」、「福田之印」、「高内館福田印」、「春潮」

識語 (表紙) 哀公御直筆張紙有之

(裏見返し) 福田三右衛門秘藏本 (徳川頼房の傳記、慶長十二年十二月の條に哀公徳川齊修の直筆を貼附

す、朱にて訂正せしところ多し 二八九一(四三)

伴林光平尺牘

寫 一軸

二九七

伴林光平自筆 卷子本媚茶色織紋布表紙見返し金砂子 八寸一分 三通を合装せり 第一「山本詞兄」宛七寸六分 第二「平岡富之介」宛五寸二分 第三「小山老人」宛五寸一分(草葉を綠色に拓出せる料紙) 題簽左肩「伴林光平大人尺牘」内題なし 所收左の如し

(第一) 三月つもこり伴林 山本詞兄御下(次に生麥事件に係はる「亥三月十九日英國軍船ヨリ差出矣書翰大意」) 同三月廿一日右返翰ノ寫シ」及び「亥三月薩州家ヨリ被差出矣伺書寫」を附記せり 亥三月は文久三年なり)

(第二) 二月廿八日光平拜 平岡富之介様(癸亥二月廿二日京都三條河原に足利高氏義詮義滿の像を晒したる聞書を附記せり癸亥は文久三年にあたる)

(第三) 四月廿八日法善寺大谷にて光平 小山老大人御下」とあり歳暮、元旦、人日の歌三首を記す)

(歌は土橋真吉「伴林光平」所載、安政元年正月十三日、三田爲門に宛てたる文中のものと同じ、光平の妻を失ひしは嘉永六年の冬なり本書簡四月廿八日はこの年にあたる 二八九一(三七))

野村望東尼尺牘

寫 二軸

二九八

野村望東尼自筆 卷子本檜皮色織紋表紙見返し金砂子 第二卷(とく次郎宛) 同装用紙黄唐紙に紅紙の色替り巻紙 七寸二分 原物四寸八分 題簽左肩外題なし 内題なし

(第一卷宛名) 八月廿日 國臣大人(在京中の平野國臣に宛てたるものにして八月廿日は文久三年か)

(第二卷宛名) 三月十八日 とく次郎様御もとに(三月十八日は元治元年か、とく次郎は馬場徳次郎なるべし)

(平野國臣傳五〇七頁參照 二八九—一三五)

藤孝公年譜 寫 一冊

二九九

池邊森房筆 和袋綴意色表紙 八寸七分六寸三分 七十一丁十一行 題

簽左肩「藤孝公譜 全」、「池邊之印」

奥書 (裏見返し) 寛政八丙辰年 池邊森房寫

(二八九—一四五)

藤田東湖尺牘 寫 一軸

三〇〇

藤田東湖自筆 卷子本媚茶色織紋布表紙見返し金砂子 八寸二分 原物

五寸二分 題簽左肩「藤田東湖」

文末 廿八日認む 翰林^(不明)

識語(別紙) 右先人手東不知其與何人 蓋文政之末答江戸史館同 志之

書也書中國友者尙克「之氏平太郎者吉田平坦」之通称土元者杉山忠

亮「之字澤民者會澤伯民之」省字飛將者飛田勝之省「字勝將國音相通

此五氏」與先人交誼最厚而職皆在江 館史局又宗材者總裁之晉 通指

史館總裁某氏顧某氏」以心術不正持論苟且來館 僚之攻撃館局有志之

徒已」議國史上木延引及館職之黜陟 可知也而伯民亦攝總裁之 職任

其議之責當是時先人 在水戸同居館職義不可 默止是所以有此東欺若

稽 其意如前段駁擊總裁之亡」狀後段激勵伯民者然矣」雖然文避嫌疑

用謎字暗」語恐不免無誤解且當時先」人二十三距今五十八九年」矣
任今在他郷無別可據」之書雖不能詳其事实多」田氏之囑亦不能已因
叙」所臆測以還之

明治十七年二月紀元節前一日於大阪南新街之寓居」不肖藤田任謹識
(巻首朝比奈知泉の題辭を併せ貼りたり 二八九—一三九)

へだてぬ中の日記 寫 四卷一冊

三〇一

竺亭仙果著自筆 和袋綴改装丹表紙原表紙白地に柿色にて龍の圖を帯に

せし飾あり 七寸八分五寸六分 五十九丁 十二行 附加表紙外題なし

題簽原表紙左肩淺紅色「へだてぬ中の記」「このぬし」「若樹文庫」

奥書 (巻一の末) 文政十一年季冬十七日畢

(巻二の末) 墨付九丁

(巻三の末) うしの二月十日 墨付十七丁

(巻四の末) ○文政十二年きさらきの十三日の夜」此日記かきは

て、よめる、廣道、よしなくもかきそ流せる水莖の
をかしきふしもみえぬこと葉を また」わかさとの

柳櫻におもひ出ぬ都あたりの秋のにしきを

(文政十一年高橋廣道こと仙果が友佐藤友直の嚆築學びにゆくと共に八
月晦日故郷名古屋を出て京に出て京の秋色をさぐり知人知名人を尋ねな
どして十月十日歸路迄の日記 二八九—一四九)

室鳩巢先生書翰 寫 一軸

三〇二

室鳩巢自筆 卷子本布表紙五寸三分 題簽左肩「鳩巢先生書簡」 所收

左の如し

一、五月二十九日（宛名なし）

一、同（宛名なし）

一、六月二日（坂野源七郎宛）

一、加賀松雲公（前田綱紀）書

一、室新介、小瀬又四郎の連名にて松雲公間に答へし案文

一、同淨書（末には松雲公筆にて再下問を記す）

（前三通は師子林藏石と題する法帖につきての見解をのべ松雲公の間は常用字宛なる書名につきてのもの、二通はその返事、返事淨書に記する公の間は宛の文字につきてのものなり、小瀬又四通は甫庵の孫、助信字信夫にて加賀儒臣なり 二八九―イ五一）

本居大平書翰 寫 一軸

三〇三

本居大平自筆 卷子本布表紙 八寸 題簽左肩後人筆書名同 内題なし 所收左の如し

久松榮枝主（十一月十一日） 久松榮枝様（二日） 久松穂積主（八月十五日） 穂積雅兄御もとへ（十月七日） 久松榮枝様（十一月廿五日） 久松雅主（七月六日） 久松榮兄君（二月廿五日） 宛名なし 穂積雅主（六月廿九日） 穂積雅主（十二月廿五日） 穂積主御もとへ（七月十一日）

（久松榮枝は穂積とも稱し近江住の大平門にて書は多く文化前後のもの の如し 二八九―イ五三）

屋代弘賢書翰 寫 二軸

三〇四

屋代弘賢自筆 卷子本織布表紙 七寸五分 題簽左肩後人筆書名同 内

題なし 所收左の如し

（乾）哥五首 奉答侍史御中正月十九日 御答人、御中正月十九日 歌

二首 御答人、御中正月十九日（六十二歳の春とあれば文政二年

のものなり）文政三年春歌三首 文政四年春歌三首 文政五年正

月九日 文政六年詠三首 文政七年詠二首 安房守様五月廿八日

五月三日 内用御直覽六月廿四日 内藤様三月十五日 三月廿

五日 閏月廿三日 文政八年詠二首 文政九年詠三首 奉答侍史

御中正月廿九日 正月元日 六日 九月五日

（坤）内藤様人、御中三月九日 内藤様御直覽三月廿九日 二月七日

廿七日 内藤様御答人、御中三月十五日 内藤様三月十三日 正

月十一日 御直覽二月十八日 詠四首 御答人、御中四月四日

廿五日 詠一首 日附宛名なし 内藤安房守様御答人、御中四月

九日 四月十四日 九月十三夜詠二首 九月十三夜琴の絃にちな

む詠一首 文化十二年正月詠三首 詠二首 詠一首

（詠歌多けれど皆書翰に附して示せしものにして皆内藤安房守忠明にしめせるもの、如し 二八九―イ六一）

頼杏坪尺牘 寫 五軸

三〇五

頼杏坪自筆 卷子本黒紫色唐草模様布表紙 六寸三分 題簽水色布書名 同 内題なし

（原物六通二卷、八通三卷、ことごとく廣島藩の歌人大藤恂卿に寄せしもの文も又詠草歌道に關するもの多し、恂卿名源七郎、棕栢のやと號せり、書中閏八月とあるもの見ゆ恐らくは文政七年なるべし 二八九―イ六五）

地誌及紀行

萬國地誌

訂正増譯采覽異言卷之一 寫一冊 三〇六

山村昌永 杉田勤校 大槻茂質(磐水)閱 和袋綴替水色表紙原表紙共紙
八寸九分六寸三分 三十丁 三周單邊一周雙邊六寸三分四寸七分 九行
題簽左肩「訂正増譯采覽異言稿本」 原表紙外題書名同 内題「辨誤増
譯采覽異言卷之一」とあり「辨誤」を朱にて「訂正」と改む
(享和二年成りし全十二卷中卷一の稿本、内題の次に「磐水大槻先生閱江
都山村昌永子明著譯」と記せしを抹消し貼紙して「土浦山村昌永子明増
譯 若狭杉田勤士業校正 仙臺大槻茂質子煥參閱」と訂す、蟲損多く裏
打補修あり塗抹訂正書入多し 二九〇・九一―一五)

新鑄總界全圖并日本邊界圖 一軸 三〇七

高橋景保(觀巢)著 文化六年六月大槻玄澤跋 永田善吉彫刻 卷子本七
寸七分 題簽左肩紅紙墨「高橋景保著 大槻玄澤跋 永田善吉刻 世界
圖及日本邊界圖」内題(日本の部)「日本邊海略圖」
(二九〇・九一―一五)

新訂萬國全圖 一舖 三〇八

高橋景保編 和茶色布表紙 一尺六寸三分九寸五分 題簽中央墨「高橋
景保編新訂萬國全圖 永田善吉銅版文化七年刊」
奥記(凡例の奥) 日本文化七年春三月 測量所臣高橋景保謹識
(左右に東半球西半球を大きくならべ圖し四周に小さく「以北極爲心
圖」「以南極爲心圖」「定日本京師爲心圖」「日本覆對圖」を圖す 二九
〇・九一―一三)

歐西紀行卷三 寫一冊 三〇九

高島祐啓(烈)著自筆 和袋綴改裝記録表紙 八寸九分六寸四分 二十丁
十行 挿畫十九箇二十二頁分 外題なし 原表紙外題左肩書名同
(文久二年幕府の遣歐使節に加はりし著者の長崎出帆以來十四日間の日
記・挿畫中肉色貼紙ありて順序構圖の變替を云ふ、まゝ朱筆を加ふ 二
九〇・九八―一)

寛永漂民記 四卷一冊 三一〇

和袋綴改裝楡皮色表紙 七寸三分五分 四周單邊六寸四寸三分 四十三
丁半 十二行 挿畫卷一、五箇八頁分 卷二、三箇五頁分 卷三、三箇
四頁分 卷四、地圖三頁分 題簽左肩雙邊刊墨「寛永漂民記板本珍書」
内題なし 各卷柱に丁附あり、「豊芥」「齋藏文庫」「洒竹文庫」「若樹
文庫」「石塚文庫」

(稀書複製會新生編所收本の原本 二九〇・九九一―一)

ハタン延寶書 寫 一冊 三一

奇山筆 打橋繪 和袋綴纒色表紙 四寸九分七寸五分 二十丁 十三行
挿繪六圖六頁分 外題左肩書名同 内題なし 扉書名同、「竹柏園」
奥書 右之壹冊者肥州長崎「御役所瀬寄御藏方掛り」打橋何某乞請令書
寫尤「人物者打橋子之画也珍書」可秘藏と、

文政二己卯年九月上浣寫 主奇山(花押)

(延寶八年申五月十七日夜日向國伊東出雲守領沖に波丹船漂着の一件、
卷頭波丹人彩色像六面あり 二九〇・九九一―一三)

日本地誌

大濱記行 寫 一冊 三二

臥牛山人著自筆 自序 和袋綴砥粉色表紙 七寸九分五寸三分 五十五
丁 十二行 繪二十五頁分 題簽左肩書名同 内題なし、「高木家藏」
序文末 文政十二のとしつちのへ丑のはしめの秋杏林館にしるす 臥牛
山人回圖

卷末 臥牛草稿(花押)

(江戸より水戸仙臺を経て鶴城への紀行文 二九一・〇八一―一五)

九州陣道の記 寫 一軸 三三

楠長譜著自筆 卷子本緑色に金糸入布表紙見返し金布目紙 四寸七分
外題なし 内題なし

卷首 天正十五年春三月爲「薩易嶋津修理太夫義久」御誅伐御動座長譜
供「奉道中泊之次第

奥書 天正十五年七月九日「書之」 長譜(花押)

(天正十五年秀吉の九州陣に山陽道を下り赤間關に病みて引返し五月二
十一日京都につく迄の日記、狂句和歌など多し、桑田忠親「楠長譜の九
州陣道の記」―國語國文十ノ八一参照 二九一・〇八一―一三)

行客袖珍 寫 一冊 三四

深澤薰著自筆 癸亥夏男通題辭 寛政改元己酉春二月念二自序 和袋綴
焦茶色石疊草花模様押出表紙 六寸七分四寸四分 二十九丁 十行 題
簽左肩淡卵色紙「行客袖珍 東海道」 見返し(貼紙に)「御出入宿」と
題して尼崎以下九箇所に各一軒の旅館の名を記す

(扉裏に「諸國道中記」その他の案内記の批評をなす、江戸日本橋より
乃井野に至る道中案内記なり卷末に道中心得を附す 二九一・〇八一―
九)

東遊日記 寫 一冊 三三

渡邊明(臨齋居士)著自筆 和袋綴改装丹色表紙 原表紙共紙 八寸二分
五寸七分 七十四丁 九行 外題なし 原表紙外題左肩「東遊日記
從京都伊勢 參詣至江戸」右肩別筆「豊後渡邊明先生記行」、「若樹文庫」

(内題下に臨齋居士明述とあり、「竹柏園藏書志」六三〇頁参照 二九一
・〇八一―一)

藐庵旅日記 稿本 寫 一冊 三六

西邨貌庵著自筆 和袋綴煙草色地草花模様入布表紙見返し大小金切箔散らし 五寸七分八寸 九十三丁 約二十行 題簽左肩金紙三村竹清筆書名同 内題なし

識語 (卷末) 薩州御祐筆「吉井七左衛門

(天保五年二月六日江戸出發京大和めぐりをせし時の繪日記、裏見返しに三村清三郎の貌庵自筆稿本なる由の識語あり 二九一・〇八一—一七)

江戸圖鑑綱目 一冊一舖

三七

石川流宣撰並圖 自序跋 和袋綴濃縹色表紙 乾冊八寸八分五寸八分

四周單邊六寸九分四寸八分 十四丁 外題なし 柱心「圖」坤冊附圖一舖 題簽中央缺損して一部分を存するのみ

跋 (乾卷) 武江城府下編作石川流宣俊之圖

輿記 (坤卷) 元祿二春 圖畫作者 畫工 石川氏俊之圖

刊記 (乾卷) 元祿二巳天初春 書林 江戸 相模屋太兵衛

(二九一・一—一七)

哥難春藝二記 寫 一冊 闕

三二八

畠山常操著 畠山常行註 和袋綴改装栗色表紙 原表紙共紙 八寸五寸

四分 三十六丁 九行 題簽左肩雙邊(刊)佐佐木信綱筆書名同 原表紙

左肩「哥難春藝ニ記一」内題なし 表紙右肩「畠山梅軒常操述 同孫常行註」中央「全二卷上」とあり

(天保二年四月武州金澤より鎌倉に至る日記、書名は金杉日記の意にて

金澤より杉田にわたる故か、「竹柏園藏書志」六三〇頁参照 二九一・一—一七三)

慶長年間江戸圖說 寫 一冊

三一九

中神守節著 和袋綴朱色表紙 八寸七分六寸三分 四周雙邊七寸一分五寸 二十四丁 内地圖二丁 八行 題簽左肩書名同 内題「慶長年間圖考」、「對梅宇主秋原乙彦藏于俳書二酉精舍」、「只誠藏」、「高木家藏」 輿書 乙亥仲秋 梅龍園主人しるす

右慶長中江戸圖の説あるひとつとものに應じてしるしぬこの圖にのする諸役人等のことハ別に考あり

(高木利太「家藏日本地誌目錄」續篇二二六頁参照 二九一・一—一七五)

七島日記 寫 一冊

三三〇

小寺應齋著 自畫 和袋綴縹色表紙 八寸八分六寸五分 五十二丁 一行 彩色畫二十箇二十頁分 外題左肩「八丈嶋巡」内題なし、「英王堂藏書」

(近世中期の寫、刊本文政七年龜田鵬齋序「七島日記」は本書に筆を加へたるもの、寛政八年の日記なること鵬齋の序によりて知る、「寛政十年午二月寫」の「寛政七島廻」と題する一本の輿に「御代官三河口太忠伊豆國七島之支配被 仰付ニ付三年巳前石嶋爲見分罷越ひ御書附之者仕立ひ書面之由」とあり、應齋は代官三河口太忠の祐筆として八丈島檢分に從ひしなるべし 二九一・一—一九)

新編江戸名所圖誌

寫 前六卷六冊後七卷七冊

三三一

懷山子輯著 塵積校正 和袋綴丹表紙(前) 黄表紙(後) 八寸九分六寸二分 十一行 彩色畫一は九葉 二は六葉 三はなし 四は六葉 五は六葉 六は四葉 後編一は十葉 二は五葉 三は三葉 四は六葉 五は六葉 六は一葉 七は六葉 計六十九葉一三八頁分 題簽左肩「新編江戸名所圖誌」

(寛政頃の編なるべし、前行の江戸地誌を集成し誤を訂さんとせるもの、如し、前編には貞雄—瀨名氏なるべし—の説を加へあり 二九一・一—一—)

新編武藏風土記稿本

寫 一冊 闕

三三三

和袋綴共表紙 各丁裏紙を添ふ 八寸五寸八分 三十二丁 挿畫二十七箇四十頁分 外題左肩「武藏風土記 荏原郡」 内題なし

(新編武藏風土記豊島郡の部の草稿の斷片を順序なく集輯す、挿畫も刊本になきもの圖柄を異にせるものあり、外題に「荏原郡」とあれどもとより誤なり 二九一・一—一—)

葛の葉草 寫 一帖

三三三

古庵糸亦著自筆自序 折本卵色地紫色地横刷毛目模様表紙 八寸一分十三折 題簽左肩黄紙「葛の葉草全」内題「くつの葉草」、「高木家藏」 奥書 右ハ何レモ其里村ノ口碑ヲ傳エキ、書ツクルモノ成「アナカチ正シク思フヘカラズアハレピンナキト笑イタマウナ 文政十一戊歳「六月初日」 隅田川辺小梅「里於古庵ニ書之」糸亦回

識語 (隅田川古圖考の初に) 此圖ハ私ノスイリヨウチステアラマシヲ

カキシルシヌ古シエの古川筋アルイハ「古キ地名又ハ里人ノ申ツタエシコト、モ」トリアツメ古シヘハカクヤアラント書キ「アラハセシモノナリアナカチセウト」タノムニアラス

(卷首に「隅田川古圖考」と題して沿岸の葛飾郡、二郷半領、足立郡、東西葛西領、豊島郡の鳥瞰圖を附し本文はそれらの地誌を考證す 二九一・一—一—)

玉川の水 寫 一冊

三三四

本間游清著自筆 和袋綴卵色表紙 七寸八分五寸七分 十五丁 十三行 外題左肩書名同 内題なし、「月の屋」「竹柏園文庫」 奥書 天保五年五月 九江老夫游清「しるす (天保五年五月武藏の紀行なり 二九一・一—一—)

東遊記 寫 二冊

三三五

關橋守著自筆 和袋綴鶯色表紙 八寸五寸六分 十一行 挿畫甲卷八箇十六頁分 子卷八箇十六頁分 題簽左肩「關橋守翁東遊記甲(子)」 「高木家藏」

(上卷内題の下に「上毛室田甲子翁關橋守誌^{時齡}」とあり、書中柳亭、永海、永湖等の挿畫多し、明治二年房總武相紀行なり 二九一・一—一—)

向岡閑話 寫 三冊

三三六

大田南畝著自筆 末顔・印南野樵跋自筆 和袋綴黄色表紙 七寸六分五

寸四分 單邊六寸二分四寸一分の九行罫紙 外題左肩「(書名同)上
(中、下)」卷之上外題の下に別筆にて「調布日記」とあり、「大田氏藏
書」「南畝文庫」「清水藏書」「東山文庫」

奥書 (上卷裏見返し)文化己巳仲春初三抄于荏原郡羽田漁村 玉川漁夫

(中卷裏見返し)起于文化六年己巳仲春初三日羽田漁村盡于念八日上布

田驛 五宿漁翁

(下卷裏見返し)起于仲春廿八日五宿中布田村

(新百家説林所收よりも記事多し 二九一・一—イ二七)

紫の一もと 寫 四卷四冊

三三七

戸田茂睡著 和袋綴水色表紙 六寸九分四寸五分 六行 題簽左肩(破損)□
□□□もと元「紫のひとつもと」(イ)「紫のひとつもと貞」各

冊表紙「第三十 共四本」「東卅八」等の貼紙あり、「和學講談所」
奥書 (貞卷末)貞享三ひのへとらの年なか月日

元祿十六(イ)拾衣更着初六「酒瀟軒ニおゐて環写之

(國書刊行會「戸田茂睡全集」所收、「竹柏園藏書誌」六三三頁参照

二九一・一—イ五)

むらさきのひとつもと 寫 三冊 闕

三三八

戸田茂睡著 和袋綴記録表紙 七寸三分五寸七分 八行 題簽左肩絹布

「紫のひとつもと 乾下(坤上、坤下)」、「玉川文庫」「若樹文庫」「高木
氏圖書記」他一印あり

奥書 右此本者源恭光入道露寒「蜜々令恩借竊藏知音之懷」諒非其人暫
時之外見可秘々「干時貞享戊辰林鐘中旬書之」

(右に別筆にて)宝永三年茂睡卒前十九年之寫本也(虫損)在世直轉之書尤
可珍重□□□(虫損)

此本原丸橋氏忠清藏書之由虎口書ニミエタリ

(別筆朱)天保八年五月十日一校了夕佳樓主人(花押)

(卷末別紙別筆にて)「戸田茂睡傳」二葉を附し「春雨梅樹老人誌之 安

政戊午八十一歳」とあり、梅樹老人は書物奉行石井至毅。「竹柏園藏書

誌」六三二頁参照 二九一・一—イ七)

むらさきのひとつもと 寫 一冊

三三九

戸田茂睡著 和袋綴黄色表紙 七寸八分五寸二分 九十五丁 八行 題

簽左肩書名同 内題「むらさきのひとつもと」、「吉岡藏書」

識語 (卷頭)天保乙未夏表紙をあらたむ「下の卷の外題は原本のまゝ、

上の卷はおなしさまにあらたにつくりたるの也」(イ)原本に外題のなけれ

ばなり」七夕の日」 直三翁柳亭

(裏見返し)此本流布の本とは大に異同あり」又闕たるところあり別

本を以て校」正すへし

以レ朱書入たるは前の持ぬしの筆也」おのれハいまた筆をくださず

文政(卯カ)□年八月尽 柳亭種彦

(本文數本を以て朱書校合し朱墨頭註を加へ間々柳亭曰の考を附す種彦

手澤本の寫しなり 二九一・一—イ二一)

阿彌陀瀧遊覽記行 寫 一冊

三三〇

小田切春江(忠近)著自筆 和袋綴卵色地丸紋押出し模様表紙 七寸七分

いせをのあま 寫 一冊

三三五

岡山正貴著自筆 和綴葉裝黃茶色布表紙 用紙鳥の子紙 七寸二分五寸九分 五十六丁うち墨付五十二丁 六行 題簽左肩金切箔短冊「伊勢地名考」とあるを「いせをのあま」と訂せしは佐佐木信綱筆なり 内題なし 奥書 君か爲書あつめぬるもしほ草」これや伊勢雄の海士のしはさに

岡田正貴上

寶曆九のとし己卯の四月 日

(松坂にはじまりて伊勢内官外官に及ぶ伊勢案内なり、考證證歌などつらねたり 二九一・四一―一二五)

花洛細見圖

十五卷十五冊

三三六

金屋平右衛門序 和折本濃緑色表紙 八寸八分五寸八分 四周單邊 七寸二分一尺九分 題簽中央雙邊「寶花洛細見圖」又は「永華洛細見圖」内題なし、「生駒氏藏書」 刊記 (卷一序文の終に) 元祿十七甲申歲正月吉日

洛陽繪本所 寺町通二條下ル二町目 金屋平右衛門板

(二九一・四一―一三五)

京雀

七卷七冊

三三七

淺井了意著 和袋綴丹色行成表紙 八寸九分五寸九分 四周雙邊六寸七分四寸八分 十行 挿畫卷一、十四頁分 卷二、十一頁分 卷三、七頁分 卷四、一頁分 卷五、十三頁分 卷六、四頁分 卷七、三頁分 題簽左肩「京す、め一丈うちの巻」「京す、め二北より南へたて町」「京す、め

三北より南へたて町」「京す、め四東より西の野はつれまてよこ町」「京す、め五東より西へのはつれまてよこ町」「京す、め六ほり川より西の北南たて町」「京す、め七寺町の東川原町たてよこ」 柱刻「京一ノ巻 (一七ノ巻) (丁附)」、「天城藏書」

刊記 (卷七末) 寛文五年正月 日 山田市郎兵衛板

(卷二の第十一丁落丁補寫、各挿畫後人の筆にて彩色せり 二九一・四一―一三七)

京童

六卷六冊

三三八

中川喜雲著 自序 和袋綴鐵色地牡丹唐草模様行成表紙 八寸七分五寸七分 四周單邊 七寸一分五寸一分 十一行 挿畫卷一、二十頁分 卷二、二十一頁分 卷三、十一頁分 卷四、十四頁分 卷五、十頁分 卷六、十三頁分 題簽左肩雙邊「京わらへ一たつみの方の名所」卷二缺「京わらへ三ぬいぬうしとらう」「京わらへ四うたつみま未」「京わらへ五ぬうしとらう」 卷六缺 柱刻「一(一六)卷(丁付)」、「霞亭文庫」「甘露堂藏」「中川氏藏」 奥記 明曆四戊戌年七月吉日

さはら木町通烏丸東へ入町」山森六兵衛刊行 (卷六黒表紙にして他五本に異りて取合せ本なり、卷六霞亭甘露堂二印の外に「養閑齋藏書記」印あり 二九一・四一―一二七)

高野山通念集

十一卷十冊

三三九

一無軒道治著 「于時寛文拾二初冬南山の羈客自得子一無軒にして硯をならし畢ぬ」の自序 和袋綴深縹色表紙 八寸七分五寸九分 四周單邊

七寸一分五寸一分 十一行但し序・目錄九行 挿畫第一・四冊十一頁分
 第二六・八冊六頁分 第三冊十六頁分 第五冊八頁分 第七冊四頁分
 第九冊十四頁分 第十冊十二頁分 題簽左肩雙邊^高野通念集奥院 一「(同)
 壇上二」(同) 千手院 五之室 一心院 三「(同) 本仲院 小田原四五」
 「(同) 往生院 宝幢院 清淨心院 蓮花谷 新別所六」(同) 谷上七「(同)
 南谷八」(同) 西院 九「(同) 天野十」(同) 慈尊院 附錄十一「但
 し一より十一に至る卷數は後筆 内題「通念集」 柱刻卷一「奥」卷二
 「壇」卷三「千」卷四「本」卷五「小」卷六「往」卷七「谷」「本」卷八
 「南」卷九「西」卷十「天」卷十一「慈」、霞亭文庫「甘露堂藏」
 (二九一・四一・二九)

湯山遊觀路程記

寫 一卷一冊

三四〇

貝原益軒著自筆 和袋綴改裝第一附加表紙瓶覗色空摺模様入表紙 第二
 附加表紙白茶色表紙 原表紙共表紙 用紙裏打 七寸六分五寸五分 墨
 附十丁 七行 外題第二表紙及原表紙左肩自筆書名同 内題なし
 奥書 「自湯山行京路程」の奥 右一編ハ中村惕齋所記篤信又間補其
 不足

「自湯山池田越箕面道」の奥 右自篇是至此延寶八年四月二十九日
 於攝之湯山旅館書之是篤信所經歷也

「小濱より大坂への道伊丹道のり記」の奥

延寶八年五月八日於大坂旅舎書之 損軒

(延寶八年夏益軒の箕面有馬に遊びし直後旅館に於て録せしもの、後年
 の有馬山温泉記の資料の一なるべし 二九一・四一・三二)

難波鶴跡追

二卷二冊

三四一

和袋綴改裝黒表紙 用紙裏打補修 二寸六分六寸三分 四周單邊二寸二
 分五寸六分 約二十行 挿畫十二箇十二頁分 題簽左肩短冊墨「難波鶴
 上(下)」

奥書 (最終丁の表の二十一行目及び同裏缺損せるを補寫す)

延寶七^{己未}歲三月吉日 京堀川 小嶋尾長右衛門

(卷頭の序一丁及び挿畫一丁を缺く、卷末の補寫は「難波雀」に據りし
 もの、如くなれど忠實なる寫しならず、佐古慶三「難波雀類書考」参照
 二九一・四一・三三)

御手の糸下

一冊

三四二

山口素枝著 和袋綴落葉色表紙 七寸四分五寸四分 四周單邊五寸九分
 四寸七分 十六丁 七行 挿繪四頁分 外題(墨)書名同 柱刻「御手の
 糸下 廿六(一四十一)」

刊記 宝永五年「子ノ文月日」

山口素枝編作
 中橋下榎町「香河幸波書ス
 日本橋南二町目」西村新助開板

(下卷のみ、奈良案内記なり 二九一・四一・一五)

大和國地圖

寫 一鋪

三四三

伊能忠敬著自筆 表紙なし 五尺四寸五分三尺八寸 裏貼紙ありて「故
 伊能忠敬翁實測大和國地圖」

實測による道筋を朱にて示し沿道の村落山川神社佛閣を圖示す、十三越

にて法隆寺郡山を経て奈良に至り更に長谷街道を辿りて長谷の東端にて終る、他に矢田山當麻寺吉野山等への道筋をも記す

(文化五年の測量によりて製し同六年七月二十五日幕府に献上したるもの、副本、三萬六千分の縮尺、裏打せる紙に針にて突寫して製す、大谷亮吉「伊能忠敬」参照 二九一・四一・一三)

正改 大和國名所圖繪卷之一 稿本 寫 一卷二冊 三四四

和袋綴改装記録表紙 原表紙共紙 八寸七分六寸三分 四周單邊(刊) 六寸八分五寸 外題左肩佐佐木信綱筆「改大和國名所圖繪卷一稿本」原表紙外題左肩書名同 七寸四分五寸一分

(近世末期寫、國土元始、大和國號、倭字、和字、各郡等につき古記に據りて説き終に帝王略記を載す、加筆訂正多し 二九一・四一・二三)

洛陽名所集 十二卷六冊 三四五

山本泰順著「万治元年戊戌八月日山本泰順撰」の自序 和袋綴二冊宛合綴六冊に改装黒茶色地毘沙門格子模様空摺表紙 八寸五分五寸八分

十一行 挿畫卷一、二圖九頁分 卷二、三圖十頁分 卷三、三圖六頁分 卷四、三圖八頁分 卷五、五圖十一頁分 卷六、二圖五頁分 卷七、三圖六頁分 卷八、五圖十頁分 卷九、四圖十頁分 卷十、二圖六頁分 卷十一、四圖五頁分 卷十二、三圖六頁分 題箋左肩雙邊(第五冊)「山城名所記九」(第二第六冊)替題箋墨「山城名所記 卷之三(十一)」他の冊は卷數の部分缺損 柱刻なし、「常高寺」

識語 (第四冊裏見返し) 勢効員辨郡 片種村 木村教樂寺 同左近 (第五冊裏見返し) 若松村 金山源助

(京都叢書所收 二九一・四一・一七)

和州南都之圖 一鋪 三四六

黑表紙 四寸五分三寸六分 圖面一尺九寸二分一尺四寸二分 四周單邊 一尺八寸五分一尺三寸五分 外題なし 刊記 安永七戊戌年十一月吉日

大坂心齋橋筋順慶町「澁川清右衛門」板行 同 心齋橋筋南久太郎町「柳原喜兵衛

(二九一・四一・一)

出雲國名所圖會 稿本 寫 一冊 三四七

神田常有著自筆 和袋綴改装表紙 原表紙は共紙 八寸五分六寸一分 用紙裏打七十七丁 九行 外題左肩佐佐木信綱筆書名同 原表紙外題左肩「出雲國名所圖會卷之(之) 嶋根郡草稿」

(「出雲國名所圖會卷之(之) 目錄」の下に「雲州琴川漁叟神田常有稿」とありて上に紙片を貼りこれを隠す、本文初めに「雲州琴川無味菴常有稿」と署名せり、圖繪とあれど繪なし 二九一・五一・五)

石見國名跡考 寫 四冊 三四八

藤井宗雄著 和袋綴丹色地網目表紙 七寸九分五寸四分 十二行 題箋左肩雙邊「(書名同) 卷一(一)卷三、附錄」。「神木氏藏書印」「高木家藏」

(卷一内題の下に「藤井宗雄記」とあり、文字裝幀すべて別項「石見偉

人傳」一・二六六一に同様、高木利太「家藏日本地誌目錄」参照 二九一・五一一三

藝備街道瀧見笠 寫 一冊 三四九

林政休著 小田切忠近校合 和袋綴薄茶色布表紙 用紙薄様 二寸三分五寸一分 九十七丁 十五行 外題なし、「小田切」「高木家藏」奥書 (墨)天明二龍集姑洗日 藝陽廣陵住 林政休稿

嘉永三上章閣茂仲秋 改補之早 (朱)卷中誤字多シ一本ヲ得テ校合畢

于時元治元年十二月藝州御陣中ノ燈下ニ一校了

尾張世臣 小田切忠近

(二九一・五一一)

長崎港唐人屋舖並市中風俗圖 寫 一軸 三五〇

卷子本媚茶色地唐草織紋表紙 一尺三寸二分 題簽左肩「長崎港唐人舖並市中風俗圖全」内題なし、「南葵文庫」

(江戸中期筆、全畫淡彩を施す、畫中間々白描の所ありて施すべき彩色を註記し又省筆ありて後補すべき點を註記せり、下書き繪なるべし、市中の風俗春夏の二季にわたる、或は他に秋冬のものあるか 二九一・六一一五)

蝦夷紀行 寫 一冊 三五二

和袋綴共表紙 七寸四寸五分 墨附三十二丁白紙四丁 七行 外題左肩書名同 内題なし

識語 (見返し貼紙) 此紀行は近藤重藏等を從ひ蝦夷に行きたる人の自筆也尙調らふへし (二九一・七一一五)

蝦夷道中記 寫 一冊 三五二

和半紙四折帳綴雪母引表紙 四寸一分五寸八分 四十七丁 約十八行 挿畫五十九箇 外題中央書名同 内題なし

識語 (初丁裏朱) 蝦夷地は名所舊跡無之皆藪原にて人の往來も「無之依而我形を認不文ヲ以御姉様の御笑草に」指上ひわざとおかしく認め付御笑覽被成下度也 (表紙) 門田藏 (裏表紙) 文久二年

(松前を中心とする見聞記、幕吏の手録なるべし 二九一・七一一三)

舊繪臺灣圖 寫 一軸 三五三

卷子本黄色絹表紙 用紙裏打 二尺九寸一分 題簽左肩後筆書名同 書名の下に「吳榮光跋」内題なし

卷首 (別紙に附記) 披覽此圖不禁滄桑之感

案諸羅縣於乾隆五十二年改名嘉義蓋此圖猶未改名 時所製迄今逾二百年矣 (吳印榮光)

(清朝初期寫か、彰化縣を中心として諸羅縣竹塹城等北端花杯嶼、燭臺嶼に至る臺灣西岸一帶の鳥瞰地圖、彩色を施す 二九一・八一一一)

〔臺灣圖〕 寫 一軸

三五四

卷子本表紙なし 用紙裏打 一尺二寸五分 外題なし 内題なし

(清朝時代の圖、鳳山縣城・臺灣府城・嘉義縣城・竹塹城等を中心として北端棋杆巽・燭檣巽に至る臺灣西岸一帯の鳥瞰地圖、彩色を施す、圖中別紙を貼り註記するもの頗る多し、例せば阿公店館の所に「下距桶仔舖貳拾五里上距大湖舖貳拾伍里原安號書壹名遞夫肆名今奉文刪定遞夫參名」と 二九一・八一三)

〔朝鮮古地圖〕 一帖

三五五

折本薄葡萄酒表紙 一尺一寸六分七寸 十二葉 外題なし 内題なし

(天下圖・中國圖・東國八道大總圖・八道の各圖・日本圖・琉球圖を收む、各圖略の説明あり、中に大明・武衛殿・王姓源氏・江戸の註關白所居などあれば明末我が慶長前後の刊なるべし、圖甚だ略なり 二九一・九一―)

中國地誌

欽定滿洲源流考

寫 二十卷附目錄一卷二十冊

三五六

阿桂(清)奉勅撰 乾隆四十二年八月十九日上諭 乾隆四十二年九月上表 唐袋綴玉蜀黍色表紙 八寸八分五寸六分 七行 外題なし

(清朝時代の寫なるべし 二九二・一―)

荊州大堤石礪岩全圖 寫 一軸

三五七

卷子本茶色絹布表紙 一尺六分 原物絹本八寸九分 題簽左肩外題なし 内題なし

(清朝時代寫、彩色あり、末に二十八行にわたり圖の説明あり 二九二・二―)

黃河山川道圖 寫 一軸

三五八

沈勉齋筆 卷子本鶯茶地雲形模様表紙 一尺九分 外題なし 内題なし

卷末 (同筆) 道光四年武林沈勉齋繪回

識語 (見返し別筆) 山川道圖

(黃河の沿岸圖にして卷初を西卷尾を東とす、上流は孟縣、洛河の黃河に入る邊りより筆を起し虞城縣附近に到る 二九二・二―)

大明地理之圖 寫 一鋪

三五九

一尺一寸八分八寸 外題なし 内題なし

奥書 (右下端に) 此圖以禹貢一統志圖書編

而二直隸十三道者以墨爲界其府一者各以彩分之府城州縣城者以方」圖辯之舜十二州禹九州者以品色」頒之而京旧都与五嶽以金標之布」政司与五嶺者以銀微之江淮河漢」者廣其河其餘名山大川關梁廟寺」古蹟等者各題名於其所四川者喜」之貴州廣西雲南者又大略之本邦」与朝鮮者分其道韃靼西番安南等」者舉其名而已宜以圖符併視焉

歲次辛酉延寶九年六月望」元祿甲戌七年七月三日

(二九二・二―)

〔南支那圖〕寫一軸

三六〇

卷子本模様入黒色表紙 一尺二寸 原物絹本一尺一寸 外題なし 内題なし

(清朝時代寫、福建省の詳細なる清代海防圖、彩色を施す 二九二・二一四三)

南アメリカ地誌

〔栗原研究所報告書〕寫九冊

三六一

栗原研究所編 堅紙表紙縦綴二冊 薄老竹色表紙横綴七冊 各冊内容次の如し

- 一、栗原研究所事業概況 十四行洋罫紙二十九丁
- 二、黄道光對日照流星觀測概況 圖及び表十三葉 一九三五年中のもの
- 三、氣象概況及諸表 十三葉 昭和八年より昭和十年にいたるもの
- 四、舊石器型の石器 十葉
- 五、石器及土器 十葉
- 六―八、土器 各十葉
- (以上五冊 彩色畫、ペン畫、寫真等を用ふる圖譜なり)
- 九、先住民族の遺蹟及化石探險報告 十葉 多くの寫真を用ひて説明す (在住日本人によるブラジルの天文氣象動物植物考古等の研究所なる所に於いて昭和十年平生夙三郎旅行の際その概要を報告せしもの 二九六・二一四一)

社會科學

政治

民選議院假規則 寫二冊

三六二

松岡毅軒(時敏)著自筆

甲(民選議院假規則)は和假綴共表紙 九寸五分六寸七分 四周雙邊六寸九分四寸七分「太政官」と柱刻ある八行飴色罫紙 表紙共四十六丁 乙(議事上院略規)は和假綴表紙なし 八寸五分五寸九分 四周單邊六寸三分四寸十行の薄縹色罫紙 全十丁 甲外題左肩「民選議院假規則 初(朱にて次と改む)稿」

(甲表紙に朱にて「編纂掛松岡時敏稿」とあり、墨初稿にして朱を以て訂正しあるが次稿なり、別に尾佐竹猛の解説二葉あるによれば明治六年の起案なりと、「竹柏園藏書志」三一頁参照 三一三・二一四一)

古代法制

本朝法家文書目錄 寫一冊

三六三

神谷永平校訂自筆 和袋綴共表紙 八寸八分六寸六分 表紙共二十丁 八行 外題中央墨「法家文書目錄」神谷圖書「藤永平印」「弘綱藏書」奥書 右法家目錄原与國史目錄合爲一卷去弘化三年首夏於度會」弘訓神

主學館寫之尔來購之四方未得類本故今比校本書併考」彼此訂正訛謬聊加朱書如其類格篇目闕遺感不少按格目錄之下曰類聚已了則知類聚三代格同時之撰伏請有識」得善本被示耳

嘉永第四夏 尾張 神谷永平謹識

識語 (表紙) 草工不行屆候へとも數本寫候間一本進上仕候

十卯十二月九日 因幡守永平

佐々木君

(日本古法制書を律・令・格式・雜にわけて略註せる目錄 三二八—イ 三)

名例律 寫 一冊

三六四

萱生由章筆 和袋綴記錄表紙 八寸九分六寸三分 二十八丁 外題

〔書名同〕完

奥書 (朱) 一本奥尾ニ

右依懇望乍秃筆遂辱写附与之者 參議左大辨藤原俊方

右「寛延元年戊辰七月寫畢 春日部由舊識」由の下に藍にて「章ニ

改」とあり

(藍)藍点一本校合畢

(奥に云ふ所の朱書一本及藍一本を以て校合を施せり、奥書末に別筆「萱生家藏」の貼紙あり、表紙外題の右肩「萱生由章先生自筆」とあり更に弘綱藏と署す、佐佐木弘綱舊藏本なり 三二八—イ一)

校正法曹至要鈔草稿

寫 二卷二冊

三六五

橋本正兌著 度會公祐序 和袋綴引表紙 八寸九分六寸四分 九行

外題左肩(書名同)上(下) 内題「法曹至要鈔」、「松室書庫」

識語 以前訂正如此然正兌孤陋寡見何敢成其定一本之間と有

疑貽者以俟來者爾 天保元年十二月二十五日 度會神

主正兌識

(壺井義知、速水房常、石崎多門、群書類從、山田以文、寛文二年刊本

等の諸本或は引用書原本等によりて詳細頭註校異を施す、別筆にて坂上

明兼、度會神主正兌像二面及び橋村先生度會正兌神主著述目錄一丁を附

す 三二八・一—イ三)

職原鈔 寫 二卷二冊

三六六

北畠親房著 和袋綴納戸色行成表紙 上冊八寸五寸五分 上冊のみ四周

單邊六寸三分五寸 有界八行 下冊七寸六分五寸五分 八行註二行 外

題左肩累書「職原上(下)」

奥書 (上冊) 本云「正平二年」十月廿五日書写異同廿六日写点訖又權ノ

左「中弁兼左近衛權少將 源顯統」

寛正五年甲申五月二十三日

(下冊) 正平二年十二月一日書写之并写點畢

權左中弁兼左近衛少將源顯統

(顯統本系の寛正五年寫本を室町末期に轉寫せし取合せ本、橋守部舊藏印あり 三二八・一—イ五)

守護地頭考

寫 二卷二冊

三六七

星野恆著自筆 和袋綴媚茶色表紙共紙 八寸二分五寸一分 十行 外題
原表紙左肩「守護地頭考 上(下)」同右下「八拾五葉」

(「史學雜誌」二編三編所載原稿、後に「史學叢說」第一集に「守護地頭考明治廿四年五月草」として收めらる。全篇塗抹訂正の跡頗る多し 三二八・二一四三)

大儀殿庭裝束圖・同禮服冠圖 寫 一冊 三六八

和袋綴堅紙表紙 原表紙共紙 用紙薄様 九寸二分六寸七分 二十丁

外題左肩佐木信綱筆書名同 原表紙中央「大儀殿庭裝束圖 同禮服冠圖 全」丙題なし、賀茂眞淵緑印 「竹柏園文庫」

識語 (表紙右肩佐木信綱筆) 賀茂翁旧藏本翁の藏印あり (三二八・六一四九)

辰日略次第 寫 三六九

傳藤原爲家自筆 折本共表紙 五寸五分五寸 表紙共八折 概ね七行

外題左肩書名同 丙題なし

識語 (表紙右下) 前藤原納言爲家扇次第嘉禎度
懷中

添狀 此間賜預の辰日畧次第「令熟覽の處中院大納言」筆跡無紛存の表

帑之前藤之一行ハ爲相卿」筆と相見候(下畧)

八月十日

左大辨宰相殿

爲久

(大嘗會の次第を記す、爲久は冷泉家 三二八・六一四五)

當家着用裝束以上事 寫 一冊 三七〇

飛鳥井雅綱筆 和胡蝶裝綠色地葡萄栗鼠織出模様絹表紙 用紙鳥の子 五寸五分 四寸二分 墨付百八枚 八行 外題左肩後筆書名同、「竹柏園文庫」

奥書 斯一冊當家着用裝束以下之事并旧記等取用「板之極秘重寶物過」之哉誠以雖不可出篋底「依三位中將殿房基御懇望」令加書寫所進献之也」 天文十三年六月吉日 左丞相(花押)

(内容は當家着用裝束事、當家相傳十二合文書事、家門末子入室門跡等事、家門管領寺院事、家領再敷地等事など 三二八・六一四七)

四節八座抄 寫 一冊 三七一

藤原定能著 和胡蝶裝表紙破損裏表紙なし 五寸六分五寸四分 有界四寸四分四寸六分 表紙共五十六丁 七行 外題左肩書名同 丙題なし

卷末 (別筆) 四節八座抄隨分秘抄也

(鎌倉時代寫、本文群書類從卷百一所收と少異あり、欄外に注記多し 三二八・七一四)

寛永行幸記 古活字本 三軸 三七二

卷子木卯色表紙 用紙雲母引 九寸七分 外題左肩後筆「東福門院行幸圖」「御歌會之卷」「後水尾院行幸圖」 丙題なし

(丁付を有するものあり無きものあり、又その痕跡のみを留むるものあり)

りて各卷各葉一定せず、又一種二種兩様式を混在し各卷互に錯簡あり、繪柄に着色あれど後人の所爲なり 三二八・八一―五)

大嘗會悠紀主基二國蘇詞

寫 一冊

三七三

契沖筆 和袋綴改裝油色布表紙 用紙裏打 七寸八分五寸五分 四十四丁 十行 題簽左肩裏葉色書名同 内題なし

奥書 元祿九年十二月十六日抄之訖」沙門契沖

(本文中所收歌出典、年號を朱書頭注或は傍記する條多し、卷末二葉別筆にて「長秋詠藻大嘗會歌」より抄出せるものを附す 三二八・八一―三)

棠陰秘事加抄

三卷六冊

三七四

和袋綴繪皮色行成表紙 七寸七分六寸九分 四周單邊七寸二分五寸五分 十行 題簽脫落後補左肩墨「棠陰比事」内題「棠陰比事卷上之上(一)下之下)」柱心(卷數)棠陰秘事加抄(丁數)「淨教寺行」「竹冷文庫」卷尾 棠陰秘事加鈔大尾

(目錄の内題下に「四明柱 シレイノクイ 萬榮編集 マンエイヘムシツ」「居延田 キョモンテン 澤校正 タクカウセイ」とあり、卷首に兩者の序あり、本文版下或は朝鮮刊行本によるか、本文並びに鄭克評言に反點讀假名を施し次に片假名交り日本文にて評註す、或は林羅山の著といふ、寛文二年刊あり一に棠陰比事諺解ともいふと、野間光辰「西鶴新攷」所收「本朝櫻陰比事考證」参照 三二九・二一―七)

經 濟

〔德川理財會要稿本〕

寫 八冊 闕

三七五

大藏省編 和袋綴堅紙表紙 「大藏省」(十行)「考課狀立案用大藏省」(九行)とせる野紙を用ふ 九寸五分六寸七分 題簽左肩「勘定所事務章程之部初譯」「經費之部 第一原稿」「賑恤之部原稿」「官貸之部初譯」「鑛山之部初譯」(簽なくして外題のみ)「米廩之部初譯」「治農之部修譯書」「宗教十四年一月二十六日闕了」(簽なく外題のみ) 内題經費、賑恤、鑛山、米廩の部には「舊幕府理財會要」

(日本經濟叢書に翻刻流布せる德川理財會要の草稿にして朱を以て多く改訂を加へあり、勘定所事務章程之部は第一門職務にあたる一部なり、經費之部は第三門の卷十の全部、賑恤の部は同卷十三の大半にして大體翻刻本の體をなせども他の初譯修譯などあるものは翻刻本にいたる遠き故なるべし體をなさず、「宗教」は翻刻本になけれどその折に作成せるを一部にまとめ共に存せしなるべし、この書は明治十年代にあたりて大藏省にて編せしものその掛りたりし小菅揆一の印などを認む、日本經濟叢書解題参照 三三〇・二一―一)

社會事業

おろかおひ 寫 一冊

三七六

足代弘訓著 和袋綴共表紙 八寸四分五寸八分 表紙共二十四丁 十行 外題左肩「おろかおひ大意」内題なし、「竹柏園文庫」識語 (表紙に墨) 足代權大夫弘訓稿

(同朱) 先生自筆もましれり珍藏すべし佐々木弘綱藏

(末一丁及び改補の部分弘訓筆なり、内容は飢饉につきての諸事にて末に「天保四年癸巳十月足代權大夫弘訓」とあり 三六八―イ一)

教 育

罪言 寫 一軸

三七七

富岡鐵齋自筆 卷子本紺地菱目形織紋模様布表紙 八寸二分 但し六寸二分八寸の袋綴を改装せり 本文三十行 題簽左肩別筆書名同下に「富岡百練」表紙兩端封じ目に「百練」の丸墨印各二顆あり、「穴戸」「里」文末 明治六年十月

教部大輔穴戸璣殿

教部少輔黒田清綱殿「閣下

京上廿二區東三本木「富岡百練」恐懼百拜謹上

(神社寺院管轄につきての封事、小高根太郎「富岡鐵齋の研究」参照

三七〇―イ一)

諸國風俗問狀附答書 一冊

三七八

石原正明著 和袋綴共表紙 四寸五分六寸四分 六丁 二十一行 外題中央稍左書名同

奥記 右諸國風俗は編纂之節御答被下ひ人々の御名」をも書加へ申ひ間御答書之末に國郡郷町御苗」字俗名實名姓□^(五韻)まで委細に御記し可被下ひ也」 石原喜左衛門正明

附答書(合綴)

寫一冊表紙なし 四寸八分六寸五分 十丁 二十一行 外題なし

内題なし
(習俗に關する百三十三箇條を印刷し諸國に配りし質問狀、答書は水戸封内無名氏のもの 三七〇―イ三)

風俗及習慣

蝦夷國風圖畫 寫 一軸

三七九

卷子本深縹色花菱模様布表紙 六寸八分八寸八分 題簽左肩白紙書名同奥書 右蝦夷國風圖會譯文者本朝之故實熊野之本縁」蝦夷講破摩弓之起厚今現ニ蝦夷地尔残り有者也現在之物見而」觀察せよと爾云依之此圖繪一卷著シ諸人惑令解也」

寛政十戊午年三月上旬 山本蘭亭書之也

(寛政十年蘭亭畫く所の寫し、熊祭や日常生活の圖の間に簡單なる説明を加へあり、彩色畫 三八〇・二一―イ一)

衣服體裁考稿本 寫 五卷五冊

三八〇

谷好井著 和袋綴三冊共表紙二冊表紙なし 九寸七分六寸二分(内一冊九寸七分一尺二寸二分)十行 外題(内一冊)右肩「大唐六典拔書」内題(内一冊)「衣服體裁考衣禪條補」

(上代の衣服に關する書、一冊は圖錄一冊は唐六典の拔書なり 三八一―イ一)

市隱月令 寫 一冊

三八一

村田了阿著自筆 和横假綴共表紙 用紙色變り料紙(表のみを使用す) 一尺五寸五分 十四丁 約四十四行 外題中央書名同 内題なし、「中川氏藏」

(江戸の年中行事及び四季の景物を中心とする日記、「近世文藝叢書第十二」所收原本、同書の解題には「文化年間の記たるや疑なし」といふ 三八四—四五)

七夕之器考 寫 一軸

三八二

賀茂真淵著自筆 卷子本白茶地金欄表紙 見返し金砂子散らし紙 一尺一寸 題簽左肩短冊「七夕之器考 縣居翁草稿」内題「乞巧奠 草稿」但し「草稿」の二字はみせけち

卷末 寶曆甲戌七月一日人のもとめによりて賀茂真淵記

(もみ子家集に「かものうしのたなはたまつりの紀書て給ふよしせ川のおもとに傳へられしをかの紀をしはしと、めておもとより およひなき天の川をもせきとめて此水くきハよそになかさし」とあれば鶴殿餘野子に與へしものなるへし、「賀茂真淵全集第十二卷」所收の原本なり 三八四—四三)

山茶やぶれ笠 一冊

三八三

頓滴林著 和袋綴改装深縹色行成表紙 用紙裁斷 五寸九分四寸四分 四周單邊五寸四分四寸 二十八丁内序一丁跋一丁 十六行 挿畫四箇八

頁分 外題なし 柱記「二(二十八)」、「綾町」雲林庵藏書「久彌藏」

「甘露堂藏」尾雲林庵文庫「富田藏書」

刊記 延寶三年夏至 小石河住山水氏頓滴林作 堺町 菊屋七郎兵衛板

(「甘露堂文庫稀覯本攷覽」参照 三八七—四五)

讚嘲記時之大鞞 一冊

三八四

吹上氏かわすの介安方著 和袋綴改装深縹色地菊唐草浮出模様表紙 六寸四分四寸五分 四周單邊五寸四分四寸 三十七丁内目錄半丁跋半丁 十四行 挿畫四箇八頁分 題簽剝落 外題なし 柱記「さん一(卅七)但し「又十六」丁ありて卅六の丁附を缺くも本文續きたり、「甘露堂藏」久彌藏」

刊記 うろこかたや加兵衛開板(「鱗」の丸印を刻す)

識語 (裏見返し附箋墨) 此本第三十六缺丁にてよし、又十六ありて全

三十七張也 久弥

(稀書複製會本の原本か、「近世遊女評判記年表」野間光辰「西鶴新攷」所收一参照 三八七—四九)

桃源集 一冊

三八五

腔田鈍太郎末孫白面書生著 小藤原定家序 和袋綴改装深縹色表紙 六寸一分四寸六分 三十六丁(第三丁と四丁との間に「四三」丁あり) 序本文十行後序七行 題簽中央双邊(刊)墨「島原集全」、「永田文庫」「甘露堂藏」

奥記 承末之春抽「毫子虚白堂」腔田鈍太郎末孫白面書生敬(擬假名あれ)

(後序の題下に) 政開板

(承應四年即ち明暦元年の刊なり、元禄五年の書目には二冊とあり「甘露堂文庫稀覯本攷覽」参照 三八七—一三)

浪花遊所之賦・古今浮連歌序 寫 一帖 三八六

戀々山人半水著自筆 折本薄利久茶表紙 七寸二分五寸六分 五十六頁
題簽中央紙片外題なし、「所縁菴印」

識語 (函蓋裏に) 慶應貳稔丙寅素秋「一荷堂戀々山人半水師作文之筆共」所縁庵戀鐘齋所藏

(前は難波遊里の様を紹介せし戯文にして末に「應第二秋日戀々山人半水戯書」とあり、後は都々一集の序なり 三八七—一五)

ぬ物がたり 一冊 三八七

和袋綴改装濃縹色地雷紋繋ぎ唐草模様光澤摺表紙 用紙裁斷 六寸四分四寸六分 二十三丁内目錄一丁 十行 挿畫三箇三頁分 外題なし、

「南木藏書」「甘露堂藏」
刊記 明暦二丙 歲仲春吉日 政開板

(甘露堂文庫稀覯本攷覽参照 三八七—一一)

まよこりくさ 一冊 三八八

虚光菴眞月居士(藤本箕山)著 乙未臘天上幹自序 和袋綴改装深縹色地雷紋繋ぎに唐草模様光澤摺表紙 八寸六寸 三十八丁内序六丁目錄二丁三周單邊七寸三分五寸四分 十二行 題簽左肩剝落 序の内題書名同 目錄及び本文の内題「滿散利久佐」 柱記「増一(一卅八終)」、「永田文庫」「甘露堂藏」

刊記 (序文の奥) 明暦貳丙 歲初夏 開板

(「甘露堂文庫稀覯本攷覽」及び「近世遊女評判記年表」―野間光辰「西鶴新攷所收」―参照 三八七—一七)

吉原天秤 一冊 三八九

和袋綴改装深縹色表紙 六寸三分四寸五分 三十八丁内序一丁跋半丁 四周單邊五寸四分四寸一分 十四行 挿畫六箇六頁分 外題なし、「甘露堂文庫」

(尾崎久彌「江戸軟文學考異」に解題翻刻、更に稀書複製會より複製さる、「近世遊女評判記年表」―野間光辰「西鶴新攷」所收―に延寶初年刊半紙本一冊とあり 三八七—一七)

吉原よぶこ鳥 一冊 三九〇

和袋綴改装黒表紙 用紙裏打三周裁斷 二十九丁 六寸四分四寸三分 四周單邊五寸四分四寸一分 挿畫七箇十三頁分 外題なし 内題なし 柱心に丁附あり、「川島不舟圖書」

(第「八」より第「三十六」までありて外缺丁、卷初補紙四枚巻尾補紙三枚、卷初補紙一枚目に柳亭種彦「吉原書籍目錄」の記事を引く、同書によれば本書紙數三十九張、皐月中旬うろこ形屋加兵衛開板、寛文八年刊なり 三八七—一三)

國字諺語 寫 二冊 三九一

椎園著自筆 和袋綴改装淺縹色表紙 用紙裏打 六寸九分四寸四分 十

七十九行 題簽左肩〔書名同〕椎園稿本上〔下〕本紙初丁左肩に原題簽單邊「國字」分類諺語 椎園稿本を貼る 内題なし
〔但諺をいろは順に排列二段に記せり、書中ま、考證略解を施せり、又所々可の朱印を押せるものあり、〕竹柏園藏書志に椎園或は蜂屋茂橘ならんかといふ 三八九—イ三〕

軍 事

海國兵談 寫 十六卷三冊

三九二

林子平著 天明六年丙午夏五月二十有八日工藤球卿序 天明六年丙午冬自序 林丙吉〔越智通次〕筆 和袋綴丹色行成表紙 八寸七分五寸九分 八行 題簽左肩無邊「兵譚 自一至五〔自六至十二、自十三至十六終〕、「桂川之印」

奥書 〔第三冊裏見返し本文に同筆〕十二童 林丙吉越智通次書

識語 〔卷末〕天明六年丙午夏 仙臺 林子平述 〔翻智〕 〔不刊〕 〔灰直〕 〔書文〕

〔本書刊本に比するに「予嚮に三國通鑑を著ス」云々の自跋を缺く、林丙吉越智通次は子平兄嘉膳〔友諒〕第三子なり、十二歳は天明八年、故に本書天明八年の書寫にかゝる、林家より桂川氏への所與本 三九一・一—イ三〕

軍略秘書 寫 一冊

三九三

和袋綴共表紙 用紙鳥の子 八寸二分五寸九分 五十三丁 九行 外題 左肩別筆「軍略秘書古寫本」 内題なし

〔近世初期寫、「合戦始ル前弓鉄炮之口傳」以下二十四條、軍陣の心得をとけり 三九九—イ九〕

雌鑑抄 寫 二十二卷二十一冊

三九四

北條氏長著 和綴葉裝深縹色表紙 用紙鳥の子 七寸九分六寸二分 八行 題簽左肩無邊書名同

奥書 兵瀆雌鑑四十二卷就執心令受與之者也深秘而莫有他見

〔別項兵法雄鑑—三九七—に同筆同裝なり 三九九—イ一〕

七書 二十四卷七冊

三九五

江伯虎序 慶長十一龍集丙午初秋念又一日閑室元倍跋 和袋綴改裝澁紙表紙 九寸一分六寸五分 四周雙邊七寸五寸一分 八行十七字 外題なし 内題なし 柱刻「孫子」「吳子」「六韜」「三略」「尉繚」「司馬」「太宗」、「高木家藏」

識語 〔初冊見返し〕此七書ハ活字板七書ヲ原板トシテ刊行シタルモノナリ寛永年間 京都書肆ガ慶長十一年閑室元倍ノ刊記ヲ以テ出版シタルモノト 全ク別板ナリ彼板ハ訓點ヲ付スルモ此板ハ白文ナリ此板ハ木活本ノ不足ヲ補フタメ同ジ頃元倍ノ刊行スルモノナリト傳フ

此七冊九條公爵家舊藏本ナリ 昭和四年十二月 甲麓莊主人

〔伏見板古活字本の所謂異植板を以て原板とす慶長中刊、孫子三卷、吳子二卷、六韜六卷、三略三卷、尉繚子五卷、司馬法三卷、唐太宗李衛公問對三卷の七部 三九九—イ五〕

人見流拔覺集上卷 寫 五卷一冊

三九六

和帳風に美濃紙を二つ折にして數葉をかさね綴葉裝風にち合す澁紙表紙 七寸五分五寸四分 六十三丁 八行 外題なし 内題なし 初丁に「人見流拔覺集上卷全五卷 註本」とあり

奥書 右條々大夏之德儀努々不可有他言者也

慶長十八年癸丑八月十五日選之

慶十九 六月吉日 人見下齋宗次(花押) (印)

倉賀野長左衛門殿參

(人見流馬術の傳書、奥書の人名のみが人見宗次の書なるべし、本文は別筆にして慶長十八年の寫なり、人見氏の印は朱の切支丹印なり 三九九一七)

兵法雄鑑 寫 五十二卷二十七冊

三九七

北條氏長著 和綴葉裝深縹色表紙 用紙鳥の子 七寸九分六寸二分 十行 題簽左肩書名同

奥書 兵法雄鑑五十二卷終右之外微妙至善合五十四帖也微妙至善之二卷者兵法之秘事成故不顯之而已(中略)

維時正保第二之曆九月朔日書勝成矣後之覽焉者於兵家者流弁漕瀧

惟幸故跋伊豆平氏早雲寺天兵宗瑞七世孫北條新藏平朝臣

(別項雌鑑抄一三九四一と同筆同裝なり 三九九一七)

解紛記 古活字本 二卷一冊 闕

三九八

和袋綴改裝縹色表紙 用紙裁斷 六寸九分四寸九分 本文上卷四十二丁 中卷三十三丁白紙一丁(上卷裏表紙見返しなりしもの) 目錄各卷見返

しにあり 四周雙邊五寸六分四寸 八行約十四五字 題簽左肩剝落外題なし 柱心「解紛卷上(中)(丁數)」、「和州初瀬 關東屋次郎右衛門」奥記(上卷及び中卷末共に)慶長十二丁曆三月日 識語 (上卷目錄右下に墨) 廊坊庫寶

(上、中、下三卷三冊のうち下卷闕、刀劍の記なり 三九九・二一七三)

本朝古今銘盡 古活字本 一冊

三九九

和袋綴卵色地雲母模様表紙裏表紙雲母剝落して昆沙門格子に牡丹を配したる行成表紙の地紙を露はす 八寸五分六寸 三十三丁 約十八字 各頁圖あり 題簽左肩剝落外題なし 内題なし、「高木家藏」

識語(裏見返し墨書)慶長十二年霜月吉日松田道以久元(花押)

(別筆) 本主後藤源兵衛

(墨を以て焼刃を補畫し、その下に刀匠の名を假名にて書入れたり、書入の文字慶長を去る遠からず、川瀬一馬「古活字版之研究」に所謂第一種本なり 三九九・二一七一)

弦史 寫 一冊

四〇〇

岸本由豆流著 文政十二年七月廿七日自序 和袋綴白茶色布目紙表紙

八寸八分六寸 墨付二十二丁 十行 題簽左肩書名同 内題の下に「官

工岸本 大隅平由豆流編、「宍戸氏藏書記」

(幕府弦師の家を嗣げる著者弦の沿革を考證す 三九九・四一七三)

自然科學

蘭香 二帖

四〇一

折本山吹茶色草花織出模様布表紙 一は一尺五寸七寸 一は一尺三寸三分七寸 題箋中央一は白絹一は金切箔紙「蘭香」内題なし、「快」「庵」所収次の如し

- (第一帖) 大槻玄澤和歌短冊 間重新書簡附大槻如電添附 福井棊園評箋 山本幸民詩箋 木村青竹書簡(宇田川榕庵宛封紙付) 大槻磐溪書簡(宇田川榕庵宛) 筆者未詳蘭文 箕作阮甫詩箋 坪井信道詩箋(題「酒至」) 同書簡(宇田川榕庵宛) 同詩箋(箕作摩西見示元旦偶作次韻却寄) 文政十二年略曆(刷物) 大阪屋四郎兵衛宇田川宛書簡包紙 小石中藏宇田川榕庵宛書簡包紙 筆者未詳歐文七種 宇田川玄隨名刺 小石元俊和歌短冊 華岡隨賢和歌短冊 湊長安書簡(五十嵐喜徳宛) 廣川辨詩短冊 緒方洪庵和歌短冊 橋本綱常詩箋 阿部樸齋書簡(岡先生宛) 廣瀬元泰詩箋二枚 小石元瑞書簡(玄同宛) 和製カテーテル効能書(文政庚寅夏五月齋藤方策刷物) 城東千住解剖入覽券(盟主宇田川榕庵等) 藥品會入場券(醫學館) 於城東千住婦人死體解剖圖(扇面寫實傳桂川甫賢戯伎) 亞歐堂田善筆牡丹圖 天保五年西曆曆(溫和堂藏)
- (第二帖) 松本良甫書簡(伊東南洋宛) 山東京山書簡(栲園宛) 緒方洪庵書簡(宇田川興齋宛封箋とも) 大槻玄澤書簡(大槻民治宛) 長與

專齋(印東立澤宛) 馬場穀里(宇田川榕庵宛) 林洞海書簡(伊東南洋宛) 御國禁耶蘇書目(刷物) 伊藤方成書簡(岡保義宛) 廣瀬元泰書簡(緒方宛) 山尾庸三書簡(父宛) 宇田川樺齋書簡(佐々木中澤宛) 博物會案内(天明戊申桂川甫周等の刷物) 伊東方成書簡(岡保義宛封箋附) 群芳陳人書簡(宇田川榕庵宛) 緒方洪庵書簡(伊東南洋宛) 箕作阮甫詩箋(過仙行) 山尾忠次郎書簡(岡保義宛封箋附) 栗本丹洲書簡(宇田川榕庵宛) 伊藤玄朴書簡(伊東昌之助宛) 馬場穀里書簡(宇田川榕庵宛) 西村茂樹書簡(伊東南洋宛) 佐藤尚中書簡(伊東南洋宛) 難波立願書簡 佐藤尚中書簡(中井敬所宛) 大槻磐水書簡(佐々木中澤宛) 田能村太一書物借用證(宇田川榕庵宛) 澁井小室詩箋

岩井晚香詩箋 阿部樸齋本草會刷物 足立天年植物畫五葉 伊藤鯉屋書簡(宇田川先醒宛) 伊藤圭介書簡(大樋修二宛) 福地源一郎書簡(大槻如電宛) 桂川國興書簡(大槻修二宛) 某書簡(伊東南洋宛) 内田恒次郎書簡(伊東昌之助宛) 岸田吟香畫 玳瑁拙者畫家猪臚干の畫

シユルコーブ書簡(朽木隱岐守宛) ハルトマン名刺 ウエーム・ホツブ名刺二枚 宇田川玄隨洋文字名刺 シーボルト封箋(大槻玄澤宛) 同書簡 岡研介蘭文書簡(坪井信道宛) 時計屋の廣告(英字、蘭譯を附したる寫) 某名刺(カイタロウとよまる) 江馬椿考證文 小野蘭山書簡 狩野快庵舊藏 藤貞幹書簡(宇田川榕庵宛)

(蘭學洋學に關係ある人々の書畫尺牘刷物その他を集めしもの 四〇九一—一)

有馬頼僮算書集

○

○

○

○

○

○

○

(本叢書中「狩野氏藏書記」の印あるもの多くは帝國學士院藏寫本の原本なり)

開法要旨 寫 三卷三冊

四〇二

有馬賴僮著 和袋綴納戸色表紙 八寸四分五寸七分 十行野紙 題簽雙邊左肩版(書名同)上(中、下) 内題なし、「狩野氏圖書記」「伯爵有馬家藏」

淵 澁
舍窗林

奧書 (下冊)維言寶曆十二年壬午天 南呂戊申日 澁淵子撰述 (四一九一) 一冊

加減乘除門 寫 一冊

四〇三

有馬賴僮著 和袋綴納戸色表紙 八寸六分五寸八分 墨附四十四丁白紙 二丁 十行野紙 題簽左肩雙邊書名同(版)、「狩野氏圖書記」「伯爵有馬家藏」

堂華林
之額印

奧書 寶曆六載次柔兆因敦奏正穀旦 澁淵子選述 (四一九一) 一冊

九歸增損法 寫 二卷二冊

四〇四

有馬賴僮著 和袋綴濃綠色表紙 八寸四分五寸六分 十行野紙 題簽雙邊左肩版(書名同)上(下) 内題「九皈增損法」「狩野氏圖書記」「伯爵有馬家藏」

淵 澁
舍窗林

奧書 (下冊裏見返し)嘗寶曆壬午天紅樹下澁 澁淵子筆述 (用紙開法要旨と同形 四一九一) 一冊

極數變形草 寫 三卷三冊

四〇五

有馬賴僮著 自序 和袋綴勝色表紙 八寸九分六寸一分 四周單邊六寸八分四寸五分 十行 左肩題簽雙邊(書名同)上(中、下) 内題「極數變形草」「狩野氏圖書記」「伯爵有馬家藏」

序文 (上畧) 此書の本 術は關孝和生の稿を閱して松永安右衛門添削を 加へ編書す又極數を得るの詳解は山路氏述作 せり我も亦本術の演段起源を著し全く三卷と なし算學の徒に授與せしむるものならん 林窓舍輯 (四一九一) 一冊

截積傳 寫 一冊

四〇六

有馬賴僮著 和袋綴空色絹表紙 用紙薄葉 八寸七分六寸二分 墨附四十六丁白紙四丁 行數不定 題簽左肩書名同 内題「截積之傳」「伯爵有馬家藏」

奧書 于時延享三歲次柔兆攝提格早冬丙戌日(イ) 林窓庵述之 (招差三要)二冊本に同筆同裝にして新寫、彩色圖あり 四一九一) 一冊

拾璣算法 五卷五冊

四〇七

豐田文景(鳳岳)著 明和四年秋九月川口尹當序 明和丁亥孟春上澁近藤政隆序 明和丙戌夏五月穀旦自序 澤崎信定跋 和袋綴濃縹色表紙 八寸八分五寸八分 四周單邊六寸八分四寸八分 有界十行 題簽左肩(書名同)一(一五)、「納戸藏本」

見返し (第一冊) 拾璣算濃 鳳岳先生著述 不許翻刻 千里必究 武陽書林 千鍾房

梓行

奥記 拾遺算法後編嗣出 明和六己丑夏五月日

書肆 京都 寺町通五條上ル町 天王寺屋市郎兵衛

同 寺町通松原下ル町 梅村三郎兵衛

大坂 心齋橋筋安堂寺町 大野木市兵衛

江都 日本橋通一丁目 須原茂兵衛開板

(林鶴一「和算研究集録」に本書は有馬頼僮著なりと 四一九一―一)

招差三要 寫 二卷二冊

四〇八

有馬頼僮著 瀧川子龍筆 「維時明和元申申天朔陽下澣扇軒有氏其映頼

僮撰」の自序 和袋綴鼠色表紙 八寸九分六寸三分 十行 題簽左肩雙

邊(「書名同)上(下)」、「狩野氏圖書記」「伯爵有馬家藏」「井上正忠」

識語 (下卷裏見返し) 傳來不詳 本多利明 山岡綏忠

(「諸角踏轍術」一四一〇―に同筆同裝なり従つて本書も子龍の筆寫本

なるべし 四一九一―一)

招差三要 寫 一冊

四〇九

有馬頼僮著 「維時明和甲申天朔陽下澣扇軒有氏其映頼僮撰」の自序

和袋綴空色絹表紙 用紙薄様 八寸七分六寸二分 墨附百三十五丁白紙

四丁 十行 題簽左肩(「書名同)全、「伯爵有馬家藏」

奥書 (卷末) 傳來不詳 本多利明 山岡綏忠

(序文奥書上下二冊本に同じ、恐らくは二冊本を以て新寫したるものな

るべし 四一九一―一)

諸角踏轍術

寫 二卷二冊

四一〇

有馬頼僮著 瀧川子龍筆 和袋綴鼠色表紙 九寸一分六寸三分 十行

外題なし 扉左肩(「書名同)乾(坤)、「狩野氏圖書記」「伯爵有馬

藏」

奥書 (坤冊末) 于皆寶曆十有二龍集壬午南訛甲申 日筑南鎮護蔽芾館

源頼僮撰述

識語 (同裏見返し) 本多利明 山岡綏忠

崇山規矩亭瀧川有又子龍團圓(瀧川有又)「字日子龍」の朱印)

(四一九一―一)

方圓奇巧

稿本 寫 四卷四冊

四一一

有馬頼僮著自筆 「維時明和三龍集柔兆閏茂太簇上澣肇探毫于筑南林花

堂同謹識畢」の自序 和袋綴共表紙 九寸六寸七分 十行罫紙 外題中

央(「書名同)元(享、利、貞) 本文初に「種風閣輯録」とあり、「納

戸藏本」「伯爵有馬家藏」

識語 (元冊表紙)(朱) 五拾五番(墨) 子六十九响(墨) 四月七日始

ル 同廿四日納ル(朱) 御納戸

(享冊同)(墨) 四月廿四日始ル 五月七日納ル

(利冊同)(墨) 五月八日始ル同十八日納ル

(貞冊同)(墨) 五月十八日渡ス 五月廿三日濟

(四一九一―一)

○

渾蓋通憲圖說

明版 三卷二冊

四一二

李之藻(明)演 鄭懷魁(明)訂 萬曆疆圉叶洽之歲(丁未三十五年)自序

同年樊良樞(明)跋 唐袋綴改裝藍表紙 九寸七分五寸六分 四周雙邊七

寸四分四寸九分 有界九行(序は七行) 十八字 外題なし 内題「(書名

同)首(上、下)卷」柱刻「渾蓋通憲圖說首(上、下)卷(丁敷)」、「貞

吉」「竹厝」「漢陽葉氏藏書」

識語 (樊氏跋の次に朱書)

嘉慶二十三年小暑盡日圍首卷起 六月二十日丙戌也 天氣涼爽似初秋

〔天學初函〕中の一 四四一—一四二

皇國醫道沿革考

稿本 寫 一冊

四一三

今村了庵著自筆 和假綴共表紙 八寸三分五寸八分 廿九丁 十行 外

題左肩書名同

(明治十五年文部省の命により本邦醫道の沿革を講説せし著者の稿本、

朱書訂正の跡多く又附箋多し 四九〇—一四三)

性欲雜說

寫 一軸

四一四

森鷗外(林太郎)著自筆 卷子本綾絹表紙 一尺六分 十五行二十四字語

原稿用紙二十二丁(第七丁に貼紙ありて赤インクにて補記す)題箋左肩

金紙後筆「性欲雜說森鷗外先生自筆草稿」内題「公衆醫事」その左に「性

欲雜說」下に「挾書生抄」と匿名を署す

(雜誌原稿にして墨書、補記校正の跡多し、郵送に使用せし陸軍省用縦封筒を卷首に貼す、宛名は「小石川區小日向堂町男爵小池正直閣下」裏書は「於陸軍省森林太郎」消印日附は「(大正)二年二月二十四日」四九二—一四一)

種痘傳法

一冊

四一五

司馬江漢著 和假綴共表紙 五寸五分三寸九分 四周單邊四寸二分三寸

一分 表紙共五丁 八行 外題中央書名同 内題「種痘の傳」

卷末 文化十癸酉正月 春波樓主人施方(下に「〇〇」の署名あり)

(四九三—一四一)

重修改和經史證類備用本草

明版 三十卷十冊 四一六

曹孝忠(宋)等奉勅撰 成化四年歲次戊子冬十一月既望商輅重刊本草序

泰和中子下己酉冬日晦明軒記 嘉靖癸未冬十月既望陳鳳梧重刊證類本艸

叙 己酉孟秋望日麻革重脩證類本草序 政和六年九月一日曹孝忠政和新

修經史證類備用本草自序 政和六年七月二十九日奉勅校勘の人名表 皇

統三年九月望字文虛中證類本草後 大德丙午仲冬望日許宅印跋 唐袋綴

檜皮色表紙 一尺五分六寸一分 四周雙邊八寸七分五寸七分 有界每半

葉十二行二十三字 註雙行二十三字 外題なし 柱刻「本草叙(序)

(丁附)」「方書(丁附)」「本草一(一—三十)(丁附)」「覺(靈印)」「稻

田福堂圖書」「江風山月莊」「遠加文庫」「樂只園」

奥記 成化四年歲次戊子冬十一月既望重刊

山東按察司經歷司知事湖廣黃陂楊昇督工

山東州府東平州學正湖廣武陵梅詡重校

山東都司濟南衛經歷司知事華亭劉肅重錄

寓濟南士人 姑蘇朱 同錄

(成化の重刊を嘉靖に更に重刊せるもの 四九四—イ三)

和名集并異名製劑記

古活字本 二卷二冊

四一七

和袋綴替澁引表紙 四寸七分六寸五分 四周單邊四寸五分八分 十三行

片假名交り十二、三字 外題なし 柱刻「和名上(下)(丁敷)」、「村

野藏書」外二印

刊記 寛永二乙丑歲初夏吉日

(元和九年梅壽刊本の改版、活字また異れり 四九四—イ一)

○

延壽撮要

古活字本 一冊

四一八

曲直瀨玄朔著 「慶長己亥丘夏之節」自跋 和袋綴改裝替蔦茶色表紙 九

寸六寸五分 五十五丁 匡廓なし 每半葉十一行約二十字 替題簽左肩

雙邊墨書名同、「濱和助」

(再版本なり 四九九—イ一)

工 藝

友禪ひいながた

四卷四冊

四一九

日置清親畫 和袋綴紙粉色地市松模様光澤摺表紙 七寸五分五寸五分

三周單邊一周無邊六寸七分四寸九分 題簽中央雙邊「都今様友禪ひ

いながた(卷數その他)「都今様友禪ひいながた二小袖」所「都今様友禪

ひいな形三着所「都今様友禪繪下」に「ふろしき しきし くし 手のこ

ひ たんざく ひおけ所「ふくさ かけもの さかづき 香つ、み ほり

箱 あふぎ た、う紙所「さし うちわ」を三段に記す四」 内題な

し 柱刻「ひなかつた一(卷二—四)(丁附)」、「芸叢之印」「甘露堂藏」

奥記 右雛形之繪模様染色請取仕立出」之者也

左女牛井通和泉町」友盡齋」日置徳右衛門清親

圖之 日置 親清

貞享五戌年正月上弦日」書林 小森善兵衛清七」小佐治半左衛門靜榮

(「甘露堂文庫稀覯本攷覽」参照 五八六—イ一)

白粉手鑑

一帖

四二〇

八詠樓主人編 自序 明治戊申天長節の夜半自跋 其翌朝自又跋 折本

代赭色表紙 九寸二分六寸九分 十九折 題簽左肩外題なし 内題なし

序 本帖ハ天明五年木田」千賀磨の大坂出店ニ於て」作りたる「白粉手

鑑』の壹百十七種類中より撰ミ採して「當時の白粉が如何なる形容」を以て市販せられしかを示す」もの也

跋 (明治戊申天長節の夜半八詠樓するすの跋ありて次に朱) この帖子は柳亭種彦翁が白きがまゝに「遺し、ものにして予昨冬翁が旧藏の珍籍」若干と共に書僮より購ひしものなり(中畧) 八詠樓主人又識
(京都白山松原木田千賀磨の白粉商票を貼り込みしものなり 五九五—イ一)

産 業

度量考 寫 一冊

四二一

中野柳圃著 馬場穀里増補自筆 同凡例自筆 和袋綴茶色表紙 七寸七分五寸二分 四十三丁 十二行 外題左肩書名同、「若樹文庫」

凡例 此編ハ柳圃先生ノ嘗テ稿ヲ起セシモノニ基ツキ外ハ僅ニ見聞スル所ヲ増加セルノミ(中略)又穀量鬻量ノ中ニモ大ニ譯齟齬セル者アリ

是亦原書ノ俣ヲ寫シ追日再考ヲ期ス 文化九年申年秋 穀里誌

(大槻如電「新撰洋學年表」文化九年の條に「西洋度量考 馬場佐十郎撰」とあり 六〇九—イ一)

美術

總記

鑑定筆記 寫九冊 圖

四二三

小杉楓邨著自筆 和袋綴 七寸五分五寸 用紙「帝國博物館」東京帝室博物館」等の柱刻ある野紙その他 表紙三は卵色紙 四・八乙・九は樺色紙 五・六・七・八上は紫地白花紋刷出紙 題簽三・四・十は左肩 五・六・七・八甲は中央八乙・九は題簽なし 外題「鑑査筆記三(四)」
 鑑定雜記五(一十)「内題なし、」杉園藏」
 識語 (第三冊表紙右肩) 明治三十年三十一年」三十二年三十三年
 (第四冊同) 明治三十三年七月起り十二月ニ至ル」三十四年一月起り十二月ニ至ル」三十五年一月起り十二月ニ至ル
 (第五冊題簽左下) 明治三十七季
 (第六冊同) 明治三十八年
 (第七冊同) 明治三十九年
 (第八甲冊同) 明治四十年
 (第八乙冊表紙左下) 明治四十年八月」起り四十一年」十二月ニ至ル
 四十二年」一月起り二月ニ至ル
 (第九冊同) 明治四十二年三月起り」同年十月ニ至ル
 (第十冊同) 明治四十二年十一月起り

(帝室博物館に於て鑑定せるもの、同部廢止後自宅に於て鑑定せるもの、並に諸家諸所に於いて展觀せるものにつき日記體に記す、所々目録等を貼り附す 七〇〇—一三)

まことのとも 寫四冊

四二三

小杉楓邨編自筆 和袋綴第三冊のみ假綴第一・四は澁引表紙 第二は落葉色表紙 第三は白表紙 六寸一分四寸三分 三のみ六寸四分四寸一分 外題左肩「まのとも(一四)」内題なし「杉園藏」

識語(卷一表紙右肩)古筆屏風古人傳」古繪目錄」大佛師正統系圖」世尊寺家略譜

(卷二同) 畫圖品類」幽冥會議」耳塵鈔ぬきかき」鑑定家印譜

(卷四同) 源氏物語ふせやのちり 後撰集に添る詞」古畫備考書ぬき」西洋畫

談」書は美術たるの説

(以上を各卷合綴し朱の書入をなす、卷三「珍書縱覽目錄」として前田家の珍藏書を縱覽せる際の書目を記す、卷四の「書は美術たるの説」はその記載ある東京學士會院雜誌第十四編之九を合綴す 七〇〇—一)

東錦繪 一冊

四二四

和袋綴焦茶色表紙 一尺二寸九寸二分 五十五丁 題簽中央後筆「東錦繪 今尾家」内題なし 所收主なるもの次の如し

- 東 都 最負競(豐國) 當盛十花選(豐國、廣重) 見立七小町(豐國) 當見
- 立五行相剋(豐國) 立月盡(豐國) 立六哥仙(豐國) 名轟大入來滿
- (豐國) 深以仲意氣地新倭羅(豐國) 江戸自慢(豐國) 見立出世角

力(豊國) 東海道五十三次名所古跡三宿續(一勇齋國芳) 東高名會席

盡(豊國) 七津以呂半 見三十六歌撰(豊國) 東海道五

十三次(豊國) 江戸名所圖會(豊國) 忠臣藏銘々傳(豊國) 見三十六

句選(一陽齋豊國、香蝶樓豊國) 紫式部げんじかるた(梅蝶樓國貞)

義士夜討圖(一英齋芳艶) 文治三年奥州高館合戦自衣川白龍昇天(一

英齋芳艶) 川中島大合戦組討盡(一英齋芳艶) 仁義八行(一壽齋芳

員) 花くらべ(一陽齋豊國) 諸國名所百景(廣重)

(大版芝居錦繪を袋綴に改装合綴す 七二一—一四九)

畏寒具汚帳 寫 一帖 四二五

富岡鐵齋自畫 明治四十年十月自序跋 折本勝色地花紋織出布表紙 七

寸八分六寸 絹本二十面うち彩色畫十二面序跋四面 題簽左肩絹「鐵崖

仙史人物冊節題」 内題なし

序 (第一折裏に錢形に「一文不值」とありて)

或携此帖乞題一言「披之即數十年前」余之所畫也憮然久」之爲摘此四

字云「明治卅年十月鐵齋外史(「富岡百鍊」「鐵叟」の朱印)

跋 餘嗜讀書至會心處「殆忘寢食遂畫之」以爲娛樂矣然「一時遊戲之筆

素」無論次不復計」其工拙也

明治卅年十月自跋「於學古書集」七十二翁鏡齋外史

(附箋一葉鐵齋筆にて「一文不值」「畏寒具汚」につきての説明あり、

帙には同じく鐵齋筆にて墨繪あり、同筆にて「畏寒具汚」と題す 七二

一—一四五)

睡餘墨戲帖 寫 一帖 四二六

富岡鐵齋自畫 折本金欄表紙 七寸五分四寸八分 紙本二十面うち題字

一面跋一面 題簽左肩絹「睡餘墨戲」 内題なし

跋 有人惠茶一煎「愛其色香閑座」移時遂與睡魔「爲筆戰苦心」聊以得

其捷也」鐵齋外史(「鏡叟隱居」の朱の畫印)

(彩色の畫帖 七二一—一四三)

風俗画帳 寫 一帖 四二七

淡島椿岳自畫 折本銀鼠色地花紋織出布表紙 七寸三分一尺三分 十八

折 紙本彩色畫十七面 外題なし 内題なし

(明治初葉の東京街頭の風俗を戲畫して見るが如し 七二一—一四一)

書道

女實語教・女童子教 二卷二冊 四二八

居初氏女つな書竝に畫 和袋綴煙草色表紙 八寸六分六寸二分 四行

挿畫上は六箇六頁分下は十箇十頁分 題簽中央「女誠女實語教上」「女誠

女童子教下」 内題なし 繪入

刊記 (下末) 元祿八歲弥生中旬「居初氏女つな書畫之」 文臺屋治郎兵衛藏板

識語 (各冊表見返し) 準道所持

(下末貼紙) 元祿八乙亥年ヨリ文久改元辛酉年迄「百六十八年也

(二冊を一冊に紙捻にて假綴す 七二八—一四九)

四體千字文書法 一冊 四二九

周伯濕(元)書 和袋綴改裝柿澁色表紙 八寸九分七寸 二十二丁 八行
外題なし 内題「四體千字書法」

奥書 此板泉州大鳥郡堺南庄石屋町住「石部了冊入道新刊巧極妙字迫
真」奇哉于時天正二年六月吉辰 宿薦齋書焉識

識語 (裏見返し) 此千字文年号考レハ天正二年「開坂侍リヌ今年寛文
九年迄」九十六年也故此書及大破早「今表紙新令修理後世之」爲助
資者也玄時光陰移早「真如矢乎
(同左下隅)之持盛方

(至正二十年周伯濕の書せる四體千字文を天正二年泉州石部氏の印行せ
るもの 七二八—一三)

〔野中兼山書帖〕 寫 一帖

四三〇

野中兼山承應二年自筆 折本勝色無地布表紙 用紙唐紙 九寸二分五寸
四分 四周單邊赤色有界八寸四寸七分 三十七折 四行十字 題簽左肩
白茶色布外題なし 内題なし、「劍器」「野」「兼山氏」

奥書 癸巳早春「九齡山人書野兼山」
(唐詩選卷六を草書にて録す、卷末の貼紙に明和六年の識語あり 七二
八—一五)

筆道 寫 一冊

四三一

佐佐木徳綱筆 和袋綴白茶絹表紙 九寸一分六寸五分 六十五丁 十一
行 題簽左肩「筆道廿一條額傳」 内題「廿一條」、「月本入木道正統
四十二世徳綱」

奥書 右色紙形奉「郁芳藤公仰書之」二時寛政八年三月「一夜也」書

博士賀茂保考

此一冊ハ先生の二男「良保兄うつしおかれし」を傳れらしゆへ写し也」
文化十ふたとせ夜なか月「十日あまり 佐、木徳綱」宋印
(入木道の諸書を抄寫せしもの 七二八—一九)

藤田友間筆道傳書

(近世初期の書家藤田友間の望月三郎右衛門に授けたる傳書を輯す)

示愚息乘因及同志學者教誠條章

寫 一冊

四三二

藤田友間著 和袋綴淺縹色表紙 九寸六寸二分 十七丁 十行 外題なし
奥書 藤田友閑(「彩雲」朱印)

望月三郎右衛門

卷末 右教誠十七箇條を背かすして同志一般にかたく守れる學者ハ「た
とひ遠境にしていま相馴さる末くの弟子たりといふとも」先師の派
流と稱し予か僚友として字智法門成就の時節を「相期すへしたとひ直
弟にて日々に對面すといふとも此等」のむねを守り給はさる學者ハ道
の魔障なりと排「斥して永く同門のちなみをたつへし若俊秀の徒あ
りて勇猛信實に自利々他の饒益同志一般にして」先師の御恩を報し予
か所願を満足せしめ給へかしと」述るところしかなるときに
寛文四年歲次甲辰孟夏之吉
(七二八—一七)

本朝筆道入學初門總論・筆道志學警策章

寫一冊

四三三

藤田友間著 藤田乘因書 和袋綴淺縹色表紙 九寸六寸二分 十三丁う

ち警策章五丁 九行 外題なし

奧書(警策章末) 正保二年九月十八日謹奉_レ備_二予吾學筆之師_一 松花堂主

傳燈八壇金剛昭乘_レ惶々翁真影座_一 下以充_レ報酬之追薦_ニ矣

間睡庵友間頓首_一 不肖 乘因書之

(別筆) 望月三郎左衛門殿

(七二八—一七)

和國筆道三秘略鈔

寫 六卷一冊

四三四

藤田友間著 和袋綴淺縹色表紙 九寸六寸二分 四十九丁 十行 外題

なし

奧書 皆寛文四_甲辰歲五月十六日書之早而授與愚息乘因者也

藤田氏間睡庵主_一 彩雲翁友間_一 (彩雲) 朱印

(別筆) 望月三郎右衛門

(七二八—一七)

和國筆道十二字略鈔

寫 一冊

四三五

藤田友間著 和袋綴淺縹色表紙 九寸六寸二分 十四丁 十行 外題なし

奧書 藤田友間 (彩雲朱印)

(別筆) 望月三郎右衛門

(七二八—一七)

夜鶴庭訓抄

寫 一冊

四三六

賀茂保考筆 和袋綴澁引表紙 八寸九分六寸五分 墨付二十二丁 九行

外題中央書名同、「もちぬしさとうしうろく」

奧書 本云一校了_一 (二時) 正安元年十月二日

建武四年_丁十二月廿日以秘本書寫之但_一 不審事等多之必可色墨

行兼_一 賴舜

應永廿二年十一月十日_一 朝舜 胤舜_一 一覽了_一 (花押)

右以古筆之一冊模書之

(下の一行のみ朱) 本生直書寫歟

安永六季九月廿一日 入木 保考

(以下青) 右以異本積奥宿禰所秘一校了

于時寛政七年九月五日 右少史行 (花押)

(朱の書入あり、青筆にて積奥宿禰所藏本との校合あり 七二八—一七)

一)

名家罽紙帳

寫 一帖

四三七

林若樹編 折木丹色表紙 一尺一寸六寸八分 題簽左肩外題なし 内題

なし、「若樹文庫」

(近世諸名家の用ひたる罽紙を貼れるものなり、「竹柏園藏書志」六三

四頁参照 七二九—一七)

版 畫

新疆征戰銅版圖

一帖

四三八

己丑新正宣宗(清)題自筆(刻) 折本納戸鼠色地唐草模様表紙見返し金砂子散らし紙 一尺九寸七分一尺六寸三分 十一折 四周雙邊一尺七寸七分二尺九寸六分の見通し圖十箇 題簽左肩黃色紙墨書名同下に墨「道光九年刊」と 内題なし

(道光八年張格爾の入冠を平定せし揚威將軍の功蹟を圖し上に「己丑新正御筆」として宣宗の題詩を刻す 七三二—一—)

邦樂及中國樂

糸竹初心集 三卷三冊

四三九

中村宗三著 和袋綴深縹色毘沙門格子空摺表紙 六寸五分四寸五分 三周單邊一周無邊 五寸三分四寸一分 八行 挿畫各卷一箇一頁分 題簽左肩雙邊「糸竹初心集一節切上」(墨にて後補) 「糸竹初心集ことの引様中」(原) 「糸竹初心集三味線下」(墨にて後補) 柱刻「糸上(中、下)(丁敷)」、「甘露堂藏」「平出氏書室記」

奥記 寛文四年甲辰卯月吉日「寺町通四條下ル町」秋田屋九兵衛板行 識語 (上冊右肩貼紙平出氏筆) 金二百四十一共三冊(同右下)隨 「甘露堂文庫稀觀本攷覽」參照 七六一—一—

御神樂由來 寫 一冊

四四〇

堤盛衛著自筆 和綴莖裝卵色布表紙 九寸三分六寸六分 八丁 六行 外題左肩佐佐木信綱筆書名同 奥書 權禰宜從五位下荒木田神主御師「堤大夫」盛衛(花押) 寶永三丁亥年六吉日

(神樂の由來を説き併せて永代代々神樂の祈禱をす、む 七六一—一— 五)

樂書 元版 二百卷二十四冊 闕

四四一

陳暘(宋)著 林宇冲校勘 慶元庚申楊萬里序 進樂書表 自序 至正丁亥秋(缺損社) 光大後序 唐袋綴改裝肉色表紙 八寸三分六寸 四周單邊六寸七分五寸四分 有界十三行二十一字 外題なし 序の題は「三山陳先生樂書」 柱題「樂」「樂目」「樂書」、「傳增湘讀書」等 (覆宋本、柱に「君輔」「子皿」「君玉」など刻者名を記すものあり、序目錄及び卷三迄はすべて補寫、その他にま、補寫ありなほ且若干の缺丁を存す 七六一—一—)

〔箏琵琶譜〕 寫 一軸

四四二

竹逸筆 卷子本原折本形を軸に變へしもの 縹色表紙 連歌の懷紙を半截して二十二枚をつなぎてその裏面を用ふ裏打あり 五寸五分 外題なし 内題なし

奥書 享德二三 爲擊蒙令受了 隱槐判 于時享德三九廿六寫了 竹逸(花押)

(唐樂盤涉調の曲の箏の譜を墨書としその傍に琵琶の譜を朱書したるものなり、表の連歌は切れ〜になり居るも題にて判讀しうるは「賦山何連歌」「賦何舟連歌」「賦何路連歌」、年代及び著者の分るものは「文安四九月尺關白點(一條兼良) 文安四十廿五關白點(一條兼良) 文安三十卅御點(御花園天皇か)、宗砌等の連中にて判讀しうるは經秀、明茂、時尙、源政仲、中原康富、茂成、慶俊、尙成、四條大納言等なり 七六一

一七一

平家物語

節附本 寫 四卷八冊

四四三

福地櫻痴筆 和假綴共表紙 九寸三分六寸七分 六行 外題「平家物語

一ノ上(一四ノ下)各卷上下の二冊に分つ 内題なし

奥書 (一ノ上裏見返し) 明治廿九年七月八日起筆 同二十日校寫了

(一ノ下) 明治廿九年七月二十一日起筆 同八月四日淨寫了

(二ノ上) 明治廿九年八月六日起筆 同十五日淨寫校了

(二ノ下) 明治廿九年八月十六日起筆 同二十七日淨寫校了

(三ノ上) 明治廿九年八月廿八日起筆 同九月十五日校寫了

(三ノ下) 明治廿九年九月十六日起筆 同二十四日校寫了

(四ノ上) 明治廿九年九月廿五日起筆 同十一月四日校寫了 此間

稿下 脚本不暇染筆此卷

(四ノ下) 明治廿九年十一月十日起筆 同十二月十二日校寫了歲

晚 匆々不暇揮毫

(祇園精舎より三井寺炎上に及ぶ、章節を附し「印本」との異同を頭註

せる條間々あり 七六一一(一九)

舞番日記

寫 一軸

四四四

卷子本白紙表紙 九寸八分 外題左肩墨後人筆 「座右一舞番日記 唯襟

一 内題なし

奥書 本云右条、依内、被仰下注進之 正和二年四月日 賴成

(別筆) 大炊御門前大納言入道與奪之

正二位行權大納言大宰權帥藤原朝臣(花押)

〔藤原〕の二字書改め)

(鎌倉末又は南北朝頃の寫、左舞三十二右舞二十二舞樂の名稱を列記し、それに關する舞、人、樂人、樂調子等を註記せるもの、若干破損あり 七六一一(二三)

演藝・演劇

雨夜三盃機嫌

三卷二冊

四四五

木笛庵瘦牛著 元祿六若水日自序 「吉田半兵衛畫」 元祿癸酉春正月

之吉少嗜堂布川跋 和袋綴深縹色表紙 七寸六分五寸二分 四周單邊五

寸九分四寸五分 序、口狀十一行目錄十行 卷上本文五行評欄十一行

卷中本文七行 卷下本文七行跋八行 柱刻「上(中、下)ノ」の如く

卷名丁數のみ 題簽左肩雙邊「京都江戸雨夜三盃機嫌上」大坂江戸雨夜三はいき

けん下、「森氏」「紫」「京都游戲三昧院」「大坂松廼舍文庫」「京都甘露堂藏」

刊記 「ハニモトヨフガキヤドノホトリ板本夕顔宿邊」

識語 (下冊裏見返し) 此本柳亭種彦所藏上卷「加朱點者翁之手筆也不

可」徒然看過也」丁丑夏日 七十一翁枳園

(第一冊上卷、第二冊卷之中卷之下を收む、上卷所々朱點を加へたる所

あり「甘露堂文庫稀覯本攷覽」参照 七七一(一五)

嵐百人鬘

一冊 闕

四四六

和袋綴改裝黒表紙 七寸四分五寸四分 四周單邊六寸六分四寸八分 十

五丁 十二行 外題なし 内題「嵐百人鬘 目錄上之卷」 柱刻「上嵐

三(一十九)うち「九ノ十二」の丁あり

見返し 午の年 役者一挺鼓 三卷物袋入 新版繪入
 (上巻のみ、見返し廣告の午年は元祿十二年従つて本書或はその前年元祿十一年刊か、守隨憲治「歌舞伎序説」一一六頁に元祿十一年刊とあり 七七—一七一)

新刻役者綱目 六卷六冊

四四七

八文字舍自笑著 自序 和袋綴縹色毘沙門格子地桐唐草模様空摺表紙
 六寸二分四寸二分 四周單邊五寸三寸六分 九行 柱刻「綱目卷之一
 (一六)(丁附)」題簽左肩單邊「新刻役者綱目(一六)」内題外題同、
 「三馬」「家在東武敷寄屋橋南」「式亭」「好文堂」「甘露堂藏」「久彌藏」
 刊記 明和八年 辛卯五月吉日
 京麩屋町通誓願寺下ル町 八文字屋八左衛門板

(役者評判記の集成なり 七七—一七一)

役者二挺三味線 三卷三冊

四四八

〔江島其磧〕著 和袋綴黒表紙 三寸五分五寸五分 四周單邊三寸四寸
 九分 十五行 挿畫京之卷四箇八頁分 大坂之卷六箇十一頁分 江戸之
 卷六箇十二頁分 題簽左肩剝脫の跡あり外題なし 内題「役者二挺三味
 線」柱刻「京二挺」「二挺 大」「二挺 江」下に各丁附あり
 刊記(京、江戸之巻の末に好色一代曾我の出版豫告ありて次に)

元祿十五年午三月吉日

ふ屋町通せいくはんじ下ル町 八文字屋 八左衛門板

(三都二の替り藝評なれども各優の經歷藝風を述べること最も詳にして
 役者評判記中の白眉なり、八文字屋本初期のもの其積作と推定さる、京

之巻は第四丁補寫、大坂之巻は初三丁のみ補寫また刊記ある終丁無きは
 脱落せしものか 七七—一七九)

役者我身寶 三卷三冊

四四九

〔江島其磧〕著 和袋綴淺葱色に草色横雲ある表紙 三寸七分五寸四分
 四周單邊三寸二分四寸九分 每半葉十五行 京之卷四箇八頁分 江戸之
 卷四箇八頁分 大坂之卷五箇十頁分
 題簽左肩雙邊京「都の花代」金の光さす
 女形の後帯

江戸「武藏野の月」白銀の二枚看板 大坂「難波江のお片」錢になる
 立髪丹前 武道の仕懸

(括弧内は一部分又は全部欠損) 内題「役者我身寶」

刊記(京之巻缺)

(江戸之巻) 正徳六申年 正月吉日 江島屋市郎左衛門板 靨屋

毘右衛門板 正本屋九兵衛板

(大坂之巻) 正徳六申年 正月二日 江島屋市郎左衛門板 靨屋

喜右衛門板 正本屋九兵衛板

(正徳五年顔見世狂言の役者評判記、作者其磧は八文字屋八左衛門と確
 執中にて一肆を出して出刊執筆に努力せし頃の著 七七—一七三)

璣訓蒙鑑草 三卷三冊

四五〇

多賀谷環中仙著自序 川枝豊信畫 和袋綴深縹色表紙 七寸四分五寸三
 分 四周單邊五寸九分四寸 題簽左肩黄色紙飾付三邊「拾伽璣訓蒙鑑草
 御伽璣訓蒙鑑草

松(竹、梅)、「英王堂藏書」「甘露堂藏」

奥記 當世影繪姿鑑 五冊 當正月夕出し申ひ 續璣 訓蒙鏡草 三冊

近日出来 璣指南圖解 三冊 同斷

多賀谷環中仙撰 京大和繪師 川枝豊信圖 京板木師岡村平兵衛

享保十五年 戊正月吉日 書林 武陽 西村市郎右衛門 浪花 瀨戸

物屋傳兵衛 皇都 蒼屋傳兵衛

(奥に「書林含靈軒藏板目錄」一丁あり、「稀書複製會刊行 稀書解説

第六編」参照 七七九—一)

蹴鞠

雲井の春 寫 一冊

四五二

一條兼良著 清閑寺熙定筆 和綴葉裝金泥山水模様表紙 用紙鳥の子金

泥雲水草花下繪 八寸四分六寸 墨附十九枚 九行 外題なし、「潜龍

閣」箱に「樂」「後樂園」

(享徳二年三月内裏の晴の御鞠の日記、卷末に「人々裝束并轡色事」の

記事あり、群書類従所収と殆ど同じ、箱の題簽に「清閑寺熙定卿書」と

朱書す、「鶯箱極秘抄」一四九四—と同函 七八三—四五)

蹴鞠秘傳 寫 一軸

四五二

飛鳥井宋世著自筆 卷子木深縹色表紙 一尺七寸 用紙鳥の子 外題なし

内題なし

奥書 右一卷者赤松兵部少輔殿多一年兩道之御執心異于他殊更道之奥

儀御懇望之事有之爰數年參會中絶之間依拜談所望俄當國余進發且

者可謂千載一遇者歟所詮此時爲奉授雖爲隨分之秘說不殘心底染紫

毫詔相構未代不可及聊余之御沙汰候也 桑門宋世(花押)

延徳二季菊月五日

(桑門宋世は飛鳥井雅康、増訂國書解題八五九頁に蹴鞠十二箇條肝心抄

寫本一卷飛鳥井雅康、延徳二年庚戌九月書とあるものに別本なり 七八

三一—)

蹴鞠略記 一軸

四五三

飛鳥井雅經著 卷子木表紙なし 軸なし 一尺一寸五分七分 内題の下

に「左親衛員外亞將藤原雅經撰」とあり

奥書 (墨) 右一卷授藤村源兵衛尉友久詔

元和二曆大呂下浣 右近中將雅胤(朱印)

(群書類従卷三百五十四所収のもの等しく同本は元和辛酉端午同じく

雅胤水谷彦次衛門に授くの記ありしと云へば、元和の頃刊行して鞠の傳

授用にさづけたりしものと思はる、雅胤は飛鳥井雅宣の初名、慶安四年

薨す 七八三—一七)

鞠之事 寫 一冊

四五四

和綴葉裝共表紙 五寸五分二分 墨附四十九枚白紙四枚 八行 外題左

肩書名同 内題なし

奥書 (本文別筆) 應永廿五年三月日 相傳之「音熊丸」行譽

文明七年十一月十一日感得之朝衡

識語 (表紙右下) 朝衡

(室町期寫、「道誓法眼口傳」を附す、蹴鞠傳書の抄 七八三—一三)

遊藝・娯樂

三百箇條 寫 三卷三冊

四五五

酒井卍葉筆 酒井筑波丸(卍葉)序、萬葉亭古調(卍葉)凡例 和袋綴改裝
澁引表紙 八寸九分六寸三分 題簽左肩外題なし 内題なし、「卍葉文
庫」

奥書 寛政十年歲次戊午夏五月酒井「筑波丸騰寫於萬葉亭中」(「古調」
の印)

(序に云ふ「此ふみや誰人の作といふにハあらず茶祖宗易より片宗關に
いたるまでその師傳を次第にケ條にしたてはしめおはりに侘數寄の大意
を論し(中略)次に手前作前をことくくあけつろいて三百ヶ條となし石
州流の便りとす」と 七九一—一〇一)

算經

古活字本 一冊

四五六

本因坊算砂著 和袋綴改裝蔦茶色表紙用紙裏打 九寸六寸五分 四周雙
邊七寸一分六寸一分 三十丁奥附一丁計三十一丁 外題なし 内題なし
柱刻「算經一(一三十一)」

刊記 (整版)右「一冊定石井作物一百」五十餘科雖有淺深」厚薄非口
傳者難識」量歟所詮不可習傳之者乎

慶長十二丁未十二月五日」

本因坊算砂(方形黒印)

(盤面に註して「黒先生」「白先劫勝」などあるが活字印刷なり、上下
匡廓外に墨にて書入あり 七九五—一〇一)

語學

國語

三種攷 寫 一冊

四五七

岡本保孝著自筆 和袋綴檜皮色表紙 七寸六分五寸三分 四周單邊六寸
六分四寸六分十行罫紙 九十八丁 うち音便考二十一丁發語攷十七丁濁
語考四十七丁清濁辨一丁 外題左肩自筆「三種攷音便發語濁語附清濁辨」
内題「音便考」

(師清水濱臣の説を引くこと多し、「慶長以來諸家著述目錄漢學家之部」
岡本保孝の條に「三種考」とあり 八一〇—一〇一)

假字考證 寫 一冊

四五八

村田春海著自筆 和袋綴濃綠色絞模様表紙 八寸八分六寸四分 墨附二
十丁 十行 外題左肩書名同、「桑名」「樂亭文庫」「立教館圖書印」
奥書 享和元年八月 平春浦謹上

(假名遣につきての論、「竹柏園藏書志」四二四頁参照 八一—一〇五)

いくとくるとのことのはのさた 寫 一冊 四五九

黒川春村著自筆 和袋綴堅紙表紙 原表紙白紙 九寸三分六寸八分 原表紙共五丁 本文は半葉十行の罫紙 外題左肩小杉樫廊筆書名同 原表紙左肩春村筆書名同 内題「碩鼠漫筆卷之二拔萃」、「竹柏園文庫」 識語 (原表紙裏見返し) この春村翁の自筆にてかきぬかれたる「一とちいさ、か疑ひあらぬものなるよし」一こと證明しぬ佐々木信綱ぬしか」もたまへる本の中なり 小杉樫廊圍

古言拾葉

寫 一冊

四六〇

和袋綴澁引表紙 七寸六分五寸 四周單邊五寸六分三寸六分十分行罫紙 五十丁 題簽左肩書名同 内題なし、「濱舎」 (近世末期寫、記紀萬葉以下撰集物語日記記錄隨筆より珍しき言語物名を集め五十音順に排列し出所を注しま、用例を擧ぐ 八一三—一七)

柩園類語

寫 二冊

四六一

岸本由豆流著自筆 和袋綴堅紙表紙 第一冊「柩園」と柱刻ある十一行罫紙 第二冊十行罫紙 八寸五寸七分 外題なし 内題なし、「竹柏園文庫」「歌堂文庫」 識語 (第一冊表紙右下佐佐木信綱筆) 藏書志四三八頁の解説は「かきたがへたるなるべし」 (古語の珍しきを古書より抄出しているは引にせるもの、二冊共に「い」部より始む 八一三—一九)

說文解字注附六書音均表

寫 三十二卷十六冊 四六二

段玉裁(清)著 嘉慶戊辰五月王念孫序 「音均表」には乾隆丁酉孟春月戴震序 乾隆丁酉五月吳省欽序 乾隆庚寅四月九日錢大昕序あり 和袋綴淺葱色表紙 八寸七分六寸一分 四周單邊六寸二分四寸三分 無界九行註雙行 題簽左肩白紙平田篤胤筆 「說文解字段註一(一十五)」 「說文解字段註 六書音均表 十六止」 「平田氏記」「小山田文庫」「松筠堂記」 (經韻樓藏版の唐本を謄寫せしもの、平田篤胤舊藏、小口書も亦彼の筆 八二一—一九)

西番譯語

寫 一冊

四六三

唐袋綴黄色絹表紙 用紙黄色唐紙 九寸二分五寸九分 九十六丁白紙四丁 無邊二段二行 題簽左肩水色雲形織出模様絹 外題なし、「慈禧皇太后御筆之寶」「爽秋」「峴」其他三印 (清代寫、華夷譯語乙種本、西藏四川方言中の一、清内府舊藏と傳ふ 八二九—一)

バツタツク字の書

寫 一帖

四六四

折本 三寸一分二寸五分 六折 十二、三行 外題なし 内題なし (厚き樹皮を摺帖風にし、漆やうのものにて文字と繪を書く、スマトラ

バツタツク族の文字なり 八二九—一三〇

英語

ゑんぎりしことは 二卷一冊

四六五

清水卯三郎著 「まんえむかのへさるのとしうづき江どのたびやにしるすしみづなほまろ」序 和袋綴縹色表紙 五寸一分三寸七分 四周單邊四寸三寸一分 五十二丁 十二行 題簽左肩雙邊書名同(上下缺損) 内題なし、「牽舟文庫」

見返し あさうどの「もちひ」ゑんぎりしことは「ならびに」あひばなし
 (しみずなほまろは清水卯三郎なり、萬延元年は西曆一八六〇年にあたる 八三三—一)

○

和英商賈對話集初編 一冊

四六六

安政六己未九月凡例 和袋綴淺縹色表紙 綴目左邊左開き四寸三分五寸九分 凡例四頁本文七十五頁 四周單邊三寸七分四寸 七行 題簽右肩雙邊書名同、「珍書顧家久長清玩」

刊記 (裏見返し) 發行長崎下築後町鹽田幸八
 本文第一頁

A new || FAMILIAR PHRASES || of the || ENGLISH and
 JAPANESE LANGUAGES || GENERAL USE || for the ||
 MERCHANT || of the || BOTH COUNTRIES || first parts ||
 NAGASAKY || Sixth year of ANSAY || December 1859 ||

(英文は横書き、發音を左方に片假名縦書きにて示す、對談は縦書きにして紙面の下部に記す、四邊の匡廓頁付英文及びその發音は木活字、對譯は整版なり、まづ木活字により印刷し、對譯の部を整版にて刷り足したるなり 八三七—一)

文學

日本文學

總記

文林綺語抄 寫一冊

四六七

南里有隣著自筆 和袋綴白茶色表紙 八寸二分五寸六分 十九丁 十行
題箋左肩紙「文林綺語抄 完」扉中央書名同 内題「倭文碎錦」下に
「肥陽賢城土南里元易撰」、「南里家印」
(和文に於ける對句を全對當句對、長短對、冠解對、兩斷對、本歌對、
本文對、借字對、連句對、隔字對、秀句體に分ちて文格を明らかにせん
としたるもの 九一〇・一一一)

文學者傳記

小山内薫日記 寫一冊

四六八

小山内薫著自筆 博文館發行「明治三十年當用日記」を使用 外題なし
内題なし
(片假名交り墨書、薫十七歳の明治三十年一月一日より同八月二十四日
に至る、二月五日の條に同人雜誌「奇人國報」第五號一葉を挿む、「竹

柏園藏書志」四〇〇頁参照 九一〇・二八一―イ五)

紅葉山人日記 寫一冊

四六九

尾崎紅葉著自筆 洋裝背黒布堅紙表紙 用紙水色 十二行罫紙 七寸八
分五寸三分 墨附七十六丁 外題なし 内題なし
(明治三十四年七月二十九日より同三十五年一月三十一日に至る、所々
朱筆を使用し新聞其の他の切抜張込みあり、中央公論五百八十六號参照
九一〇・二八一―イ三)

漱石遺墨 寫一軸

四七〇

夏目漱石(金之助)自筆 卷子本茶表紙 五寸八分 外題なし 内題なし
卷末 十月二十二日「夏目金之助」鈴木穆様
識語 (箱蓋裏) 文中肉とあるは印肉也日付を落せるが去月亡父十年祭
席上漱石「未亡人にお訊ねせしに漱石が自作の書画を自ら表装せしめ
られしが如きは」長逝の僅か前年の頃なりし由、家父穆大正四年秋先
帝御大典に參列」の途次出京早稻田の同邸を訪問し帰後李王職用の
印肉を呈し漱石「これを愛用されしと云ふ、この一書中山雅兄の鑒望
により呈上す」昭和十八年九月二日 鈴木治識
(九一〇・二八一―イ一)

和歌

篤好文詞 寫一冊

四七一

五十嵐篤好著自筆 和袋綴堅紙表紙 八寸二分五寸九分 九丁 外題左

肩「五十嵐篤好文詞」 内題なし

(初丁に「富士谷大人三十三回忌に今のあるしに奉りし文 安政二年十月 篤好」とあり、御杖の三十三年忌にその子題を出して歌をつのりしを、題詠の先師の教にかなはざるを説ける文 九一一・二一一・二一九)

調枕名寄 寫 三十五冊 闕 四七二

澄月著 和綴葉裝白茶色表紙 用紙布目鳥の子 七寸九分五寸七分 十行 題簽左肩金砂子短冊「調枕第一(―第卅五)」内題「調枕名寄 乞食活計客澄月撰」

(近世中期寫、校合あり、第三十六冊闕、歌枕を道國別に部類し歌と作者と出典とをあぐ 九一一・二一一・二二七)

歌讀大事 寫 一冊 四七三

東素純筆 和綴葉裝古裂表紙 四寸四分四寸五分 墨附八枚 七行乃至八行 題簽中央金紙後筆「歌讀大事東素純筆」内題「歌讀大夏」上に朱にて「二条家」と冠す 奥書 (「」内は朱) 東素傳より傳授早ヌ

圓明殿へ「進之由」 素純「拜」

(室町末期寫、朱筆を加ふること多く漢字に附訓し假名に漢字を宛てなどしたり、素傳より被傳せるを更に他に傳へんためなり 九一一・二一一・二二七)

悅目抄 寫 一冊 四七四

和袋綴改裝黄色表紙用紙 裏打上下裁斷 九寸六寸六分 墨附三十丁白

紙二丁 十五行 題簽左肩白紙「悅目抄古鈔本」 内題なし

(室町末期寫、奥書の二丁順序を誤る、群書類従本に同じけれど異同あり、宮内卿律師伊憲の奥書を缺く 九一一・二一一・二一八)

悅目抄 寫 一冊 四七五

和綴葉裝共表紙 六寸七分五寸 墨附五十枚白紙一枚 十行 外題中央

「悅目抄古寫本」

識語 (裏見返し別筆)

詞花 過來にし跡をは捨つことしより「千世をかそへん住よしの姿

古今」 いさ、めにときまつまにそひはへぬる」こ、ろはせをは人に

みえつ、

古今」 あちきなしなけきなつめ(マ)そうきことに「あい來るみをはすて

ん物かは

こ、のつの品川しろき蓮かな 心 敬

小倉山莊色紙和歌 寫 一冊 四七六

藤原滿基著 和綴葉裝龜甲模様金襴表紙見返し金泥若松模様 用紙鳥の子 八寸五寸七分 墨附五十三枚 十行 題簽左肩絹「百人一首抄」

奥書 此一冊之間書以愚本致」寫之外見雖憚多隨」藤原祐自命而令致」

許容早」 延徳二年八月朔 宗祇(花押)

(室町末期寫、「百人一首抄 藤坊堯惠法印 奥書種玉菴宗祇」なる牛庵

の極めを附す、奥書宗祇筆には非ざるべし 九一一・二一一・二一四)

小倉百首嶺のもみち葉總釋 寫一冊

四七七

六人部は香著自筆 和袋綴改装堅紙表紙原表紙檀紙反古 七寸八分五寸八分 扉に景樹「古今和歌集正義」の包紙を用ひ裏に補記あり 薄黄肌色匡廓六寸七分四寸五分「六人部藏」と印せし半葉十二行罫紙 八丁 外題左肩書名同 原表紙外題左肩「新釋小倉百首總釋」、「千邨家印」(小倉百人一首注釋の總論、補正多き稿なり、九一・二一・二一・五五)

歌會次第 寫一軸

四七八

賀茂真淵著 岡本保孝筆 卷子本代赭色表紙 用紙裏打 六寸二分九寸九分 外題左肩「歌會次第岡本保孝著木村正辭博士旧藏」 奥書 右は田安の殿にて哥の會ありし時仰ことありて賀茂翁にあらたに「さためさせ給ひし」式なり翁の自筆のを源清良かもとにありしをかりてうつせり」 寛政五年九月十七日 平春海 右一帖ハ先師泊酒舎先醒の遺書の一にして其家に今に藏す」おのれうつしおけるをこたひ授與 木村少博士 明治三年庚午五月廿四日 岡本中博士保孝 (内題下に略稱なりとあり 九一・二一・二一・二三)

歌經標式 寫一冊

四七九

和袋綴空色地白水玉模様漉込表紙 用紙鳥の子 九寸一分六寸六分 墨附十二丁白紙一丁 十一行 題簽左肩白紙「濱成式」 (室町末期寫、竹村五百枝舊藏、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」参照 九一・二一・三三)

歌仙家集類語 寫二冊

四八〇

岸本由豆流著自筆 和袋綴共表紙 八寸五寸七分 「栴園」と柱刻ある 四周單邊六寸八分四寸五分十一行罫紙 外題左肩書名同 内題なし、「歌堂文庫」「竹柏園文庫」 (歌仙家集中の語彙をイロハ順及び五十音順に排列す 九一・二一・二一・六五)

歌道解醒 寫一冊

四八一

富士谷御杖(藤原成元)著自筆 和袋綴改装焦茶色表紙 七寸五分五寸九分 三十九丁 八行 題簽左肩佐佐木信綱筆書名同下に「富士谷御杖著」 奥書 文化二年七月 藤原成元友かきに示す (佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」二百九頁参照 九一・二一・二一・一〇一)

歌道非唯抄附開國論 寫一冊

四八二

富士谷御杖(成元)著自筆 和袋綴標色表紙 七寸四分五寸二分 四周單邊六寸四寸三分九行罫紙 墨附四十四丁白紙一丁 外題左肩書名同内題の下に「平安 富士谷成元述」、「竹柏園文庫」 奥書 この御杖ぬしか自筆の何くれとある「二本いとめつらし中には其説をかき」終へざるものもましれ、と今ハいかに「せむさらはた、そのめつらしきことくさ」をよみ見て感するに餘りあり例の「佐々木信綱ぬしもとめ出られてしめ」さるいとめてたしとて感賞する」すなはち一言を加ふ」明治四十年五月 楳邨印

(卷末に同自筆稿本「開國論」二章を附す、佐佐木信綱「日本歌學史」参照 九一一・二一〇七)

歌堂類語 寫 三冊 闕

四八三

井上文雄著 第一冊のみ自筆 和袋綴堅紙表紙 第一冊八寸五寸八分

第二冊八寸三分五寸六分 第三冊九寸四分六寸四分 用紙第一冊「攻證

閣」とある十一行罫紙 第二冊「柯堂」とある十行罫紙及無罫紙 第三

冊無罫 外題左肩同書名内題なし、「竹柏園文庫」

(中世の歌文より詞句を摘出してイロハ順に排列す、「竹柏園藏書志」

云ふ「一冊は自筆二冊は他筆なり」と 九一一・二一〇七・二一〇八・二一〇九

神明憑談 寫 一冊

四八四

富士谷御杖著 福田美楯筆 「文政六年癸未二月」美楯跋 和袋綴澁引

表紙 七寸八分五寸四分 三十三丁 九行 外題左肩書名同、「日紅葦」

奥書 以上答へたる条々いさゝかも私意を以て「いはすいづれも古書に

みゆる所をのふる」なり今一条ことにその證をひくにいとまな」し疑

はしく八來てとふへしゆめく「世の」古證もなき説ともにとまふへか

らす」 文政五年壬午冬十一月 須賀室にしるす 御杖

(歌論より神儒佛の道に及び問答體に記す 九一一・二一〇九)

愚管抄 寫 一冊

四八五

源承著 和袋綴深川鼠色表紙 八寸九分六寸六分 墨附四十六丁白紙二

丁 十二行 題簽左肩朽葉色紙書名同

識語 (卷末) 太秦源承法眼所作也 爲氏卿舍弟 號愚管抄

(近世期寫、「和歌口傳」一五三二一と同じき書、九條家舊藏本、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」参照 九一一・二一〇九・二一〇七)

櫛の垢の辨 稿本 寫 一冊

四八六

(尾高高雅著)自筆 和袋綴瓶覗色表紙 七寸七分五寸六分 四周雙邊

五寸八分四寸三分「松園藏書」の柱刻ある十行罫紙 三十九丁 題簽左

肩朱刷雙邊「佐、夜、草昏櫛の垢の弁」 内題「櫛のあかの弁」

奥書 安政四年 五月草早

(木下幸文の「櫛の垢」を辯難せるもの、初めに宣長の説次に幸文の説

を擧げ、高雅弁として自らの考を記す、竹柏園藏書志には大藤高雅とあ

れど尾高高雅にはあらざるか、一印あり 九一一・二一〇九・二一〇七

顯昭陳狀 寫 二卷一冊

四八七

顯昭著 和袋綴深川鼠色表紙 用紙鳥の子 八寸四分六寸二分 墨附八

十一丁白紙一丁 九行 外題なし、「八雲軒」「藤亭」「安元」

(江戸初期寫、群書類従本に同じき不完本なれど流布本を校すべきもの

あり、脇坂安元手澤本 九一一・二一〇九・二一〇七)

耕雲抄 寫 一冊

四八八

耕雲(藤原長親)著 和綴葉裝表紙脱落裏表紙白茶色蠟箋 用紙鳥の子

五寸八分五寸八分 墨附二十九枚白紙六枚 十行 外題左肩書名同 内

題なし

(室町期寫、貼付せる琴山の極札には「山崎宗鑑」とあり 九一一・二

一〇四七)

古歌抄 寫 一軸

四八九

蝮川親當筆 卷子本 落葉色古裂表紙 見返し金銀砂子 用紙金銀切箔
散らし鳥の子紙にて裏打す 八寸三分 外題なし 内題なし

奥書 右馬頭殿御本申出書寫者也」彼御本定御自筆云々

永享九年五月三日 親當(花押)

(箱に題簽ありて佐佐木信綱筆「古歌抄元享九年蝮川親當書」と、元は
永の誤記なるべし、萬葉集古今集等より百一首を抄出せるもの、「鏡章」
參照 九一・二一・三一)

心よるかた 寫 一冊

四九〇

谷千生著自筆 和袋綴澁引表紙 七寸九分五寸五分 四十七丁 九行

外題左肩小杉楹邸筆書名同 内題なし、「杉園藏」

(八田知紀のしらべの直路の説を反駁せるもの、朱にて補正せり、末に
「明治六年の秋」と 九一・二一・五七)

越部禪尼消息 寫 一冊

四九一

越部禪尼著 正親町公通筆 和袋綴澁引表紙 用紙裏打 九寸四分七寸
原物八寸八分六寸 十丁うち墨附七丁 外題左肩正親町公明筆書名同、

「正親町藏」「麗澤藏書」

奥書 (卷末「追加書之」の部の奥に)

右越部禪尼消息祖父一品令書寫」給加修補收于書痕置中訖

天明三年春權大納言(花押)「公明」

以先人遺命和書加之 法眼慶融此」抄周嗣禪師新千載作者頓公和歌門弟所持之

本」也以昵近之功被付屬早」 貞治三年三月日 頓宗
右一冊遂一覽早 藤原喬化

(群書類從第四百四十三卷所收に比するに「追加書之」とせし二丁半多く
同じく和歌に關する教なり 九一・二一・一一一)

五代集詞枕下 寫 一冊

四九二

藤原範兼著 和綴葉裝落葉色古裂表紙見返し金布目紙 用紙鳥の子(薄
葉二枚を糊づけして一枚となす) 八寸二分五寸三分 墨附百二十枚白
紙二枚 十一行 外題なし
奥書 寂身本奥書云」

以範兼卿自筆本令書寫了」件本者兵部卿成實相傳之畢

京極黃門消息云

範兼卿部類借給畢早可書留也」先年書之或權勢之人ニ被取範几不被」

返之又云此物極至要物云々又云天下難」得之重寶也云々

壬生二品家隆卿消息云

殊至要之物也早可借給可書寫也云々仍」書進了

寂公本落字僻書等甚以繁多也而年」來所持愚本又以同前仍云詞詞云作

者校」合五代之撰集直付兩本之紙謬異者爲證」本染愚筆而已

建長五年四月三日爲少童書之」朝議大夫源朝臣」在判(在判の二字判
讀さる)

(南北北朝期寫、「五代集詞枕下住吉津守之國夏正筆」の極めあり、十七

海より卅九橋までを收む、分類番號及歌集名卷名を朱にて註す、卷下の

み、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」一四八頁參照 九一・二一

一一九)

材林和歌抄

寫 一冊

四九三

下河邊長流撰 自序 和綴葉裝白茶色地金泥山水模様金切箔散らし表紙(但し前表紙の模様紙剝脱す)見返し金泥布目紙 用紙鳥の子 五寸八分四寸二分 墨附百九十五丁白紙三丁 十行 外題なし、「篁園文庫」(近世中期寫、竹柏園藏書志には自筆淨書本とあれど他筆なるべし、元箱の表には「下河邊長流録材林和哥抄 攝州桑津村閑居□□竹宥筆」と墨書し「筆」の上の字を抹消せんとせし跡あり、竹内文平舊藏、長流全集所收の原本、同上卷凡例参照 九一一・二一・二七)

鷺箱極秘抄

寫 一冊

四九四

清閑寺照定筆 和綴葉裝共表紙 用紙鳥の子金泥雲水草花下繪あり 八寸三分六寸一分 墨附四十二丁 十行乃至十一行 外題なし、「濟龍閣」箱に「樂」「後樂園」

奥書 (前左衛門佐基俊及び釋阿五條二位俊成の奥書の次に)

此書ハ家之人にもゆるさす余之家之人ハ名をも不聞年來不淺此道にとき給へる」心さしなればゆるしたてまつるたとへは「淵ハ瀨となるともあなたに子より外にゆるすま」しく候然是住吉玉津嶋之御利生にあつからせ給へし」嘉祿元年月日 藤氏判

九条三位女□□(二字不明)入大道御前俊成卿女子相傳之一卷也定家禪門等以秘書也(近世中期寫、悦目抄と同じ、箱に「清閑寺照定卿筆」と朱書す 彰考館舊藏「雲井の春」四五一—と同箱 九一一・二一・一五)

三五記

寫 二卷一冊

四九五

正徹跋 和綴葉裝共表紙 七寸八分五寸二分 墨附五十三枚白紙一枚 八丁 題簽中央金切箔模様短冊「三五記 松月庵 正徹筆」内題上卷「三五記」下卷「三五記末」 奥書 (上卷は群書類従本の爲實の奥を缺き、下卷は同じく源具世及桑門光曉の奥を缺く)

(下卷末朱)以書寫本校合早

跋 此鈔同當世好士持之以稱「定家卿作被竊握也或又号」謀書也一向遠却依邪正更」雖難并此抄之中家□及」見處也然間先寫進覽之」能々可被相尋者也但於三五」記者少年昔冷泉中將爲邦」被取持本一見早若然者定」家卿作歟仍此子細加筆者也」 休心叟正徹(花押)

(室町期寫、跋は正徹筆の轉寫、群書類従本と殆んど同じ、朱にて書入あり、能勢規十郎舊藏、林羅山の印あり 九一一・二一・四九)

三體和歌

寫 一冊

四九六

和胡蝶裝白茶色地枝菊水禽模様表紙 七寸九分五寸七分 墨附四丁白紙 三丁(一葉と半葉二枚を背にて糊附す) 題簽左肩白茶色紙 「三躰之和調」 内題「三躰和調 建仁二年三月廿一日」 (室町末期寫、春夏を「ふとくおほき」なる體秋冬を「からひほそ」き體戀旅を「ことに艶」なる體の三躰にて詠める後鳥羽院御製・良經・慈圓・定家・家隆・寂蓮・長明の作を集めしもの 九一一・二一・三五)

師說撰歌和歌集

寫 一冊

四九七

木戸元齋著 和袋綴改裝焦茶色表紙 用紙鳥の子 七寸五分六寸五分 三十九丁 十二行 題簽左肩佐佐木信綱筆書名同左傍に「玆書なり奥書

注意」の註あり 内題「師說撰哥和歌集」、「平出氏書室記」

奥書 此一冊直江山城守兼繼仰有餘力折々」に書集て注せよとこはれ侍りける時」に大政大臣の心の水の御哥思えたれとも」此比の懇志一入再入の紅よりもふかし」依之いなひかたけれハ病筆を染て紙」上にむかへとも心宜ととして言葉俗也四」季の次第を調れば作者の次位雜亂」せり神慮もとかめおほしく人口もは、かりお」ほしはや、丙丁童子にあたへらる」へき物也

天正十三歳 三月七日」木戸元齋壽三此一冊草書の侍りけるを大闇秀吉大」明をせめ給ふ時に日本國の人數半を分ち」て渡海す朝鮮の都をやふりけるに」異國の軍士面を迎る事かなはぬハ大明」王懇望し給ふにて勅使肥の名護や」に到來して和事相調早其後大明爲仕置越後宰相景勝佐竹義宣」渡海の刻予を屬して百濟國のうち」蒲浦玄午川所に在陣之中よる、閑談に勞屈をのへて侍る折に佐竹義宣」所望し給ふにて又書改て献之世上人」嘲不少のみ」

文祿三歳六月廿八日 木戸元齋壽三

此一帖十九歳前に壽三自筆の本をもて書」寫ていたつらに箱のそこに古ぬるをある人」書写をこはれければとり出てつかはしける

見るたびに袖の上にそなかれぬる
ふかきこゝろの水くきのあと」 尙俊

(近世中期寫、古歌を撰び評釋を加ふ 九一・二一・一〇三)

耳底記

寫 一冊

四九八

烏丸光廣著 光祖筆 和袋綴栗皮色表紙 七寸五分六寸七分 本文墨附
七十九丁白紙四十一丁 十三行 外題中央書名同 内題「幽齋口義」下

に「光廣記之」

奥書 這御記者法雲院殿前亞相」光廣卿細川二位入道幽齋」歌道御問答御自筆也有」子細在于飛鳥井家年來」懇望今度乞前大納言雅重卿」校尤御本寸法并」一字一点無相違馳秃筆」讒書寫了永傳子孫」可秘幽底者也」 安永五季春前八座光祖」

墨附七十九枚余帙四十一枚

(光廣自筆耳底記を塗抹の末に至るまで忠實に寫す「日本文學大辭典」

參照 九一・二一・四三)

袖中抄

寫 二十卷五冊

四九九

顯昭著 和袋綴丹色表紙 九寸六寸六分 十行 題簽左肩水色紙「袖中抄自一至四(自十七自廿)」、「芽垣内藏書」

識語 (第五冊裏見返し)顯昭法師の袖中抄ハ板行の本さへ世にある事」

希なるにかゝるめてたき古寫本の上卷一冊うせた」るはした四冊文觀堂といへる書肆にありしを文化」の末かた求め置しか缺卷のうらみやみかたなくて二」十余年経たりしにはからずも佐渡氏なる人の此」上卷を所持なせしを見當り懇望してもらひ請け」合て全部とす離散してよりいくはく長きとし月」をや過つらむを誠に千歳の奇偶といふへし文園に」久しくつほめりし花の今開き合たるか其うれしさ」たとふへきものなし 岡田啓

(近世初期寫、書中間々同筆墨朱にて校註を施す、岡田啓は近世末期の

尾張郷土史家 九一・二一・一三七)

袖中抄卷第一

寫 一軸

五〇〇

顯昭著 卷子本改装落葉色地紋布表紙見返し銀切箔散らし 用紙裏打
九寸七分 題簽左肩「袖中抄」内題の下部破損あり「巻第一」とありし
ものか

(室町期寫、巻第一のみ、能筆、朱にて聲點あり、本文よし「鏡草」參
照 九一・二一・一三)

初心導書 寫 一冊

五〇一

和袋綴金銀泥流水に花の模様ある古扇面四箇を張り合せたる表紙 七寸
九分五寸五分 五十一丁 九行 題簽左肩網目模様紙短冊書名同 内題
なし

奧書 右一帖源家武息春滿磨依堅「競望卒馳老筆訖後見雖」憚多且應貴
命且思形見故「不顧是非僻案条々所載言也」敢不可有他見穴賢々、

明應第六九月七日 釋玄譽^在判

永祿七年霜月上旬之「比取所々書付早

(歌話及古歌の註を記す、表紙裏に「十市兵部少輔遠忠真跡初心導書表
紙号ハ秀頼母堂淀君」なる極を貼附す、袋紙に「青木印」あり青木信虎
舊藏、表紙には和歌を記す 九一・二一・九五)

新撰髓腦 寫 一冊

五〇二

藤原公任著 和袋綴改装款冬色表紙 用紙鳥の子薄様 六寸七分四寸九
分 墨附二十三丁白紙三丁 八行 外題左肩書名同 内題なし、「滋岡
庫」「鷓」

奧書 新撰髓腦一卷「此書四條大納言公任卿撰也

識語 (表紙左下隅)「宗情」

(室町末期寫、流布本と異同あり、巻初に無名の書を寫す 九一・二
一・五九)

撰集佳句部類卷第廿九 寫 一冊

五〇三

和綴葉裝改装納戸色地草花模様布表紙 七寸八分五寸二分 五十丁 十
行 題簽左肩外題なし

(鎌倉期寫、撰集の中より佳き句を選び作歌の参考に編めるもの、第廿
九卷人事部中のみ、戀よりむくひに至る廿二項歌數凡そ五百首、脱簡あ
り、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」參照 九一・二一・九九)

續後歌林良材集 寫 二冊

五〇四

契沖著自筆 「元祿三年三月日柳花朝」の自序 和袋綴澁引表紙 七寸
七分五寸七分 外題なし

奧書 元祿三年午四月十二日於高津「柳花朝北窓に急きて筆をとる

野納契沖

識語 (下巻裏見返し)寛政十年三月十五日「城戸千楯得之

(別筆)享和元年五月難波の書林にてもとめつ」稻彦

(一條兼良の歌林良材及び下河邊長流の續歌林良材に洩らせる故事のた
ぐひを集めて註せる稿本、城戸千楯・橋本稻彦・竹柏園舊藏 九一・
二一・九三)

續類要句 寫 十卷一冊 闕

五〇五

和袋綴(葉を折らずに綴つ)白茶地鳥模様金襴表紙見返し金切箔散らし銀
泥模様紙 九寸七寸一分 墨附百七枚 十六行 外題なし 内題「續類

要句卷第四十一(一四十九)「第五十内題切取られてなし、「天橋千里明也」

(室町初期寫、「類聚要句」一五二七—と同筆同裝、玉葉集・續千載集・續後拾遺集を部類してイロハ順に排列す、片假名書、卷四十一より四十五までは木部、四十五の後半より四十七までは鳥部、四十八は獸部、四十九以下は人倫部なり、九十七枚目半より切取りあり 九一・二一・イ六九)

長歌言葉珠衣 寫 六冊

五〇六

小國重年著 和袋綴紙粉色地柳枝に鶯模様表紙 八寸七分六寸一分 用紙薄葉 十行 外題左肩書名同 内題「長歌言葉珠衣目錄」「詞珠衣一之卷(一六之卷)」、「小平保三」「渡邊千秋藏書」(九一・二一・イ四一)

長歌撰格 稿本 寫 二卷二冊

五〇七

橘守部著自筆 和袋綴玉蜀黍色布目紙表紙 八寸七分六寸一分 十二行 題簽左肩「錦所叢書 長歌撰格上(下)板下本十六(十七)」「十六」「十七」のみ朱)

識語 (上巻題簽) 池庵守部先生自書也「可愛玩也

(初稿本か、文政二年成稿のものよりも簡畧にして異同多し、「長歌撰格稿本上」一二一参照 九一・二一・イ二五)

俊頼口傳 寫 二卷二冊

五〇八

源俊頼著 加藤枝直(爲直)筆 和袋綴縹色表紙 八寸九分六寸四分 十

行 題簽左肩「俊頼口傳上(下)巻」、「橋氏藏書」外一印 奥書 (下巻) 元文三年三月東條景周といふ人の異本校合の「本をかりてうつし侍る也 爲直(印)

(校合あり、上巻七十一條まで下巻七十二條より百卅四條に至る 九一・二一・イ七一)

なしこ草・辨なしこ草・辨々なしこ草

寫 三部三冊 五〇九

村田春海著(なしこ草・同辨々) 本居大平著(同辨) 和袋綴紺色補裝表紙 九寸六寸二分 原裝共表紙 辨・辨々は縹色表紙原表紙なし八寸六分六寸 題簽左肩「なしこ草平春海歌論消息」(原表紙題簽なし外題左肩「平春海歌論消息」)「辨なしこ草」「辨々なしこ草」内題辨「村田君御許へ聞えさする返事」辨々「稻掛大平か返事に又答たる書」、辨・辨々にのみ印記あり「鶴鶴書巢」「樂入」「永田文庫」他一印 奥書 (なしこ草) 此消息は春海かむすめたせ子に「か、せて大平におくりし本によりて」うつせし也朱もてかけるは「本居宣長翁か自筆なり

(以下藍) 此ひと、ち川親廣ぬしたつさへて見せ給ふを」と、め置(見)見るに哥よみならふへき心かまへ」にはいとくよきふみになん是かこたへも「侍るとかきく物からそはゆかしくもおほえすなん」此表番に名をしるしてよと此ぬしのそみ」給ふに此ふみのもと本居の新古今集ふりを「よめるを我も人もさたある事にてつひに春海か」とひかけしなれば難新古のこゝろもてなしこ」草としるしてかへし侍りぬかし 賀茂季鷹

(なしこ草は村田春海の本居大平に答へし歌論書に本居宣長の朱書批評

を加へしもの、辨なしこ草は大平より春海に答へし消息、辨々なしこ草は又更に春海より大平に答へし消息 九一一・二一―イ七三)

二十一 代集後談 寫 一冊 五一〇

觀阿著 和袋綴代赭色表紙 九寸四分六寸八分 九十四丁 十一行 題簽左肩書名同、「鑿水」

奧書 此二十一代和哥集後談者予自古抄中「ウツ秋華加卑詞爲一冊授與于愚息以益者」也 旨 天和三年五月一日 觀阿居士判

(二十一 代集につきて撰者成立秀歌論評等を記す、終に廿一代集歌員多入名錄及び名家の師資關係を附す 九一一・二一―イ一〇五)

八代集抄 伊達千廣手澤木 寫 五十卷十五冊 五一―

北村季吟著 天和二年仲春時正日自跋 和袋綴草花模様表紙 七寸五分 五寸三分 題簽各冊中央色變り短冊を細く切りて用ふ「古今抄上(下)」

「後撰抄上(下)」「拾遺抄上(下)」「後拾遺上(下)」「金葉抄」「詞花抄」「千載抄上(下)」「新古今抄上(中、下)」内題每卷「古今和歌集」の如く所收書名を掲ぐ

刊記 天和二年中夏吉辰梓行畢「北村書堂」村上勘兵衛(入木)

(天和二年刊本の後刷、この書伊達千廣手澤木にして古今抄には附箋及び若干の書入あり、箱の蓋に千廣の手にて「聖化」「二四」の文字あり、「竹柏園藏書志」参照 九一一・二一―イ七)

百人一首燈草稿 寫 一冊 五二二

富士谷御杖(成元)著 寛政十二年自筆 和袋綴紙粉色表紙 七寸一分五

寸 四周單邊五寸七分四寸三分十六行罫紙 墨付二十五丁 外題左肩書名同

卷首 柳河(ウツ)富士谷成元口授 門人 三木正長 廣野家榮 錄 奧書 庚申十月廿九日丑刻燈下完業

(見返しに百首の初句索引あり、塗抹訂正の跡多く俊惠法師の夜もすがらの歌の如きは改稿四度に及べり、百人一首燈の自筆草稿頗る多くして弘文莊待買古書目第六同第十にも夫々別本あり、本書又右二本と異なる、二冊本として文化元年出雲寺文治郎等刊 九一一・二一―イ一三五)

百人一首考 稿本 寫 一冊 闕 五二三

賀茂眞淵著自筆 自序 和袋綴澁引表紙 九寸一分六寸 四十八丁 三行 外題左肩「賀茂縣居大人藥 百人一首解」、眞淵綠色印あり (本文卷首に「百人一首考卷一」とあり天智天皇より光孝天皇に至り以下缺卷、「字比麻奈備」の稿本なるべし、但し記事相互に増減あるも大意に於て同じ 九一一・二一―イ一三九)

非唯漫錄 寫 一冊 五二四

富士谷御杖(成元)著自筆 和袋綴檜皮色表紙 七寸四分五寸三分 四周雙邊六寸四分四寸十分十行罫紙裏打あり 十七丁 外題左肩「北邊非唯漫錄」 内題下に「富士谷成元識」

識語 (表紙左肩外題の下に) 神書備忘 (彼自身の神道説によりて歌道を説く 九一一・二一―イ二二)

風葉和歌集 寫 十八卷二冊 五二五

和袋綴濛引表紙 用紙薄様 八寸九分六寸三分 題簽左肩「書名同上」(下)、「陽氣盧記」「篁園文庫」「たか春の花のしをりにしのはれんわ
かわけくらすけふの山ふみ中郵秋香」

奥書 (秋香筆) 此書は小中村博士の家にひめもたりしなるを「こたひ
さるよしありて古物語字類抄和語」説略圖聞書語辭辨説聞書と、も
にけふしも」博士みつかから攬來りてめくまれしなり

明治廿六年十月廿四日 中郵秋香

(義象筆) 中村翁没後嗣子春二君ゆかりある書なればとて「みつか
携來りておのれに與へられたり」 明治四十三年初秋 池邊義象
この書能くく見るニ橘千蔭翁の自筆とおほゆ

(江戸中期寫) 釋教部を獨立せしめず卷七に收め羈旅部を卷八に收むる
故、丹鶴本二十卷なるに對して本書は十八卷本なり、出典を傍記する事
なし書中異本校合多し 九一一・二一・一三二)

夫木和歌抄 寫 三十七卷三十七冊 (内總目錄一冊) 五二六

藤原長清編 和袋綴卵色表紙 八寸六分六寸二分 十行 題簽左肩短冊

「夫木和詞抄」その下に「第一春」の如く卷數部類を示す 第三十七冊

題簽脱落の跡あり、「共三十七卷子孫永保雲煙家藏書記」
(近世初期寫、奥書流布本に同じ 九一一・二一・一三二)

北邊髓腦 稿本 寫 一冊 五二七

富士谷御杖(成元)著自筆 和袋綴縹色表紙 七寸三分五寸二分 四周單
邊六寸四寸三分九行對紙 六十五丁 外題左肩「富士谷御杖翁稿本北邊
髓腦完本」内題の下に「上(下)篇」とあり上下合本、「竹柏園文庫」

(佐佐木信綱「増訂日本歌學史」四一八頁參照 九一一・二一・一八五)

毎月抄 寫 一冊 五二八

藤原定家著 和袋綴勝色表紙 七寸九分五寸七分 十五丁 十行 題簽
左肩白紙「京極黃門贈衣笠内府消息」内題「定家卿消息稱毎月抄」。「古
川所藏」

奥書 此定家卿消息以群書類從所收訂本課人令書寫了

天保十二年十月十五日手自一校完 信友

(朱) 他日得見一本誤脫甚多、但採其可者」聊加批校用朱墨又加
點

(信友朱にて校異を施し點を加ふ、奥書は信友自筆なり 九一一・二一
一八七)

萬代和歌集 寫 二十卷十冊 五二九

(井上文雄母筆)和袋綴卵色表紙 十行 外題左肩「萬代集一(一十)」

「歌堂文庫」「弘綱文庫」

識語 (第一冊表紙右肩) 文雄先生惠贈 共拾本

(同見返し文雄筆) 萬代集七之卷之十之卷迄「我慈母之筆也仍我形見
として」佐々木弘綱ニ贈者也」 明治三庚午五月「七十一翁文雄
(奥書は丹鶴叢書本に同じ 九一一・二一・一三二)

結び松 寫 一帖 五二〇

和折本水鳥模様絹表紙 六寸七分五寸九分 四十折 外題なし 内題な
し、「桃華藏」

(各折に歌枕の實地にて採集せし植物一種を貼附して傍に國名と和歌一首作者を記す、近世末期好事家の所業なるべし 九一一・二一〇九)

無名抄 寫 一冊

五二一

鴨長明著 尊興・尊任筆 和綴葉裝(但し用紙四折をそのまゝ、綴づ)共表紙 用紙鳥の子 七寸八分四寸八分 六十六丁 九行 外題中央「長明無名抄」 内題なし、「平出氏書室記」

奧書 應安四年^亥三月立筆了 助筆尊任

老比丘尊興

此本ハ同朋寶藏房維円法印本也 先年書寫處「不終功經年序爲後學小生又新書寫之」

識語 (表紙表右下) 尊興(表見返し右下) 傳領賢紹

(目錄なく片假名交りにて稍々古體を存す、「竹柏園藏書志」參照 九一・二一〇九)

無名抄 寫 一冊

五二二

鴨長明著 和袋綴白茶色地花模様空摺表紙 六寸九分四寸六分 墨附八十丁白紙一丁 十一行 外題左肩書名同

奧書 鴨長明抄云々 本云元享三年五月十八日於久我殿

(室町末期寫 九一一・二一〇九)

村さめ 寫 一冊

五二三

六人部は香著自筆 和袋綴深川鼠色表紙 用紙罫紙 五寸一分三寸六分 墨附二十六丁白紙三丁 八行 外題なし

(桂園一枝の春部の歌を抄出して難評せるもの、終に自詠を録す裏見返

しにも詠草を記す 九一一・二一〇九)

八雲のしをり 稿本 寫 二卷一冊

五二四

間宮(源)永好著自筆 和袋綴白茶色表紙 八寸五寸五分 五十一丁うち下十二丁 匡廓六寸四寸一分 無界七行註二行 題簽左肩白茶色紙書名同、「間宮之記」「竹柏園文庫」

(和歌の入門書、所々に補正あり 九一一・二一〇九)

八雲御抄卷第六 古活字本 一冊

五二五

順德天皇著 和袋綴改裝澁染表紙 九寸三分六寸四分 三十九丁 十行 題簽左肩橙色地金銀草模様短冊「八雲抄 六」 内題「八雲抄卷第六」、「竹内圖書」

奧書 校本云幽齋本跋「至德二年^{己丑}九月五日以綾小路羽林^經御本書寫之」老筆之間其誤不勝計

(以下三行のみ他筆) 以家證本再三校合之 儀同三司在判 寬永十三^二廿七 (花押)

又本云「德治第三^{戊申}二月十九日 自第一至于第六比馳筆」墨更々不可有拜見者也殊可秘之

右六冊一覽早 天正五年八月日幽齋玄旨判

(朱墨の校異あり、川瀨一馬「古活字版之研究」に本書無刊記本にして元和末寛永初頃刊かといふ、竹内子爵家舊藏 九一一・二一〇九)

類句 寫 二十五冊

五二六

和袋綴裏葉色表紙 八寸九分六寸五分 十五行 題簽左肩薄款冬色紙書名同 の下に「いろは」等所收内容を示す文字あり、内題なし、「子孫

永保共二十五卷雲煙家藏書記」

(江戸時代中期寫、中古より中世に至る撰集家集所收歌の初句をいろは順に配列し上に集名、下に作者名を記せし一種の索引なり 九一一・二一―一三)

類聚要句

寫 十卷一冊 闕

五二七

和袋綴(葉を折らずに綴づ)白茶色地鳥模様金欄表紙 見返し金切箔散らし銀泥模様紙 九寸七寸一分 百四十枚 十六行 外題なし 内題「類

聚要句卷第八十一 木部三八下」、「天橋千里明也」

識語 (表見返し裏) 山下宗半様御誂哥書内□(卷末) 番數百四十

(室町初期寫、續類要句一五〇五一同筆同裝、古歌を部類してイロハ順に排列す、片假名書、卷八十一より八十七までは木部、八十八より九十までは鳥部 九一一・二一―一六七)

類題六帖

寫 一冊

五二八

小澤蘆庵著 橋曙覽筆 生壁色草花織出模様布表紙 用紙薄様鳥の子

五寸八分三寸七分 百五十八丁 十一行 外題なし 内題なし、「白梅窗記」「山口氏圖書記」

奥書 (裏見返し) この哥ふみはもよ類題六帖と名つけて「小澤蘆庵翁の撰はれつるすりまきなるを」こたひおのれみつからうつしものして「梅窗山口君ニおくりまわらすとて

濱千鳥つたなきあともいとはずは「いにしへしのふしるへには」せよ

弘化二とせといふとしの「しはず」 橋尙事

識語 (見返し) 白梅窗記

(梅窓の子孫山口皆雄氏舊藏、「竹柏園藏書志」二七五頁参照 九一一・二一―一二二)

六家類句和歌

寫 二十冊 闕

五二九

和袋綴藍紫澹込み紙表紙 九寸八分七寸 十三行 外題なし 内題「六

家類句丙(戊・庚)集」、「曼珠圖書之印」

(近世初期寫、拾玉集・壬二集・拾遺愚草・秋篠月清集・山家集・長秋詠草の六家集を句毎にいろは順に配列せしものにして、丙集六冊は二句目戊集七冊は三句目庚集七冊は四句目の索引なり 九一一・二一―一三九)

和歌會次第

寫 一軸

五三〇

藤原定家著 梨木祐爲筆 卷子本納戸色地紋布表紙 一尺一寸 原物九

寸二分 題簽左肩金紙佐佐木信綱筆 「和歌會次第藤原定家著梨木祐爲模写」

奥書 元享四年十月六日以中院入道殿自筆「之本書写校合了

武衛大將軍藤(花押)

嘉曆三年三月十五日自黃門相傳之可秘々々「權少僧都 重性(花押)這一卷或人持來之時」令書寫所也」 于時寛政九年五月四日祐爲

(「竹柏園藏書志」三四四頁参照 九一一・二一―一二九)

和歌書様・和歌會次第

寫 一軸

五三一

藤原定家著 庭田重經筆 卷子本改装白茶色地桑色朽木形地紋布表紙

九寸三分 原物八寸五分 題簽左肩金砂子紙佐佐木信綱筆「和歌書様等藤原定家著庭田重經書」

奧書 此一冊者以京極黃門定家卿真筆書寫之「蓋愛野鷲与惡家雞古今晋風流也豫爲」備後昆奔範親用其真翰而不凌字形模「之了熟願塗亂移於紙恣者乎主逸少有」蘭亭帖得傳者少也東々木梅花後人臨之者「皆賢本也嗚呼可慕而已」

文明十七春二月日 從四位下左近衛權少將藤原基春以左少將本書寫之尤可秘之」從四位下右近衛權少將 源重經

(重經は庭白家、文龜年中薨、ただしこの本は摸寫にあらず 九一一・二一四二五)

和歌口傳

寫 一冊

五三二

源承著 和袋綴款冬色表紙 九寸五分七寸 四十六丁 十二行 題簽左

肩白紙「和歌口傳源承法眼」 内題なし、「柳原庫」「竹柏園文庫」

識語 (卷末同筆) あすありとおもふ心にほたされて「けふもむなし」暮しぬる哉

(裏見返し別筆) 大系圖云「源承山法眼」前大納言爲家卿六男」續拾遺新後撰玉葉續千載」續後拾遺等作者

(近世初期寫、愚管抄と同じき書、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」参照 九一一・二一四七七)

和歌座右

寫 五冊

五三三

和袋綴海老茶色表紙 九寸六寸五分 十行 題簽左肩「和歌座右三(四

・五)」(一、二卷缺) 内題なし、「芸叢之印」「篁園文庫」

(近世中期寫、撰集家集百首等より和歌を抄出しイロハ順に次第し詳註を加ふ 九一一・二一四四五)

和歌三式

寫 三冊

五三四

生嶋(平)宣盛筆 和綴葉裝唐紙表紙 八寸四分六寸 外題左肩「詞經標式藤原實成撰」「喜撰式」「孫姬式」、上冊「歌經標式」中冊内題「和歌作式」下冊内題「和歌式」、「尙好」

奧書 (孫姬式末)長祿四年 庚辰正月十六日以顯昭本令書」寫早

東山院士四雅

以彼圓雅上人自筆不替一字令書寫早

寛正第四年十月廿日雨中書之」從五位上大藏大輔橘朝臣業文

(各冊末又は初)此一帖祖父宣盛朝臣若年之筆蹟也爲子孫」之覺悟加奧書了 平朝臣 治孝

(宣盛は生島氏、代々桂宮の諸大夫、元祿八年七十歳にして卒す 九一一・二一四五一)

和歌三身大事

寫 一通

五三五

榮元自筆 折紙 用紙鳥の子 六寸一分

奧書 和歌相傳之外不可有他見者也(從)雖積千金莫傳可秘々々

元祿三年 庚午年四月廿二日」北村湖春仁

阿闍梨遍照金剛」大善院大僧都 榮元(花押)示

(住吉・玉津島・人丸の歌につき眞言を添へ合掌父母等の印相を圖す 九一一・二一四七五)

和歌色葉集 寫 二卷一冊 闕

五三六

上覺著 和袋綴白茶表紙 六寸二分四寸七分 墨附九十三丁 十三行
題簽左肩剝落の跡あり外題なし 内題「和歌色葉集中(下)」

與書 (卷中) 本云應永卅年癸卯十月十九日相州早河庄網一色爲慰在陣
之徒然之攻於異端但以文字胡亂之本令書寫云「雲石」叟良怡土屋總州」
皆永享九天丁霜月十日任本書之云定季味者海老名「美濃守」
于時嘉吉元年辛酉十一月書之相州白根庄之内石藏寺祐「芳書」

(卷下) 于時建久五年仲夏上旬西山隱士上覺抄記
抑予依一寺之脈通万事之間投略抄之草見廣學之「虔許容無極感氣有餘
雖似嘲哂被書狀云三卷髓」腦六義肝心也扇喜撰之風追能因之路不堪干
愁加」一篇

難波津の底ハ曇もあらしかし書集たる清き玉藻に
建久九年十二月十一日右中辨長房朝臣令遣先遍内「供書狀云(中畧)
于時應永卅年十一月十日於愚亭任本写之在陣」未終白地歸宅也 雲石
叟 良怡

皆永享十九天丁仲侶初三書之畢 愚者定季
皆嘉吉元年辛酉十一月書之相州石藏寺住僧梅山
識語 (第一丁表) 五代集釋(同左肩) 色葉上下
(上卷を缺く、中下を一冊に合綴、片假名書き 九一・二一・イ六三)

和歌大綱附連歌沙汰聞書 寫 一冊

五三七

和假綴共表紙 八寸五分五寸九分 和歌大綱十二丁 連歌沙汰聞書十四
丁 十行 外題左肩「和歌大綱并連歌沙汰聞書」

與書 (和歌大綱) 文龜二年閏三月四日書了 持主勝巖
(連歌沙汰聞書) 文龜二年閏三月六日 持主勝岩

(別筆) 此一帖自河州求之「天正八年庚辰中焯日 主養賢
(室町期寫、和歌大綱は流布本悦目抄の原形本の一と認めらる、もの、
岡本清茂舊藏、紙帙あり、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」参照
九一・二一・イ五三)

和歌題林抄 寫 二卷一冊

五三八

和袋綴裝油色金欄表紙見返し金紙 八寸五寸二分 小口三方金 墨附百
十三枚 八行 題簽左肩金紙外題なし、「北田紫水」
與書 (別筆) 一夜松西坊 自伯之

(室町末期寫、群書一覽に「種心秘要抄」を引きて本書の著書を一條兼
良とせり、「連歌師 横川文通上人和哥題林全部一冊」の古筆極めあり
九一・二一・イ一三三)

上古及奈良時代和歌

古事記之歌附古事記之歌線分

寫 五冊

五三九

和袋綴深川鼠色行成表紙線分は表紙色や、濃し 八寸五寸五分 四周雙
邊六寸七分四寸五分一頁十二行三十字詰「池ノ端紙儀製」和紙原稿用紙
外題左肩「古事記上中(下) 卷之歌」線分は題簽左肩淡卵色紙「古事記
之歌線分上(中、下)」柱には歌の番號を出現順にアラビヤ文字にて朱
書し、下に訂正古訓古事記により所在丁數を示す、線分の柱は五十音を
内容改まるごとに記す

奥書 (線分の末に) 明治參拾壹年拾壹月廿六日結了」
(正編では古事記の歌謡を抄出、古事記傳の解を記し、守部契沖等の説にて補ふ、各歌は又朱にて體語は、用語は、手彌波はテ等の印を附しあり、線分は正編を利用せる語句索引にして五十音順に語句をあげ、正編附する番號と必要に應じて句をもか、く、編者未詳なれど林甕臣舊藏なりと 九一一・二一一一七)

古事記謠歌註 稿本 寫一冊 五四〇

内山眞龍著自筆 和袋綴改装丹表紙 用紙裏打 八寸二分六寸 四十三丁 八行註雙行 外題後筆書名同、「竹柏園文庫」
(虫蝕多くして文字不明の所尠からず 九一一・二一一一)

古風抄 稿本 寫三冊 闕 五四一

和袋綴卵色表紙 八寸五寸六分 外題なし 内題なし 扉第一冊「古風抄一 神代神武崇神景行 嘉永四年四月十二日起草」第二冊「古風抄二 應神仁德履中允恭 嘉永四年六月朔日書早」第四冊「古風抄四 皇極舒明考德齊明天智 嘉永四年七月廿七日書早」

(全四冊中第三冊を缺く、神代より天智天皇までの歌を註す、文中塗抹訂正附箋等頗る改正の跡あり 九一一・二一一一一)

〔齊明紀童謠秘説〕 寫一軸 五四二

賀茂眞淵著 卷子本縹色地花葉織出模様金欄表紙見返し金箔布目紙用紙金泥にて若松を書きし鳥の子 七寸四分 外題なし 内題なし

末尾 としのなをたからのこよみ」といひてとをまりふたつのとしのむつき」になむかきてつたへぬ かものまふち」はるみちぬしへ
(近世中期寫、「竹柏園藏書志」には眞淵自筆とあれど疑はし、眞淵が春満より傳へし齊明紀童謠の秘説を寶曆十二年村田春道に傳へたるもの、春道の子春海の刊行せし「齊明紀童謠考」にはこの書を模寫して掲ぐ本書と本文多少の異同あり、「百代草」及び「竹柏園藏書志」五六頁参照 九一一・二一一一九)

日本紀類聚解謠歌註 稿本 寫二冊 五四三

内山眞龍著自筆 和綴改装丹表紙 用紙裏打 八寸二分五寸七分 上冊四十四丁下冊四十九丁 八行註十二行 外題後筆「書名同」上(下)「内題上冊「日本書紀謠歌」下冊「日本書紀歌」
奥書 (下冊)文化八年未年二月六日考終
(古事記謠歌註—五四〇—と同裝 九一一・二一一一三)

日本書紀歌口解 寫二卷一冊 五四四

荷田東麿述 藤原明理割記 菅原溫校書 栗田土麿筆 和袋綴滲引表紙 九寸一分六寸二分 上卷扉共三十五丁下卷二十九丁外白紙一丁外別紙二丁 十行 外題中央「日本書紀歌口解」 扉左肩「日本記歌口解上下」

卷初 (内題の次に) 荷田東麻呂先生説 藤原明理割記 菅原溫校書

奥書 天明六年丙午十二月三日寫早但本文及此彼略而寫
(栗田土滿筆寫、下卷に私説を頭註す 九一一・二一一一五)

思草考 寫 一冊

五四五

井上文雄著自筆 和袋綴補裝堅紙表紙原裝共表紙 八寸四分五寸七分
「萬笈堂藏」の柱刻ある十行黒罫紙七丁 外題左肩書名同内題「思草の考」竹柏園文庫」

(萬葉集中の思草につきて仙覺抄等の諸註、八代集例歌等を引きて考證す 九一一・二二一―イ五九)

紀記萬葉歌撰部類稿 寫 二冊

五四六

物集高世・近藤久棟共編 和假綴共表紙 七寸九分五寸六分 八行 外

題中央(書名同)上(下)」

(紀記萬葉の和歌を神祇、君臣付主従、父子付母子祖孫、夫婦、兄弟付姉妹、朋友、雜に分類す 九一一・二二一―イ四七)

詞林采葉抄 寫 十卷三冊

五四七

山阿著 應永八―十二年英俊筆 和袋綴改裝澁引表紙 用紙裏打裁斷あり 八寸三分六寸一分 外題なし

奥書 (上卷) 應永八年辛巳九月九日夜功終早

旅宿之便ニ此本ヲ所持して」北山内倉殿白石書之早

寫本ハ越智玉手殿ノ所持本也 僧英俊 卅二

(中卷) 應永十年癸未二月十日夜寫之玉手殿本賜處也」法眼英俊 卅四年

(下卷卷八) 一校了

應永十二年乙酉九月十二日和州廣瀬郡於百濟寺寫之

(「本云去年^{貞治}秋之比二條關白殿下云々」の奥ありて次の年記あり)

貞治壬午十一月廿五日榆柳榮刃藤澤山隱侶桑門由阿^春七十六

書本云广安三年暮廿日誂數輩寫十帖早抑此由阿上人者」西都花下備槐門師範東關月前爲藤澤客衆而万葉」始終口傳思源底學之十卷首尾自抄究深奧記之」誠是怗宏歎才博覽人也出非和語明鏡昏哉爰予以謂」酌冷

泉遺流幸被慕當道餘波仍及大概相傳致」一部書寫但殘命已待旦暮餘執必莫及再往而已」柿本遺慶澄經記之春秋滿七十心性院僧正

康曆元年己未八月六日終寫功早(次行より入麿の記事約半丁あり)

(片假名本、本文萬葉學叢刊本と殆ど同じ 九一一・二二一―イ五三)

詞林采葉抄 寫 十卷六冊

五四八

由阿著 和袋綴縹色表紙 九寸六寸五分 八行 題簽左肩白紙書名同、

「佐藤藏書」

奥書 先年草案之本紛在之間重寫之

應安二年三月十八日 額齡七十九右筆可」取之

(次に「去年貞治四秋比二條關白殿下云々」の奥ありて年記左の如し)

貞治丙午十一月廿五日」榆柳營邊藤澤山隱侶桑門由阿^{春秋}七

(近世中期寫、第五冊の他は各冊二卷を收む、片假名本、萬葉學叢刊及び國文註釋全書所收本とは小異あり、誤脱少からず 九一一・二二一―イ

五五)

詞林采葉抄 寫 十卷十冊

五四九

由阿著 藤原貞雄筆 和袋綴黃色表紙 九寸三分六寸四分 九行 題簽

左肩白紙書名同

奥書 本云先年草案之本紛失之間重書寫之

應安二年三月十八日 頽齡七十九可耻之

(次に「本云去貞治秋之比二條關白殿下云々」の奥ありて年記次の如し
貞治壬午十一月廿五日「榆柳營邊藤澤山隱侶桑門由阿春秋于時應永

二年乙亥卯月上旬寫之

この採葉抄のとまきハ千箱のうし」のしめしにいえらくこは人のひめ
る」をもよいたく口たゝきてとうて筒よ」てすか／＼しうかいうつせ
よともとゆお」のれうとき物からひたふるにそむるハもい」と／＼お
ほろかしさハいへいなふらはいよゝゝゑらきたまハんとわりなくふみ
てひちて」つゝの日の間になんかいてけりきハみて眞名」やかん名の
たかへあるハをちはた餘れるあ」ならむこれハしも大人のよみかうか
へ玉ふ」へしといさゝほさつ

天明よつのとしきのへたつの」みな月はたそまりいつかの日」ふち
はらのさを

(平假名本、各冊二卷を収む、朱にて書入多し、第一冊表見返しに附箋
六枚あり、本文一丁目表にも貼紙ありしも剝脱せしと見え藏書印半ば残
れり、國文註釋全書所收本とも小異あり 九一一・二二一・イ五七)

萬葉考別記 寫 一冊 闕

五五〇

賀茂真淵著 和袋綴縹色表紙 八寸九分六寸一分 二十三丁 十二行
題簽左肩「萬葉考三四五六別記」 内表紙外題中央書名題簽と同 内
題「萬葉考卷三(一六)別記」
(卷首に卷三、四、五、六の目次一丁あり、他は流布板本に同じ、朱別
筆にて校正せし所あり 九一一・二二一・イ三一)

萬葉集 二十卷二十冊

五五一

和袋綴納戸色市松模様表紙 九寸三分六寸五分 四周雙邊七寸五分五寸
七分 八行十八字 贊題簽左肩白紙墨「万葉和詞(歌)集」一(一廿)「
柱刻「萬葉卷一(一廿)」、「茂木文庫」「石田藏」「里見義」

刊記 寛永貳拾年癸未蠟月吉日「洛陽三条寺町誓願寺前安田十兵衛新刊
奥書 (墨)應長元年ヨリ此奥書マテ御本無之

元祿二年巳巳四月十九日校讎了 密乘末資契冲

右萬葉集二十卷以 景山屈先生家藏本校正之至如冠註旁註亦皆據其本
已此本也」先生所自校正蓋以契冲先師代匠記爲據如其稱師云則今并似
閑翁之說也翁亦「契冲之門人也 先生與似閑之門人樋口老人宗武友善
是故 先生以其本校正」訓點冠註旁註之則實契冲傳說之義不待代匠記
而明焉者也故予深崇「信之以餘力写之藏巾笥爲秘珍矣後之閱者勿忽詭
爾

寶曆七年丁丑五月九日卒業于平安室坊寓居

神風伊勢意須比飯高薺庵本居宣長謹

天明六年丙午十月十二日夜會讀卒業

(一冊目見返し附箋)

コノ萬葉集ハ鈴屋先生二十九才ノ時京都室町ノ旅居ノホドニ屈景山先
生ノ藏本ヲ借「ウケテソノ本ノマ、ヲ書入タマヘル也故ニイマダシキ
考ドモ多キ也屈先生ハ契冲師ノ說ヲ用」ラレタル也此ノ屈先生ノ書入
ノ後ニ岡部翁ノ說ヲ書入玉ヘルハ師云トアル是也又自ラノ「考ニ名ヲ
シルタマハヌモアリ宣云トアラハシタマヘルモアリ」鈴屋門人某云
(宣長の堀景山藏本の書入を寫せるのち師真淵の説に自説や田中道麻

呂、稻懸茂穂―本居大平―荒木田久老、加藤千蔭等の説などを加へたるを門人某の寫しおきしもの 九一・二二―イ三三)

萬葉集

寫 二十卷十冊

五五二

荷田信美筆 和袋綴澁引表紙 八寸九分六寸四分 八行 外題左肩「萬葉集一二(一十九二十)」

(寛永流布本を謄寫せる本文に自説を記し契沖東丸上田秋成等の諸註を附記せり、本文、古本、六條本、活字本、異本等を以て校合せる所あり 九一・二二―イ四九)

萬葉集

古活字附訓本 二十卷二十冊

五五三

和袋綴松葉色草花模様摺出表紙 九寸三分六寸八分 四周雙邊七寸四分

五寸五分 八行十八字 題簽左肩墨流し短冊墨「萬葉集一(一二十)」
柱「萬葉卷一(一廿)」(丁數) 内題「萬葉集卷第一(一二十)」、「東坊城」「中川屋藏書印」外一印

奥書 (卷一末朱筆) 享和二年十二月十五日以故大人書入本一校畢
(縣居、鈴屋諸説を主として第一卷に書入あり、附箋の中に正宣誌とあるは山川正宣の手なるべし 九一・二二―イ三五)

萬葉集

近藤芳樹書入本 十五卷十五冊 闕

五五四

和袋綴深紺色表紙 八寸七分六寸二分 四周雙邊七寸四分五寸四分 八行十八字 題簽左肩雙邊「萬葉和歌集六(一廿)」 柱「萬葉卷六(一廿)」(丁數)

刊記 岢寶永六丑季春吉辰「御書物屋 出雲寺和泉掾

(六卷より廿卷まで全卷にわたる近藤芳樹の書入あり、ことは本文の校合・訓の改正より考略解契冲宣長等の諸先達の註及び諸古典からの引例にわたりま、自説をも加ふ 九一・二二―イ三七)

萬葉集金澤文庫本斷卷

寫 三葉

五五五

傳尊圓法親王筆 二葉は一尺六分八寸三分 金色對三方單邊九寸一分七寸五分 八行約十五字詰 一葉は同用紙にて四行分のみなり

(二葉は卷十六の三三一六より三三一九迄あり墨の訓あり、一葉は三三三四四の一部のみにして朱の訓あり、相つゞく二葉は袋綴なりし原本の姿をとゞむ 九一・二二―イ一三)

萬葉集歌林類聚

寫 十六卷十六冊

五五六

野田忠肅編 和袋綴朱表紙 九寸六寸三分 十二行 外題なし

(近世末期寫、萬葉集中の歌を四季天地木草等に分類それを更に各題目に分類して編せしもの、久松潜一「契沖傳」第四編野田忠肅と契沖の條参照 九一・二二―イ四一)

萬葉集註疏

寫 二卷四冊 闕

五五七

近藤芳樹著自筆(他筆をも混す) 同補修 近藤久敬校合 和袋綴共表紙 九寸二分六寸七分 十行 外題一、二なし三、四左肩「萬葉集註疏二之一(一ノ二)」 内題なし

識語 (四冊目表紙朱) 此はいまた校合を経されハさそかし「謬説もおほく侍るらむその御こゝろして」よみ玉へかしあなかしこ 久敬
(一冊目萬葉集卷一の前本の註を收めて自筆又自らの朱の補修あり、二

三四にて卷二の一九九番の中にいたるは他筆にて芳樹の孫久敬の朱筆の
校合及び自説の附箋あり、刊本は久敬の説はとらずして原説に従へり、
明治四十三年刊歌書刊行會本二冊を附す 九一一・二二一―四三)

萬葉集品物解 寫 三卷三冊 闕

五五八

鹿持(藤原)雅澄著自筆 和袋綴代赭色行成表紙 九寸一分六寸三分 四
周單邊に刷りし用紙 六寸八分五寸三分 十行 題簽左肩白紙雅澄筆書
名同(但し下に「古義附録」とし冊數順をしるし朱にて一「草類上」
二「草類下竹類」三「木類」と傍にしるせり) 柱には墨書にて「萬葉品
物解」 内題「萬葉集古義附録 品物解」下に「土左藤原雅澄撰」と
奥書 文政十年丁亥七月二日起筆同月十九日繕寫畢
(刊本に比するに四の鳥類獸類魚類蟲類の條を缺く、全卷朱又は墨にて
補訂を加へ又配列順序の變更を示せるものもあり、刊本はその補訂に従
ふ 九一一・二二一―イ五一)

萬葉類葉集 寫 十八卷十四冊 闕

五五九

藤原宣胤編 丘岬栲園(俊平)筆同校合 和袋綴薄卵色蠟箋表紙 九寸六
寸四分 十二行 題簽左肩本文同筆外題の下に「天象」「時節」の
如く内容を示す小字を加ふ 内題「類葉抄第一(一十八)」

奥書 (第一冊)延德三年依「勅命部類之」權大納言藤原宣胤

(第二冊、第一冊と同じ奥書ありて次に)

(朱)享和三年九月廿九日依祝忝山藏本一校朱書了「丘岬俊平

(第四冊、延德三年依「勅命」部類之「權大納言藤原宣胤

(第五冊、第四冊と同じ奥書ありて次に)

(朱)享和三年十月初旬依祝忝山藏書一校了「丘岬俊平

(第六冊、第四冊の奥書に同じ)

(第七冊、(朱)享和三年九月依祝忝山藏本校合朱書畢「二三之誤字

假字逶者隨舊本也他日加正焉」丘岬俊平

(第八冊、第四冊と同じ奥書ありて次に)

(青)享和三年九月 丘岬俊平書添早

(第九冊、第四冊と同じ奥書ありて次に)

(朱)享和亥年九月依祝忝山藏書校合朱書畢「丘岬栲園(花押)

(第十冊、第四冊と同じ奥書ありて次に)

(朱)享和三年十月廿九日以祝忝山藏書一校朱書畢「丘岬俊平

(第十二冊、第四冊と同じ奥書ありて次に)

(朱)享和三年霜月以祝忝山藏書一校朱書早「丘岬としひら

(第十三冊、第四冊と同じ奥書ありて次に)

(朱)享和三年霜月以祝忝山藏書一校朱書早「丘岬としひら(花
押)

(第十四冊―十八冊)延德三年依「勅命」部類之「權大納言藤原宣胤」

(朱)享和三年霜月以祝忝山藏書校合朱書早「丘岬(花押)

(一天象、二時節、三上・三下地儀上下、四居所、五諸國、六

草、七木、八飛禽、九走獸、十昆蟲、十一雜魚、十二甲蟲、

十三・十四人倫上下、十五人體、十六闕、十七衣服飲食、十八

器材の部類に萬葉集中の歌を集めしもの、延德三年藤原宣胤、後土御門

院の勅命により撰する所 九一一・二二一―イ三九)

類字萬葉集

寫 六卷六冊

五六〇

和袋綴薄代赭色表紙 七寸七分五寸五分 一頁六寸四分四寸三分十二行
水色罫紙 題簽左肩白紙本文と同筆書名の下に「阿伊字延乎」の如く所
收内容を示す細字と巻数を記す 内題なし、「末左年印」「萬葉廬」「足
立」等

(萬葉集の五十音別語彙・寶永版本の丁敷により所在を示す、一卷阿
行、二卷加行、三卷左多行、四卷奈波行、五卷万行以下、六卷附録雜々
を分載す、末左年は即ち尾州鈴屋門の鈴木眞實なるべし、本書又同人の
編か 九一一・二二一・四四五)

平安時代和歌

和泉式部家集 寫 二冊

五六一

和泉式部著 若泉法水・梅村鶯雅筆 外題左肩「和泉式部家集完共二
乾」「和泉式部續集完共二坤」(「共二」は朱)、「靜幽文庫」 「源利義
印」

奥書 (乾)文化己巳冬日標箋 藤原元雄(花押)

此書小林歌城大人の持給へるをかりて若泉法水に「うつさせて靜幽堂
に藏む

天保六年乙未二月二十八日一枚(「一枚」のみ朱) 源利義(花押)

(坤)此書小林歌城大人の持給へるをかりて梅村鶯雅にうつさせて靜

幽堂に藏む

天保六年乙未二月二十六日一枚(「一枚」のみ朱) 源利義(花押)

(朱)家集九十一枚「續集八十八枚」共二百六十九枚

(藤原元雄筆本の轉寫本、下卷末に歌數丁數を記す 九一一・二二一・四四五)

金葉和歌集 寫 十卷一冊

五六二

源俊賴奉勅撰 和もと薄袋綴なりしを補紙を加へ三枚を糊して一丁と
なし綴裝に改裝路考茶布表紙 七寸五分五寸二分 墨附百一枚 十一
行 外題なし

奥書 仰大外記師象朝臣以冷泉家證本「書寫同令校合早」
參議藤原濟繼

以右奥書本令書寫之處不審事在「之仍申出李部王御自筆御」木重一枚
可爲證本者乎」 桑門(花押)

(室町中期寫、卷頭修理大夫顯季の歌より初る所謂二度本にして流布本
に比して語句歌序少異あり、藤原濟繼は姉小路氏 九一一・二二一・四
七)

建禮門院右京大夫集 寫 一冊

五六三

建禮門院右京大夫著 和綴裝路考茶地織紋古裂表紙見返し金箔摺出し
鶴龜模様 五寸八分五寸三分 墨付六十九枚 十行 題簽左肩丹色紙書
名同 内題なし

(室町末期寫、富山房文庫佐佐木信綱校註「建禮門院右京大夫集」參照
九一一・二二一・四六九)

古今集聞書 寫 二冊

五六四

花山院長親著 和袋綴改裝淺縹色表紙 用紙裏打 七寸七分五寸五分
十二行 題簽左肩後補「古今集耕雲聞書上(下)」 内題「古今和哥集聞

書、「落合氏藏」「下田氏記」

奥書 (一、序注の末) 醍醐寺殿耕雲和尚仁御傳授之間書也」秘と大

秘」此和尚ハ南方花山院右大將長親

(下卷末) 此聞書令一見早大槩無子細參差所と任」筆令添削者也于時

在病床心神昏眊」定有混謬歟字盡又狼藉後日可覆校而」已

つたへをく心をあたにもらすなよ」古今の露のことの葉

應永十八年辛卯季春初九日」畹雲山人御列在之

同年孟冬再見重所と書加早」畹雲

(補註ありて次に) 于時永享十二年庚申正月廿日書之

(再)に補註ありて次に) 右書原本五冊一序二春秋ノ上三秋ノ下」物名

四戀五哀傷大野所也」此書者東野勿常縁自筆之本也

(近世末期寫 九一一・二三一・イ三九)

古今集抄の奥に書ける詞 寫 一冊

五六五

加藤枝直著自筆 和袋綴改装梅鼠色表紙原表紙共表紙 九寸三分六寸三

分 三丁 十行 外題なし 原表紙外題左肩書名同 内題なし、「橋氏

藏書」

奥書 寛保二年八月 爲直

(古今集抄全部五冊を寫しその奥に記せる詞、枝直のなほ爲直といひし

時のものなり 九一一・二三一・イ五三)

古今集序註 寫 一冊

五六六

和綴葉裝黄色立稿古製表紙見返し金箔 用紙鳥の子 八寸一分五寸五分

五十二枚 十行 題簽左肩朱色短冊書名同

奥書 讀進候之趣無相違 常縁判

(宗祇作と傳ふる古今集註の部のみの寫しなり、書中朱にて聲點返點訓

等を附し、語釋・批評・傳説等に涉りて傍註書入あり、「近衛賴家公 古今集

全部」なる琴山の極めあり、「竹柏園藏書志」二六八頁參照 九一一・二

三一・イ三七)

古今清濁聲句訓說等聞書 寫 一冊

五六七

齋孝著 下河邊長流筆 和袋綴薄茶色表紙 五寸一分五寸一分 三十四

丁 十行 題簽左肩「古今集聞書 清濁聲句 訓說等」 内題書名同下に「和歌所遺

老齋孝」とあり

奥書 (卷末) 天和三初春日 長流(花押)」 以齋孝一流本寫之

(卷初七葉に清濁を朱記す、以下訓說 九一一・二三一・イ一〇一)

古今問答 寫 二軸 闕

五六八

卷子本(冊子を卷子本に改装)納戸鼠色表紙見返し銀切箔散らし 八寸九

分 上卷二十五丁(卷初と卷末の各一丁を缺く)中卷三十丁 約十行 外

題なし 内題(中卷)「古今問答中 問者予答者三位入道」

(室町期寫、「古今和歌集注」五七九一と同筆、同じく消息の裏に書

く、上卷は序より卷十まで中卷は卷十一より卷十六までを收む、下卷を

缺く、或人の問へるに俊成の答へしもの、佐佐木信綱「國文學の文獻學

的研究」參照 九一一・二三一・イ二二)

古今和歌集 寫 二冊

五六九

紀貫之等奉勅撰 和袋綴丹色表紙 九寸八分九寸二分 十二行 題簽第

一册缺第二册中央「古今和歌集二」、「麻都能夜」

(室町期寫、竹柏園藏書志には或は飛鳥井宋世の筆かといふ 九一一・二二一・一三三)

古今和歌集 寫 一册

五七〇

紀貫之等奉勅撰 堯孝・圓雅筆 和綴葉裝金銀泥花鳥模様表紙 八寸二分五寸三分 百六十枚 十行 題簽左肩「古今集」堯孝圓雅兩筆 奧書名判有、「英王堂藏書」

奧書 (貞應二年七月廿二日同廿八日の定家奥の次に)

本云此古今奉附屬良守上人了

文和二年三月十八日

西方行者頓阿

(堯孝筆) 此集端一兩枚染筆與詵釋新續古今集 隱名作者 圓雅 所令終功也以相「傳之本加校合早可爲證本者」歟

嘉吉三年十二月廿二日「和歌所老拙法印(花押)」

(堯孝の奥にいふ如く卷首二頁は堯孝筆他はすべて圓雅筆なり、「竹柏園藏書志」一六〇頁及び「鏡草」參照 九一一・二二一・一三五)

古今和歌集 寫 二册

五七一

紀貫之等奉勅撰 和袋綴紺色表紙 用紙鳥の子 七寸二分五寸 十行 題簽左肩「(書名同)上(下)」
奧書 (貞應二年七月廿二日の奥書の次に)

(墨) 写本云「此一帖依結城越後守藤原政胤懇切之所望」凌七十有餘之老眼終書功與之予參江州御「陣之次於蜂屋之旅館走筆豈成文字形」乎深恥外見者也」 長享三年三月十六日沙彌榮雅御判

校本云 嘉元三年七月上旬以藤大納言爲世卿」本書寫之京極中納言定

家卿自筆秘」本也字跡大略摸書之如朱點不違一字寫」之秘本經日數之

此集爲難去所望永正十年仲商之比以飛」鳥非亞相雅親卿法名榮雅御自筆之本書」寫之令讀合者也然或人」青蓮院宮尊道真翰之秘本所持之衆同」年孟冬上澣令恩借之數反加校合訖即相」替之所具注之兩本之御奧書載右而已

(次に歌の順序の異なるもの及び漢文序斷片一枚ありて)

光明峯寺道家卿御眞筆古今上卷奥ニ有之

書本奥云「建長六年四月廿八日書寫了」同年九月十七日心靜令校合了」同十二月十日委細校了

同八年四月五日以九条前内府御本」京橋入道黃門兩本等一度校了

本云「文永六年五月十四日書寫了」同六月八日一校了云々」文永十年

四月十一日書寫了了」一校了

(朱) 貞和三年十二月一日以證本一行書端御子左 前大納言自筆 校合之序詞假名

字以下如本直之作者同前」哥字大略相替之間不及直之字之声同寫」之要須之字少々直付之 釋(花押)太 如此在判 (割書六字のみ墨)

(墨) 右同道家卿御眞筆古今下卷奥ニ有之

書本奥書云「建長六年八月廿七日依或人之御詵」令書寫了

校本事」定家卿本越本 伊本 寂兩本飯本」清一木九條内大臣御本」俊木此大

草子也家隆卿本

判云 建長八年八月三日以八木以七人」校合了相違事一帖書置了了親行在

本云「文永六年六月三日書寫了了」同八日一校了云々」文永十年五月

三日書寫之了」一校了

家々稱證本之本作書入以墨減哥令別書之

(朱)貞和三年十二月二日校合早字と声以下」如上帖寫之

釋(花押) 太如此在判林 (割書六字のみ墨)

(墨)牡丹花門弟賴實以筆跡之本書寫「兩度令校合朱書ニハ寫之字付

飛鳥井雅俊卿以眞筆之本校合少々相違之」所朱ニテ書イ之字付

光明峯寺道家公以御眞跡之本校合相替」儀并朱書寫之

(藍)爲備寺來證本不厭不堪手跡以相傳本」令書寫之追而集數多悉本

校合早居」此家輩莫失此志猶若得尋眞應證」本者可加勘校而已」下野

守平常緣

(墨)右之校本者野州眞跡小堀遠効所持也」彼以本令讀合朱點并相替

之儀以藍色」書寫早

(近世初期寫、書中朱藍の声點及び校合の書入多し 九一一・二三一・イ

四九)

古今和歌集

寫 二十卷一冊

五七二

紀貫之等奉勅撰 文明十九年宋世筆 和綴葉裝波形織出布表紙 用紙鳥

の子 四寸五分三寸八分 百七十五枚 九行 外題なし

奥書 文明十九年四月五日於越後國「符中四ヶ日之間終書功早乎但」爲

令暗誦哥許書之仍號」略本者也奉授上杉相州房定朝臣定 宋世(花押)

(九一一・二三一・イ九五)

古今和歌集

寫 二十卷一冊

五七三

紀貫之等奉勅撰 和綴葉裝栗梅色地荷荷模樣金欄表紙見返し紺紙金銀箔

散らし 用紙鳥の子 八寸二分五分一分 墨附六十四枚 十行 外題なし

奥書 (貞應本の奥書の次に) 這古今集之筆者自始至第五妹哥之」下王

生忠岑秋夜哥左中將爲道朝臣也」同部自讀人不知妹露哥至素性法師」

紅葉之歌法印定富也同部自興風」深山歌至第十六哀傷部之終左中將」

爲冬朝臣也自第十七雜部至黃門奥書」大納言實久卿也紛失之後實久卿書

續了

抑右本卷と改觀部と点氣先」覽後哲撥一而大成恰相似四聖善」縁奇珍

絶綸也日正本曰眞蹟尤堪握翫」者乎

寛永十一年霜月十五葉 權大納言光廣(花押)

(鎌倉末期寫、烏丸光廣の奥記何によれるや不明、但し筆蹟の四區分は

孰れも所謂定家流にして光廣の云ふが如く別筆なり、奥書に云ふ爲道、

爲冬は二條家爲世の男、實久は清水谷實久か、定家自筆本を模したるか

と思はる、所あり 九一一・二三一・イ一〇三)

古今和歌集

寫 二十卷二冊

五七四

紀貫之等奉勅撰 文永二年西住・聖音筆 和胡蝶裝改裝赤地錦四角八角

つなぎ中に草花模樣表紙 背紺地金欄 見返し金紙 用紙雲母引肌色染

紙八行 題簽左肩白紙「古今和歌集上(下)」内題「古今和詞(歌)

集第一(一十)」「古今和詞集卷第十一(一二十)」

奥書 (上卷本紙末)一校了 筑州前吏朝議大夫源孝行在判

文永二年五月三日書了申刻」 右筆西住

(下卷本紙末、貞應本の奥の次に)

文永二年五月四日書了午時」 執筆聖音

(右の年記の前後に異本の奥を次の如く記す)
異本奥云

——二——七——二——癸亥イ本(貞應二年七月廿二日の意)

同廿八日令讀合訖書入落字了

傳于嫡孫可爲將來之證本

弘安七年八月廿八日於龜谷御房書寫了

此本者京極入道中納言定家卿自筆本ヲ

借請天可令書寫也 則文字不遑本也云

識語 (上卷末補紙) 此集西住法師眞跡云 爲珍奇者也

兔園叟(花押)

(下卷末補紙) 此集上下爲珍翫一定而可謂證本者乎

兔園叟(花押)

(箱蓋表) 兩筆「古今集」西住法師上「聖音法師下」奥書曼殊院覺如

法親王

(貞應元年本を文永二年西住聖音二僧の書寫しその後遠からざる頃貞應

二年奥書本を以て校合を加へしもの 九一一・二三一・一〇九)

古今和歌集

嘉祿本 寫 二十卷一冊

五七五

紀貫之等奉勅撰 和綴葉裝納戸鼠色地草花織紋布表紙表見返し金紙 六

寸八分四寸 墨附百九十三枚 八行 外題なし

奥書 此集家と所稱雖説と多且任師説又加「了見爲備後學之證本手自書

之近代」僻案之輩以書生之失錯稱有識之秘事」可謂道之塵姓不可用之

但如此用捨只可」隨其身之所好不可存自他之差別志同道合者可用之」

嘉祿二年四月九日 戸部尙書判

(室町中期寫、「古今和歌集大覺寺殿義性筆」なる琴山の極めあり 九一
一・二三一・一九三)

古今和歌集

清輔本 寫 二十卷二冊

五七六

紀貫之等奉勅撰 傳藤原家隆筆 和綴葉裝點紫地金銀泥山水模様表紙見

返し金紙 用紙鳥の子雲母摺 九寸九分五寸七分 (上)墨附百二十七枚

白紙一枚(下)墨附百三十四枚白紙六枚 九行 題簽左肩白茶色地模様

入短冊「古今和歌集上(下)」

識語 (上卷二枚目裏) 以貫之自筆本書寫古今也件本者於皇太后宮燒

失畢云と和哥等不似餘本其說頗違矣 通宗

(鎌倉期寫、袋草紙に古今の證本の一として擧げたるもの、轉寫本、假

字序の註を朱書し、本文の上下行間に墨朱の書入多く聲點あり、箱の表

に金泥にて「古今集家隆筆」とあり、「竹柏園藏書志」参照 九一一・

二三一・一〇九)

古今和歌集

貞應本 寫 二十卷一冊

五七七

紀貫之等奉勅撰 傳飛鳥井榮雅筆 和綴葉裝深縹色地草花模様布表紙見

返し金銀泥金銀切箔雲形模様 用紙鳥の子 八寸一分五寸六分 墨附百

五十一枚白紙一枚 十行 題簽左肩白茶色地模様入短冊書名同

識語 (貞應本の定家奥書ありて卷末に)

這古今和歌集全部一冊者飛鳥井殿榮雅眞跡外題者近衛殿種家公筆」

翰無疑似者也一筆猶重之況二美」備乎可謂聯璧矣緹巾一襲之」家珍

也」萬治四年暮春中旬 牛庵」隨世(判)

(室町期寫、墨朱にて書入あり、朱にて聲點あり、二重箱にして中箱の

蓋裏に「飛鳥井雅親筆」と書けるは徳川齊昭筆なりといふ、外箱の表には「古今集飛鳥井榮雅筆」とあり、又「後樂園」「樂」の印記あり、「竹柏園藏書志」参照 九一・二三―一五

古今和歌集聞書 寫 二十三冊

五七八

堯惠筆 和綴葉裝紫地に金泥にて各冊異なる圖を描く 絹表紙見返し金切箔散らし布目模様紙 用紙鳥の子 五寸二分五寸二分 七行 外題なし 内題 首卷「古今和歌集序 紀淑望」 第一冊「古今集序中辭句相傳聞書」 第二冊「序中秘傳切紙一卷載之」 第三冊以下「古今和歌集卷第一(二十)」、「英王堂」「有胤」

奥書 (第一冊) 第一ノ帖「延徳四年壬子十月廿六日」和泉守藤原憲輔ニ當「流二条家令授之間書」二十二卷之中一部之序「初卷也」 法印堯惠(花押)

(第二冊) 第二ノ帖「延徳四年壬子十月廿六日」當流二条家之間書「和泉守藤原憲輔令授」全部二十二卷之内序分ノ後ノ一卷是ニハ序切紙ヲ寄テ「令書者也」法印堯惠(花押)

(第三冊) 第三ノ帖「二十二帖之内」法印堯惠(花押) 傳付藤原憲輔

(以下第二十一冊に至るまで「帖」の番數を變ずるのみ)

(第二十二冊) 第二十二ノ帖「二十二帖之終」當流二条家玄淵之義也「延徳四年壬子十月廿六日」法印堯惠(花押)傳付藤原憲輔

(宋にて訓點あり、法印堯惠が和泉守憲輔に二條家相傳の註を授くべく書けるもの、「竹柏園藏書志」百六十八頁参照 九一・二三―一三)

古今和歌集注 寫 二冊 闕

五七九

顯昭著 卷子本(冊子を卷子本に改装) 納戸鼠色表紙見返し銀切箔散らし原本共表紙 九寸三分 丁卷三五丁半辛卷二十三丁 十三行 題簽左肩白茶色地金泥模様絹「古今注」第一枚目原本の表紙なり 外題左肩(丁卷)「古今注」第十二(辛卷)「古今注」第十九(丁卷)「古今和歌集卷第十一戀哥一」「古今和歌集卷第十二戀二」(辛卷)「古今和歌集卷第十九短哥」「古今和歌集卷第廿」 奥書 (丁卷) 文治元年十月廿六日「注進之」

重賜差聲

顯昭

(辛卷) 文治元年十一月十七日 古今一部「依梁園教命勘注了大略釋」奥義外無先是宰相入道 俗名教長 法名觀蓮 被注獻賜件本加披閱糺邪正」仍多引載彼抄而已」 重賜全部差聲 顯昭

(室町期寫、原本表紙裏に「口少早納」と記す、丁卷は平假名本、續々群書類聚所收本頭書以外に「予按云」と頭注あり、辛卷は片假名本、兩卷とも朱點あり、原本は二卷づゝ一冊とし全八冊なりしもの如し、消息の裏を用ふ、「竹柏園藏書志」参照 九一・二三―一九)

古今和歌集註 寫 一冊 闕

五八〇

和胡蝶裝銀泥草花丸形模様表紙 七寸九分五寸五分 墨付十二枚白紙二枚 十行 外題中央「古今和歌集卷第十物名」内題「古今和歌集第十」「正親町藏」等 奥書 一校了

(室町末期寫、卷十のみ、二條家系統の註、佐佐木信綱「鏡草」参照)

九一一・二三一・四一

古今和歌集註 寫 一冊

五八一

北畠親房著 和袋綴横縞香色表紙 九寸三分七寸一分 百九丁 十三行
題簽左肩白紙「古今抄」内題なし、「竹柏園文庫」

奥書 此註則後村上院正平年中仰於中院入道准后親房公而被註仍宗匠

二條流 撫拾於諸家兩說所註也則「先師中書大王 宗良親王宗匠 爲世卿外孫 加一見而

上奏之相傳」之早 嬭雲子釋竺源惠梵

應永卅二年臘月廿八日於燈下終写功早斯註本相傳「當流口傳」等書加

隨分爲證本之処依令失却而「重拭老眼馳秃筆訖此本未校合也烏焉馬

謬」雖有之先写留早 重可加校合候也」竺源叟 行季 六十五

(近世初期寫、本書後半古今和歌集二十卷の註は續群書類從所收本に缺く所なり、その序の註に於ても續群書類從と異なる所あり 九一一・二三一―一八五)

古今和歌集論選稿本 寫 一冊 闕

五八二

和袋綴共表紙 九寸二分六寸三分 七十九丁 十七行 外題左肩書名

同、「小林藏」

(近世末期寫、卷第十一より卷第十三に到る詳註にして眞淵契沖の説を引くこと多し 九一一・二三一―一六一)

後撰倭詞集 寫 二十卷二冊

五八三

清原元輔等奉勅撰 和綴葉裝網目地花蝶縞布表紙 見返し雲形金砂子模

様 八寸三分五分、十行 題簽短冊左肩「後撰倭詞集上(下)」内

題外題に同じ、「英王堂藏書」

(上冊扉「徹書記後撰和歌集上下二冊

山翠

」下冊末「後撰和歌集上下二

冊徹書記眞蹟也一古齋」の古筆極書を貼布す、本文と同筆を以て間々異本校合あり、「竹柏園藏書志」六二三頁參照 九一一・二三一―一五)

後撰和歌集 寫 一軸 闕

五八四

清原元輔等奉勅撰 卷子本(もと冊子なりしを改装)深縹色金欄表紙見

返し金箔布目紙墨流し鳥の子の補紙あり 十九枚を切繼ぐ一枚約十行

外題なし 内題「後撰和歌集卷八冬部」、「根津文庫」 「原尹祥印」 「子

孫永保」 「森家藏書」

(鎌倉期寫、卷第八のみ、佐國目錄、大木、或本等を以て校し、朱點を

かけ、古體假名にて校異を記し、また大和物語等を引きて作者の傳を考へたるあり、註句流布本とまゝ、異同を存し、對校本も亦すべて流布本と

系統を異にするもの、如く、異本と稱すべきも亦證本たるべきもの 九

一一・二三一―一九)

後撰和歌集 天福本 寫 二十卷二冊

五八五

清原元輔等奉勅撰 和綴葉裝横縞古裂表紙見返し白茶色地金銀泥及切箔

散らし模様紙 用紙鳥の子 八寸六分五分八分 墨附百九十六枚白紙七

枚 二枚目表及二百三枚目裏銀切箔散らし山に草花模様 替題簽左肩短

冊佐佐木信綱筆「後撰集 姉小路基綱卿 筆本」

奥書 筆者 姉小路中納言基綱卿

(室町中期寫、奥書の次に貼紙にて「姉小路殿基綱卿眞蹟御奥書西三條

殿稱名院(印記「翠山」)の極めを附す 九一一・二三一―一七)

五代集類題 寫 七冊

五八六

富士谷御杖(北邊館二世富士谷)編 和袋綴裏葉色表紙 七寸七分五寸四分 十二行 外題左肩書名同下に冊數順を記す

(三代集類題—五九—の姉妹編にして同體裁の編、後拾遺以下新古今迄の勅撰集につき類別す、この書初めに「おほむね」ありてその態度を示す、卷二迄は卷數を記せど以下なし一春夏、二秋冬、三—四戀、五別旅祝哀傷、六名所神祇釋教 七雜、を收む 九一一・二三—イ二三)

西行法師集 寫 一冊

五八七

西行著 和袋綴灰汁色表紙 八寸七分六寸五分 二十七丁 十二行 外題左肩書名同 内題「西行上人集」、「墨翠館藏」、「淡洲文庫」、「澁谷文庫」

「進藤家」

(近世初期寫、周嗣本系統本、初二丁一本を以て朱書校合せり、朱書一本の前書他本になきものあり、これは藤岡本板本以外の集による校合なるべし、伊藤嘉夫「西行法師全歌集」三一〇頁參照 九一一・二三—イ六三)

山家集 寫 一冊

五八八

西行著 和綴葉裝肉色糸と灰色糸とにて三角を重ねて石疊模様を織出せる表紙見返しすかし模様入金紙 用紙鳥の子 七寸七分五寸六分 墨附二十九枚白紙七枚 十一行 外題なし

(室町初期寫、一首を二行に書す、周嗣本系の山家集の順を遂ひて抄出せるもの、「後小松院山家集一冊」の極札あり、箱に佐佐木信綱筆「山家

集傳後小松院宸翰本」なる外題あり 九一一・二三—イ二七)

山家集 寫 一冊 闕

五八九

西行著 和袋綴縹色表紙 八寸四分六寸 五十一丁 十行 外題なし 内題なし

奥書 本書本云

山家集哥三千百十二首也其中」より三重集をはゑらひ出られ」たるなり但百首をのそかれたり」此山家集本哥の次第もしとけ」なくみたれ侍り哥のかすもいま」三十一首たらす正本はなら伊勢」にそ侍なる尋とりてかゝるへし

(近世初期寫、下卷のみ、所謂古山家集なり、伊藤嘉夫「纂訂西行法師全歌集」參照 九一一・二三—イ六五)

山家集 和學講談所本 寫 三冊

五九〇

西行著 和袋綴縹色地金砂子雲形模様表紙 八寸七分六寸 十一行 題簽左肩(書名同)上(中・下)、「和學講談所」温改堂文庫」

奥書 以上歌數一千五百五十三首」本云一千五百七十二首云々」凡此書本落字僻字太多之又不紊哥繁多也 (不明)可校證本

今山家集之外又有山家中抄 被畧拔」此集内書出者也」

西行法師俗名範清號佐藤兵衛尉

建久元年二月十五日入滅之由隆信朝臣」集也

此山家集密々申出」禁裏御本遂書写校合早尤」可爲證本乎」

于時文祿三年季春上澹」玄旨判」

(近世初期寫、異本校合多し、卷末に「一本」を以て三首を補へり、伊

藤嘉夫「纂訂西行法師全歌集」参照 九一・二三―一（一）

三代集類題

寫 八卷六冊

五九一

富士谷御杖（成元）編 和袋綴裏葉色表紙 七寸七分五寸四分 十二行
外題左肩書名同下に所收卷數を記す

（三代集の歌に全部題をつけて類別したるもの、「五代集類題」―五八六一の姉妹編、一二、三四各合綴 九一・二三―一（二五）

〔散木集註〕

寫 一冊

五九二

顯昭著 下河邊長流筆 和袋綴薄茶色表紙 四寸八分五寸一分 四十六

丁 十行 題簽左肩金泥入白紙「顯昭抄」 内題なし

奧書 壽永二年十月七日奉「梁」教命註進之「重下給差聲了」顯昭

右以顯昭自筆本写茲尤秘藏々々 墨付四十六丁 長流

（初一丁表「虫損已下同」として虫損箇所を示す、卷中朱の聲點を附す 九一・二三―一（九九）

詞花和歌集

寫 十卷一冊 闕

五九三

藤原顯輔奉勅撰 傳二條爲氏筆 和袋綴裝繪皮色地菊花散らし表紙 見

返し銀切箔 用紙鳥の子 八寸一分六寸 墨付四十八枚 九行 題簽左

肩縹色金砂子散らし短冊「詞花和歌集上」

奧書 右詞華集 自卷第一者二條家爲氏卿の宸筆無疑者也「依所望加疎毫

到第六 赤面々々」寛文四甲 冬冷泉左中將藤原」爲清

（南北朝初期寫、卷六までを收む、被除歌を載せず、「這詞花集一冊者二條家爲家卿之息爲氏卿之真跡也殊其裔冷泉爲清卿之證記於卷末則何疑

之哉加之外題者細川女旨法印所筆而可謂猶合璧是誠希世之佳珍也雖然世多贗而不免味者之譏故聊附一語以解後來之惑者爾弘化丙午暮春古筆了因（花押）」の折紙を附す 九一・二三―一（一〇五）

拾遺集不審附 拾遺愚草不審

寫 一冊

五九四

三條西公條著自筆 和袋綴瓶覗色表紙 九寸七寸 墨附十五丁白紙二丁

十二行 外題左肩 「拾遺集不審 拾遺愚草同」 内題「拾遺和歌集」「拾遺愚草」「新撰菟

玖波集」「杉園藏」「明曆」

奧書 （拾遺和歌集の奥）條々委細可注給ひ殊更物名部一向無分別名」

共々委可被仰下ひ

（拾遺愚草の奥）此一冊如形以朱注付愚意ひ拾遺無相傳集候「古人猶

不付手斗繁ひ拾遺愚草歌是又冥見其」恐ひ管窺分注付ひ一向無不審事

之處不注之 又」無之見處同前ひ御一見之後可被投火中ひ不可説々

々」不得隙事ひ間連々注付不及再見ひ不可有正跡ひ」 仍覺

（仍覺―三條西公條一の朱にて解を施せるもの、本文も同筆なり、卷末に新撰菟玖波集若干句を掲げ注を附す 九一・二三―一（四五）

拾遺抄

寫 一冊

五九五

顯昭著 和袋綴焦茶色表紙 八寸八分六寸三分 二十八丁 十三行

題簽左肩書名同、「杉園藏」

奧書 壽永二年五月八日依 仰注進之大様除奥義」抄哥其後又下預差聲

早 顯昭

建元元年七月廿二日奉授二品大王了 顯昭

弘安五年三月六日一校了 侍從雅有

(室町末期寫、片假名書なり、右奥書ある本の寫し 九一一・二三—イ
四三)

拾遺和歌集 寫 十卷一冊

五九六

傳日比正廣筆 和綴葉裝納戸色梅竹織出布表紙 用紙鳥の子 八寸七分
五寸九分 八十六枚 十行 外題なし

奥書 于時康正二年仲冬下旬於洛陽四條坊門烏丸「草庵拭老眼讀數紙早
(卷首に松月菴正廣筆なる古筆極札を貼附せり、正廣は正徹の門弟日比
氏、書中まゝ朱書校異を施し作者の履歷を傍記せる所あり 九一一・二
三—イ五七)

拾遺和歌集註 寫 一冊

五九七

和袋綴代赭色表紙 七寸六分五寸五分 七十八丁 十一行 題簽左肩白
紙書名同 内題「拾遺和歌集」、「人中芬陀利華」、「木村正辭圖書」

(近世中期寫、卷第一より卷第九までの註也書中主旨法印の説を引く所
あり 九一一・二三—イ七五)

拾遺和歌集標註 寫 四冊

五九八

和袋綴濫引表紙 八寸九分六寸三分 十二行 外題「(書名同)花(鳥、
風、月)」、「朝田所藏」、「木邨正辭圖書」

(本文間と校異を施し、花鳥二冊の卷十まで詳しく標註し、眞淵説玉勝
間の文をも引きたり、風月の二冊は本文を記すのみ、竹柏園藏書志云ふ
或は清水光房著かと 九一一・二三—イ六七)

新撰萬葉集 寫 二卷一冊

五九九

和綴葉裝櫻鼠色地銀泥草花模様表紙 八寸四分六寸 墨附四十七枚 十
行 外題左肩佐佐木信綱筆「新撰萬葉集上下合本」

奥書 新撰萬葉集

以詩讀歌號菅家萬葉集 菅家撰也「二卷書也序曰寛平五載秋九月廿五
日下」卷延喜十三年八月廿一日云と是他人撰也或「説源相公説云と如
何

(江戸中期寫、上卷漢文序を缺く、墨朱青にて異本との校合あり 九一
一・二三—イ五九)

千載和歌集 寫 二十卷二冊

六〇〇

藤原俊成奉勅撰 豊原統秋筆 和袋綴栗梅色地金泥草鳥模様表紙 九寸
三分六寸六分 九行 題簽左肩剝脱の跡あり外題なし

奥書 申出春宮御本本寫早「此集美覽之本卷物廿卷也料紙色紙白表紙
青 紫檀摺貝 撰者自筆外題金泥 中務權少輔 納時繪手箱」蔣葦手件葦
羅 軸 露丸 伊經書之

手撰者自筆云と和哥二首圖之其哥曰

和哥の裏に千々の玉藻ハかきつめつ「万代までに君か見むため 蓋に
蔣也」後の世もなをたのむかな君か代に「あへるは法のうき木とおも
へは 身に蔣也

文治四年八月廿七日以撰者皇太宮大夫入道自筆」之本自書寫之雖手跡
見苦爲家證本書之不兼」之所と行向彼撰者之許相尋子細直付早尤證本
也」宮内卿在判 秘本也
給保季早在判

又本奥書云 二位入道 賢空 成實以木寫之

以此等之數本具令校合愚本仍今所令三寫也但以「愚筆令書寫之間文字形不可有正躰只依數奇志」忘後日之嘲而已

應永卅四年丁未年正月日 前上總介範政在判

入道正三位皇太后大夫俊成本名顯廣 法名尺阿撰去壽永年之中奉可撰進上之院宣文治三年九月之比羨覽之「此集持參之時召御前有寂感尋聞食時繪歌」則以「震筆令書置御翌日預御教書狀云」撰者詠頗今少可撰加進之仍後日切入自詠云々其後撰「者詠卅五首云々」此子細以彼子息侍從定家說所注置也

于時應永卅四年三月重而加校合早從四位下源朝臣範政室町在判

（室町末期寫、初丁表貼紙に「千載和歌 豊筑後守統秋寫筆 加筆 光廣卿」の極めあり、別筆にて異本校合註記多し、上卷二丁表註記と同筆にて拾芥抄明月記心敬私語及び玄旨の説を抄す、これと同筆にて下卷裏扉に「千載集中秀歌」と題する記あり、「竹柏園藏書志」一七五頁参照 九一一・二三一・二九）

千載和歌集下 寫 一冊

六〇一

藤原俊成奉勅撰 文明九年源貞滋筆 和綴紙粉色表紙 七寸二分五寸九分 五十九丁 十行 題簽なし外題左肩「書名同」内題「千載咏詩集卷第十六（一二十）」、「小寺姓玉晃文庫」

奥書 文明九年閏正月「於鞍馬寺書之」妙法坊御所望之間「依難（之）勢不願後日嘲」染筆早 源貞滋

（卷十六より卷二十までを收む、外題の下に同筆にて「教山」とあり 九一一・二三一・一九一）

撰集菅公歌鈔 稿本 寫 一冊

六〇二

千葉葛野編自筆 和袋綴改裝落葉色表紙原表紙共表紙 八寸九分五寸五分 十六丁 八行 題簽左肩白紙書名同 原表紙外題中央「書名同」

草稿本「内題「菅贈大政大臣歌集」、「三多」

奥書（青）右四季雜凡四十八首皆出于集歌 鈔出

（朱及青にて書入あり原表紙外題の右に青にて「他日校合未畢」とあり 仲田顯忠が補訂を加へたりといふ、版本菅原贈太政大臣集を合綴す、岸本由豆流手澤本 九一一・二三一・一八七）

續詞花和歌集 寫 二十卷二冊

六〇三

藤原清輔著 猪苗代兼誼筆 和袋綴白地綠色散らし模様表紙 九寸七分 六寸三分 十行 外題左肩「續詞花 上（下）」、「稻屋之印」

奥書 以九条三位隆教本撰者 自筆書寫校合早
（別丁）此續詞花集廿卷全部上下二冊「者以 久我家御本令書写了 八雲御抄云續詞花集廿卷有序」長光雖可爲闕勅撰「二条院崩御不遂之云々當時所」世希可秘藏者也

寶曆十年秋八月朔「法橋平入道」兼誼（花押）
（清輔の漢文の跋あり、朱にて校合あり 九一一・二三一・一四七）

橘爲仲集 寫 一冊

六〇四

橘爲仲著 和綴葉裝種々の色紙を貼り合はせたる表紙 八寸六分五寸九分 十九枚 十二行 題簽左肩裏葉色紙「橘爲仲集西行法師自筆之寫」内題なし、「青木印」

(近世末期寫、朱にて一本と校合す、青木信寅舊藏 九一・二三—七七)

槻の落葉續日本後紀歌考

狩谷掖齋書入本 一冊 六〇五

荒木田久老著 「寛政の三とせといふ年のむ月」永非幸直序(秦文信書)

「寛政三年八月」田内秀真跋 和袋綴裏葉色表紙 八寸五分五寸九分

四十二丁 四周單邊五寸五分五寸一分但し上部一寸標記の欄あり 題簽

左肩「槻の落葉純日本後紀」(被損)全「内題「槻の落葉」、「青裳文庫」」森氏開萬

册府之記「大槻文庫」

刊記 伊豫國人 田内秀真發行

寛政六甲寅五月「大坂博勢町佐野屋橋筋」播磨屋新兵衛

識語 (見返し) 此書朱筆標記掖齋狩谷翁「所自書宜秘藏云

明治癸酉四月二日

枳園立之錄

(天明八年八月十一日なる久老の考を本文とし久老の再考及び刊行者秀眞の案を標記して出す、狩谷掖齋の書入は今井似閑、村田春海、加藤千陰等の諸説に自説をも加へあり 九一・二三—一七)

貫之集

寫 十卷二冊

六〇六

紀貫之著 和綴葉裝縹色地草花模様布表紙見返し金砂子雲形模様 用紙色替り鳥の子 六寸七分五寸七分 外題なし 内題「紀將作歌集卷第一」

「紀將集第二(四、五)」「紀將集局第三」「紀將歌集第六(七、九)」

「紀將調集第八」「紀將哥集第十」

(近世初期寫、西本願寺本三十六人集の中なる貫之集上下二冊の模本、

貴紳の臨寫せるものか原本の趣致を得て精妙なり、箱に「紀將集寫二冊」とあり 九一・二三—一七三)

二條太皇太后宮大貳集

寫 一冊

六〇七

大貳(高階成章女)著 傳金森帶刀筆 和袋綴藍刷毛目卵色表紙 八寸

一分六寸一分 二十五丁 十行 外題左肩書名同

奥書 入撰集哥數「金葉一詞花一千載一新勅撰七續後撰一續拾遺一玉葉

五」續後拾遺一新千載一」

一校早」墨付廿五丁

(近世初期寫、書中間、異本校合あり、勅撰集に入りたる歌にはその集名を傍記せり、表見返しに「金森帶刀筆」の紙片を貼る 九一・二三—一五二)

貧道集

寫 二冊

六〇八

藤原教長著 井上文雄筆 和袋綴共表紙 用紙攻證閣の柱刻ある十一行 罨紙 外題左肩書名同、「歌堂文庫」「弘綱藏書」

識語 (表紙右肩) 參議教長卿集

奥書 (墨) 天保七年七月十六日一校早」歌堂閑人

(朱) 此集は參議教永卿の詠也さるは久」安六年崇徳院へ百首の哥を奉られし」哥にていちしるし文雄先生のかたみに」と我にあたへられし也疎藏すへし」 佐々木弘綱

(續群書類從所收奥に「以佐々木信綱氏本及丹鶴叢書本校合了」といふ信綱本は本書なるべし 九一・二三—一七一)

堀川次部百首 群書類従本 一冊

六〇九

塙保己一編 和袋綴卵色布目紙表紙 八寸八分五寸九分 四十四丁 十行 題簽左肩白紙墨「羣書類従百六十八」他に表紙右肩に墨にてたゞちに「堀川次部百首」内題「永久四年百首」を朱にて「堀川院百首と訂正す、「稻廼舍藏書」

奥書 (墨) 享和三亥年十月寫早

同四年正月以清水濱臣本一校早 源正路

文化十一年七月以正路本写早 平景寛

(文化十一年長尾景寛が群書類従本に清水濱臣、新見正路本の書入れを寫せしものなり、朱にて本文校正、墨にて上欄註記す 九一一・二二二・一五五)

紫式部集 寫 一冊

六一〇

紫式部著 和袋綴縹色表紙 八寸七分六寸七分 二十九丁 十行 外題中央「紫式部集古寫本」内題なし

奥書 (上畧) 右書様者青蓮院尊圓親王「御自筆之故書付之此一冊者定

家卿自「筆之本也草子之寸法書様以下似字形」不逢一字如本写置加校合者也此草子如「之一丁面又三丁目之面又草子之始而裏押」付候一丁以上四面者透写書之者也透写之分朱驗在之以上十一面也

天文第八幕秋下旬廿九日

(近世初期寫、奥書の次に原本の寸法を示し他本との校合につきて記す 九一一・二二二・一八三)

紫式部和歌集・和泉式部和歌集 寫 一冊 六一一

和袋綴縹色布目表紙 九寸六寸九分 四十二丁 十行 題簽左肩白紙書名同、「田安府芸臺印」「田藩文庫」(表紙)

紫式部和歌集 紫式部著 内題「紫式部詠」

奥書 本云此一冊以定家卿自筆本書寫之早

和泉式部和歌集 和泉式部著 内題「和泉式部詠」

奥書 本云于時慶長第二仲冬天對夜雪之寒燈書寫之早「丹山隱士在判本文旨以自筆之寫本之者也」亞相拾遺藤判

(近世中期寫、二種を續け書きにし各補遺を附す校合あり 九一一・二二二・一八三)

林葉和詞集 寫 六卷一冊 六一二

俊惠著 和袋綴改裝白茶色表紙 用紙裏打 八寸一分六寸四分 七十四丁 十二行 外題左肩別筆「林葉和歌集」扉左肩又別筆「林葉集 俊惠法師俊頼朝臣息」

奥書 右林葉集者俊惠法師俊頼朝臣子息哥也

此寫本者將軍家常徳院殿以御物御本所令書「寫之本也以件本書寫之校合早」

是適依亦交易街中求得而公軌「所秘之書也其所謂希見爲貴」者誰不感焉一日東山翁有「檢斯集云今視大夫公雋永」豈羨家君之什乎於諸跋于「燈下」 藤前之一月九日 屈曲子

(近世初期寫、公軌は東山翁即木下長嘯子の門人なりと、新校群書類従對合本と同系のもの 九一一・二二二・一八三)

鎌倉時代和歌

家隆卿集

寫 二卷一冊

六一三

藤原家隆著 和綴葉裝栗梅色地菱形模様金欄表紙見返し金銀箔散らし用紙鳥の子 五寸三分四寸五分 百五十枚 一行 外題なし

奧書 本云乾元二年五月日書寫校合了」以彼本應永十六年初夏」寫了尤可爲證本歟」同廿四年六月朔日又寫了」以異本猶令校合早

兩帖千首外下卷哥數尙在之云々」

(室町初期寫、所收歌上卷「大僧正四季百首」「百首和哥爲家卿家會」

「百首和歌」(六家集本に「擬作」とあるもの)「百首和哥洞院攝政家」

「詠百首和哥前内大臣家會」、下卷四季之部に於て六家集本に比して少異あり、まゝ、異本校合あり、「三井寺持教法印家隆卿集哥書一冊」なる古筆見室の

極めあり 九一一・二四一(一三二)

玉葉和歌集

寫 二十卷二冊

六一四

藤原爲兼奉勅撰 和綴葉裝深縹色表紙 用紙鳥の子薄様 七寸八分六寸

七分 十行 外題なし、「園」「春木文庫」「書備之藏」「子孫寶之」

奧書 此集應 鳳詔之旨忘免款之醜以三」七之光景終兩帖之書功者也遂

度々」讀合改字と訛謬而已殆可謂證本者乎

文明十一年淺臘廿二日」右中辨藤原光忠

以奏覽正本准后家本卷第十七欠 重而讀合直付早但此集奏覽以後少と被改之事

在」之歟仍大概以御本朱書之定令用捨者也

(室町末期寫 九一一・二四一(一九))

拾遺愚草

寫 二冊 闕

六一五

藤原定家著 和袋綴草色菊花唐草模様金欄表紙 用紙裏打 八寸八分六寸九分 墨付上八十八丁下五十七丁 十行 題簽左肩(書名同)上

(下)内題上卷「拾遺愚草員外雜詠」下卷「拾遺愚草下部類哥」

奧書 (上卷)雜哥之中寂末百首尤可秘」處也彼是爲證本也 正徹(花押)

識語 (箱蓋裏) 徹書記 拾遺愚草全部二冊 上墨付五十七枚 木下長嘯 外

題上下共

右各真蹟無疑者也」筆蹟關主 古筆了仲(花押)

正徹筆一段勝たり且外題有之上者」長嘯子之藏本歟定家卿詠哥之可爲

證本者也

(室町期寫、下卷と員外雜歌との二冊のみ 九一一・二四一(一七))

拾遺愚草

寫 四冊

六一六

藤原定家著 和袋綴縹色表紙 七寸三分四寸八分 十行 題簽左肩「拾

遺愚草上(中、下、員外)」

奧書 (上卷) 本云弘安元年六月十日以作者自筆草本校合傍直付早」端

書位署等入寫彼者也檀紙切紙也題書所或上或下

(室町中期寫、佐佐木信綱編「藤原定家歌集」岩波文庫本の底本なり、

竹柏園藏書志二二四頁參照、上卷末に「本云此百首雖不入拾遺愚草依爲

百首私此帖加書之早」と註して員外の「百首春」を添ふ 九一一・二四

一(一九)

拾遺愚草

寫 三冊

六一七

藤原定家著 田村建顯筆 和綴葉裝深縹色地草模様布表紙 用紙鳥の子

十二行 題簽左肩白茶色短冊〔書名同〕中〔下〕上卷題簽剝脫す

奥書 (中卷) 右拾遺愚草三冊者以定家卿之自筆透寫之本冷泉爲綱朝臣所持

元祿二年二月下旬於洛陽「京極寺町見性寺校合之

人數 于時四位中將 爲綱卿 實陰朝臣

長義朝臣 豐滋

以右校合之本染錐毛新寫之尤爲無類之」本矣

元祿六年十二月日 右京 太夫建顯

(田村建顯は一ノ關の藩主なり 竹柏園藏書志二二四頁參照 九一一・二四一四一)

拾遺愚草

和學講談所本 寫 三卷三冊 闕 六一八

藤原定家著 和袋綴花淺葱色上下金切箔散らし表紙 八寸七分六寸 十

一行 題簽左肩白紙「拾遺愚草中」「拾遺愚草下」「拾遺愚草員外」和

學講談所「溫故堂文庫」

奥書 此拾遺愚草上中下并員外今度命書生令「新寫之抑肖柏老人拔六家之集而」

則爲抄書之号然而彼本集連々所「望之故也殊於此集者雖元來所持」之

爲作一具也矣」慶長第三戊戌季秋望日「丹山隱士女旨在判

(上卷闕、細川幽齋與書本の近世初期轉寫本、各冊表紙「東廿九」と刻

せし白紙其の他整理番號とおぼしきを記せし二紙を貼る 九一一・二四

一四一一)

拾遺愚草員外

寫 一冊 六一九

藤原定家著 和綴葉裝山吹色地桐唐草模様布表紙見返し金紙 七寸四分

五寸一分 五十七枚 十行 外題なし 内題「員外雜哥」

卷首 員外雜哥 一字百首 一句百首 已上建久元年六月

伊呂波四十七首二度 同年六月

文字銚哥廿首 同年同月

卅一字歌二度

十五首哥

十三首哥

已上片時終篇狼藉左道家有」其恥雖不加入家集其中一兩」首有

撰取哥等仍追書連之

四百六首

(南北朝時代寫、右所收歌目錄の外「養和百首披露之後猶可詠堀川院題

之由」云々の前書ありて「堀川院百首題」を收む、「住吉神主津守國冬員外雜哥一冊」

なる古筆極めあり 九一一・二四一四三七) 六一〇

拾遺愚草抄出聞書

寫 一冊 六一〇

三條西實隆著 和袋綴薄代赭色表紙 一尺二分七寸七分 八十四丁 十

二行 外題なし、「山口文庫」等

奥書 大永六年仲春上旬注釈之「權大納言正二位藤原朝臣實隆在判

此抄出老父伯内大臣二位殿御講尺清津書物也下愚」秘閑窓爲守當家一

流之玄淵書写所令校合」也堅可被制外見者哉

天文十一年卯月中旬令書写之」于時權大納言正三位藤原朝臣公條在判

此書物稱名院殿自筆以御本書写校合之本也然者」源晴氏朝臣御所望候

之条雖惡筆憚多御懇意不」淺小間令書写進献ひ不可有外見候者乎

元龜四年癸西三月下旬令書写之訖」常如野釋樹閣(花押)

(元龜四年本の轉寫にして江戸初期寫なるべし 九一一・二四—イ一七)

新古今和歌集 寫 二十卷一冊

六二一

藤原定家等奉勅撰 甘露寺親長筆 和綴葉裝水色古代裂表紙裏金砂子に金箔散らし紙 用紙楮紙 八寸四分六寸五分 墨附百九十七枚白紙一枚十三行 題簽左肩白茶色青漉込短冊本文同筆「新古今和調集」
奧書 (朱) 本云民部少輔從五位下紀朝臣實爲

法名礼果 詳取房判

(墨) 本云康安元林鐘上弦以正親町亞相忠孝卿 秘本書寫詔 前相公羽林藤判

(朱) 本云翌日具令校合加朱點了

(墨) 文明四年十二月廿九日以右奧書之 本勾當内侍翌年二月七日終

寫功詔 猶不審事等繁多也以他本可校也

正二位行陸奥出羽按察使藤原親長五十歳(花押)

同十日令校合了猶有不審事

(朱) 同十一日自戀部加朱點自一至十先白加朱點者也都護(花押)

(墨) 同卅日以兩本令校合直詔(花押「親長」)

(次に目録・新古今被直事・後鳥羽院御跋・定家朝臣自筆本奥書・定家卿被進御室消息・家長朝臣自筆本奥書等ありて墨) 右書以或本書加了于時 文明八年三月十五日

和歌所寄人 按察使親長

(本文中作者名の傍に朱にて傳記、及び入集歌數等を註す、卷第十二の奥に「本云延文元年六月二日至此卷加切鏝者也」とあるはこの註のこ

となるべし 九一一・二四—イ三)

新古今和歌集 隱岐本 寫 二冊

六二二

藤原定家等奉勅撰 和袋綴白茶色菊花模様摺出表紙 九寸八分七寸二分 十行 題簽左肩「新古今和歌集上(下)」
奧書 本云承元三年六月十九日書之 同七月廿二日依重勅定披改直之 已上

號阿波院 土御門院之御宇

故二位入道殿自筆正本也仍不達一字書寫之 藤原隆祐在判

此本是後鳥羽院於隱岐手自有御撰定而家 隆之許被送遺也此号御撰本 仍彼卿自筆書 寫之而所止置家也朱合點之外皆除之

後覽知之于時寬元二年十二月十七日以彼自筆 之本書寫之爲備後代明 鏡執云前權介隆祐加 判形早尤爲尋重不愼底而已

已上千九百七十八首之内除哥三百六十七首 御撰定本千六百十一首也

(近世初朝寫、三矢重松等校「隱岐本新古今和歌集」解題六九頁參照 九一一・二四—イ二一)

新古今和歌集 烏丸本 寫 二十卷二冊

六二三

藤原定家等奉勅撰 和綴葉裝珊瑚珠色地銀色草葉模様表紙見返し金紙用紙鳥の子 九行 題簽なし外題左肩「新古今和歌集上」(下卷外題なし) 内題「新古今和調集卷第一(二)四、六、八、九、十一、廿」「新古今和歌集卷第五(七、十、十二—十九)

奧書(上卷末に隱岐本御奥書のうち「なを野への草しけき」以下ありて)書本云「此新古今者竹馬之時以御室御本所書寫也」延應元年十一

月十六日以或貴所御本壬生二位
自筆本也能、校合了不合點哥者於遠所被出哥也「仁治四年二月比以京極中納言入道自筆本」校合上之注寫之早
建長四年三月廿四日以大夫阿闍梨田嘉之自筆本校合早而朱點上之注同以付」之早抄序者此本雖有端依無其所「與令書寫也」(以上本文同筆)

不慮相傳訖 僧辨實「相傳早靄丸
應永十一年卯月一日相傳滿義(花押)

かくハかりへかたく「見ゆる世中に」うらやましくも「すめる」月かな

正五位上藏人右少辨藤原冬光「延德二年霜月廿三日」藏人右兵衛權佐藤原冬光

(下卷)書本云「下賜御本書之詔」承元三年五月十二日在判「同七月廿二日依重勅定被直改之」已上書本

以宮内卿家隆自筆本愷書寫之了「新本者是賜 上皇御本被書寫之」後依重 宣旨所、被直之正其草「本也即上皇召此本令書寫之御」云、弥爲備證本數度校合可「秘」

延應元年四月九日以梶井宮御所「御本一校早并作者名注早」彼御本云以證本五度校合了

(次に「新古今被直事」に七首をあげて)

此集者拾遺三品定家卿以自筆「所令書獻御室也其後又有」取捨事被直改之間如此令「注進之處又遣彼人之許」悉被直定了

延應元年十一月廿三日以前内大臣家「御本家隆二位
眞筆本能、令校合了但於合」點者於隱岐令抄御之本之定也「合點之外者被捨哥也
書寫本云校合本旁秘藏者也」努、不及外見在判

定家卿書進御室以件本「書寫早

(次に「定家卿消息云」として御室の「僧都御坊宛消息」ありて)
寛元、年六月十六日以京極中納言「入道定家眞筆之本校合了此本旁」可秘藏本也 在判

建長四年三月廿七日以大夫阿闍梨「田嘉之自筆本校合早
(次に「以家長朝臣自筆本校合了件本奥書云」として)

寶治元年三月廿三日左近大夫將監源朝臣「家棟自手院御所上北面所傳得也」左兵衛權少尉源盛棟(以上本文同筆)

不慮相傳訖 僧辨實「相傳早靄丸

應永十一年卯月一日相傳滿義(花押)

延德二季霜月廿二日「藏人右兵衛權佐藤原朝臣冬光(花押)

春の雨のあまねき御代を契かな「霜にかれゆく草葉からすな

識語 (箱蓋表貼紙) 新古今集無類正本
深可秘者也 二冊

(同裏貼紙) はこ蓋表の紙札は「不昧眞院との、正筆也

(圖書寮烏丸光榮筆本の原本、下卷終帖錯簡あり右奥書は正しき順序に直して録す、所々朱墨にて註し切紙にて合點を施す、武田祐吉「國文學研究歌道篇」小島吉雄「新古今和歌集の研究」参照 九一・二四一

五)

新古今集竟宴懷紙模本

寫 一軸

六二四

卷子本山吹花色金襴表紙 見返し布目金紙 用紙裏打上下裁斷あり 一尺一寸二分一尺二分 外題左肩佐佐木信綱筆書名同 内題なし 奥書 (末に本文同筆)

元久二年三月廿六日新古今和歌集竟宴「和歌

御製講師 右衛門督通具

講師 前上總介家隆

讀師 前太政大臣

(以下本文別筆)此一巻一座十九歌首「華翰墨痕昭然所稱者也」尤以可爲几上之珍玩秘襲「勿輕仍加後語證明焉」寛文甲丑季春中旬 正二位藤原弘資(花押)

(元久二年竟宴歌の寫しにして室町中期のものか、甲丑の年次なし甲辰の誤か、弘資は日野家、群書類従所收本と順序相異す 九一・二四一—一三)

新古今和歌集聞書 寫 一冊

六二五

東常縁著 細川幽齋增補 和綴葉裝水色地金泥草花模様表紙 見返し銀紙 五寸三分六寸一分 墨附百九枚白紙二枚 十三行 外題なし
奥書 此抄出連と請先達之説少と又加了「見書置一冊也不可他見之故筆」跡無正躰者也「平常縁在判

右一冊以東野州自筆本「令書寫尤可爲證本者也

文明二年三月日 宗幸在判

此集之抄出以右之奥書本書寫之尤可謂秘藏而哥數不幾首「漏脱多之仍年來所聞置之」義等今加之於常縁抄者分而爲「上下雖似有其恐所記非愚」意之僻案是以惠雲院殿「近衛太閤三光院三条西前内府等之御説」述卑詞者也旁以堅禁外見「深可納函底耳

慶長第二季陽下旬「丹山隱士女旨

(近世初期寫 九一・二四一—二九)

新古今和歌集聞書 寫 一冊 闕

六二六

東常縁著 和袋綴縹色地草花模様織出布表紙 八寸七分六寸四分 墨附百三十四丁 十行 題簽中央白茶色地金欄短冊「新古今集下」内題「新古今和歌集」

奥書 此新古今集抄二巻以右三人所跋之本謄書之希世之好本也予亦暇日「考古人之註解而增補其不足者數十」首令所補者其詞頭皆加鱗形之朱點「以分之是亦非予之私意矣之觀者」繹焉因以跋之云

寛永十五年秋九月日 八雲軒安元

識語 (表紙右肩貼佐木信綱筆) 八雲軒本新古今抄零本

(常縁・宗幸・幽齋の奥書ある流布本に八雲軒安元の増注せしもの、下巻一冊のみ 九一・二四一—三九)

新三十六人歌合 寫 一軸

六二七

妙法院宮堯然親王・聖護院宮道晃親王・大覺寺宮空性親王・中院通村・高倉永慶・中院通純筆 卷子本古金欄表紙 五寸五分八寸九分 用紙金泥草木散らし模様鳥の子 題簽左肩墨流し短冊「新三十六人哥仙筆者六人」

奥書 (筆者の名をあげて次に)

右各尊翰也尤可謂重寶者也「承應二年二月廿八日權中納言基定

(六人各六首づ、寄合書せしもの、基定は持明院家 九一・二四一—一五)

新選六帖類字 寫 一冊

六二八

和假綴共表紙 七寸九分五寸六分 三十二丁 十行 外題左肩書名同
内題「新選六帖抄」、「歌堂文庫」、「竹柏園文庫」

(近世末期寫、珍しき語句の歌を抄出し次に類似をのせ出所の丁數を記す 九一一・二四一・二五)

新和歌集 寫 一冊

六二九

藤原爲氏撰 和綴葉裝藍地草花織出模様古裂表紙 見返し金箔散らし紙

七寸四寸三分 二百二十九枚 八行 題簽左肩「新和歌集自一到十」

「青木氏藏書印」「牧氏藏書之記」外一印

(近世中期寫 九一一・二四一・二三)

檜葉和歌集 寫 五卷一冊 闕

六三〇

素俊著 和袋綴白紙表紙 九寸七分七寸二分 墨附五十六丁白紙二丁

十二行 外題左肩書名同 内題「檜葉和調(歌)集卷第七 (一十二)」

奥書 于時嘉禎三年季伏五日

建長七年七月十八日書寫之(花押)

本云修補之時次第聊相乱歟以他本追又校合之

虫損之間于時應永卅五年三月比修補之 中臣祐富在判

識語 (卷末貼紙) 檜葉集 若宮神祐定改茂筆也「祐明一男祐房四代之

孫」嘉祿二年補若宮神主」文永六年 死七十一」建

長七年 五十七歲之筆也

(卷末別筆) 此一巻八十市里元軍大人ヨリ予ニ給ヒシ也何クノ誰カコ

ト、モシラス後人ノ考ヘラマツノミ」愚禿之徒 祐護識

(江戸初期寫、卷七より卷十二までを收む 九一一・二四一・二七)

〔百首和歌集〕 寫 一冊

六三一

和假綴裝白地縹色漉込紙表紙 用紙消息袖中抄卷四及び和漢朗詠集の
故紙裏紙 四寸七分六寸六分 墨附七十五丁 十五乃至十七行 外題な
し 内題なし

卷首 (定家) 洞院攝政家百首」詠百首和哥」權中納言定家

(爲氏) 冬日同詠百首廣製和哥」弘長百首正二位行中納言兼侍從藤原朝

臣爲氏上

(爲世) 夏日同詠百首應製「和哥」正二位臣藤原朝臣爲世上」

(爲藤) 侍從中納言爲藤

(爲定) 元應御百首 爲定卿

(爲定) 秋日同詠百首應製和歌」正二位行民部卿臣藤原朝臣爲定上

(爲明) 「秋日侍太上皇仙洞同詠百首」應製和歌」散位正四位下臣藤

原朝臣爲明上(但し百首とあるも半丁六首よりなく殘部は散佚す)

(爲定) 八月十五夜同詠月五十首」……

參議正四位下行右兵衛督兼美濃介臣藤原爲定上

(釋空) 釋空

(爲明) 爲明

(爲遠) 右近衛權少將爲遠

(爲重) 爲重

奥書 (定家) 本云于時建武四年三月十五日以定家卿」自筆本不透一字

書寫畢 延文二年南呂中句之比不慮見」及之間不透一字書寫了尤」可

爲秘本者也(花押)

(爲氏) 一校了

(爲定) 一交了

(爲定) 貞和二年後九月日以家本爲明持參之書寫之雖一字不遘正本者也

延文二年十月日又書改了「一交了」

(次丁の表に五首ありて「一交了」と、百首中の大分を佚せる也)

(爲定) 一校畢

識語 (表見返し別筆にて左の目錄を記す)

百首定家「百首爲氏」百首爲世「百首爲藤」百首爲定「百首同」五十

首同「百首爲明」百首釋空「百首爲明」百首爲遠「百首爲重」

(延文二年寫、用紙裏文書消息署名日附に「道昭」又「厂應四 四月」

「中院大納(缺)」「通冬」等あり、定家百首和歌與書花押に同じ花押所々にあ

り、道昭・通冬恐らくは中院道顯同子通冬なるべし 九一一・二四一

三五)

〔冷泉爲相卿百首和歌〕

寫 一冊

六三二

冷泉爲相著 和改裝綴葉裝山吹色金欄表紙見返し金紙 墨付十六枚白紙

二十枚 九行乃至十一行 題簽中央海老色紙「冷泉爲相卿和歌」 内題

なし

(室町中期寫、)「夏日侍太上皇仙洞同詠百首應 製和歌 正二位臣藤原

朝臣爲相上」「夏日侍太上皇仙洞同詠百首應 製和歌 散位正四位下臣

藤原朝臣爲相上」の百首歌二種を收む、本文續群書類從所收「爲相卿百

首」と同じ 九一一・二四一(三三)

室町時代和歌

亞槐集 寫 一冊

六三三

飛鳥井雅親著 和袋綴白茶表紙 九寸一分六寸七分 九十六丁 十三行

外題左肩書名同 内題なし、「彰熙」

奧書 此一冊先考詠草存日未及編集之儀「夢後部類名亞槐集吾家之一集

也」子葉孫枝殊可尊重而也 明應壬子黃鐘中旬羽林中郎將藤雅俊

右者以環翠軒本令書寫之同一校畢

于天文四年五月八日 兵部少輔中原遠忠

(中原遠忠寫本の轉寫本、室町末期寫、中原遠忠は十市氏なるべし、

「夏日同詠百首應製和歌」を初めとする雅親の集 九一一・二五一一(三)

意路葉、うたのしめし 寫 一冊

六三四

和袋綴改裝蔦色表紙 用紙黃染紙 八寸四分六寸一分 三十五丁 十行

替題簽左肩白地金砂子綠色模様短冊書名同

識語 (表見返し) いろ葉哥序「元祿六年七月二日 橋木屋」左エ門

(室町末期寫、歌の頭にいろは歌を詠み込みし佛教教訓歌集 九一一・

二五一(一三)

常徳院殿集 寫 一冊

六三五

足利義熙著 和袋綴改裝薄銀煤竹色布表紙用紙裏打 八寸四分六寸三分

三十二丁、十一行 題簽左肩金紙別筆書名同

奧書 右御歌者常徳院殿御詠草也而以彼御「自筆奉書寫之早但件御本以

惣徳院より 急用之由候間寫殘申御詠共少々有之」則令返進之者也

(室町末期寫、常徳院即足利義熙の詠約三百首を年代順に集む 九一一・

二五—一五)

新續古今和歌集上 寫 一冊

六三六

藤原雅世撰 和綴葉裝黃茶色地寶塔模様布表紙見返し金銀切箔 八寸五寸六分 墨付二百二十五枚 十行 題簽左肩雀茶紙書名同

奥書 校合早

識語 (貼紙) 伏見殿道欽御筆

(室町初期寫) 上卷のみ、卷一より卷十までを收む以下闕、十三代集本に比するに歌數多く序文その他語句に多少の異同あり、孰れも朱書校合せり、『後崇光院御筆』始ハ伏見入道親王と奉稱候「新續古今集」伏見殿道欽御筆と小札御座候「元祖」古筆了筆ニ御座候」なる古筆極めあり 九一・二五—一五)

聖廟法樂百首 寫 一冊

六三七

正徹著 和綴葉裝改裝白茶色布表紙原表紙なし 七寸七分五寸一分 六枚 九行 外題中央紙雙邊書名同 内題「百首 聖廟法樂」

奥書 永享元年十一月自七日夜參籠同十三日曉退出社參看」經之間三日 詠之卒尔無極不可有外見者也

(室町中期寫) 内題の下に「千松末葉釋正徹」と記す 九一・二五—一五)

淺間宮和歌 寫 一冊

六三八

今川範政著 和袋綴納戸色五三桐模様表紙 七寸六寸五分 二十一丁 十行 外題左肩「天正四年古写本 淺間宮和歌 今川範政」内題なし

奥書 此詠草或所持之間書寫早依無類本少ミ不審之處不及校合者也 于時天正二丙子年卯月廿八日(花押)

(外題は萩野由之筆なりと竹相園藏書志に云ふ 九一・二五—一七)

長壽院内府九十賀和歌 寫 一軸

六三九

卷子木深縹色布表紙見返し金砂子及金切箔雲形模様紙 一尺一寸 題簽左肩短冊佐佐木信綱筆「みつのはま」内題なし

(室町期末寫) 文祿元年勸修寺内大臣伊豐の九十賀を行へる時人々の詠める祝歌を集めたるもの、卷初に伊豐の歌を書し次に九十人の詠を書く 續群書類從卷四〇二參照 九一・二五—一五)

僻案愚點二百三十首 寫 一冊

六四〇

飛鳥井榮雅編 和袋綴代赭色表紙 六寸七分五寸三分 三十八丁 十行 題簽左肩後補書名同 内題なし

奥書 (二十四丁裏) 僻案愚點二百三十五首」榮雅上 識語 (表紙題簽の下文同筆) 奥榮雅詠也

(室町末期寫) 御製・義政・一位局その他の作二百三十首を集め、奥に榮雅その他の詠を聚む 九一・二五—一一)

夢窓國師詠草 寫 一冊

六四一

夢窓著 和袋綴藤色表紙 七寸七分五寸七分 二十六丁 八行 外題左肩墨佐佐木信綱筆「夢想國師詠草」内題なし、「風早藏書」

奥書 (裏見返し) 右一帖暫時之間書寫之」加一校了 元祿二二十八」羽林中將藤(花押)

(群書類従本に相違する所あり 九一一・二五—一五)

江戸時代和歌

青つゝら 寫 一冊

六四二

清水珍一著 和袋綴淺藍色表紙 七寸八分五寸五分 二十二丁 八行

外題左肩墨「長歌集全」 内題「長歌集」、「珍磨」

識語 (第一丁表墨) うた 清水珍一

(第二丁表墨) 青つゝら 數ならぬ賤が言葉の青つゝら」くりかへ

しみよなかき心を

(伊勢山田の天保頃の盲人珍一の長歌集、朱墨にて加筆訂正す、表紙に佐佐木信綱筆にて「清水珍一歌集 青つゝら」と 九一一・二六一—四

五)

縣居落穂 稿本 寫 一冊

六四三

賀茂真淵著 和袋綴改裝代赭色表紙 原表紙は共表紙 題簽なし 八寸

五寸四分 三十七丁 九行 外題中央書名同 内題「賀茂翁落穂卷上

(「卷上」を朱にて消す)「賀茂翁落穂卷下」(全體を朱にて消す)

(墨朱にて訂正加筆あり、明治二十六年刊縣居落穂の原稿本なれど刊本と異なる所ありと竹柏園藏書志に云ふ 九一一・二六一—七五)

泉圓長歌稿本 寫 一冊

六四四

泉圓著 石川依平選 泉久澄編自筆 同跋 和袋綴改裝丹表紙 七寸九分五寸三分 四周雙邊六寸二分四寸四分の薄納戸色十一行罫紙 三十一

丁 題簽左肩雙邊書名同 内題なし

(泉圓は越後國蒲原郡五泉之里の人、天保八年十月十三日歿、男久澄その詠をあつめ石川依平の意見を得て編せし集の稿本なり、長歌及び文詞を收む 九一一・二六一—六三)

磯足集 稿本 寫 一冊

六四五

加藤磯足著自筆 和袋綴瓶覗色表紙 八寸八分六寸三分 四十八丁 十

二行 外題左肩佐佐木信綱筆書名同 内題なし

奥書 長歌七十五首 短哥九十四首

通計

旋頭哥六首 文詞三章

從安永三年至寛政十一年作之」磯足稿

(磯足の歌集にして文詞をも附す、表紙に佐佐木信綱筆にて「鈴屋門加藤磯足の集」とあり 九一一・二六一—四七)

一日千首詠草 寫 一冊

六四六

富士谷御杖(不盡谷成元)著 福田美楯筆 「弘化四年丁未仲秋」福田

美楯序「加賀守藤原爲周」跋 和袋綴澁引表紙 八寸一分五寸七分 五

十八丁 十行 題簽左肩雙邊「一日千首詠草富士谷述全」

奥書 寛政七年乙卯三月十三日自辰刻終日」終夜詠之」平安不盡谷成元 (成元二十五回忌に當り美楯自ら書寫せし由を序にいふ 九一一・二六一—五七)

會山和歌集 寫 一冊

六四七

日周著 「於時正徳三癸巳十一月六日梅啣散人石川常富序 和袋綴毘沙門格子模様款冬色表紙 九寸一分六寸三分 四十二丁 十一行 題簽左肩「會山歌集全」、「日顯之印」外一印

(水戸寂光寺住日周上人の詠歌誦詩を集む、徳川光圀との贈答多し、「竹柏園藏書誌」六二四頁参照 九一・二六一・二五)

柿園太郎百首 寫 一冊 六四八

小野務著自筆 和袋綴共表紙 八寸六寸四分 十一丁 十行 外題左肩書名同

奥書 此百首題ハ藤園のしたりくらのやの壽槐陰の護など」とたりあまりいつたりの人とともにものせんとて堀河院の百首」題をいさゝかとりかへて出せるになんさておのれはいにし月の「なぬかのひよりよみはしめて此とをかの夜すてによみはてぬなほ」次郎三郎をもものするあらましあれハ柿の太郎百首」と人ハいふめり

文政十一年五月 小野務 (九一・二六一・一七)

花鳥風月 寫 二冊 六四九

加藤千蔭著自筆 和大和綴(卷一) 附加表紙白茶色布表紙 用紙裏打七寸九分五寸五分 約六行 題簽左肩白茶色紙「うけらの芽生」原表紙共表紙 外題左肩「花鳥風月」 内題なし (卷二) 附加表紙水玉模様 漉込表紙 用紙添紙あり 八寸二分五寸八分 十行 外題なし原表紙共表紙 外題左肩「自丁卯至辛未第二」 内題なし 奥書 (卷二裏表紙) 起延享四年盡寶曆「元年」橋千蔭集

識語 (卷一原表紙) たちはなのすみよし詠草覺「自子至寅

(同裏) 式日哥會十三日「萬葉會讀」一ノ日令義解會讀「六ノ日」右何も九半時始「但哥會ハ四半時始日之長短ニより」長短ニよる」目唯「藤華卿芳

(卷二原表紙) 秋月亭(朱) 十三才斗の時の□にていと□□□し給へし(朱) い

(卷一は千蔭十歳より十二歳、卷二は十三歳より十五歳に至る詠草、卷一には墨にて訂正書入、卷二には墨朱にて書入あり、卷一は松本愛重博士及び竹柏園舊藏、卷一の替表紙題簽「うけらの芽生」及本文朱註は松本博士の筆、卷二は島田蕃根氏及び竹柏園舊藏となりしもの 九一・二六一・二二)

桂の落葉 稿本 寫 二卷一冊 六五〇

香川景樹著 仲田顯忠編自筆 「嘉永七とせといふとしの霜ふる月蓬園あるし」顯忠序 和袋綴附加表紙澁引表紙 原表紙共表紙 六寸七分四寸六分 墨付七十八丁 十行 題簽左肩書名同 原表紙外題左肩「桂のおち葉三編上」 内題なし

(序文によるに前板行桂の落葉一、二篇の次に集編せるもの、序文の上欄に朱にて「嘉永七年ハ蓬園先生年五十四なり、此本は先生自筆也」と記す、墨朱貼紙にて加筆多し、卷末に墨朱にて度々訂正加筆の後「物計七百二十二首」と 九一・二六一・一五)

かつら一葉 寫 一冊 六五一

香川景樹著 柳原安子筆 和袋綴共表紙 十丁 八行 外題中央書名同

内題なし

識語 (表紙左下) かけ樹の哥

(景樹の歌を柳原安子の抄録せしもの 九一一・二六—イ七七)

九月十三夜詩歌卷

寫 一軸

六五二

冷泉爲景筆 卷子本紺表紙 用紙裏打 一尺 題簽左肩金砂子散らし紙

佐佐木信綱筆「九月十三夜詩歌卷」冷泉爲景筆

竹柏園藏書志三五五頁參照 内題なし

奥書 壬午季穉之佳節「於岡氏齋醉□」迅筆「遙青子

(寛永十九年九月十三夜岡氏方にて筆者等六人のよみし歌十詩三を書せしもの、佚名氏作自筆の和文序あり、遙青子即ち爲景にして惺窩第一子 九一一・二六—イ三一)

九月十八日兼題歌集評

寫 一冊

六五三

伴林光平著自筆 自跋 和袋綴共表紙 七寸五分五寸三分 四周單邊六

寸六分四寸五分十行野紙 十三丁(表紙共) 十行 外題左肩「九月十八

日兼題」 内題「九月十八日兼題」

跋 (朱) あせ安き色ともみえぬ八千草の「おほかる中にとりわきてに

ほふは」萩の花摺」

九月廿三日朝

伴林光平

識語 (表紙別筆) 伴林光平評

(森本淑慎等の歌會における詠草に光平の朱にて添削を施し評を加へたるもの 九一一・二六—イ八五)

熊谷直好大人詠草

寫 一冊

六五四

熊谷直好著自筆 和假綴共表紙 九寸六寸七分 二十九丁 外題中央書

名同後人筆にて「景門高足自筆」と冠す 内題なし

巻首 (二丁目裏) この歌こゝろのうこく所にしたかひ「言葉の出る時

にまかせてよみ侍れハ」あるは題にかなひかたくあるハ戯に」過たる

なるへし又そのふりも古いまと」ましハれ、とこゝろみに書集て」師

のさを」待のみ 直好

(詠歌は四季戀雜に配列せり 九一一・二六—イ九)

熊谷直好家集

寫 一冊

六五五

熊谷直好著 間島冬道撰自筆 和袋綴縹色表紙 七寸七分五寸四分 四

周雙邊五寸九分四寸二分「靖齋」の柱刻ある十行野紙 三十一丁 題簽

左肩墨書名同「吉田嘉猷藏書」

(内題下に間島冬道筆にて「冬道撰」とあり 九一一・二六—イ六五)

契沖自詠自註歌

寫 一軸

六五六

契沖著自筆 卷子本玉蜀黍色地古裂表紙見返し金切箔散らし紙 用紙雲

母引き紙にて裏打を施す 五寸九分 もと半紙半截の横本を卷子本に改

装せしもの 墨附十二枚 外題なし 内題なし

識語 右此契沖一局兼而御称美之処紙鹿抹ニ」候へ共先ハ全備之物ニ候

間」贈進候御有余之節軸表紙御申付候者」可足素願者也

于時寶永八辛卯年三月某日 晩翠(花押)

小野田盛尹君

筆の穂の「ちりのみたれも」見えぬかな」なにはたかつの「水茎の跡

樂曲翁(花押)

(人丸影開眼の歌・仲丸・行平・喜撰・蟬丸を詠める歌及び林葉粟塵集

中の二十人を贅する歌の精細なる自註なり、漫吟集に出でたるもの比するに頗る詳し、箱に「契沖阿闍梨真蹟自註歌一軸」とあるは殿村茂濟筆なるよし竹柏園藏書志に云ふ 九一一・二六一・一三三

桂林集 寫 一冊

六五七

月庵(源直朝)著 三條西實枝序并跋 和綴葉裝萌葱色地金襴表紙 見返し 金銀切箔散らし紙 七寸六分五寸六分 墨附二十三丁白紙三丁 十行 題簽左肩金砂子短冊佐木信綱筆 書名同 内題なし

(近世中期寫、本文同筆にて實枝直朝に關する識語あり 九一一・二六一・八一)

鴻臚集 寫 五卷五冊

六五八

松平忠福著 松平とみのり編 文政四年五月主水正源朝臣(松平)正剛序 寛政十あまり二とせさ月源(松平)とみのり原序 文政四年松平貞征跋 和袋綴鳥の子表紙 六寸七分五寸五分 六行 題簽左肩香色紙外題松平正剛筆 内題なし

(忠福は上野國小幡藩主、歌は日野資枝門、寛政十一年五月二十二日歿、歿後一子とみのり主となり七百餘首を分類して編せしもの、同じく子貞征文政四年寫さしめて一部を本家をつぐ忠福の孫忠恵におくると跋文にいふ、正剛も亦忠福の子にして高木正直の養子となる 九一一・二六一・四一)

策傳和尚送答控 寫 一冊

六五九

安樂庵策傳著自筆 和袋綴空色波に花瓣をうけたる織出模様布表紙見返

し金布目紙 四寸七分六寸七分 八十五丁うち墨付八十三丁 題簽中央 剝脱の跡あり 箱中央に白紙ありて書名同 内題なし (策傳が當時の公卿諸侯風雅人と贈答せる歌狂歌漢詩等の控にして寛永九壬申より寛永十二乙亥に至る間の控なり、前後は雜記に用ひられて肩衝の名などあり 九一一・二六一・七九)

四季戀雜百首詠草拔萃 寫 一軸

六六〇

香川景周著自筆 卷子木瓶覗色裂地表紙 七寸八分九寸二分 美濃版袋綴本を裁斷卷子本に改裝せるものにして各葉半丁七行 題簽左肩紅紙 「景周百首」 原外題(第一葉表中央)「四季戀雜百首」詠草拔萃」スミ(朱) 内題なし 「濱雄藏書」「賓水」 識語 (第一葉表右上) 春 夏 秋 冬 雜 (同右下) 景周 (同左下) 校

(所收歌百首、歌頭に墨朱の點或は朱圈を附し間々朱墨を以て校正を施す、卷末葉別筆にて和歌二百を録し「意誠」と署す 九一一・二六一・九一)

十二月歌 寫 一軸

六六一

賀茂真淵撰自筆 卷子木檜皮色金襴表紙見返し金砂子雲形模様紙 七寸四分 外題なし 内題なし 識語 (卷末) 十二月歌「賀茂縣主真跡」無疑者也特歌「各甚秀逸

橘守部 觀

(十二月屏風の料に貞隆・千蔭・枝直・貞臣・春道・高豊・宇萬伎・信秀・さちを・真淵等の歌を輯め簡單なる註解を加へし草稿 九一一・二

六一・一二九

少林寺和尚和歌集 寫 一冊

六六二

杵柄著自筆 和袋綴縹色表紙 七寸九分五寸五分 二十六丁 六行 外題左肩書名同 内題なし

奥書 此書者少林寺閑居杵柄之自詠自筆也此和尚者數年日野資枝卿之御門人三而和哥之道ニ志深其名高シ」享和元年九月十三日斃

六十六歳 干時享和三年亥正月菅原吉尙書之置」行年三十歳

識語 (表見返し貼紙鉛筆書) 少林寺淨土寺」筑前福岡市材木町」僧惠

順開基 慶長九年黒田長政創建

(九一一・二六一・一七三)

鈴屋歌集壹之卷

稿本 寫 一冊

六六三

本居宣長著自筆 和袋綴表紙なし 八寸一分六寸八分 三十丁 約十五

行 外題なし 内題「鈴屋歌集壹之卷」附箋二十丁裏二枚 二十一丁表

二枚 二十二丁表二枚 二十二丁裏一枚 二十四丁裏一枚 二十七丁表

一枚 二十八丁裏一枚 二十九丁表一枚 「須受能屋藏書」

奥書 己ノ十二月廿八日此卷板下書了

(鈴屋集の原本、前輯鈴屋哥集卷二(〇八一―一)と共たるべきもの、玉小櫛の草稿の裏に書す、書入訂正多し、春歌より夏歌までを収む、裏の玉小櫛の草稿は桐壺の卷の零本なるも刊本と異同少からず、竹

柏園藏書志二二七頁及三八一頁参照 九一一・二六一・一九)

續草徑集

稿本 寫 一冊

六六四

大隈言道著自筆 和袋綴丹表紙 用紙薄葉 六寸一分四寸一分 五十八

丁 十二行又は十三行 題簽左肩雙邊刻後人筆書名同 内題なし

識語 (表紙右) 大隈言道自筆詠草」大正六年四月福岡にて得

(文久三年より慶應四年までの歌を集むといふ。日本文學大辭典参照

九一一・二六一・一六一)

田家集 寫 一冊

六六五

南里有隣著自筆 和假綴共表紙 用紙は白紙罫紙裏紙等を用ふ 九寸六

寸三分 墨附九十九丁 十行乃至十六行 外題中央書名同 内題なし

(南里有隣の詠草集、表紙の副紙左肩に「詠草集」とあり、卷末六丁に

は發句を録す 九一一・二六一・一四九)

野鴈集 寫 一冊

六六六

安藤野鴈著自筆 和袋綴改装茶表紙 九寸六寸二分 本文は紙型一定せ

ず裏打を施す 二十四丁 題簽左肩雙邊後人筆書名同 表紙右に題簽同

筆にて「安藤野鴈翁自筆稿本」

奥書 いにしへふりいまふりすへてハ二百首なり」いそちまてうたへる

哥をかきつめてふたも、ちにもなりに」けるかな

元治元年五月二十三日

(國歌大系第十九卷などにおさまるもの、原本、初丁表紙として用ひたる反古には若干の書目を掲げ「右以上元治元年八月二十二日彦九郎ニ預ケ置出立」とあり、その書目中に「野尸集六冊」と見ゆ、佐佐木信綱

「國文學の文獻學的研究」参照 九一一・二六一・一七)

一 柳越智千古家集 寫 一冊

六六七

一柳千古著自筆 和袋綴淺縹色表紙 七寸七分五寸六分 墨付百二十三
丁白紙三丁 十五行 題簽左肩「一柳千古家集全」

(内題の下に「文政二年四月」とあり末に「天保二年辛卯正月」以降の
作を収む 概ねこの間の詠草なり 九一・二六―イ五三)

一 一時百首 寫 一軸

六六八

香川景樹著自筆 享和二年筆 卷子本瓶覗色裂地表紙 七寸八分九寸三
分 美濃版袋綴本十二葉を裁断して卷子本に改装せるものにして各葉半
丁十二行、「賓水」「賓水珍藏」題簽左肩紅紙書名同

奥書 こは享和といふとしはしまりてまたの年の二月「末つかたつの國
猪名野の圓通菴にゆきてと、」まりをるほとある日かれこれ打つとひ
百首の「哥よまむとてはしりよみによみけるうたなり」ふた時の間に
といひ契りけれとおのく「かきをへ」たれば三時まり四時にもやおよ
ひつらむ」景樹
(九一・二六―イ八九)

蓬臆愚藻集 寫 一冊

寫 一冊

六六九

桃澤夢宅著自筆 和袋綴縹色瓶甲地龍紋模様表紙 八寸六分六寸 墨付
百三十七丁白紙二丁 十行 題簽左肩縹色雲形短冊書名同 内題なし、
「篁園文庫」

卷首 藪原樵匡衛(印「夢宅」)
奥書 (裏見返し) 寛政六甲寅歲八月良辰「振思亭

(自詠に上京の日記を附す、「竹柏園藏書志」六二六頁参照 九一・
二六―イ一三)

眞淵歌集 稿本 寫 二冊

稿本 寫 二冊

六七〇

賀茂眞淵著自筆 (卷一) 和袋綴澁紙表紙 八寸五寸四分 四周單邊六
寸五分四寸十行罫紙 三十一丁 外題なし 表紙中央に墨「〇」内題
なし 卷初「元文辛酉年遠州處士(この下紙を切取る)時居(東都)」(卷二) 和
假綴共表紙 七寸九分五寸七分 用紙無罫紙 墨付 三十七丁 白紙三
丁十二行 外題中央「眞淵家集二」左肩「〇」、各冊とも眞淵の藏書印な
り

識語 (卷一表紙) 元文六年「寛保二年」延享元年「三年」
(卷二表紙) 延享元年

(卷一は元文六年正月より延享元年七月まで、卷二は同年同月より寛延
二年二月までの歌集、卷二には後の岡部の日記、五社遷宮の祝詞をも収
む、卷二の裏表紙は百人一首註歌の覺書を用ふ、卷一は平出氏舊藏より
竹柏園舊藏となりしもの 九一・二六―イ二七)

漫吟集 十卷二冊

十卷二冊

六七一

契沖著 龍善昌編 龍公美校 本居宣長序 「天明紀元春江東彦根前文
學伏水郷人龍公美子玉」序 下河邊長流序 二世文學龍世華序 「天明
の七といふしハす」尾張國年魚市人渡への直磨跋 「天明丁未のとし
の暮正三位藤原良道」跋 和袋綴檜皮色表紙 七寸五分五寸三分 十一
行 題簽中央後筆墨「吟集春(上下破損)」契沖漫吟集秋冬、「富岡百鍊」
「鐵齋」「浪花心齋橋通北久宝寺町南へ入河内屋源七郎製本之記」「五橋

田生(題箋)

(目錄の前に「元祿壬午正月十一日水戸府下安藤新介爲明拜撰」の契沖の傳記及肖像を附す、帙には富岡鐵齋筆圓珠庵圖ありて題箋鐵齋筆「契沖漫吟歌集 鐵齋外史畧(印)」と「竹柏園藏書志」参照 九一一・二六一・一三七)

漫醉集 寫 一冊 闕

六七二

加藤雀庵(篠廼屋翁昶)著自筆 和袋綴引布目紙表紙 七寸八分五寸六分 四十四丁十二行 題箋左肩書名同 内題「漫醉集卷之二篠廼屋翁昶詠艸(印「爲蛤無叟」)」、「雀志文庫」、「酒竹文庫」、「若樹文庫」(俳諧歌をも收む 九一一・二六一・一七)

以萬葉集之倭哥詞詠之分 寫 一軸

六七三

松永貞德著自筆 卷子本媚茶色金欄表紙見返し金布目紙 八寸 もと冊子なりしを改装す 十七枚 十行 外題なし、「篁園文庫」(萬葉集中の詞によりて百一箇の題に百七首を詠じたるもの、訂正せし所あり、神田道伴の極めあり、伊勢松坂長井家より竹柏園舊藏となりしもの 九一一・二六一・一三三)

六人部是香家集 寫 一冊

六七四

六人部是香著自筆 和袋綴紅樺色表紙 七寸四分五寸二分 四周單邊五寸九分四寸二分十行罫紙四十八丁 外題右肩佐佐木信綱筆書名同 (表紙に自ら「嘉永五年詠艸」「同六年九月迄」とせる如く、その間の作をおさめ自らの補修あり ま、雜記をも混す 九一一・二六一・一一)

(五)

茂睡眞跡三十首并七首 一帖

六七五

戸田茂睡著 「天保の十とせまり一とせ長月の廿日池窗のあるし守部」序 水竹堂據了・大橋知良跋・天保十四年安西雲烟跋 和折本白茶色表紙 五寸二分二寸三分 二十九折 題箋中央書名同 見返し かくれ家の名歌入「茂睡眞跡三十首并七首」雲烟室藏梓 (竹内三位惟庸に添削を乞へる茂睡の歌稿を模刻せしもの 九一一・二六一・一八三)

不求橋梨本隱家勸進百首 一冊

六七六

戸田茂睡編 和袋綴縹色表紙 七寸五分五寸二分 二十一丁 九行 題箋左肩後補墨「隱家勸進百首」 刊記 元祿七甲戌歲九月日「江戸下谷車坂」木屋「伊兵衛刊 (九一一・二六一・一五五)

もみ子家集 寫 一冊

六七七

小曾根紅子著自筆 和袋綴代赭色表紙 九寸六寸五分 四十三丁 十行 題箋左肩波模様入短冊村田春海筆書名同 内題なし 識語 (見返し附箋村田春海筆) もみ子又ハやしほの子」ともいへり 老いての後に名を菅子と改む」こゝに菅子とあるハ其故也しかれとも」縣居集にも紅子とあれハ紅子を」もて唱ふへし又縣居の門人に其」比菅子といへる哥よみ別にあれは」かた／＼まきらハし菅子の名 此集」にはのそくへし

(巻首に書簡一通を附す)

けさきこえ給へる紅子」のいえの集うしのもとめ給ふ」とよおのれハもたらねは」そのむすめなる人をよひて」き、侍りしに、いにし年」火の事にあひてうせぬるか」是のみす、けたれとのこれり」とてもてきぬるをまゐらする」うしへよきにことゝりて」きこえ給ひてよよの子」後にきよい子と申侍り」紅子後に菅子と申侍りし」うつしとらせ給ハ、かへし」給ひてよときこえ給へ

よし子の君 ひさ子

(九一一・二六一・四三)

康定詠草 寫 一冊

六七八

松平康定著自筆 (本居宣長)評 和假綴共表紙 七寸二分四寸七分
十五丁 外題中央に「詠草」左より下部に「康定」とあり右肩貼紙佐佐木信綱筆「康定詠草二三八頁」 内題なし

(四十首を収めて清書批評を乞ひしものにして、若干の評言を書入あるは、康定の師事せし本居宣長なるべし 九一一・二六一・一一)

柳原安子詠草 寫 一冊

六七九

柳原安子著自筆 美濃判書簡反古四つ折を假綴せしもの共表紙 五寸三分七寸五分 表紙共二十八丁 外題なし 表紙に附箋して「柳原安子刀自詠草」と 内題なし

(表紙に「天保十四年秋草案」と墨書す 九一一・二六一・五九)

也未能狭知 寫 一冊

六八〇

日下部高豊著 「寛政のよとせなかつき中の九日源の朝臣道別」序 和袋綴肌色唐草模様摺出表紙 八寸八分六寸 墨付十八丁白紙六丁 十行

外題左肩書名同 内題「高とよおち集」

(續日本歌學全書二篇「高豊をち集」の底本 九一一・二六一・三九)

ゆきかひ 寫 一冊

六八一

弓屋倭文字著 賀茂真淵筆 和袋綴媚茶色地金砂子散らし布表紙(下半分の布を切取る) 八寸六分六寸二分 三十丁 十行 題簽中央(書名同)全

識語 (巻末)真淵書「梅谷市左衛門」所持

(弓屋倭文字の歌文集文布刊本二の巻にあたる部分、ゆきかひ(往復消息)散のこり(和歌)を収む、行數字配りなど刊本に等しく、刊本の十八丁裏、十九丁表の部分に缺き、橘常樹の跋文を署名なくして載する所、眞筆とするに若干の疑なきにあらず、題簽・識語は眞滋の筆なりと謂ふ、
「竹柏園藏書志」二三六頁参照 九一一・二六一・六九)

ゆく雁 寫 一冊

六八二

柳原安子著自筆 和假綴共表紙 六寸四寸三分 十丁 外題中央「香川景樹翁評點柳原安子歌」、内題なし

巻末(景樹筆)御述懐のかすく、いかならんやと」ともにかなしく見給へてなん

すべて御哥今少ゆるやかに」有たく□くはしくはまのあたり申參ひ」へし」 かしこ

(安子の詠草に景樹の加點あり 書名は竹柏園藏書誌による 九一一・

二六一・イ六七)

涼月遺草 稿本 寫 二卷二冊

六八三

鶉殿よの子著 村田春海筆 寛政五年春海跋 和袋綴濫引表紙 九寸六寸 十七丁 十三行 題簽左肩短冊「涼月遺草よの子集」 内題「涼月遺草上」(「余野子家集上」を白墨にて消したる上に書す)「涼月遺草下」、「竹柏園文庫」

識語 (卷末) 涼月遺草上下合一冊ハ平春海翁か筆「写する所にしていとめつらし佐々木信綱ぬし」祕架におけるを一日よみて一言かくはしるしそふ」
小杉樞郎 御歌所 四ノ上

(上巻は「月なみのゆきかひぶみ」下巻は歌文を載す、寛政五年刊の原本なるへし、白墨にて塗抹したる上訂正せる所多し、朱にて濁點及び句點を附す、また墨朱にて書入あり 九一一・二六一・イ三五)

倭詞五十人一首・同追加 寫 二冊

六八四

宮川松堅著 享保七年九月廿二日自序 内海顯糺追加序 和袋綴落葉色表紙 七寸五分五寸四分、四周單邊五寸七分四寸三分 題簽中央黄色「倭歌五十人一首上」「和歌五十人一首追加下」 内題「倭詞五十人一首」「和詞五十人一首追加」「志在不朽」「淡島寒月鳥の藏印」「花盟」(上は二十八丁に終り、下は二十九丁におこり五十二丁に終る、竹柏園藏書志参照 九一一・二六一・イ八七)

現代和歌

海士の囀序詞 寫 一軸

六八五

三條實美著自筆 卷子本金欄表紙 八寸五尺一寸 本文絹地一尺四寸 奥書六寸五分 題簽金紙「三條實美公眞蹟」 内題なし

末に 明治の十あまり二とせ六月」太政大臣三條實美しるす 奥書 足代翁の家集の序にとて物せられたる「三條公の眞蹟をみて」通禱
はまちとり昔のあとを」なかめても」むかしとなりし」きみをしそ」
おもふ

(足代弘訓家集の序の眞筆、通禱は東久世なり 九一一・二七一・イ五)

稻妻の巻 寫 三軸

六八六

田中光顯編 卷子本山吹茶色瑞雲織出し模様布表紙 七寸七分 題簽左肩光顯筆「稻妻の巻上(中・下)」 内題なし

識語 (卷初) 大正七年九月「裝潢の成りし日よめる
いなつまの」いとかよひし」ことのはを」つなき」と、めて」見す
る」卷かな 光顯

所收電報の差出人左の如し

上巻 藤波言忠(一枚)、入江爲守(二枚)、阪正臣(二枚)、大口鯛二(一枚)、千葉胤明(三枚)、加藤木の芽(四枚)、井關美安子(二枚)、小島染野(十枚)、今泉定助(一枚)、武島又次郎(三枚)、高田愼藏(三枚)、高田早苗(一枚)、熊澤一衛(三枚)、朝吹英二(一枚)、大町壯(一枚)、千葉・池邊・遠山英一・武島・大町五城・井原豊作合作(二枚)

中巻 佐佐木信綱(二十二枚)、池邊義象(六枚)、篠田時化雄(十二枚)
下巻 加藤義清(三十五枚)

(大正初めより七年迄編者に送られたる和歌狂詠をかきし電報送達紙を集めしもの 九一一・二七―イ七)

高崎先生詠草 寫 三十一冊

六八七

高崎正風著 自加筆 和假綴共表紙 七寸九分五寸五分 外題なし たゞ所收歌の製作年代と歌數を中央にしめすのみ 内題なし

(明治十一年より三十五年迄―但し十五年を缺く―の詠歌を年代別に四季戀雜に分類せるもの二十六冊と、それより選びし四季戀雜に分類せるもの五冊とよりなる、たゞし明治十三年分三冊にわたり選歌の分秋の部を缺く、筆者は不明なれどまゝ正風自らの補修あり、書名は竹柏園藏書志による 九一一・二七―イ三)

歌 合

外宮北御門歌合 寫 一軸

六八八

度會常長等著 原裝袋綴三十六枚を改裝卷子本とす 格子縞地七寶模様金欄表紙見返し金銀山水模様 軸菊を刻みし石、用紙消息等の裏紙 金銀箔散らし紙にて裏打を施す裏打の際文字の薄れしを模筆入墨せる所あり 七寸二分 外題なし 内題「歌合元享元年冬」、「上野藏書」

(南北朝寫、八十一番の歌合、歌片假名書き、判詞は片假名交り、裏文書文字不明、群書類従本に比するに勝・持の記入なく、又卷末作者附なし、書名は群書類従本による 九一一・二九―イ一一)

〔光嚴院三十六番歌合〕 寫 一軸

六八九

光嚴院御筆 卷子本白茶色金欄表紙 見返し銀切箔散らし紙 用紙鳥の子にて裏打 一尺一分 上下單邊八寸二分五厘 外題なし 内題「歌合」識語 (卷首裏端書) 貞和五年八月九日

(貞和五年八月九日に催されし歌合、作者は女房・隆家・新大納言・權大納言・太政大臣・公宗卿女・一條・源大納言・小宰相・公蔭卿・忠季卿・俊冬、女房はもとより光嚴院の御隱名、「後光嚴院宸翰特御製御点勅判御事 黄金七拾枚」云々と古筆了仲の折紙あり 九一一・二九―イ一三)

三十六人詔合 寫 一冊

六九〇

「弘長二年なか月」序 和袋綴肌色表紙改裝裏打裁斷あり 七寸二分四寸五分 三十二丁 八行 外題左肩書名同、「圓融藏」「加持井御文庫」「竹柏園文庫」「盛卿之印」

(室町末期寫、弘長二年九月成るものにて鎌倉時代歌人十八番の歌合、群書類従卷二百十六所收三十六人大歌合と同内容にして詞句に若干相違あり 九一一・二九―イ七)

定家家隆詔合 寫 一冊

六九一

後鳥羽天皇御選及び御點 和袋綴改裝菖蒲朝顔模様表紙 用紙裏打 九寸一分六寸 三十一丁 題簽左肩白紙「定家家隆詔合全」内題「定家家隆詔合 一名撰五十番哥合」

奥書 此詔合者於「後鳥羽院御遠所隱岐嶋」御閑居之間定給云々

御點 左十八首 合三十五首
右十七首

(近世初期寫、御點は朱を以て引く、所々に註あり爲家なりと云ふ、群書類從第二百十六卷に定家隆兩卿選歌合とあるものこれなり 九一一・二九一—一)

點取和歌類聚

寫 十六卷五冊

六九二

永宣筆 和袋綴縹色表紙 八寸七分六寸四分 十二行 題簽左肩書名同 (近世中期寫、第一冊に目次あり、「光台院殿五十首勅點後鳥羽院」以下「百首通茂仙洞勅點」に至る點取の和歌を收む、外に金泥櫻花模様短冊の題簽「點取和歌類聚全部五冊」及び「點取和歌類聚者」御家之御重寶之處「靈鷲院様御代永宣奉願致拜借□□□」此書和哥所之秘書ニ而地下之者一覽不相成儀「吾家之書物之内□□□□申送者也」□□永宣「同宣周」の二葉を添ふ、朱にて異本との校合あり 九一一・二九一—一三)

百番調合

寫 一冊

六九三

飛鳥井雅緣筆 和綴葉裝白茶色地蘭菊模様布表紙 見返し金泥雲形模様紙 用紙鳥の子 五寸四分五寸七分 墨付七十枚白紙七枚 十行 外題なし 内題「百番調合 左源氏 右狹衣」 奥書 (本文末) 本本文云「以秀長朝臣自筆之本」書寫畢

(次に所收歌二百首初句索引ありて次に)

此一帖祖父中納言「筆跡也猶以證本」可校合之 榮雅(花押)
(雅緣は飛鳥井榮雅の祖父、群書類從所收本と大差なし 九一一・二九一—一)

歌詠

神樂催馬樂

寫 一冊

六九四

石川依平著自筆 和袋綴共表紙 六寸五分四寸六分 四十七丁 十一行 外題左肩書名同 内題なし

識語 (表見返し) 神樂「東遊」催馬樂「風俗

(本文を記し己が考を附す 九一一・五一一—一五)

神樂催馬樂註秘抄

寫 一冊

六九五

一條兼良著 綾小路有俊筆 和袋綴白茶色表紙 九寸三分七寸一分 四十七丁 十三行 外題中央「神樂註秘抄全」内題「神樂註秘抄」「催馬樂註秘抄」

奥書 本云右神樂并催馬樂等秘註借筆他人以正「本令書寫數度校合入落字等了尤可爲證」本矣「康正元年九月十日 權中納言有俊

件正本依應仁元年天下之「兵乱預置邊土之處令紛矣了雖爲遺恨無力次第也仍以此本」可准正本者乎「文明元年八月五日記之 釋有璠

(別筆) 前一條殿御作歟 宗□^(後カ虫掛) 交合了

(所々頭註を施す「綾小路中納言有俊卿法名有璠」の貼紙を附す 九一一・五一一—一七)

歌舞

寫 一冊

六九六

小杉楹邨著自筆 和袋綴澁横縞表紙 二十字詰十行修史館原稿用紙 八十丁 外題左肩書名同 内題「風俗志料の中」「杉園藏」

(遊戯門として歌舞・踊躍・儻・歌垣・踏歌等の部門に分ちて記す、書中附箋朱書訂正書入多し 九一一・五―一三)

古本神樂催馬樂譜 寫 一冊

六九七

和袋綴水色表紙 九寸六寸三分 五十九丁 十二行 外題左肩書名同内題なし、「清水濱臣藏書」「酒竹文庫」「泊酒舍藏」

識語 (表見返し貼紙) 寅 十月十二日始卯三月廿二日終

奧書 (墨) 右東遊哥風俗哥者賀茂縣主所藏自筆書入之本也

安永五年丙申七月三日寫之 小林連義兄

(朱別筆) 享和壬戌仲夏一日加一校了 濱臣

(濱臣の墨朱にての書入あり 九一一・五―一三)

梁塵愚案鈔 寫 二卷一冊

六九八

一條兼良著 和袋綴縹色表紙 九寸二分六寸五分 六十一丁 十一行

外題中央書名同、「松下見林」外一印

奧書 (下卷末朱) 校本奥書云「右催馬樂之哥曲愚案の及所筆に任て言

を抄す子細は神樂」とおなし未案得書等有之しはらくさしをく追而可

書加之

(墨) 梁塵愚案抄後成恩寺入道大殿 御新作神樂催馬樂等之秘説

也 殊御自筆正本無所疑不可凌辱者也 桃竹禿居士良鑑

(近世初期寫、本文所々朱註校合を施す、上卷末奥書續群書類従所收本

に同じ) 九一一・五―一五)

梁塵秘抄口傳集 寫 六卷六軸 闕

六九九

卷子本厚手奉書表紙 用紙裏打あり 一尺二分 外題左肩「梁塵秘抄卷第一」「梁塵秘抄口傳集卷第十」「梁塵秘抄口傳集卷第十一(十四)」、

「平松藏」

奧書 (卷十末) 此本ハ妙音院入道御本敷而法性寺禪定殿下御邊二年

來御日記ニ相具テ被取置之由傳承也而二條中將經定朝臣預置ハ間

彼羽林又依爲雅曲之弟子蜜々借寄テ書寫之也

寛元四年八月廿一日送給之 同廿二日書寫也

此草子自入道中納言經資遺跡所尋取也

康曆元年長月十七日書了此奥ク御奥書 伏見院宸筆也御所御本自當家

文書出來之間 當道雖不相應猶依因縁以老眼書之類以枝業敷(花押)

(第一は梁塵秘抄卷一の斷片と同口傳集卷一の斷片にして中に章按とせ

し朱書入一つあり、綾小路家本の江戸期に於ける影寫、口傳集十、十

一、十二、十三、十四の五卷は完本にして卷一と同時同一人の影寫な

り、岩波文庫本の底本として用ひられしもの 九一一・五―一三)

梁塵秘抄卷第二 寫 二冊

七〇〇

後白河天皇御撰 代赭色行成表紙 九寸六寸五分 九行 題簽左肩白紙

「梁塵秘抄甲(乙)」、「郵岡氏印」「越後國頸城郡高田室直助平千壽所藏」

「藤酒屋藏」(表紙に貼紙)

奥付 此一帖不慮相傳 秘本事也 正詢(花押)

右一冊以寂蓮手跡徹書記門弟正詢奥書判形 有之本書寫畢

(近世末期寫、佐佐木信綱編「原本梁塵秘抄」の原本、同書解題参照

九一一・五―一九)

和漢朗詠集 寫 二軸

七〇一

藤原公任撰 安倍直明筆 卷子本白茶色金欄古裂表紙 見返し金銀砂子雲形模様紙 九寸三分無界 外題なし 内題「(書名同)上(下)」

奧書 (上卷) 貞和三年初秋十二日書寫訖前對州刺史安倍直明(花押)

本云舊本令紛失而家君欲被奉 當今之間聊書寫之 隨家君讀給愚身執筆點之末代以之可爲證本歟 菅長成

建長三年十二月廿九日侍御讀畢 文章博士 菅長成

本云弘安三年九月廿三日書寫畢累代之本紛失之間以愚本「書寫之本重所書也」 同十二月十日兩點畢 散位菅忠長

(下卷) 本與云建長四年四月十一日上下御讀畢去年十二月九日御書始

自同「十一日御書始有御讀三品光兼卿藏人佐資定等追雖」被召加御侍讀一身連日候御讀兩卷早速畢令亞黃軒「之幼聽不堪丹府之感悅者也翰

林主人菅在判長成卿筆也

故江大府卿爲匡時朝臣被勘付之文也云々「每詩哥所々ゆ、しうよき云々雖不知由緒所注付也

校點故季部大卿敦光朝臣家本異黃色點是也

弘安三年大呂二日朱墨兩點異同廿日如本注付畢

家本紛失之間以愚本書寫之本所自書也至紕謬「俟君子 散位藤達鑑

長英朝臣也

貞和三年初冬十六日上下書寫點畢「前對州刺史安倍直明(花押)

(以下青) 本與書云此書者更無私記強無秘說歟唯以讀傳兮爲說亦以叶理兮爲本以先人授」或人之本移點擇諸說與異說之善合點畢 翰林主人菅在判

惟範書之奧書云

寬元二年十一月廿八日光祿員外讀畢共撫白髮對此黃卷崇文之餘也」

大府卿菅在判

寬元二年仲冬朔日受大府卿說畢 光祿惟範在判

寬元四年四月廿三日受御說畢抑此書者以菅大府卿御自筆本誂他筆書

寫畢而去、年比以大府卿授惟範朝臣之書重勘付之偏感先後之學被施秘藏之」說云々今之左點是也翰林之與書中或人者即彼朝臣也然者可謂希代之證」本歟敢不可備聊余矣 桑門證胤在判

(墨朱青黃の書入異本校合多く朱の乎古止點あり、「七月廿九日古筆了

佐」の極書を附す、箱書「安倍直明」は小堀宗市筆といふ、「竹柏園藏書志」三五六頁參照 九一一・五五―イ三)

和漢朗詠集 寫 一冊 闕

七〇二

藤原公任撰 和胡蝶裝代楮色表紙 七寸四分五寸一分 四十八枚 六行

外題なし 内題なし

奧書 (四十七枚表) (破損本云カ) 正和二年十一月八日以家之說授男定長畢」

刑部卿 (破損在判カ)

曆應二年十一月廿九日終功了

(同頁左下に別筆にて花押あり)

(下卷「猿」の「曉峽藟深猿一叫」より「無常」末「いまこんと」に至りその前後を闕く、但し「無常」の部四十七枚裏に近世初期の補寫あり、朱にてヲコト點を施し訓點を墨書す 九一一・五五―イ五)

和漢朗詠集 寫 二卷 二軸

七〇三

藤原公任撰 改装卷子本納戸色地金欄布表紙 見返し金銀泥雲松模様紙
用紙鳥の子 金銀箔散らし紙にて裏打 一尺 天地八寸五分五厘有界九
分 題簽左肩「(書名同)上(下)」

識語 (下巻奥別筆) 主宗海

(室町初期寫、上巻無訓無點、下巻朱筆を以て訓返點を施す、『和漢朗
詠集全部』上巻世尊寺行能卿「下巻二條家爲冬朝臣」芳毫無紛者也」黃
金貳拾枚「寶永三年初秋下旬」古筆「了仲」の折紙を附す 九一一・五
五—一七)

今様集

寫 一卷一冊

七〇四

小杉楓郵編自筆 和袋綴澁引表紙 六寸一分四寸二分 用紙罫紙四寸二
分三寸三分 四十丁内白紙六丁 十三行 外題中央「今やう集」、「杉園
藏」

(古書に散見する今様を集めしもの朱にて書入あり 九一一・五六—イ
一)

謡曲・舞曲

一 萬箱王

寫 一冊

七〇五

和袋綴(丁の表裏を糊付す)深縹色表紙 見返し銀切箔散らし紙 用紙鳥
の子 六寸八寸四分三十一枚 十二行 題簽左肩金砂子散らし草花模
様白短冊「一萬箱王 原題ハ我
キリカネ」
(近世初期寫、本文濁點を施し音曲あり、別項「堀河夜討」一七一八—

「した」一七二—「大職冠」一七一四—「たかたち」一七一五—「夢
あはせ」一七二—「かまた」一七〇九—「笈さかし」一七〇八—「新
きよく」一七一三—は共に同筆同装なり、笹野堅「幸若舞曲集」序説後
篇第十一藤井氏本の條参照 九一一・六一—四三三)

謡抄

古活字本 六卷六冊 闕

七〇六

和袋綴改装檜皮色行成表紙 九寸四分七寸一分 無邊無界 九行 片假
名まじり 外題左肩墨「謡抄一(一十)」柱題はそれ／＼の曲目の上の
字を刻す例せば高砂の部分は「高」老松は「老」の如し、「殘花畫屋」
刊記(難波一・鶴嶋羽二・三輪二・鶴飼十の奥)台林刊行

(船辨慶十の奥)台林刊

(元和寛永頃刊、卷一・二・五・七・九・十の六冊を存す、「古活字版
之研究」五六八頁参照 九一一・六一—六五)

謡本

古活字本 二冊

七〇七

和袋綴藍色表紙 八寸三分六寸(西行櫻)十二丁(關寺小町)十五丁 七
行十三字 題簽朽葉色紙中央「西行櫻上(上のみ朱書)」「關寺小町下(下
のみ朱書)」内題なし、「高木家藏」「白雲堂圖書部」
(慶元中刊嵯峨本と異なる一異本の零卷「高木文庫古活字版目錄」三一頁
参照 九一一・六一—五五)

笈さかし

寫 一冊

七〇八

二十七枚 替題簽左肩紅色紙書名同
(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同装 九一一・六一—四九)

かまた 寫 一冊

七〇九

三十二枚 替題箋左肩紅色紙書名同

(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同裝 九一一・六一・六—イ四七)

曲舞集 二卷二冊

七二〇

和綴葉裝紺地金泥山水模様表紙 用紙胡粉引き 八寸五寸九分 七行

柱刻上部に「一ノ二ノおもて上」「一ノ三ノうら」等 題箋左肩「曲舞集上」下冊文字磨滅して不明 内題上冊「曲舞揃」下冊「曲舞小諷集」及び

「四季小謡揃」

(曲舞揃は上宮太子以下三十五番、曲舞小諷集は弓弦葉以下十五番、四季小謡揃は祝言以下四十九番を収む、各曲節を附す、嵯峨本版式に模したるもの 九一一・六一・六—イ六三)

四こくおち 寫 一冊

七二一

和袋綴卵色布目地羊齒及び源氏車模様表紙 見返し銀箔龜甲模様紙 十

六丁 十三行 題箋中央無邊紅色紙書名同、「紫影」

識語 (表紙右肩) 四冊ノ内

(もと六箇六頁分の挿繪ありしを全部切取りしあとあり、節付けなし、別項「くちきさくら」一八〇一—参照 九一一・六一・六—イ六七)

した 寫 一冊

七二二

六十枚 替題箋紅色紙左肩「した」

(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同裝 九一一・六一・六—イ三九)

新きよく 寫 一冊

七二三

三十七枚 替題箋左肩紅色紙書名同

(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同裝 九一一・六一・六—イ五一)

大職冠 寫 一冊

七二四

五十四枚 題箋左肩橙色地金砂子散らし草花模様短冊

(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同裝 九一一・六一・六—イ四一)

たかたち 寫 一冊

七二五

四十四枚 替題箋左肩紅色紙書名同

(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同裝 見返し破損す九一一・六一・六—イ三五)

伏見ときほ 丹緑本古活字本 一冊 闕

七二六

和袋綴改装替表紙澁引表紙 用紙裏打上下裁斷 八寸三分六寸一分 二

十二丁 十行十九字 挿畫七箇七頁分綴目に丁付あり 外題なし 内題

なし

(古活字本舞の木の、初丁より十丁まで落丁十一丁より二十二丁まで各丁折端約四行分及び十九丁裏を缺損す、補修の際十八丁裏は十九丁裏の挿畫と錯簡す、川瀬一馬「古活字版之研究」附圖第二六七の慶長年間刊古活字本伏見常盤と形式酷似す 九一一・六一・六—イ二七)

堀河 丹緑本 一冊 闕

七二七

和袋綴改装後補毘沙門格子牡丹唐草丹行成表紙 八寸三分五寸七分 三十三丁 十行 挿畫四周單邊六寸二分四寸七分 八箇八頁分 外題なし 柱題「堀河」

(第一丁と第二丁表半葉及び第三十四終丁裏半葉を缺く 九一・六一・六一五九)

堀河夜討 寫 一冊

七二八

三十一枚 題簽左肩金砂子散らし白短冊

(別頂「二萬箱王」一七〇五―と同筆同裝 九一・六一・三三七)

舞の本 三十六卷三十六冊

七一九

和袋綴改装勝色表紙 九寸五寸七分 十行 挿畫(見通し)のもの下に斷りし他はすべて半丁宛なり) はま出(五) いわうか嶋(五) ときは問答

(六) 入鹿(六) 夢合(六) なすの與市(三) 新曲(十) こしこえ(五)

四國落(六) 元服曾我(六) 小袖曾我(七) 和田酒宴(十) とかし(七)

清重(七) 未來記(七) 木曾願書(四) かけきよ(十六) 馬揃(四) ふ

ゑの巻(五) 伊吹(八) 十番斬(十) 伏見常盤(九) 大職冠(十三) 堀

河夜討(九) 敦盛(十二) 滿仲(十一) たかたち(十四)うち見通し(一)

夜討曾我(二十二)うち見通し(一) 百合若大臣(十三) 文覺(十) おいさ

かし(七) 志田(十五) つきしま(十二) 多ほし折(十三) 八嶋(十三)

うち見通し(二) つるきさむたん(六) 替題簽中央白短冊墨 外題挿畫の

項に掲出せし書名と同じ内題(外題と異なるもののみを擧ぐ)「はまいて」

「いわうかしま」「いるか」「夢あはせ」「なすのよ」「しんきよく」「げんぶく曾我」「わたさかもり」「きよしげ」「景清」「馬そろゑ」「ふえの

まき」「伊ふき」「ふしみときは」「たいしよくわん」「ほりかわ夜うち」「あつもり」「まんちう」「たかたち」「ゆりわか大臣」「もんかく」「しだ」「多ほし折」「やしま」「つるきさんだん」 柱刻(上部に柱題下部に丁附あり柱題の外題と異なるもののみを擧ぐ)「濱出」「硫黄嶋」「與一」「腰越」「元ふくそか」「和田」「願書」「笛卷」「伏見」「堀河」「高館」「百合若」「文學」「笈探」「信田」「兵庫」「烏帽子折」「劔」「平出氏書室記」刊記 (「多ほし折」の奥) 寛永十二年乙亥二月吉日開板之

(全冊讀假名及び濁點を附す、「大職冠」「たかたち」「八嶋」「堀河夜討」のみ更に句點を附し版下の字體を異にして初よりの整版なり、他のものは元和活字本の覆刻版にして整版に際し讀假名濁點を附けしなり、川瀬一馬「古活字版之研究」笹野堅「幸若舞曲集序説」参照 九一・六一・三三七)

舞の本 藤井本 寫 九冊

七二〇

和袋綴納戸色毘沙門格子牡丹唐草光澤摺表紙 九寸一分六寸九分 八行

題簽左肩無邊款冬色紙「ふし見ときは」ときはもんたう ふえのまき

一「きりかねそか けんふくそか わたさかもり 一」「みらいき くらまいて 多ほしおり 二」「小袖そか 夜うちそか 十はんきり 二」

「ひやうこ いわうか嶋 三」「日本記 いるか 大しよくはん」「や

しま きよしげ たかたち 四」「した まんちう」「しつか かけきよ

はまいて 九けつのかひ 五」「男山菅氏圖書」「熊沢之印」

(江戸初期寫、全冊〇印にて句讀點を施す 振假名音曲を附し假名多

し、各冊裏返し別筆にて「まつ村みさ」或は「松むらみさ」或は「み

さ」とあり、笹野堅「幸若舞曲集」序説後篇所載藤井氏一本なり、島津

久基「近古小説新纂」所收同書考説参照 九一一・六一一三三

夢あわせ 寫 一冊

七二二

六枚 替題箋左肩紅色紙書名同

(別項「一萬箱王」一七〇五—と同筆同裝 九一一・六一一四五)

謡曲別集百番 寫 百卷百冊

七二二

和綴葉裝表紙色變り紙に金泥にて各冊異れる古雅なる圖を描く 用紙鳥の子 六寸五分四寸七分 六行 題箋左肩模様變り短冊 左の所収曲目を外題とす

磯崎、和泉式部、幽靈楠、生田忠度、石山義衡、初瀬西行、花小汐、花丸、花自然居士、法事靜、箱崎物狂、仁慶、變化退治、輪官、留春、龍宮狸々、龍神橋立、龍神七夕、沼搜、狩場重光、勝頼、甘樂太夫、鎌田、鎌倉山、哥舞妓、柏木、緬、義經、義興、大内裏、大塔宮、田鶴、多聞寺、江藻髮、月見、露の宮、難波狸々、長柄、亂舞狸々、宇治物狂、歌屏風、空隱、右衛門櫻、薄雪、田舎夕顔、大磯、大原詣、大森彦七追懸時宗、御駒乘、思出川、花鳥風月、久能、柳津、款冬、松竹、松の雪、現在千方、現在道成寺、現在籠、現在實盛、舟辰、福井瀧口、笛物狂、駒牽、戀妻、木引善光寺、定家櫻、有子内侍、鶯宿梅、天橋立、阿黒王、足引、材木義衡、早蕨、嵯峨女郎花、小夜衣、小夜礎、更科祐近、許由、北野、菊、雪鬼、妙顯寺、三輪童子、湊川、信田、嶋廻、十四經、清水冠者、人穴、日高川、善判官、盛近、文堂瀧籠、瀨良田、燒火山、祐氏、鈴虫、黒池龍神

「英王堂藏書」「英國薩道藏書」「牘庫」他に題箋に一印あり

(近世初期寫、異本との校合あり、寛永三年以後貞享二年以前の新作謡曲百番を收む、もと内藤風虎の藏書にしてサトウ氏チエンバレン氏を経て竹柏園舊藏たりしもの「新謡曲百番」及び「竹柏園藏書志」三六九頁参照 九一一・六一一五七)

謡曲秘傳抄 寫 一冊

七二三

重鏤筆 和袋綴楡皮色表紙 八寸三分六寸四分 百丁 十三行 假題箋左肩雙邊「謡曲秘傳抄完」内題第一丁表に「秘傳抄」第二丁表に「謡注」、「松本吉祿」「圖書」
奧書 寛永二霜月六日 賀州宮腰今町ニテ書之重鏤
(大原御幸以下五十番の註 九一一・六一一五九)

淨 瑠 璃

以呂波物語 一冊

七二四

近松門左衛門著 和袋綴憲法色表紙 八寸六分六寸 五十九丁 八行
題箋白紙中央「伊呂波物語直加賀掾傳全」柱刻なし 綴目に「いー(一五十九)」

刊記 右此本者依小子之懇望附秘密「音節自違校合令開板者也

貞享元甲子歲三月吉日 加賀掾(印「宇治」「好澄」)

二條通寺町西へ入町「山本九兵衛刊

(獻上本、節付あり、この書に作者記名なけれど十行本に「近松門左衛門作」とあるもの存す、又同じ獻上本にも刊年を削りし後刷あり 九一・七一―六一)

小町少將道行 一冊

七二五

和袋綴改裝納戸色表紙 七寸四分五寸四分 九丁 八行 外題なし 見返し(「上るり大あたりの所」「三人出つかい申候大あたり」とせし圖あり白く十字をぬく轡の紋二つに笹の葉をよせたる宇治の紋を配せし幕の下に「宇治さつま」と今一人語り「太十郎しやみせん」の圖「少將にせきやうらん」は「清水三郎兵衛つかい候」「はちたき」は「村上氏兵衛つかふ」「三升平四郎」の二人のつかふ圖あり、「探花文庫」刊記 (裏見返し) 右此本者依小子之懇望附秘密「音節自達校合令開版者也

宇治半大夫

宇治次郎大夫

大夫

名代 宇治 薩摩 座本 野田 若狭

作者 伊勢嶋式大夫 清水三郎兵衛

二條通寺町西へ入町 山本九兵衛刊

(節付あり、正徳頃刊の大和五穀色紙の道行の部を抜き出せしもの、しかして五穀色紙のこゝの文は紀海音の小野小町都年玉によると云ふ、この書は享保初年刊なるべし、若月保治「古淨瑠璃の新研究」参照 九一・七―イ六七)

十二段さうし 寫 一冊

七二六

平出延齡(今古園主人)寫 和袋綴共表紙 八寸二分五寸七分 三十二丁 十行 外題左肩書名同 内題なし

奥書 (墨) 正保參年三月吉日「杉田勤兵衛尉開版

(墨) 此本さし書十一はかり有今これを省き寫す原本三冊也上五段中九段(終りなり) 此正保本はいとくあやまりおほきよしなり他日呉本を得て校合すへし」天保六乙未三月既望日 今古園主人(花押) (朱) 十二段冊子以笠亭仙果所藏印本校正了傍書吳本者是也皆弘化四年丁未」二月九日夜膏雨蕭々於孤灯下小妻鎗子對讀焉今古再識 (正保三年刊本の寫、仙果所藏刊本との校合を朱書す、平出鏗二郎「近古小説解題」参照 九一・七―イ七七)

聖徳太子御傳記 一冊

七二七

和袋綴替黒表紙 六寸八分五寸 四周單邊五寸五分四寸二分 十三丁 十六行 挿繪三箇六頁分 外題なし 柱「太子一(一十五六)」刊記 うろこかたや新板 (六段木、節付なし、延寶頃刊の後刷なるべし 九一・七―イ七五)

武綱さいし 一冊

七二八

和袋綴黒表紙 六寸三分五寸 四周單邊五寸六分四寸二分 十四丁 十六行 挿繪四箇八頁分 題簽左肩白紙雙邊「四天王 たけつなさいご 兵庫合戦 丹波少掾平正信正本 大傳馬二町目 ▲屋 柱刻「兵庫一(一十六)」、「成井藏書」刊記 うろこかたや 新板 (六段木、櫻井丹波少掾の正本とあれど節付はなし 寛文頃刊の後刷なるべし 九一・七―イ七七)

俗曲・俚謡

増補 松の落葉 六卷六冊

七二九

大木扇徳編 和袋綴深川鼠色市松光澤摺表紙 見返し「律に呂に尺ぬ落葉や家の風扇徳」の句及繪あり 七寸四分五寸三分 四周單邊六寸四寸

三分 十二行 挿畫一卷一箇一頁分 二卷二箇四頁分 三・四卷三箇四頁分 五卷二箇三頁分 六卷四箇六頁分 題簽中央雙邊 「増補 松の落葉」

中興當流東淨留理 附作者共 一 「増補 松の落葉」 中興當流淨留理 二 「増補 松の落葉」

入姿の落葉 中興當流丹前出端 中興當流古今ふし 三 「増補 まつのおち葉古來」

中興踊哥百番 四 「増補 まつのをちは古來當流はやり歌」 五 「増補 姿のをち」

は中興當流所作入組 六 終 一 内題「姿の落葉」 柱刻卷一「首(丁附)」卷二

「一(丁附)」以下同様にして卷六「五(附丁)」八田所藏「甘露堂藏」

刊記 寶永庚七年 書林あつゝ、庄兵衛 板

九月吉祥日 万木治兵衛 行

(寶永元年刊「落葉集」の改修増補版「甘露堂文庫稀觀本攷覽」参照 九一一・八一イ五)

松の葉 五卷五冊

七三〇

秀松軒編 和袋綴卵色地青鍵の手繋ぎ模様龍鳳凰丸紋表紙 見返し松

と三味線を描き歌を散らし書きしたり 七寸五分五寸四分 四周單邊六

寸五分四寸五分 十二行但し卷五は十行 題簽中央雙邊 「松の葉本手

組」「まつのはな歌二」「まつの端はうた三」「待の波上るり四」「まつ

の半なけふし五」柱刻なし、「琴橋」「甘露堂藏」

刊記

元祿十六癸未年 六月吉日

京寺町通二条上ル町

井筒屋庄兵衛 板行

萬木治兵衛

(「甘露堂文庫稀觀本攷覽」参照 九一一・八一イ三)

吉原はやり小哥そらまくり 一冊

七三一

和袋綴改装原黒表紙の上に黄色表紙を附加す 六寸三分四寸五分 四周雙邊五寸五分四寸 十枚 十六行(七丁裏八丁裏は十四行) 挿畫五箇十

頁分 柱刻「一(一十)」の丁附のみ 題簽附加表紙左肩雙邊墨書名同

「浮生亭」「霞亭文庫」「骨董舎雅樂愛玩之記體上」「骨董古雜籍珍書舖

感亨堂」「甘露堂藏」

刊記(十丁本文末)

右此歌ハ直之以正本令板行者也 江戸さかい丁 中島屋伊左衛門板

(「甘露堂文庫稀觀本攷覽」は本書を諸版中延寶初印本に充つ、表見返し

に「明治廿五年七月」「浮生亭如樂」の改装その他に關する識語あり 九一一・八一イ一)

隆達小歌集 寫 一軸

七三二

隆達著 卷子本檜皮色地唐草模様古裂表紙 見返し深川鼠色紙 用紙山

水草花散らし書き布目紙 九寸一分 題簽左肩金紙 外題なし 内題な

し、「惺々翁」

(近世初期寫、百三十五章を收む 瓢形「惺々翁」印は山東京傳なり、

箱書に「瀧の本坊筆」の貼紙あり「竹柏園藏書志」三七〇頁参照 九一

一・九一五

戯曲

大職冠

三卷一冊

七三三

和袋綴改装紺表紙 七寸二分五寸二分 四周單邊六寸二分四寸八分 十三丁 十五行 挿畫四箇八頁分 題簽後補左肩單邊墨「万戸將軍玉とりの原本年月不知歌舞妓」副題簽中央墨「元祖西沢一鳳家本 俗稱西澤九兵衛板天保六年迄百八十年大坂芝居繪本」柱刻「大しよくわん(丁附)」、「楠里亭所贈笠亭珍藏記」楠里亭

刊記 辰ノ五月吉日 西沢九兵衛新板

識語 (表見返し墨) 延宝四辰年天保マテ百五十余年

(嵐三右衛門芝居繪入狂言本、見返しに「大しよくはん三番續」の役者番附あり、刊記辰年は元祿十三辰年か、大阪の好事家楠里亭其樂の笠亭仙果におくりしものなり 九一二・六一一五)

後太平記
四十八卷目

津國女夫池

一冊

七三四

近松門左衛門作 和袋綴黄色表紙 七寸三分五寸三分 六丁半 四周單邊六寸八分五寸 十二行 挿畫七箇六頁分 題簽左肩白紙雙邊 「つづくにめうといけ大々あたり 津國女夫池 竹本筑後掾直之正本ノ通り仕ゆ ぶ屋町通 八文字屋 八左衛門」副題簽剝脱のあとあり 内題「後太平記 四十八卷目 津國女夫池 色座敷大あたり」柱刻「でう敷(丁附)」、「幸堂」
刊記 八もんじや八左衛門板

(内題の下に「名代都万太夫作者近松門左衛門座本澤村長十良」とあり、享保六年の興行にして見返しに附されし役者附によるに外に山本かもん、片山小エ衛門、宮崎義平太など見ゆ、近松歌舞伎狂言集に翻刻あり 九一二・六一一三)

日本記素戔鳴尊

一冊

七三五

和袋綴黄色表紙 六寸八分五寸二分 四周單邊六寸四分四寸九分 七丁半 十六行 挿畫九箇五頁分 題簽左肩剝脱のあとあり 内題「素戔鳴尊片岡仁左衛門座大あたり」柱刻「そさのをのミこと(丁附)」、萩原乙亥易卦の藏印あり

刊記 彌生吉祥日 片岡二度のあたり きやうけん本ヤ 九左衛門板

(元祿十四年三月大阪片岡仁左衛門座興行三番續の繪入狂言本見返しに役者附あり、役者に座本仁左衛門の外、小佐川重右エ門、袖崎家流あり、書名は見返しによる 九一二・六一一九)

平安朝物語

竹取物語

奈良繪本 寫 三冊

七三六

和袋綴紺地金泥山水模様表紙 見返し銀紙 用紙鳥の子 七寸九分五寸八分十行 挿畫上・中五箇五頁分 下四箇四頁分 外題なし 内題なし (近世初期寫、挿繪は本文半丁の片面に貼付す 九一三・三一―一)

伊勢物語

寫 一冊

七三七

和綴葉裝共表紙 用紙鳥の子紙 七寸九分五寸五分 表紙共七十五丁
十行 外題なし 内題なし

識語 (表紙中央) 紙數七拾四枚

奥書 (「抑伊勢物語根源古人説」と不同 (中略) 先年所書之本爲人被借

失仍爲證本自所校合也戸部尙書在判」なる流布本奥書の次に)

業平朝臣 三品彈正尹阿保親王男
母伊豆内親王

年月 日 任左近將監

承和十四五月補藏人 嘉祥二季正月七日從五位下

貞觀四年正月七日從五位上 五年二月二日左近衛權佐

六年三月八日左近權少將 七年三月九日右馬權頭

十一年正月七日正五位下 十五年正月七日四位

元慶元年正月十五日左近中將 二年正月廿一日相模權守

三年十月藏人頭 四年正月兼美濃權守

同廿八日卒

合多本所用捨也可備證本

近代以狩使事爲端之本出來未代之人今案也更不可用之

此物語古人之説不同或稱在中將之自書」或稱伊勢之筆作就彼此有書落

事等」上古之人強不可尋其作者只可觀詞花」言葉而已」戸部尙書在判

以祖父卿眞筆本不違一字書寫」校合之可備證本矣」藤爲相

本此草子借或好士之本誂人令寫之予加校合早」隨分秘藏本」と雖然以

朱取注之文字奥書等」僻字少」在之歟但書様文字遣以下不逮彼」本写

之間不及料簡者也 權大僧都堯孝判

(次に白紙半丁ありて前記の「合多本所用捨也 (中略) 詞花言葉而已
戸部尙書在判」を再録し次に)

家本被借失之間以化徳門院」新中納言局本先人御筆所書」写也」文永
五年九月十日」老桑門 融覺在判

(室町中期寫、朱にて注及び聲點を加ふ、勘物は武田本と同一にして本

文も流布本よりは武田本に近し、奥書の前半は小異あれども内閣文庫所

藏流布本の奥を後半は武田本の奥を含む、定家本の一系統本なるべし、

なほ別に題簽を添へ「伊勢物語 後柏原院内侍
外題鳥丸光廣卿」なる牛庵の極札あり

九一三・三二一(九)

伊勢物語 寫 一冊

七三八

和綴葉裝納戸鼠色地織出模様布表紙 見返し金砂子散らし紙 用紙鳥の

子 五寸三分五寸三分 墨附八十二枚白紙八枚 十行 題簽左肩金泥澤

瀉模様短冊書名同 内題なし

奥書 (「抑伊勢物語根源古人説」と不同」に始まる流布本の奥の次に)

御本云」嘉録二年十二月廿一日以民部卿定家卿」本書寫之即校合了

沙門 在御判

文永七年十一月廿二日申出」御所御本書寫之承政僧都」筆也兩

度校合早

(室町初期寫、本文は流布本第一類に近し、行間の勘物は天福本武田本

の兩系統を含む 九一三・三二一(一五)

伊勢物語 寫 一冊

七三九

和綴葉裝鶯茶色地花小紋織出金襴表紙 用紙鳥の子紙 五寸七分五寸四

分 墨附八十八枚白紙二枚 十行 題簽中央短冊書名同 内題なし

(近世初期寫、天福本、行間及び卷末の勘物並に奥書も天福本と同じ

九一三・三二一(一七)

伊勢物語 寫 一冊

七四〇

和袋綴黒色表紙 八寸二分五寸六分 七十八丁 九行 題簽左肩「伊勢物語古寫本全」 内題なし、「一葉軒」他に墨印一箇
(室町末期寫、流布本第一類系統本、朱にて「自筆一本」と稱するものとの校合あり 九一三・三二一(一九)

伊勢物語 寫 一冊

七四一

和袋綴裝焦茶色地切金銀箔散らし金銀泥菖蒲模様表紙 見返し金銀切箔散らし 用紙鳥の子 五寸七分四寸三分 墨附八十九丁白紙七丁 九行 題簽中央緑色短冊書名同 内題なし

奥書 (天福本の勘物及奥書の次に「定家卿自筆或本奥書」として武田本の奥書を記し更に「抑伊勢物語根源古人説と不同」に始まる流布本奥書を加へ次に)
此物語新内侍冷泉前中納言 爲孝卿息女筆 跡也於傳并勘物者西室僧正公順筆也尤可奇弥一見之次聊「記之」天文十二年孟秋上澣石大臣(花押)

(近世初期寫、天福本、「伊勢物語下冷泉殿爲孝息女新内侍傳并勘物 西室公順僧正奥書三條西公條公牛庵」の極札あり 九一三・三二一(二三))

伊勢物語 寫 一冊

七四二

好榮筆 和袋綴裝改裝黄茶地花模様織出布表紙 七寸五寸 墨付七十四枚白紙一枚 十行(一枚目表のみ九行) 替題簽中央短冊「伊勢ものかたり永正十三年古寫」内題なし

奥書 (「抑伊勢物語根津古人説と不同(下略)」「近代以狩使事(中略)詞花言葉而已戸部尙書在判」「以祖父卿眞筆(中略)藤爲相」次に業平・行平・紀有常・二條后・河原左大臣融の略歴及び宋玉神女賦・曹子建洛神賦の勘物を記し次の奥あり)

伊勢物語終 本主中山彈正(缺損)範 永正十三年丙子小春廿三日好榮書之書おくも形見となれや筆の跡」たとへ命ハかきりありとも

(永正十三年寫、本文は流布本第二類に近く奥書も終の釋義の部分に「なぞへなく」「みやひ」等の項を脱する外は流布本第二類に同じ 九一三・三二一(二五))

伊勢物語 寫 一冊

七四三

和袋綴銀鼠色地白茶草花模様織出布表紙 見返し金色布目紙 九寸七寸四分 四十六丁 十一行 題簽左肩金泥草花模様短冊「書名同」全 内題なし

奥書 (流布本奥、業平の勘物、武田本奥、藤原爲相の奥ありて次に) 此一帖雖爲年來所持依爲老眼細字不見之間重同以證本」書寫校合早朱點等有心注一字書之後見不可成不審而已

永享十一年閏正月廿八日「青山水石 在判 于時寛正三年八月十四日依御所望如形書早」

(不明) □□と仕

(室町末期寫、本文は流布本第二類に近し 行間の勘物は天福本武田本の兩者を含む、朱の書入多し 九一三・三二一(二七))

伊勢物語 嵯峨本 二卷二冊

七四四

和袋綴代赭色地菱形模様表紙 用紙具引色變り紙 八寸九分六寸三分

挿畫上卷二十五箇二十五頁分 下卷二十四箇二十四頁分 題簽中央白紙
「伊勢物語上(下)」 内題なし
(嵯峨本第二種イ類の覆刻整版本、川瀨一馬「嵯峨本圖考」参照 九一
三・三二一・一七)

伊勢物語

嵯峨本 二卷二冊

七四五

和袋綴上卷原表紙卯花雲母摺縹色表紙 下卷改裝堅紙表紙 九寸一分六寸四分 用紙兩卷共具引色變り紙 九行 挿畫 上卷二十三箇二十三頁分 下卷二十五箇二十五頁分 外題左簽墨書名同 内題なし、「村上忠順」「木暮茂八郎」他に二印

刊記 (上略) 慶長庚戌孟夏日

(上卷は嵯峨本の第二種イ類の覆刻整版本、下卷は同第四種ハ類の取合せ本なり、村上忠順舊藏本 九一三・三二一・一一)

伊勢物語

嵯峨本 二卷二冊

七四六

和袋綴改裝紺色表紙 九寸一分六寸一分 九行 挿畫上卷十五箇二十五頁分下卷二十四箇二十四頁分 替題簽左肩金紙墨書名同 内題なし

識語 (上冊見返し佐々木弘綱朱筆) 此物語の板本あまたあるか「中にこハ光悦の書にていと」めつらし珍藏すへし

明治十七年七月十四日「旅のつれく〜に西尾利」重ぬしのもとにてよ「みをばりぬ」 東京住「佐々木弘綱

(二丁目表墨) 佐々木千春雄秘
奥書 慶長戊申仲夏上流 也足叟

(嵯峨本第二種イ類を覆刻せし整版本口類なり 九一三・三二一・一一)

(三)

伊勢物語

眞名本 寫 一冊

七四七

和綴葉裝(後絲にて更に假綴を施す) 紺表紙 七寸六分五寸七分 用紙鳥の子 墨付五十二枚白紙四枚 八行 題簽左肩「眞名伊勢物語」、「竹柏園文庫」

奥書 時ふと云けふと暮して明日河」流て早月日也けり 糸書之

寛永八年辛未卯月中旬 閑書之

(近世初期寫、奥書は本文と別筆、内題の下に「六條宮御撰」とあり 九一三・三二一・一三)

伊勢物語雜說

寫 一冊

七四八

澤田名垂編自筆 和袋綴縹色表紙 七寸八分五寸 二十二丁 九行 題簽左肩白紙單邊名垂筆「伊勢物語雜說玉かつま抄出全」 内題なし、「澤田氏圖書印」「坂内文庫」

識語 (卷首) 木居宣長が玉がつまの内伊勢物語の事につきて是かれ論つる」事ども別にこゝに書拔つ先に集めつる抄ともと參へ考ふべし

奥書 右伊勢物語の説どもつひてなど正しからねど見るまゝに書拔つ」といときまなきほどにてとみに物しつればあやまりも殊に多からんかし」 文政十年八月晦日 五家園主人

(二三「名云」として自説を加ふ 九一三・三二一・一五)

伊勢物語勅講抄

寫 一冊

七四九

後水尾天皇御述 和袋綴縹色地金泥草花模様表紙 用紙鳥の子 八寸七

分六寸六分 墨附百七十七丁白紙二丁 外題なし 内題なし
卷首 御講釋 後水尾帝

伊勢物語聞書 明曆二年八月廿一日始同九月廿九日御満座
(近世中期寫 九一三・三二一・一)

〔伊勢物語頭書抄〕 二卷 一冊 闕

七五〇

菱川師宣畫 和袋綴改装附加表紙 九寸九分六寸二分 四周單邊八寸六分五寸一分 上卷二十二丁 下卷十九丁 上卷十丁裏まで十三行十一丁表より十四行 挿畫上卷十五箇十五頁分 下卷三箇三頁分 題簽左肩白紙墨〔繪入伊勢物語全〕 内題「伊頭書勢」「伊首書勢」
奥書 (「近代以狩使事云々」の定家の奥あれど畧す)

刊記 伊勢物語板行世間に多しといへども文字のちがひ或は「かなつかひにあやまりこれありて重寶にならざるゆへ」ことごとくあらため世に此ものかたりの大意をしらしめんと「よみくせを付首書に抄を加へ令板行者也」
繪師「菱川吉兵衛」三月吉日「松會開板」

(中巻及び下巻十九丁までを闕く、池田龜鑑「伊勢物語に就きての研究」中の刊年不詳第三十三圖と同一内容なれども刊記の「伊勢物語云々」の部分に若干相異あり、「松會開板」は入木なり、藤懸靜也「浮世繪の研究」中には「新伊勢物語頭書抄」繪入續曲 延寶七年 繪師 菱川吉兵衛 板 松會開板とあり、但し二冊とあるは三冊を二冊に合綴せしものか 九一三・三二一・一(二)

大和物語 寫 一冊

七五一

和綴葉裝白茶色布表紙 見返し金紙 八寸五寸九分 墨附九十四枚白紙八枚 十一行 題簽中央金泥雲形模様赤色絹短冊書名同 内題なし
奥書 (卷末) 藤爲久

(近世中期寫、流布本系統、「一冷泉爲久卿筆大和物語帖 右真蹟に相違なき者也 戊寅初月吉辰 平木清光〔宋印〕」の極めあり 九一三・三三一・一)

大和物語 二卷 二冊

七五二

和袋綴濃縹色表紙 八寸六寸三分 四周單邊六寸八分五寸二分 十二行 題簽左肩雙邊「大和物語上」「やまと物かたり下」内題上卷なし下卷「大和物語下」「平出氏書室記」

刊記 慶安元孟春仲旬 押小路通寺町西入 淺見吉兵衛開
同通橋町 山限久右衛門板

識語(上巻表紙右上貼紙墨) 土百三十七共二冊(同右下同) 比

(下巻裏見返し、朱) 天保八年丁酉冬十月二十日夜以活字版本一校加
朱墨了小妻在側 同讀爲之相云今古園龜壽(花押)

(墨) 同十年己亥秋八月念四日以北村季吟抄本校正且傍註其大義了
(今古園龜壽は平出順益 九一三・三三一・一)

うつば物語 奈良繪本 寫 五冊

七五三

和袋綴紺紙金泥草花模様表紙 用紙鳥の子紙 五寸六分八寸一分 十三行 挿畫卷一・二は五箇六頁分卷三は六箇六頁分卷四・五は四箇五頁分 題簽中央「うつば一(一五)」内題なし、「英王堂藏書」

(近世初期書寫、うつぼ物語俊蔭卷の奈良繪本 九一三・三四一・五)

宇津保物語卷次考 寫 一帖

七五四

賀茂真淵著自筆 和折本改装 白茶色布表紙 用紙裏打 八寸五分六寸五分 墨付二面 題簽中央佐佐木信綱筆「宇津保物語卷次考 賀茂翁自筆稿本」 内題なし、真淵印記あり

(物語卷六卷十の次第の亂れたるをいふ、日本古典全集うつぼ物語附録「うつぼ物語考」中所收「縣居翁說」の祖本、同書參照 九一三・三四一・九)

宇津保物語考 寫 一冊

七五五

桑原やよ子著 和袋綴縹色表紙 九寸六寸 二十七丁 九行 題簽左肩書名同 内題なし、「歌堂文庫」「弘綱藏書」「竹柏園文庫」

奥書 (朱) 此一卷は桑原隆朝の母やよ子といへるかかきあつめおきけるよし也この比人してとくうつさせつれば書たかへるもありなんこ、ろそへて見む人あらたむへし

寛政三年神無月十まり九日 はるミ(はるミ)の「る」字の上に「る」を墨書し更に左傍に墨にて「村田はるミ」とあり

(九一三・三四一・七)

河海抄 寫 二十卷五冊

七五六

四辻善成(正六位上物語博士源惟良)著自序 和袋綴改装澁引表紙 用紙裁斷あり 八寸七分七寸一分 十五行 外題左簽後人筆(書名同)

自一(自五、自九、自十三、自十七)至四(至八、至十二、至十六、至二十)

奥書 本云四辻宮大納言家申出中書御本永和二年自孟「冬比今永和第五至季春四日書寫一筆訖」 永和五年三月十四日散位基重在列

かすならて名をさえかくす身なれとも」なかれてしのへ水くきの跡

康曆第二季春後八日重申出御本見合早

讀書雖非器依志切自基重家此一本所令相傳也

應永第拾六自仲春比今到孟冬比自書寫一筆訖」不可出和箱者也 師阿

さてもそのかひはなくとも名はかりは」世にたちいてよわかのうらなみ」 此一句恥後見心

文正元年 丙戌六月一日 書了

文明十三年 辛丑卯月 日 書寫終功早

(國文注釋全書本と同系、文明を去る遠からざる頃の寫、所々に見ゆる墨朱の書人も亦望町期を下らず 九一三・三六一・二三)

源概抄 寫 一冊

七五七

和袋綴落葉色表紙 見返し銀箔散らし 用紙上下裁斷 背及び小口押金

七寸六分五寸三分 百五十四丁墨付百五十一丁 八行 外題なし 内

題なし

奥書 一校早

寫本曰「知公云」此源概抄ハ誰人注尺ともしらす雖信用」説多々爰に

ある人一覽之次に筆を加て」など依強望少と改誤拾殘といへとも猶不」審所有之後見の人追而可有糺明者也」弘治元年林鐘下澣 定秀判

この寫本書まとひおほくあるにより」宗知公校明其正本にてうつし早」 天保十六年仲春上澣日 綱成(花押)

(九一三・三六一一五)

〔源氏古鏡〕 寫 一卷 闕

七五八

和綴葉裝白茶色表紙用紙薄葉の中に挟み糊にて三枚を重ねて一枚となす 八寸五分一分 四十二枚 十行 外題なし 内題なし

識語 (一丁表別筆) 身にしみておもふこゝろのとしふればつゐに色に

もぬへきかな (同左中央別筆) 源氏卷

(表紙見返し別筆)「佐藤氏」

(裏表紙見返し別筆)天曆三年「此主」一ノ宮長坂「法道知

(鎌倉期寫、桐壺より花宴まであり、空蟬の卷末、夕顔の卷初をいさ、

か缺く 九一三・三六一一七)

源氏物語 寫 五十四卷五十四冊

七五九

紫式部著 和袋綴縹色表紙 六寸四分四寸二分 八行 題籤中央色替り

短冊 各巻の名を記す 内題なし

奥書 (第二冊)(朱)以臨江齋本一校了(墨) 天正十年七月四日一校

了(朱)同朱矣了

(第三冊)(墨)天正九五廿九 一校了

(第四冊)(墨)天正十八月廿三日一校了(朱)朱矣了

(第十一冊)(墨)一校了

(第十七冊)(墨)天正八十廿三夜 校了

(第十八冊)(墨)天正七九四書五日一校了 臨江本也

(第二十冊)(朱)朱同了(墨)天正九正月十日辰刻立筆同酉刻了

(第二十二冊)(墨)天正九正十五(朱)句同了

(第二十三冊)(墨)右本者周桂筆臨江齋所持以本一校了

(墨)天正十八月廿三日一校了(朱)朱矣了

(第二十四冊)(朱)朱了(墨)天正九正月五日六日兩日了

(第二十六冊)(朱)朱引了

(第三十五冊)(墨)天正十一年正月七日

(第三十六冊)(墨)天正十^五冬至前十日

(第四十冊)(朱)天正十一八廿六朱了 以臨江齋本校了

(第四十八冊)(朱)正月七日朱同了(墨)天正九正十日巳刻同亥刻了

(第五十三冊)(朱)天正九二十六朱了

(第五十四冊)(墨)天正八十月廿日一校了

(同裏見返し)(墨)定家卿奥書云

此愚木求數多舊手跡之本抽彼是用捨短 慮所及雖有琢磨之志及九牛之一毛并蛙之一淺才寧及哉只可招嘲弄纔雖有勘加事又是 不足言未及尋問以前依不慮事此本披露於 華夷遐迩門々戶々書写預誚謗雖後悔無

詮徵前事每卷奥所注付僻案切出爲別 紙之間哥等多切失早旁難堪耻辱

之外無他 向後可停止他見 非人桑門明靜

(室町末期寫、墨朱にて校異あり各冊卷末に墨附枚數を示す、源氏物語

奥入の奥を附す 九一三・三六一一七)

源氏物語 河内本及青表紙本 寫 六卷六冊 闕

七六〇

紫式部著 和袋綴紫色漉込紙に金泥模様表紙(河内本は紫色濃し) 九寸

三分七寸四分 九行 題籤中央金銀泥山水草花模様短冊(「野わき」のみ

替題籤)「かゝり火」「野わき」「花ちる里」「うす雲」「みゆき」「夢のう

き橋」 内題なし

奥書 (花散里) 書写山金輪坊長直依所望染筆訖(花押)
識語 (かゝり火) 大納言入道榮雅筆也

(近世初期寫、「かゝり火」「野わき」は河内本、「花ちる里」「うす雲」「みゆき」「夢のうき橋」は青表紙本なり、各冊朱にて書入れあり、河内本は特に朱にて句讀點を嚴密に施せり 九一三・三六一・一三七)

源氏物語 古活字本 五十四冊

七六一

紫式部著 和袋綴紺色菱形毘沙門格子模様行成表紙 五寸六寸五分 十
一行 題簽中央墨にて「桐つぼ一」の如く卷名卷數を示す「帚木」のみ
題簽脱落 内題なし

刊記 元和九年孟夏上旬「洛陽二条通鶴屋町」富杜哥鑑開板

(第二冊「帚木」の卷のみ整版本を以て補ふ、全紙古註の書入れ頗る多
く又私説をも記す 九一三・三六一・一七九)

源氏物語須磨卷 寫 一冊

七六二

紫式部著 和綴葉裝納戸鼠色表紙 五寸八分五寸八分 墨附四十八枚白
紙二枚 十二行 題簽中央白紙金箔模様入「須磨」 内題なし 印記抹消
せしため不明

奥書 (五十丁裏左下墨) 再校了朱□

識語 (包紙表墨) 須磨之卷一冊大炊御門經名公極目札入
(室町中期寫、墨朱の書入あり 九一三・三六一・一三一)

源氏物語常夏卷 寫 一冊

七六三

紫式部著 和綴葉裝白茶色地金銀切箔散らし表紙 五寸五分五寸四分

墨附三十一枚白紙一枚 十行 題簽左肩半ば破損せる白茶色紙「とこな
つ」 内題なし

(室町期寫、「二條爲明卿筆」の貼紙あり、表紙裏に「玉津嶋社壇詠三十
首和哥」とあり 九一三・三六一・一三三)

源氏物語花の宴 三條西家證本 寫 一冊

七六四

紫式部著 和綴葉裝丹色表紙 五寸八分六寸 墨附十七枚 十行 外題

左肩佐佐木信綱筆書名同 内題なし

奥書 本「肖柏筆」以京極黃門定家卿自筆校合早 十六枚

享祿三年正月十九日書寫之了」奥入以別番写之二月廿八日一校了桑門

堯空七十六歳

(三條西家證本の近世中期寫、本文所々朱點を加ふ、山脇毅「三條西家
證本源氏物語」—藝文十六ノ七十参照 九一三・三六一・一四一)

源注拾遺 寫 八冊

七六五

契沖著自筆(うち卷五一冊のみ他筆)和袋綴改装白茶色表紙 七寸八分
五寸七分 十行 題簽左肩白紙異筆「源注拾遺(書名の下に朱にて「契沖
眞筆」及墨にて「書紙數」何枚と書入る但し卷五は朱にて「他筆」と書
き入る)一丁は原表紙共表紙にて外題左肩墨 卷一「苟且名 源注拾遺
大意」卷二より卷八まで(卷五を除く)夫々の所收の源氏物語の卷の
名を記す 内題なし、「谷藏書印」(題簽にあり)

奥書 右源語拾遺七卷一覽湖月抄之次率尔」註愚意以備他日校考者也後
加大意以一巻共八巻全

元祿九年七月十九日「密乘沙門契沖」同十一年正月五日一校畢

識語 (每巻表紙右肩) 共八巻 (同左下「一(一八)」の冊序を記す)

(自筆稿本にして朱墨の書入訂正多し、安藤年山の舊藏にして後立原翠軒表紙を附し題簽を記せりといふ。「契沖全集」第六巻凡例及び「竹柏園藏書志」三八〇頁参照、左狂生の註記二葉及同氏の川村氏宛書簡一通同函 九一三・三六一・二五)

幻中類林第五 寫 一冊

七六六

了悟著 和袋綴改裝檜皮色草花織出模様布表紙見返し金箔金泥草花模様原表紙は紙 用紙裏打 九寸九分六寸二分 墨附二十六丁 八行 外題なし

奥書 (本文と別筆) 至徳三年八月一日「感得之」右大將 (花押) (左傍貼紙「具通公」)

(更に別筆) 文明十三年菊月重遠「電覽矣」大政大臣 (花押) (左傍貼紙「通博公」)

識語 (内題の下同筆) 華洛非人桑門了悟

(包紙表) 久世殿具通公御筆

奥書「東久世殿通博公御筆

(室町中期寫、源氏物語の註にして奥入を採りしところ多し、原表紙中央に墨にて「五」とあり、若菜より雲隠までを收む、改裝に際し綴目を逆にせし箇所あり 九一三・三六一・三九)

湖月抄

〔石川雅望書入本〕 六十巻六十冊

七六七

北村季吟著 延寶元年冬至日自跋 八寸八分六寸四分 四周單邊七寸六分五寸七分 十二行 題簽中央書名の下巻の名等をしるす、「美政文庫」

「松岡氏藏書印」「露廻屋藏書」

刊記 書林「林和泉」村上勘兵衛「吉田四郎右衛門」村上勘左衛門

識語 (きりつほ奥に露之屋筆但し括弧中は同筆朱、は、き、う、つせみ・夕かほ・わかむらさき・すゑつむ花・もみちのかにも同じ人々の識語あれど略す)

也足軒御朱傳來

寶曆十三年癸未五月七日也足軒素然中院通勝卿御朱ヲ以讀合之早廣

通 (御普請奉行「石野遠江守」中原朝臣)

此源氏物語者桑宿周桂一筆也但四冊不足予書續早校合及「數度者也

天正四年孟秋中瀬臨江齋紹巴在判 (天正中之連哥師也)

右之奥書之木ヲ以寛永十七年校合早讀玄俊ヒカへ詔春「寛永十九年

十一月廿五日又校合

右之本を以明和九年九月廿六日校合但先頂之朱と分別の爲紫墨をもつて左に記す本書は朱をもつて行中に記す 廣通

右中院家傳來之朱點者家君之秘藏を傳て門生辻知篤をして「校合せし

む 萬彦 (大御番佐々木三藏源姓)

寛政八年丙辰二月八日右正本吳本之朱共校合早 知篤 (御徒士辻忠

左エ門「平姓」)

文化戊辰仲春寄跡於「源先生 (佐々木先生也) 之齋齋借亡友知篤之手

澤之本校合正源語讀法左傍之朱書者」蹄溪中原君 (石野君之号也) 之

紫書也 仲春晦 秋邦 (後薙髮して「壽阿弥と号」處士」江間五郎作

平姓「秋宜之師ナリ」)

文化六年己巳秋以得人 (秋邦之字也) 之證本校合 其進 (甲州郡内谷

村之民「森嶋彌十郎藤原姓」林家之門生也)

天保三年壬辰冬十一月廿一日令秋宜校合 露之屋（菊田泰藏源姓）時ニ飛彈之郡丞」タリ）

（御朱、四十九）紹巴。四十六讀法共）

（後刷本、以上の識語に見る如き本文の書入をせしは露之屋なるべけれど、朱墨にて註譯の上の諸書入を全冊にわたり加へたるは、その筆蹟よりしても、末摘花末に雅望案などあるより見ても石川雅望なりと思はる九一三・三六一一（二九）

光源氏物語不載系圖無向後人 寫 一卷 七六八

紹巴筆 卷子本古代裂表紙用紙裏打 七寸二分 外題なし

奥書 一校了」紹巴（花押）

（源氏物語中に系圖にも載らず一度よりでざる人を卷々よりえらび出せるもの、古事丁珉の紹巴筆なりとの證文の手紙を附す、箱蓋裏にも琴山の極札を貼附す 九一三・三六一一（三五）

岷江入楚 寫 五十五卷三十二冊 七六九

中院通勝著 和袋綴媚茶色地金粉散らし表紙 九寸三分六寸七分 十六

行 題簽中央各冊色及び模様を異にせる色紙 外題收容卷名及卷數を記す 内題外題に同じ、「富子氏」（題簽右下）

奥書に「奥入」「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」「年立」の奥書を收め終に幽齋の跋を附す

（近世中期寫、卷頭の總説は流布本の順序なれども流布本になき「秘抄序」「年立序」を收め本文また國文學註釋叢書所收圖書寮本と小異あり、墨朱にて書入多し、帙題簽に「平瀨家舊藏古寫本」とあり 九一三・三

六一一（一七）

狭衣物語 寫 二卷 二冊 闕 七七〇

甘露寺親長（蓮空）筆 和綴葉裝卷一表紙水のしみたるあとあり 卷二灰汁色地銀砂子金銀切箔散らし模様表紙見返し銀切箔散らし 七寸六分五寸五分（卷一）六十五枚（卷二）七十八枚 十二行 外題卷一左肩異筆「さころも」内題卷一初丁中央同筆「さころも」卷二外題内題共になし

奥書（卷一）明應六年十月廿日於熱下終書写之功早去七日書初了 蓮

空

（卷二）狭衣二 明應七年二月十一日書写了」件本以外不審多如何々々 蓮空

識語（卷二終丁裏貼紙異筆）後土御門帝明應七年戊午至于正徳六年丙

申通計二百十九年

（異本との校合あり、卷一蠹蝕あり、卷二蠹蝕少けれども錯簡あり、「竹柏園藏書志」参照 九一三・三七一一）

狭衣物語 寫 四冊 七七二

和袋綴青と紫澹込表紙 九寸六寸六分 十二行 外題左肩（書名同）元

（享、利、貞）、「安井藏書」

（近世中期寫、元冊卷頭に狭衣物語景圖、狭衣物語年立を附す、間と一本を以て校合し全卷傍註を施す 九一三・三七一一（三）

〇

堤中納言物語 寫 十卷一冊

七七二

和袋綴丹色表紙 九寸二分六寸五分 九十二丁 十行 外題中央書名同
内題〔扉〕「堤中納言」

巻次の立て方通行本の九、四、二、六、八、五、一、十、三、七の順となす 各巻綴目に本文と同筆にて「十冊之内」などの文字あり即ちこの巻次は據る所に従ひしなるべし

識語 (卷末朱)明治十五稔八月立秋前五日以仲父偃齋君所手寫本一校了岡本宜忠

(近世末期寫、朱の校異あり 九一三・三九一・一七)

堤中納言物語

七七三

尾崎雅嘉筆 和袋綴銀煤竹色表紙 七寸九分五寸六分 五十丁 十一行

題簽左肩白紙 内題なし

(墨朱にて異本と校合し若干の頭註あり、巻首に作者につきての考證あり 九一三・三九一・一七)

とりかへばや物語 寫 五冊

七七四

和袋綴金砂子散らし澁引表紙 九寸二分六寸四分 十二行 外題左肩

「取かへばや壹」「とりかへばや貳(三、四、五)」 内題「とりかへばや一の巻」(卷二以下は見返し裏に「とりかへばやの物語二(四、五)」奥書 (朱)以躬弦「天保十五辰のとし校合畢

(卷一初め山岡浚明の序を附す、躬弦本を以て朱書校合を施す外朱墨校異多く間々頭書傍註あり 九一三・三九一・一五)

濱松中納言物語 寫 四冊

七七五

和袋綴金砂子散らし皺紙表紙 八寸九分六寸五分 十行 外題左肩井上文雄筆書名同 内題なし、「竹柏園文庫」

(近世末期寫、「よはのねざめ」一七七六一と同筆同裝、井上文雄手澤本 九一三・三九一・一一)

よはのねざめ 寫 五冊

七七六

和袋綴金砂子散らし皺紙表紙 八寸九分六寸四分 十二行 外題左肩清水光房筆「よはのねざめ一(一五)」(第一冊のみ「る」の右傍に「は」を記す) 内題なし、「竹柏園文庫」

識語 (第五冊見返し井上文雄筆朱) 群書類從三百十三拾遺百番歌合左源氏右夜寢覺常陸介孝標女作廿首」文按に島原侯の御本この巻を第五とあれとこの巻を第一の巻成へき

(近世末期寫「濱松中納言物語」一七七五―と同筆同裝、清水光房舊藏、橋本佳「校本夜半の寢覺」日本文學大辭典」參照 九一三・三九一・一一)

鎌倉時代物語

あまのかるも 寫 四卷四冊

七七七

和袋綴葉淺葱色表紙用紙鳥の子 七寸一分五寸 十行 題簽中央丹色金泥模様入 書名同 内題なし

(近世中期の寫、九一三・四一・一五)

とよ衣

寫 三卷一冊

七七八

和綴葉裝落葉色地斜格子模様綴子表紙 表見返し金銀切箔散らし金泥山水模様布目紙 用紙鳥の子 五寸三分五分九分 墨付百五十五枚半(上卷五四枚半中卷四十五枚下卷五十六枚)白紙十九枚半 十二行約十七字 題簽左肩朱色短冊書名同 内題なし

(近世初期寫、藤井紫影舊藏本 九一三・四一四一九)

十訓抄

寫 三冊

七七九

和袋綴纒色表紙 九寸六寸五分 十行 外題「十訓鈔天(地・人)」、「河州觀心寺禪本院」

識語 (各冊末) 一校了

(近世中期寫、第一冊は第一—四 第二冊は第五—七 第三冊は第八—十を收む 九一三・四一四—一)

沙石集

古活字本 十卷十冊

七八〇

無住著 和袋綴改裝丹色行成表紙 九寸一分六寸四分 四周雙邊七寸五分五寸八分 十二行每行約二十八字片假名交り 外題なし 柱刻「沙石集一上(一—十下)」

刊記 此集行于世尙矣本有廣略條有前後不知孰是也頃「幸得無住師之眞筆正本今也不堪蘊藏於焉遂鏤于」梓十目所視豈其掠乎勿敢疑也

元和二年六月吉日 圓智校讐

識語 (各冊内題の下墨) 賢良藏本

(卷十裏見返し墨書) 爲信譽傳澄法子冥福全部十卷 頭空宗碩禪門

寛政十戊午天正月 寄附主洛西郡村中路治右エ門(朱)持之

持主顯空義隆(朱) 日寶(花押) 北筑磯貝家藏本(別筆)

(元和二年刊古活字本、川瀬一馬「古活字版之研究」参照 九一三・四一四—一七)

松陰中納言物語

寫 五卷五冊

七八一

和袋綴金砂子散らし檀紙表紙 八寸九分六寸五分 九行 外題左肩清水光房筆書名同 内題「松陰中納言第一(一—五)」

(近世末期寫、朱にて書入あり「濱松中納言物語」一七七五—「よはのねざめ」一七七六—と同筆同裝、井上文雄手澤本 九一三・四一四—五)

まつらのみや

寫 三卷一冊

七八二

新見正路筆 和袋綴記録表紙 八寸九分六寸二分 八十五丁 十一行

外題「まつらのみや」 内題なし、「安世藏書」

奥書 文化といふ年のはしめのとしみな月末の七日筆をとりておなし

くつこもりうつし終ぬ」 正路

(群書類従本と同じ奥書を有す 九一三・四一四—一三)

松浦物語

寫 三卷三冊

七八三

和袋綴纒色表紙 九寸七分六寸四分 題簽中央銀泥模様入短冊「松浦物語上(中、下)」 内題「松浦物語の上」「松浦物語中」「松浦物語下」

奥書 このおくも本くちうせて「はなれおちに」けりと」本ニ

この物語たかき代の事にて」哥もこと葉もさまことにふるめかしう

見」えしを蜀山の山の道のほとりよりさかし」きいまの世の人のつくりかへたるとて無外ニ」みくるしきこと」とも見ゆめりいづれかまことならむ」もろこしの人のうちぬる」なかといひけむうらこと」なかのそらことをかしう

貞觀三年四月十八日」そめ殿の院のにしのたいにて」かきをはりぬ花非花霧非霧夜半來天」明去來如春夢幾時去似朝」雲無寬處」これもまことの事也さはかり」傾城のいろにあはしとてあたなる」心なき人になに事にかゝることは」いひをきたまひけるそと心え」かたく唐にはさる霧のさ」ふらふ」か

(近世末期寫、上卷には朱の頭註あり、阿波國文庫本と同文の頭註もあれど彼にありてこれになきものこれにありて彼になきものあり、岩波文庫「松浦宮物語」―蜂須賀笛子解説―参照 九一三・四―イ三)

松室仲算事 寫 一軸

七八四

卷子本表紙なし 一尺三分八尺八寸八分 有界八寸八分八分 外題なし 内題「松室仲算事」

(室町期寫、内題の下に「奉納琵琶於竹生嶋御寶前事也」とあり、元亨釋書卷二十九所收「仲算童」と同材にして詳細なり、これ釋書の記事の典ならんかと思はる、古本今昔物語風の文體をとる佛敎文學の一、現代佛敎第十號所收の原本なり、佐佐木信綱「鏡草」参照 九一三・四―イ七)

吉野拾遺 一冊

七八五

和袋綴布目入白茶表紙 八寸七分五寸九分 四十九丁 十行 題簽左肩

單邊「羣書類從四百八十五」、「歌堂文庫」

識語 (表紙右肩墨) 吉野拾遺(同中央弘綱筆朱) 文雄大人頭書拔」弘綱以古本一校

(卷末朱) 明治三年庚午の夏津の殿にしたかひ侍りて東京にいたりし時」文雄翁藏本をあまたおのれにゆつられける中に此本もまし」りたり頭の見出しは則翁の筆もおなし年の閏十月十一日」古寫本を得て一校畢」源弘綱

(見返し貼紙墨) (白石ノ手翰ノ内)と題して「白石先生手簡」中「一色時棟與安澹泊書」の芳野拾遺に係るところを録し「右金谷北溟俗稱半右衛門写しおくる処也」とあり)

(羣書類從本に井上文雄、佐佐木弘綱が夫々墨朱にて頭書校合せしもの 九一三・四―イ九)

室町時代物語・小説

あかしの三郎 寫 一冊

七八六

和袋綴薄卵色藍漉込表紙 八寸六寸四分 四十六丁 十行 外題なし

内題なし 見返し中央「あかしの三郎」 奥書 (本文同筆) 天文廿三年^甲五月廿日書之 (本文殆んど平假名を使用す、内容「明石の物語」―市古貞次「未刊中世小説解題」―に同じ 九一三・五―イ四七)

秋夜長物語 寫 一冊

七八七

和袋綴記録表紙 八寸七分五寸七分 三十四丁 八行 外題中央後筆書

名同、「南都二条家文書寄贈者柳生彦藏」

(室町末葉寫、片假名交り、群書類從卷第三百十一所收本に比較するに漢語漢文體多く頗る古體を存するが如し、漢字漢文には振假名あり 九一三・五一イ九五)

秋夜長物語

古活字本 一冊

七八八

和袋綴深縹色表紙 八寸六分六寸三分 十九丁内序一丁 十二行二十三
字 四周單邊七寸五分五寸四分 題簽左肩後補墨「秋夜長物語慶長活字
本」柱刻「秋夜一(一十九)」、「阿波國文庫」「不忍文庫」「甘露堂藏」
「久彌藏」「春城清玩」「物集文庫」「高谷之印」
(片假名木活字本、尾崎久彌「甘露堂文庫稀覯本攷覽」川瀨一馬「古活字
版之研究」參照 九一三・五一イ一一三)

あさがほのつゆ

二卷一冊

七八九

和袋綴改裝縹色行成表紙 八寸二分五寸九分 四周單邊七寸一分五寸四
分 三十二丁 十四行 挿畫六箇六頁分 題簽左肩後補雙邊墨「あさか
ほのつゆ 上下」柱刻なし、「物集文庫」「春城清玩」「甘露堂藏」「久彌
藏」

奥記 延寶八年^{庚申}三月吉 万屋庄兵衛

(尾崎久彌「甘露堂文庫稀覯本攷覽」島津久基「近古小説新纂初輯」横
山重・太田武夫「室町時代物語集」卷三參照 九一三・五一イ一一五)

あさがほのつゆ下

一冊

七九〇

和袋綴改裝桑色花模様摺出表紙 用紙裏打 八寸一分五寸六分 二十三

丁 十一行 挿繪九箇九頁分 外題なし 内題なし 柱刻「あさかほ下

(丁數)」

(寛永頃刊、下卷のみ、横山重・太田武夫「室町時代物語集」第三所收
九一三・五一イ六七)

雨やとり

寫 一冊

七九一

和袋綴縹色草花模様雲母引表紙 見返し薄茶色紙 七寸六分五寸八分二
十二丁 十行 題簽左肩金紙短冊書名同 内題なし、「田平氏所藏」外二印
(近世中期寫、萩原由之「新編御伽草子上」に寛永四年寫本を以て「今
宵の少將」なる名に於いて翻刻せるものと内容同じ 九一三・五一イ七
七)

伊香物語

寫 一冊

七九二

和袋綴水色及び薄墨色にて山水刷出表紙 九寸四分六寸七分 十丁 十
二行 外題中央書名同 内題なし
(江戸時代中期寫、有朋堂文庫御伽草紙所收 九一三・五一イ八一)

いけにえ物語

寫 一冊

七九三

和袋綴深縹色表紙 見返し銀紙 八寸一分六寸三分 四十九丁 十一行
題簽左肩金紙短冊書名同 内題なし、「紫影文庫」
奥書 (本文に同筆) 此さうし正ほんのこく書申ゆ「らくちわけ見え
ぬところハしハ」すいりうに御よみゆへくひ
(藤井乙男筆) 右刊本法妙童子ト同書也 紫影
識語 (終丁表) あいをいの「松にも」きみを「たとへたり」百々「千

世までも「みさほ」なる」いろ

(近世中期寫、刊本法妙童子と内容同じ 九一三・五〇一六三)

おちくほ 奈良繪本 二卷二冊

七九四

和袋綴紺地金砂子散らし金泥草花模様表紙 用紙金泥四季草花模様入鳥の子 九寸九分七寸四分 十行 挿畫各冊片面七箇 題簽左肩金泥模様入短冊「おちくほ上」 下巻題簽剝脱し外題もなし 内題なし

(江戸中期寫、行文萬治二年刊本に類す、挿繪巧緻にして奈良繪本に見るが如き稚拙さなし 九一三・五〇一七一七)

御伽草紙 十八卷合十二冊 闕

七九五

和袋綴縹色地草花表紙 四寸八分七寸三分 十三行 挿畫すべて一箇一頁分 小町さうし七箇 からいとさうし十一箇 こわたきつね十箇 小

あつもり九箇 二十四孝二十四箇 ほんてん國十三箇 さるけんじ八箇

はまくり草紙十一箇 しゆてんとうし十箇 和泉式部五箇 よこふゑ六

箇 ねこの草紙七箇 一すんほうし八箇 さかき草紙八箇 さ、れ石四

箇 七くささうし四箇 はまい亭草紙五箇 のせさる七箇 題簽中央模

様入短冊「草紙紙繪小町さうし上下」

(「繪草紙」の三字は墨にて後補、各題簽にあれど以下之を畧す、○印を附せし字は墨、以下之に做ふ)「からいとさうし上下」「こわたきつね上下」「小あつもり上下」「二十四孝上下」「ほんてん國上中下」「さるけんし上下」「はまくり草紙上下」「しゆてんとうし上下」「和泉式部よこふゑこの草紙」「一すんほうしさかき草紙さ、れ石」「七くささうしはまいて草紙のせさる」内題なし 柱刻なし、「英王堂藏書」「甘露

堂藏」

(大阪心齋橋順慶町澁川清右衛門より刊行せる御伽草子二十三部の内にして題簽書名の十八部を收む 九一三・五〇一九九)

鬼一ほうけん 寫 三冊

七九六

和袋綴藍漉込み表紙 用紙鳥の子 五寸六分八寸一分 十五行 題簽中央朱色短冊「鬼一ほうけん上(下)」「鬼ほうけん中」 内題なし、「平出氏書室記」

奥書 (卷末朱) 右三卷以下、林市三郎寛文十年庚戌正月所「上木」題スル

判官都咄本「本一校加三朱墨了」天保六年乙未九月五日夜三更今古園主人記

識語 (上巻表紙右肩貼紙墨) 土百八十二全三冊(同右下墨) 履(表見返し墨) 一名判官都はなし」画入本五冊寛文十年印本と」同物なり

(原裝奈良繪本の挿繪上巻十箇中巻九箇下巻八箇計二十七頁分ありたるも繪の部全部切り取らる、平出鏗二郎「近古小説解題」参照 九一三・

五〇一七一七)

おもかけ物語 二卷二冊

七九七

和袋綴黒行成表紙 八寸八分五寸八分 四周單邊六寸三分四寸八分 十

行 挿畫上巻八箇八頁分下巻五箇五頁分 柱刻「おもかけ上(下)(丁附)」

題簽左肩水谷不倒筆墨書名同、「野中氏圖書」「水谷文庫」「甘露堂藏」

「久彌藏」

刊記(下巻奥) 萬治三歲庚子二月吉日

(一名辨才天本地、表見返し水谷不倒筆識語あり、島津久基「近古小説

新纂初輯「參照 九一三・五一―一〇三」

花鳥風月 寫 二冊

七九八

和袋綴金泥草花模様入薄淺葱色表紙 用紙鳥の子 五寸七分八寸 十三行 題簽中央紅色短冊「(書名同)上(下)」、紫影」

(近世中期寫、奈良繪本なれども繪の部切り取りてなし 九一三・五一―一二七)

賀茂之本地 三卷一冊

七九九

和袋綴三冊を一冊に合綴す青色行成表紙 八寸五寸五分 三周單邊六寸三分五寸一分 上十五丁中十八丁下十七丁 十行 畫は上卷五箇六頁分

中卷六箇八頁分 下卷六箇九頁分 題簽左肩雙邊「かもの御本地上中下」(「上中」の二字墨にて補ふ) 内題「賀茂之本地上(中、下)」柱刻「上中、下」(丁附)、「甘露堂藏」「久彌藏」

(種彦「還魂紙料」に承應年間の刊行なりといふ、尾崎久彌「甘露堂文庫稀觀書攷覽」横山重・太田武夫「室町時代物語集」第一所收原本の一 九一三・五一―一〇一)

きふねの本地 寫 一冊

八〇〇

和袋綴深縹色表紙 八寸二分六寸 二十六丁 十二行 外題なし、「紫景文庫」

(寛永頃寫、横山重・太田武夫「室町時代物語集」第二參照 九一三・五十一―五二)

くちきとさくら 寫 一冊

八〇一

和袋綴卵色市松模様表紙見返し銀箔毘沙門格子模様紙 五寸六分八寸二分 二十四丁十三行 題簽中央紅色丹冊形書名同 内題なし、「紫影」識語(表紙右肩)四冊ノ内(同筆にて「四冊ノ内」の書入あるもの他に

同裝の「はしへんけい」「ひてひら入」「四こくおち」あり)

(近世初期寫、もと八箇八頁分の挿畫ありしを全部切取られてなし、平出鏗二郎「室町時代小説集」所收同解題參照 九一三・五一―一五三)

胡てふもの語 寫 一冊

八〇二

和袋綴縹色表紙 八寸六寸 二十八枚 九行 題簽左肩紅橫刷毛目入紙書名同 内題なし

(近世中期寫、別名「胡蝶」「花づくし」等、有朋堂文庫「御伽草紙」所收 九一三・五一―一六五)

さかみ川 寫 一冊

八〇三

和袋綴共表紙 九寸一分六寸七分 二十三丁十一行 外題中央書名同

奥書 此さうし寛永六年閏二月吉日ニ是を「書長松殿ニまいる也」筆者 年五十七

(近世初期寫 九一三・五一―一二一)

さくらの中將 二卷二冊

八〇四

和袋綴縹色表紙 九寸六寸二分 四周單邊七寸三分五寸五分 十六行 畫は上卷四箇五頁 下卷六箇六頁 題簽左肩雙邊「繪さくらの中將上

(下)「(但し上巻後補墨) 柱刻「さくら上(下)」「(丁附)」、「水谷文庫」
甘露堂藏」「久彌藏」

刊記 (下巻奥) 寛文十^{庚戌} 曆彌生吉辰「松會開板

(一名さくら町申納言物語、表見返しに水谷不倒氏の識語あり 平出鏗
二郎「近古小説解題」参照 九一三・五一・一〇七)

しくれのさうし 寫 一冊 闕

八〇五

和袋綴改装白表紙 七寸九分五寸八分 四十八丁 十一行 外題中央

(本文に別筆) 書名同 内題なし、「紫影」

奥書 あくひつにていそき申ひま、ほんのことくと申「なからよめ申ま

しきとめいわく仕ひやかて御うつ」しかへさせなさるへくひ かやう

しゆせき御さうし」のなかのまれものにてひとめ御はつかしく御さ

か「めてたく」(不明)

天正十四年三月吉日以御本たゝいまこれは寛永拾四十一月吉日書之

(初一丁を缺、平出鏗二郎「近古小説解題」参照 九一三・五一・七三)

しやかの御ほんぢ 寫 一冊

八〇六

和袋綴雲母引白表紙 用紙杉原紙 天地截斷 八寸三分六寸八分 四十三

丁(但し第三十丁裏缺け木口少し破損) 十二行 外題なし 柱心に「一

(一四十三)」の丁附あり

(近世初期寫、横山重・太田武夫「室町時代物語集」第四解題参照 九

一三・五一・一九)

曾我物語 寫 十二卷十二冊

八〇七

石井行康筆 和綴葉裝紺地金泥山水模様表紙 用紙鳥の子 十行 題簽
中央丹地金泥短冊「(書名同) 第一冊(一十二)」、「英王堂藏書」

識語 (十二冊目初附箋) 曾我物語「石井行康朝臣眞蹟

(近世中期寫、内容流布本と相違多く本書の方すぐれたるが如し、「竹
柏園藏書志」参照、岩波文庫所收原本 九一三・五一・八九)

大佛供養物語 寫 一冊

八〇八

和袋綴鶯色表紙 八寸三分六寸六分 三十一丁 七行 外題中央(本文

に同筆) 書名同、「紫影」

奥書 享祿四年二月二日書寫畢

識語 (表紙右下本文に同筆) 釋眞海之

(本文漢字には悉く訓を施す、有朋堂文庫「御伽草紙」所收原本、横山

重・太田武夫「室町時代物語集」第四参照 九一三・五一・七五)

たなばた 二卷二冊

八〇九

和袋綴改装栗皮色表紙 八寸五分五寸五分 三周單邊六寸八分四寸九分

十行 挿畫上巻五箇五頁 下巻六箇六頁 題簽左肩後補墨題「繪たなばた

上(下)」「(上下をつけ誤る) 柱刻「たなばた」、「甘露堂藏」「久彌藏」

刊記 (下巻末) 明歴元年六月上旬 開板

(尾崎久彌「甘露堂文庫稀覯本攷覽」参照 九一三・五一・一一)

たむらのさうし 古活字本 二卷二冊

八一〇

和袋綴改装栗皮色表紙 九寸一分六寸一分 十一行二十字 題簽左肩水

谷不倒筆墨「田村草子上(下)」柱刻「タ 上(下)」「(丁附)」、「野中氏

圖書「此ぬし七米」「朝田家藏書」「水谷文庫」「甘露堂藏」「久彌藏」
識語（上巻見返し附箋水谷不倒筆）○田村のさうし寛永活字本」上下
二冊（完）『田村のさうし』は室町時代の小説にして『百合若大
臣』と共に「冒險的英雄譚として有名なるものなれど傳本極めて稀に
て」寛永頃の整版ある外未だ見ざりしが此の書を得てなほ其以前に
活字本あることを知り

（尾崎久彌「甘露堂文庫稀覯本攷覽」横山重・太田武夫「室町時代物語
集」第一參照 九一三・五一〇九）

たむらのさうし 二卷二冊

八一

和袋綴改裝毘沙門格子模様丹色行成表紙（徒然草鈔」の表紙を代用）八
寸八分五寸八分 十行 挿畫上巻は八箇八頁分下巻は七箇七頁分題箋左
肩白紙外題なし 内題「たむらのさうし上（下）」 柱刻「田村上（下）
（丁數）」

刊記 正保三歲三月吉日 杉田勘兵衛尉新板

（横山重・太田武夫「室町時代物語集」第一參照 九一三・五一〇二
三）

たわら藤太物語 二冊

八二

和袋綴改裝丹表紙 七寸五分五寸四分 十行 挿繪上巻七箇七頁分下巻
十箇十頁分 題箋左肩單邊藤井乙男筆墨（書名同）乾（坤）」 内題な
し 柱刻「とうた上（下）（丁數）」「春城清玩」

（有朋堂文庫「御伽草紙」所收 九一三・五一〇四一）

天狗内裏 寫 一冊

八一三

和袋綴藍漉込み表紙 七寸五分五寸五分 二十五丁 十一行 外題左肩
「義經記天狗内裏」内題なし。「平出氏書室記」

識語（表紙右肩貼紙）土百八十三全一冊（右下同）比（見返し墨書）此
本天狗内裏萬治二年印本と同物なり（卷末朱）右天狗内裏草紙全一卷
以東都松會萬治二年仲夏」所上木之本一校加朱墨了」天保六年乙未九
月三日夜 今古園龜壽（花押）

（朱書校合あり、正保頃刊本の系統、横山重・太田武夫「室町時代物語
集」・第二島津久基「近古小説新纂」參照 九一三・五一〇七九）

天神由來 奈良繪本 二卷二冊

八一四

和袋綴紺地金泥草木模様表紙 表見返し銀箔菊花艶出し模様紙 五寸三
分七寸六分 十三行 畫上巻五箇五頁分 題箋左肩後補書名同 内題な
し、「英王堂藏書」

（横山重・太田武夫「室町時代物語集」第一參照 九一三・五一〇九
三）

仁田四郎 寫 一冊

八一五

和袋綴白茶色表紙 八寸四分六寸三分 二十四丁 十一行 外題左肩書
名同 内題なし、「竹柏園文庫」「和學講談所」

（近世初期寫、笹野堅「室町時代少説集」横山重・太田武夫「室町時代
物語集」第二所收「ふしの人穴」各本と内容同じ 九一三・五一〇九七）

はしへんけい 寫一冊

八一六

和袋綴小菊紋卵色表紙 表見返し銀箔龜甲模様 十八丁 十三行 題簽

紅色短冊書名同 内題なし、「紫影」

識語(表紙右肩) 四冊の内

(近世初期寫、もと五箇五頁分の挿繪ありしを全部切り取られてなし、

平出鏗二郎「近古小説解題」及び別項「くちきさくら」一八〇一—参照

九一三・五—イ五五)

花世の姫さうし 一冊 闕

八一七

和袋綴毘沙門格子牡丹唐草黒色行成表紙 八寸六分五寸七分 三十二丁

三周雙邊柱部單邊七寸六寸 十行 挿繪五箇十頁分 題簽左肩雙邊(「書

名同)上 内題「はな世の姫上」 柱刻丁數のみ

(第三、八、十三、十九、廿四丁に重丁あり、第廿六丁にして上巻終り

第廿七丁「花よのひめ中」一葉を合綴したり、横山重・太田武夫「室町

時代物語集」第三解題参照 九一三・五—イ六九)

ひてひら入 寫一冊

八一八

和袋綴布目地羊齒源氏車模様卵色表紙 表見返し銀箔龜甲模様 二十六

丁 十三行 題簽中央紅短冊書名同 内題なし、「紫影」

識語(表紙右肩墨) 四冊ノ内

(近世初期寫、もと九箇九頁分の挿繪ありしを全部切り取られてなし、

有朋堂文庫「御伽草紙」及び笹野堅「幸若舞曲集」序説四三—頁以下所

收、平出鏗二郎「近古小説解題」及び別項「くちきさくら」一八〇一—

参照 九一三・五—イ五七)

一もとととく 三卷三冊

八一九

和袋綴深縹色行成表紙 九寸六寸二分 四周單邊七寸四分五寸六分 十

四行 畫は各巻とも五箇五頁分 題簽左肩後補墨「一本きく上(中、下)」

柱刻「一本上(中、下)(丁附)」、「野中氏圖書」「水谷文庫」「甘露堂

藏」「久彌藏」

刊記 (下巻木) 寛文十一^辛 亥 阪月吉且 松會開板

(横山重等「室町時代物語集」卷三参照 九一三・五—イ一〇五)

富士山の本地 二卷一冊

八二〇

和袋綴二卷を一冊に合綴改装墨色表紙 八寸八分六寸一分 四周單邊七

寸二分五寸四分 上十九丁下十八丁 挿繪上卷六箇十二頁分 下卷七箇

十四頁分 題簽後補左肩墨「蚕のはじまり日本國山のはじまり 富士

山のゆらい全 附たり秦のちよふくが夏」 内題「富士山の本地」 目錄

内題「富士山御傳記」 柱刻「富士山上(下) 丁數)」

識語 (表見返し墨) 滋岡家所持

(「延寶八年^{庚申}吉日本石町三丁目駿河屋徳兵衛開板」とあるものの後

刷、刊記「開板」の二字のみを残して他の文字を削れり、横山重等「室

町時代物語集」第二には初版によりて收む 九一三・五—イ四三)

ほうらい山 寫一冊

八二一

藤原公尹筆 和綴葉装緑色地金欄古裂表紙 用紙鳥の子金泥草花山水下

繪あり 八寸六寸 二十九丁 九行 題簽中央金泥模様短冊書名同 内

題「蓬萊山由來」

奥書 右中將藤原公尹

(本文寛文四年刊度々市兵衛開板「蓬萊山由來」に殆んど同じ、この前後の書寫か、但し刊本上下二冊に分れたるを本書一冊本に仕立てたり 九一三・五—イ九一)

松風むらさめ 二冊

八二二

和袋綴淺縹色表紙 八寸九分六寸 四周單邊七寸五分五寸二分 十四行 挿繪上卷は六箇八頁分 下卷は五箇七頁分 題簽左肩雙邊^入松風むらさ

め上(下) (「入」字缺損) 内題「まつかせむらさめ上」「松風むらさめ

下」 柱刻「松かせ上(下) (丁數) (下卷のみ綴ち目にあり)、「永田文庫」

刊記 (下卷末) 松會開板

識語 (下卷裏見返し墨) 延寶三年卯ノ九月八日 主田鍋甚兵衛

(横山重等「室町時代物語集」第五解題参照 九一三・五—イ一二五)

みしま 奈良繪本 寫 二卷二冊

八二三

和袋綴深縹色表紙 用紙鳥の子 五寸六分八寸 十三行 挿繪上卷六箇

六頁分 下卷六箇六頁分 題簽中央朱色短冊「(書名同) 上(下)」 内

題なし、「紫景文庫」

(近世初期寫、卷末に脱文あり、横山重・太田武夫「室町時代小説集」

わかくさ 奈良繪本 寫 三冊

八二四

和袋綴藍澁込み表紙 用紙鳥の子 五寸八分八寸一分 十三行 挿繪上

卷八箇八頁分 中卷七箇七頁分 下卷八箇八頁分 題簽中央朱色短冊

「(書名同) 上(中下)」 内題なし

(近世初期寫、内容萩野由之「新編御伽草子」所收本に同じ 九一三・五—イ四九)

江戸小説

菅の根・續菅の根 寫 五卷二冊

八二五

和袋綴納戸鼠色表紙 八寸八分六寸二分 九行 外題左肩「菅の根全」

「續菅の根全」内題續にはなし 柱心「スカノネ上ノ一(一三十一)」

「スカノネ中ノ一(一四十九)」「スカノネ下ノ一(一四十九)」「スカノ

ネ續ノ一(一廿五)」「スカノネ下井一(一井四十七)」、「河内氏藏書

印」

奥書 (正編) 下官いさ、かおかしありて一年門さしこめて」 侍りし

比心むつかしけれハいをやすからて」かの和歌の浦人も遙に境隔たる

心ちして」夢にたに見すいとせめてすきの道なれハ」目にちかき卷々

何くれと手に觸ぬ夜昼も」あらてそこはかとなくこの反古をかきす

さ」みぬ言の葉をもおほえわかまたとる和歌」の道のしるへともたの

めてなんおもひ立侍りし」^(ムシ以下同) 蛇のおそれを思ふといへ□と□□たき

ハ」□□心なりされと謙にハあらずまの□たり」見もしさたかに人の

聞えしを思ひ出て」かつは女子のしゐてのそむにまかせて綴侍るとい

ふことしかり

享保戊戌暮春の比清陰の窓のもとに」しるし終ぬ

(近世中期寫、菅の根は三卷、續菅の根は二卷、菅の根同續上半までは

和文物語續下半は隨筆なり 九一三・六一一

短冊の縁

寫 五卷一冊

八二六

和袋綴縹色表紙 八寸八分六寸三分 百十三丁 九行 題簽左肩「たんなさくのゑん」内題なし、「阿波國文庫」「不忍文庫」

(近世中期寫、五冊を一冊に合綴、近世雅文小説なり 九一三・六一一)

五)

都通物語

寫 三冊

八二七

源菅美著 「あふみのくにひもの、さと人源菅美」の自序 和袋綴卵色表紙 七寸三分六寸二分 八行 題簽左肩「都通物語天」「津、物語地」「通對物語人」内題なし、「綠雲館藏書印」「摹寫書記」

奧書 まくハしくせしにもあらず」わかちかたき所／＼をあらハに」しけるは吾友人源の菅美なり」そをまた田村此雄」補ふ

(伊勢物語の體裁にならひて古今の故事説話を歌物語風に記す、各節獨立の短篇、卷中近世の事にかゝるものあり寛政六年の記事ある故概ねその頃の著作か、序文似雲が伊勢殘考の説を掲ぐ、朱點あり 九一三・六一一)

あた物語

奈良繪本 寫五冊

八二八

三浦爲春(平爲春)著 和袋綴紺地金泥模様表紙 見返し金泥草花模様紙 五寸五分八寸 十三行 挿繪一卷四箇四頁分 二卷三箇三頁分 三卷四箇四頁分 四卷三箇三頁分 五卷五箇七頁分 題簽中央丹短冊「あた物語」

語一(一五)、「英王堂藏書」「英國薩道藏書」

(第一冊見返し紙箋に「あた物語長嘯子筆 画永徳筆」内題下に本文同筆「平爲春作焉」とあり、「竹柏園藏書志」は長嘯子筆永徳畫を疑ふ、朱にて讀假名を附す 九一三・六一一(二三))

うちでの小つち

五卷五冊

八二九

菱川師宣(吉兵衛)畫 和袋綴縹色表紙 七寸五分五寸四分 四周雙邊 五寸七分四寸二分 九行 挿繪各卷四箇五頁分卷四のみ五箇五頁分 題簽脱落但し左肩に跡あり 外題中央左寄り墨「打出小つち一(一五)」

(卷三は一部分缺損) 柱刻卷數及び丁數のみ

刊記 (卷末本文餘白) 繪師「菱川吉兵衛」 書林 清兵衛 開板 (改題後刷本なるべし 九一三・六一一(二五))

葛城物語

三冊

八三〇

和袋綴黒表紙 八寸五分五寸 四周單邊六寸九分五寸三分 十一行 挿繪 卷上は十三箇十三頁分 卷中は六箇六頁分 卷下は五箇五頁分 題簽左肩雙邊「かつら (以下缺損)」 柱刻「かつらき物語上(中、下) (丁數)」、「紫景文庫」

(「貞享五年^辰八月吉日洛陽書肆淺見吉兵衛板」の刊記ある「役行者緣起」は本書の改題後刷 九一三・六一一(二三))

聚樂物語

二卷二冊 闕

八三一

和袋綴縹色表紙 八寸四分五寸九分 十行 外題なし 柱刻「上(下) (丁數)」

刊記 寛永拾七年五月日」杉田勘兵衛開板

識語 (上巻見返し) 此書物末と、尙も相傳可申事」福地丹下」御子孫衆

(中巻を闕く、續群書類從第三十輯上巻その他所收 九一三・六一一・一五)

高屏風くだ物かたり 二卷二冊

八三三

〔菱川師宣〕畫 和袋綴改装卵色表紙 用紙裏打 六寸一分四寸四分

四周單邊五寸七分四寸一分 十三行 題簽左肩後補山東京山筆「高屏風くだ物語上」たかびやうぶくだ物語下」 内題「高屏風くだ物かたり上

(下)」 柱刻「上一(一廿六)」「下一(一廿六)」「山東庵」
刊記 うろこかたや新板

(上巻卷頭補紙五枚に山東京山考證識語あり、大正四年京都佐々木幸太郎複製原本なり 九一三・六一一・一七)

竹齋 二卷二冊

八三三

和袋綴納戸鼠色毘沙門格子模様表紙 八寸九分六寸三分 十一行 挿繪

上下各十三箇十三頁分 外題なし 内題なし 柱「竹齋上(下)(丁數)」一印あり

(寛永正保頃刊整版本なり 九一三・六一一・一七)

尤草紙 二卷一冊

八三四

和袋綴濃色表紙 九寸六寸 八十二丁 十行 題簽左肩「尤草紙上下」

内題(目錄)「尤之双紙」柱刻「上(下)(丁附)」「水野氏藏書記」「富氏藏」

刊記 寛永甲戌六月吉日 書舎 中野氏道伴刊行

(寛永九年刊本につゞく後刷、近世文藝叢書第七所收と同版 九一三・六一一・一七)

薬師通夜物語

八三五

和袋綴濃色表紙 八寸一分五寸六分 二十三丁 十行 題簽左肩雙邊

中央破損(「語」のみ僅かに判讀するを得) 内題なし

刊記 寛永二十年二月日大黒判

識語 (表見返し藤井紫影筆墨) 薬師通夜物語

(後「福齋物語」「寛永飢饉物語」「鼠物語」などと改題、徳川文藝類聚第一所收 九一三・六一一・一七)

嵐無常物語 一冊 闕

八三六

井原西鶴著 自板下 吉田半兵衛畫 和袋綴改装黒表紙 七寸五分五寸

三分 四周單邊六寸四寸四分 十一行 挿繪五頁 外題なし 内題なし
柱刻「嵐三 卷上(巻上の二字墨にて塗消す)一(一二十)」

(巻上のみ、元祿四年刊か、野間光辰「西鶴新攷」に翻刻さる 九一三・六一一・一七)

好色一代男 八卷五冊

八三七

井原西鶴著 自畫 落月庵西吟跋 西吟板下 和袋綴八冊を五冊に合綴

改装黒行成表紙 八寸四分六寸一分 四周單邊六寸六分五寸四分 十一行 挿繪すべて一箇一頁分にして巻一より巻七にいたる各七箇巻八のみ

五箇 題簽左肩雙邊入繪好色一代男一ノ二(三ノ四、五、六、七ノ八) (但し「一ノ」「三ノ」「ノ八」は墨) 柱刻「男一(一八)(丁附)」、「京本屋菱や利兵衛本町一丁目」「藤本伊八」「平出氏書室記」「久彌藏」「甘露堂藏」

刊記 天和二壬戌年陽月中旬 大坂安堂寺町五丁目心齋筋南横町 秋田屋 市兵衛板行

識語 (第一冊表紙左肩貼紙平出氏筆) 水十五共五冊(同) 比

(初版書肆名「大坂思案橋荒祇屋孫兵衛可心板」を入木變更して再板せし所謂秋田屋版、卷七末繪一丁を合本に際し卷八の末に誤綴せり 九一三・六二一イ二五)

好色一代男 江戸版 七卷七冊 闕

八三八

井原西鶴著 菱河師宣畫 和袋綴改装原表紙薄茶色表紙 七寸八分五寸三分 四周單邊六寸六分四寸七分 十三行 挿繪卷一は七箇八頁分 卷二より七にいたる各卷七箇七頁分 題簽左肩雙邊之世「好色一代男一(三、五、七)」之世「介かうしよく一代男二(四、六)」 柱刻「男一(一六)(丁附)」、「甘露堂藏」

(卷八を闕きて刊記不明なれど印刷鮮明なる故、江戸版初版「貞享元甲子曆三月上旬大和繪師菱河吉兵衛師宣 日本橋南貳町目川瀬石町 川崎七郎兵衛板行」にあたるものなるべし 九一三・六二一イ二九)

好色一代女 六卷五冊

八三九

井原西鶴著 「吉田半兵衛」畫 和袋綴緑色表紙 八寸六分五寸九分 四周單邊六寸三分五寸三分 十二行 挿繪卷四箇宛卷一より四にいたる

八頁分卷五は六頁分卷六は七頁分 題簽左肩雙邊入繪好色一代女二(三四、五) 外に方箋外題卷一より五までにあり卷一は判讀しがたし 柱刻「好色一代女一(一五)(丁附)」、「甘露堂藏」「久彌藏」

刊記「貞享三丙寅歲 大坂真齋橋筋吳服町角 林鐘中澆日 書林 岡田三郎右衛門版 (卷五・六を一冊に合綴、表紙に方箋ありて特裝本と稱せらるゝもの 九一三・六二一イ二三)

好色三代男 二卷二冊 闕

八四〇

和袋綴砥粉色地毘沙門格子卷龍模様表紙 八寸五分五寸四分 四周單邊六寸五分四寸五分 十一行 挿繪卷二は七頁分 卷五は六頁分 卷五題簽中央雙邊「諸國好色三代男繪入五」(「諸國」を丸花枠にて圍む) 内題「好色三代男卷之二(五)」 柱刻「三代卷二(五)(丁敷)」

刊記 貞享三曆孟陽上澆日「書林壽詞堂 皇都三條通 西村市郎右衛門 同八幡町通 坂上勝兵衛 刊行 識語 (卷二裏見返し墨) 和分山邊縣永原村 嶋田熊治郎 (卷五裏見返し卷二書入に同筆墨) 嶋田熊治郎 (挿畫は吉田半兵衛か 九一三・六二一イ二三)

西鶴置土産 五卷五冊

八四一

井原西鶴著 西齋菴團水序 自序 和袋綴改装栗梅色表紙 三周裁斷あり 七寸二分五寸三分 四周單邊六寸二分四寸五分 挿繪卷一は四箇六頁分卷二・三は三箇五頁分卷四・五は三箇四頁分 題簽左肩水色紙墨 「西齋置土産一(三、五)」「西齋をきみやげ二」「西くはく置土産四」

り誤りたるなるべし、序に「貞享五_辰年_辰 榊月吉祥日」の日附を佚せる後
刷本なり 九一三・六二一―一八九

武道傳來記 八卷八冊

八四六

井原西鶴著 自序〔吉田半兵衛〕畫 和袋綴改裝深縹色表紙 八寸四分
五寸八分 四周單邊六寸九分五分 十三行 挿繪各卷三箇六頁分（但し
卷二のみ七頁分）題簽左肩雙邊 敵討 武道傳來記一（一八） 但し卷一は
卷二の卷五は卷三の題簽の卷數を墨にて訂正して代用す卷六、七は水谷
不倒「西鶴本」の複製題簽に卷數を墨書して補ふ 内題「武道傳來記 諸
國敵討」 柱刻「武道（武道鑑とも）卷一（一八）（丁附）」、「甘露堂藏」
「久彌藏」

刊記 貞享三年卯初夏「江戸日本橋青物町」萬屋清兵衛

大坂吳服町真齋橋筋角「岡田三郎右衛門

（九一三・六二一―一二七）

本朝櫻陰比事 五冊

八四七

井原西鶴著 和袋綴改裝花唐草模様入毘沙門格子深縹色行成替表紙 八
寸二分五寸八分 四周單邊六寸六分五寸一分 十二行 挿繪卷一、四箇
七頁分 卷二、四箇六頁分 卷三、五箇八頁分 卷四、五箇八頁分 卷
五、四箇六頁分 外題なし 内題「本朝櫻陰比事」 柱刻「櫻陰卷一（一
五）（丁數）」

刊記 元祿二年己正月吉日

江戸日本橋青物町「萬屋清兵衛

大阪高麗橋真齋橋筋南入「馬屋庄左衛門」板行

（九一三・六二一―一五）

明鴉墨繪袖襦十二編 稿本 寫 二卷二冊

八四八

柳亭種彦（二世）著 自筆 和袋綴改裝紙粉色表紙 原表紙共紙 用紙每
葉裏紙を添ふ 五寸九分四寸一分 二十二行 題簽左肩書名同 原表紙
外題中央「明鴉墨繪袖襦十二編上 柳亭種彦著 歌川國貞畫 紅英堂壽
梓」 「あけからす十二編下 種彦著 國貞画 葛吉版」 内題なし、「齋
藤文庫」「酒竹文庫」「地本行事（墨）
識語（兩卷原表紙左肩） 丑十月行事

（慶應二年刊同書第十二篇の草稿、初篇は文久元年刊、第十六篇明治十
年刊にて完結 九一三・六四一―一二五）

繪本慶元浪速軍記 稿本 寫 十八冊 闕

八四九

松川半山著自筆 和假綴共表紙 八寸二分五寸六分 「豊臣記六篇」の
柱刻ある用紙 四周單邊六寸四寸四分 十一行 外題左肩書名同 所收
卷數左の如し

初篇一―六卷 初篇下帙七、八、十一卷 二篇一―四、十一―十二了卷
三篇一卷

（初篇壹の表紙外題の右に「作者松川半山」とあり右下に「慶應四年六
月十八日京都府御役所江願上同年七月四日御免全部六冊 願人越後屋治
兵衛」とありて「議政官史官檢査之印」「改濟」「御赦免」の朱印あり、
初篇下帙七の表紙に「京都府明治元年戊辰九月廿四日願上ケ同月廿五日

御免願人越後屋治兵衛 作者松川半山 印記前の通り、第二篇表紙書名のみ、同篇巻初に附箋あり「口畫之人物ハ草稿全部揃ひひ上前後見合せて下畫を認可申ゆ」と、第二篇以下願書檢印なし、各巻本文塗抹訂正貼紙あり所々挿繪の下繪あり、 九一三・六五—イ七)

繪本慶元難波軍記

板下木 寫 八冊

八五〇

松川半山著 和假綴表紙なし 用紙薄様 八寸五分六寸三分 四周單邊六寸四寸二分 十一行 柱心「豐臣記編」(刻)及びこの柱心の上に「浪速記初編卷之二(一、二、三)(墨)を貼りたるものと混在す 内題書名同 (別項「繪本慶元浪速軍記の初編卷一より卷八に至る板下木、口繪を挿入すべき頁は餘白に殘して描かず、内題の下に「浪速案川半山刪補」とあり 九一三・六五—イ五)

画本豊臣勳功記

稿本 寫 四十五冊 闕

八五一

八功社徳水著 自筆 松川半山畫 和假綴共表紙 七寸五分五寸四分 四周單邊 六寸五分四寸六分 十一行 外題書名同、「學問所改」(各篇卷一の表紙にあり) 所收卷名左の如し
第七篇一—四、六、八、九卷 第九篇一—十卷 第十篇一—四、七—十卷 第十一篇一—六、八、九卷 第十二篇一—十卷
見返し (第九篇卷十裏) 編述東都八功舎徳水 畫圖浪華松川半山
卷末 (第十篇卷十) 繪本豊臣勳功記十二編 朝鮮征 全部十冊宛 八功舎徳水編述 松川半山 畫圖
(朝倉無聲「日本小説書目年表」に「繪本豊臣勳功記九〇 八功舎徳水著 歌川國芳・芳房・松川半山畫 安政四年—明治十七年に至り完結」とあり

るもの、草稿、挿畫草稿あり、貼紙塗抹訂正附箋あり、別に第九篇の口繪板下五丁あり用紙薄様、表紙右肩に「戊辰年閏四月下旬出來松川半山」と 九一三・六五—イ三)

現代小説

雲中語

稿本 寫 一冊

八五二

森鷗外編 依田學海・森田思軒・森鷗外・齋藤綠雨・幸田露伴・饗庭篁村筆 和袋綴改裝檜皮色表紙 各丁裏打を施す 八寸五分五寸六分 三十七丁 行數不定 題箋左肩書名同 内題「めさまし草まきの十一雲中語露伴綠雨學海鷗外篁村紅葉思軒」
(明治二十九年十月、鷗外の觀潮樓にて催されし小説合評會「雲中語」の原稿、天保老人は學海、「浮木丸」に於て頭取の前半は思軒、その後半某の國に以下・不服・ひいきは鷗外、わけ知りは綠雨、「世話女房」に於て頭取・小説通は鷗外、最良は思軒、溫和家は露伴、皮肉は綠雨、むだ口は鷗外筆なり「鷗外全集」第十四卷三二—三四二頁參照 九一三・七一—イ三)

行方不明

稿本 寫 一冊

八五三

江見水蔭著自筆 和假綴共表紙 八寸五寸七分 百二十一丁 十行 畫一箇二頁分 外題左肩別筆「少説行方不明 江見水蔭原稿」
(第一丁表に朱筆にて「五月号(第十四卷第七号) 卷頭小説」と印刷上の指定あり明治四十一年五月文藝俱樂部所收の原稿 九一三・七一—イ)

文集

國風集 寫 二冊

八五四

南里有隣筆 和袋綴縹色表紙 原表紙共紙 九寸六寸四分 十行 題簽
左肩書名同 原表紙外題左肩「國風集上(中)」 内題なし、「南里家印」

(題簽書名の下に別筆「南里有隣翁稿本」とあり、上巻目次の端に「序
拔例上目次」「序跋例下目次」とありてそれを塗抹せり、歌文雜書の序
跋文詞を抄寫せるもの 九一四—一)

むらさき日記 寫 三卷一冊

八五五

和綴葉裝濃紺表紙 用紙鳥の子 墨附十四丁白紙二丁 九行 題簽左肩
「むらさき日記一部三卷全」 内題なし、「滋岡庫」

奥書 此日記三卷普賢寺殿之御本の儘寫之早尤可爲重寶之記者也
元享三年三月下旬 冷泉中將寫之

右一部三冊之書記拜借官本寫之訖「永祿元年四月上旬法眼紹巴寫
(近世初期寫、「竹柏園藏書志」三九五頁參照 九一四・三一—)

和泉式部日記 稿本 寫 一冊

八五六

和泉式部著 六人部是香筆 和袋綴縹色表紙「和泉式部全集」の柱刻あ
る用紙 八寸五分五寸九分 四周單邊頭註用二寸の上欄あり 四十八丁
十三行 外題左肩佐佐木信綱筆書名同 右肩「六人部是香 稿本」 内

題なし

(異本校合あり初二丁頭註せり、是香に「頭註和泉式部全集」の企あり
しなるべし 九一四・三四—一)

飛鳥井雅有日記 寫 一冊

八五七

飛鳥井雅有著 和袋綴薄卵色表紙 用紙鳥の子薄様 八寸一分六寸五分
三十七丁 十一行 題簽左肩「飛鳥井雅有卿記事」 内題なし

奥書 (同筆)此一帖端奥無之以勘解由小路中納言清房卿本写之當家御記
歟猶可勘也(勘解由)の右傍に「海住山也高清卿父」左傍に「嘉吉文
安比也」の註あり「當家」の右傍に「雅有歟」とし更に朱にて「歟」
を消して「卿」と訂す)

(朱筆)此一冊雅有卿御記無相違之間令加奥書尤珍重不過之者也」此
内之御詠隣女集ニアリ」寛政十二年五月下旬 民部卿雅威

(雅威所々に朱註を加へたり、古典文庫所收原本、佐佐木信綱「國文學
の文獻學的研究」三〇二頁參照 九一四・四—一)

阿佛假名諷誦 寫 一冊

八五八

阿佛尼著 和美濃紙縦二つ折り綴葉裝 六寸七分四寸六分 十丁 六行
外題中央書名同 内題「阿佛房のかなふしゆ」

(近世中期寫、卷末「入道大納言爲家追善」と記す 九一四・四—三)

方丈記 寫 一冊

八五九

鴨長明著 賀茂氏孝筆 和綴葉裝肉色表紙 用紙鳥の子裏打 八寸二分
六寸一分 二十一枚 十行 題簽中央外題「長明方丈記」 内題「鴨長
明方丈記」 扉左肩同筆「鴨長明方丈記」
奥書 慶長十九臘月中旬神前結番ニ付於社頭書之 從五位下氏孝
（佐佐木信綱「竹柏園藏書志」五一二頁「鏡草」小川壽一「對原形本方
丈記」梁瀨一雄「鴨長明の新研究」參照 九一四・四一—一）

十六夜日記 寫 一冊

八六〇

阿佛尼著 和綴葉裝紺紙金泥流水に柳の模様表紙 用紙鳥の子 七寸八
分五寸八分 三十九枚 十行 題簽左肩赤紙金泥雲形模様「道の記阿佛
内題なし

識語（卷末）右はあふつのかまくらへの羈行
（近世中期の寫、流布本系統の善寫本なり、玉井幸助「十六夜日記の原
形」—國語と國文學七ノ六—參照 九一四・四四—一）

十六夜日記

九條家本 寫 一冊

八六一

阿佛尼著 和綴葉裝共表紙 用紙薄様鳥の子 七寸五分五寸二分 墨附
五十九枚白紙一枚 八行 外題左肩「阿佛記并爲家追善作」〔阿佛假と
書き「假」に見せけちして「記」と右記す〕 内題（五十四葉表）「安嘉
門院四条局假名諷誦阿佛禪尼」

奥書（三十一葉表）安嘉門院四條法名阿佛作
（三十二葉表）中院大納言置文和哥「日吉百ヶ日參籠之時日哥之内也
いとほる、なかきいのちのつれなくて」猶なからへは子はいかにせむ

ふるさとに千世もとまてはおもはずと」とみのいのちをとふ人もかな
（五十三葉裏）安嘉門院四條法名阿佛作東日記
（五十八葉裏より五十九葉表にわたる）建治元年六月五日弟子敬白
とまる身はありてかひなき別路に「なとさきた、ぬ命なりけん
（別行）入道大納言爲家追善阿佛禪尼作也云々
（五十九葉裏）以冷泉大納言持爲卿家本書寫校合了

（室町末期寫、朱筆の書入一箇所あり、流布本の長歌以下を缺き爲家の
五七日の願文を併せ記す、十六日夜日記の原形を偲ぶ證本たるべきも
の、玉井幸助「十六夜日記の原形」—國語と國文學七ノ六—參照 九一
四・四四—一三）

徒然草

古活字本 二卷二冊

八六二

吉田兼好著 和袋綴梅鼠色表紙 九寸三分六寸八分 十行十八字 外題
なし 内題なし、「高木家藏」「桂氏藏書」
〔古活字版之研究〕にいふ所の慶長中刊十行本〇種なり 九一四・五一
—一三）

徒然草

古活字本鳥丸本 一冊 闕

八六三

吉田兼好著 和袋綴紺地市松模様空摺表紙 一尺二分六寸八分 扉白紙
一丁共九十九丁 十行約十七字 外題なし 内題なし
（上卷のみ、慶長十八年刊鳥丸本徒然草にして前半に慶長末年頃の註纂
し 九一四・五一—一）

つれく草 嵯峨本 四冊

八六四

吉田兼好著 和袋綴改裝替表紙雲母摺梅立枝模様深川鼠色表紙 用紙雲

母摺唐草模様 各冊巻首遊紙一丁を補ふ 六寸八分六寸七分 十行 題

箋後補左肩「つれく草 元(享、利、貞)」内題なし

(嵯峨本第一種木徒然草なり 九一四・五一五)

狂文旅は道つれ 寫 一冊

八六五

平亭銀鷄著自筆 和袋綴黃色行成表紙原表紙白紙 八寸四分五寸二分

四周雙邊六寸九分四寸四分十行野紙を用ふ 六十七丁 原表紙外題左肩

銀鷄筆 「狂文 旅行旅者道つれ」 附加表紙原題箋左肩白紙書名原表紙外題に同

じ、「櫻山文庫」「齋藤文庫」「銀鷄(二印)」

(文政二年正月末江戸を立ち小田原へゆき、二月三日歸宅する迄の道中心記、狂文の中に例の物識りぶりし記事多し 原表紙外題上部に別筆にて

「平亭銀鷄自筆」とあり 九一四・六一三)

草津私記 寫 一冊

八六六

岩下貞融著 和假綴共表紙 八寸一分五寸三分 四十一枚 十一行 外

題左肩「草津雜記」、外題の下「芦篠せかる添註論考」、「神村長豊藏書」

奥書 (葦手解の末) 天保二年十一月 貞融稿) あししての考又語林類葉

初稿あししての条可合考

(せかゐの解の末) 壬辰閏十一月 貞みち) 光中なほ語例をひきて師のせかい考の首書に書入おけり合考ふへし

(添註といふ文字論の末) 天保三年閏十一月十八日夜 貞融謹草
(草津滯在中の日記に葦手歌繪解寒井の解添註論等を合綴す 九一四・六一三)

櫛の垢 稿本 寫 一冊

八六七

木下幸文著自筆 和袋綴改裝澁引表紙 原裝は共表紙 八寸五寸八分

原表紙共墨附二十一丁 十行 題箋左肩單邊(刷)外題なし 原表紙外題

書名同

(朱墨を以て所々補訂す、板本亮々草紙所收の文と異同あり 九一四・

六一一五)

亮々草紙 稿本 寫 二冊

八六八

木下幸文著自筆 和袋綴改裝澁引表紙 原裝は共表紙 八寸四分五寸七

分 十行 題箋左肩單邊(刷)外題なし 原表紙外題左肩「亮々草帯

上(下)」内題書名同下に「(一)(二)の巻」

(原表紙見返しに朱筆にて「亮々草紙卷の一目録」を記す、朱墨の訂正増補多し、本書にありて板本に除きたる文あり 九一四・六一一七)

上京日記 寫 一冊 闕

八六九

野村望東尼著自筆 和綴葉裝 但し美濃紙を四折にして綴づ 表紙なし

四寸八分六寸八分 二十六丁 行數不定 二十行 前後 内題なし

(殆んど每葉朱墨を以て塗抹推蔽す、第五丁表半頁を切取る、流布本は推蔽されしものに依りたり、文久元年十一月廿四日福岡を立ち翌年五月五日宮中を拜觀せし際の日記、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」一〇

一頁「竹柏園藏書志」四一三頁参照 九一四・六一一・九

高千穂日記 寫 一冊

八七〇

磯屋久樹著自筆・自畫 和袋綴墨刷表紙 七寸九分五寸六分 三十八丁
十一行 挿畫三箇十一頁分 題簽左肩銀泥ぼかし書名同 内題なし。

「磯屋久樹」

奥書 天保十^{己亥}十一月於燈下書之

(長崎より阿蘇を經高千穂に赴きし紀行、卷末に高千穂神樂歌、高千穂
白杵郡中村附、高千穂風土を附載す 九一四・六一一・二)

たにのむもれ木 寫 一冊

八七一

清真著自筆 和袋綴茶色表紙 七寸七分五寸三分 三十八丁 八行 題
簽左肩後補書名同 内題なし

奥書 慶長四年初秋の比跡も名のみ計や志賀の唐崎にて

右一冊頻御所望雖然予龜才也剩雖生「干倭遠干歌舞之道管任現在之
本塗之畢」假名遣相違之事全非身誤不知之故也來賢可被「質之維時元
和第肆著雅敦辨無射下澣慚愧」と清真書之

(徒然草風の隨筆、本書もと無題、竹柏園藏書志の名する所による 九
一四・六一一・三三)

てくるまのもと 寫 一軸

八七二

賀茂真淵著自筆 卷子本灰色地鶴織出模様布表紙 見返し金切箔散らし
紙 一尺三寸 題簽左肩白紙金砂子散らし佐佐木信綱筆「てくるまのも
と 賀茂翁自筆 信綱題」 内題なし

奥書 是ハもとめさせ給ふによれりされと」あらをのこの哥またハ文な
とハをん」な君たちの用ぬ給ふへきにあらねは」いとを、しくいとふ
るきすかた詞なるをハ」のそきて中ころのすかたに似つらんと」おほ
ゆるをしるしてまいらするになん猶」女の哥ハかくハあらさめれハか
ひなし 賀茂真淵

(女弟子のために真淵が自らの歌文を書き與へたるもの、上下焼損して
卷首の下部は文字缺けたる所あり 佐佐木信綱「増訂賀茂真淵と木居宣
長」所收「縣居翁の歌文」参照 九一四・六一一・二)

夏野の草 寫 二卷二冊

八七三

長谷川安卿著 「成島龍洲」筆 和袋綴薄款冬色表紙 用紙薄様 八寸一
分五寸四分 十行 題簽左肩上剝脱後人筆書名同 下内容と同筆書名同
「兼松氏藏書記」「竹柏園文庫」

見返し附箋 此文は予か旧友長谷川主馬御書物奉行藤原「安あきらか手自
緝録しをけるを去年」十一月身まかりし後其子なるに乞てうつし」を
くなり夏野の草の詠もかのみつから」よめりし也

奥書 安永九年庚子の九月從息安辰借用写早」此外和哥」宗匠家御点之
卷副焉」旧知己龍洲和鼎

(龍洲は成島忠八郎、所收の文は帝國圖書館藏本として森潤三郎「紅葉
山文庫と書物奉行」に載する目錄と下卷に於いて全く相違す 九一四・
六一一・三一)

姫島日記 稿本 寫 六冊

八七四

野村望東尼著自筆 和假綴表紙なし 四寸五寸二分 内題なし

第一冊 起筆「慶應乙丑十一月廿六日」より同三十日に至る。帖末「け

ふもきたりてさま／＼とものかたりつゝなかくゐたればひるま
ちかにな」に終りたれば以下佚したるなるべし 七枚

第二冊 起筆「正月十一日」より同十九日に至る。末帖「正月廿日朝ま
てをしるす」とあり十三枚

第三冊 起筆「正月廿日朝後より書」より同三十日に至る十一枚

第四冊 起筆「二月一日」より同十一日に至る十枚外白紙一枚

第五冊 起筆「三月一日」より同四日に至る三枚

第六冊 起筆「三月四」より同十三日に至る七枚

(佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」一〇一頁「竹柏園藏書志」三九
八頁参照 九一四・六一・二五)

文林摘葉集

寫 二卷一冊

八七五

南里有隣編自筆 和袋綴共表紙 八寸一分五寸五分 四十五丁 十行

外題中央「文林摘葉集・田苑草露」、「南里家印」

(上巻は中世の序類をあつめ、下巻は「田苑草露」と名づけて近世の文
をあつめ合綴す 九一四・六一・二七)

防州日記

寫 一冊

八七六

野村望東尼著自筆 和美濃紙横二つ折假綴 表紙なし 四寸一尺四分

十枚 行數不定 内題なし

卷首「慶應卯のとし九月廿三日記」(記の右上に一字あれど不明)

卷末 右八首の哥とも霜月「一日より他人に書せ」たるにいまわニ臨ミ

壹首自ら書たれ」と手ふるひて文字「見へかたく口つからいふ其言葉」

もわかりかたくして」しるさす

(病中作十一月廿五日以下は別筆にして望東尼自筆に非ず、病中作の歌
數流布木に比して異同あり、竹柏園藏書志三九九頁に維新史料に従ひて
假に防長日記と名づくといへど維新史料には「防州日記」とあり 九一
四・六一・一九)

保科氏之女紀行

寫 一冊

八七七

藤木いち女著 和假綴共表紙 用紙鳥の子 七寸七分五寸四分 十七丁
初十四丁九行 後三丁十行及十一行 外題左肩書名同 内題なし

奥書 (裏見返し) 右之行記ハ藤木氏娘いち女十三才之時之作也父ハ

保科肥后公之家臣保科「民部祖父鴨之住藤木織部正弘増養」育而元祿
十三庚辰ノ十二月筑後久留米「有馬中務公之家臣岸外記貞知ノ許江」
嫁此時十三才ニテ記之 元祿十四年三月日写
(京より久留米への紀行 九一四・六一・一三)

穂向屋文集

寫 一冊

八七八

竹村茂雄著自筆 和袋綴玉蜀黍色表紙 九寸六寸五分 原共表紙共墨附

四十三丁 十行 題簽左肩白紙書名同 原表紙外題左肩「穂向屋文集
全」 内題「穂向屋家集」、「竹柏園文庫」

(茂雄自ら朱筆の補正あり 九一四・六一・二九)

武藏野觀花記

寫 一冊

八七九

屋代弘賢著自筆 和假綴共表紙 用紙薄様鳥の子 八寸四分五寸六分

七丁 四周單邊五寸三分四寸二分 有界十行 外題左肩自筆書名同 内

題なし、「不忍文庫」

奥書 弘賢

(文化三年二月廿六日屋代弘賢の荻野薫長、内田祐盛、飯田嘉種等と江戸郊外の櫻を尋ねし紀行 九一四・六一一三七)

山邊の虫 寫 一軸

八八〇

桑門風山著〔椿椿山畫〕 卷子本墨流紙表紙 八寸六分九寸六分 挿繪

六箇 題簽左肩短冊同筆「山邊の虫」、「椿氏琢華堂圖書記」

奥書 右文政四とせといへる葉落月しるす

(文政四年八月十五日太源短勝の歌會に寄りし人々の飛鳥山に虫めてにゆきし記事、彩色畫六葉を畫ける上に文をした、めたり或は舊藏者椿山の描く所か 九一四・六一一三三)

夢かぞへ 寫 四冊

八八一

野村望東尼著自筆 和袋綴共表紙 六寸五分四寸四分 紙數表紙共第一

冊四十四丁 第二冊三十丁 第三冊十七丁 第四冊三十丁 約十三、四

行 外題左肩「ゆめかそへ」水無月の盡「ゆめかそへ」八月「ゆめかそへ」七月八月のはしめ「ゆめかそへ」九月「ゆめかそへ」十月「ゆめかそへ」十一月 内題なし

(幽囚中の日記の淨寫本、姫島日記はこの抄録なり、各冊朱墨を以て塗抹推敲あり、各種翻刻本は推敲されしものに依る、佐佐木信綱「國文學の文獻學的研究」一〇一頁「竹柏園藏書志」三九八頁參照 九一四・六一一七)

村雨日記 寫 一冊

八八二

落合直文著自筆 和大和綴共表紙 八寸五寸三分 墨附四十九丁白紙一

丁 八行 外題左肩自筆「むらさめ日記」、「青雲舎之藏書」

(伊勢神宮教院にありし落合直文の東京遊學のため明治十四年九月東上せし際の紀行、「荻舍遺稿」所收、表紙右下に自筆にて「落合龜二郎草」の識語あり、短歌六首を影印せしもの二通添附 九一四・七一〇)

六十日記 稿本 寫 一軸

八八三

幸田露伴著自筆 卷子本萌黃絹表紙 袋綴たりしを卷子本に改裝せるものなり 用紙美濃紙 一尺一寸 四十二枚 外題なし

(明治三十二年二月二十五日より四月二十五日迄の記なり、岩波書店版「露伴全集」第五卷所收 九一四・七一三)

書 翰 文

消息文例下卷 寫 一冊

八八四

藤井高尙著自筆 和袋綴共表紙 八寸二分五寸六分 墨附表紙共三十

八丁 十行 外題左肩自筆「消息文例 下」

識語 (表紙に井上通泰筆) 高尙自筆八冊ノ一「爾他古今集新釈等ハ皆燒失ス但新釈」ノ中書本ナド若干(目錄別在)「ハワザト」備前ニ殘シシガ今宮内ニ傳レリ

(寛政十一年稿成りし本の下卷、末若干を缺く、甚だ淨書なれどなほ補正書入あり 九一六・一一三)

庭訓往來 寫一冊

八八五

正教筆 和袋綴濫引表紙 用紙裏打裁斷あり 九寸四分六寸九分 五十

丁六行 題簽左肩白紙「庭訓往來 古筆」

奧書 於越前國白山平泉寺等□院小童之所望「依難點止不願愚僧恥辱如

形令書寫處也」相講之不可有後見之嘲哂者也惡筆々々

寶德三年辛未敦牂 十六日 右筆正教大德行年五〇

(裏見返しに「主乙菊丸」なる持主の署名あり 九一六一一)

庭訓往來鈔 寫一冊

八八六

和袋綴栗皮色表紙 八寸六分五寸七分 墨引にて四周六寸一分四寸七分

九行罫 上欄一寸六分の線を引く 一行二十字詰註雙行 五十七丁

題簽左肩白紙「庭訓往來」内題なし、「知健之印」

識語 知健(花押)附與悅明子

(室町末期寫、墨書朱筆の書入多し、卷首若干缺 九一六一一五)

庭訓私記 寫二卷一冊

八八七

盛教坊筆 和袋綴白茶色地雲形模様入表紙 九寸六寸四分 四十六丁

十行 外題なし 内題「庭訓私記上」「庭訓往來私記下卷」

卷末 (卷上) 以上十二通之注畢(卷下)「庭訓私記以上」

奥書 江州弥尊寺悉地院此本有ト云云

右此本天正十年仲春寫置申申惡筆至極之条後覽之「嘲御恥ケ敷外へ共子之曰以壺之弊不捐其金以書之拙不」癡其儀ト云任先言如此候

持主関東相模國三浦之住人盛教坊

(庭訓往來の註のみを片假名交りにて記す 九一六一一九)

狂歌

繪本見立假譬盡 三卷三冊

八八八

森羅萬象(竹杖爲輕 天竺老人)篇 自序 勝尾春政畫 和袋綴蓮葉地模

樣丸紋散らし表紙 七寸五分五寸二分 三周單邊五寸八分四寸四分 十

一行 題簽左肩赤紙雙邊「繪本見立假譬盡上(中)」「繪本見立かひつく

し下」「甘露堂藏」「久彌藏」

刊記 天明三癸卯年正月吉辰 書肆 日本橋北室町三丁目 須原屋市兵

衛「神田鍋町」同 善五郎

(上卷四丁表繪讚の右下隅に「勝春政画并書」と刻す 九一七・二一五)

東海道各驛狂歌 寫一軸 闕

八八九

西山宗因評自筆 卷子本 假表紙 一尺一寸三分 外題左肩書名同 内

題なし

奥書 右之御詠令拜吟之次可加愚墨判詞之由雖不少憚且應尊命且不堪感

慨而已」明曆四年中夏上澣 宗因(花押)

(作者不詳東海道各驛狂歌に西山宗因の自筆懸點加評せるものなり 前

半京より四日市迄の部を闕く、富士、うつの山二驛の狂歌を後記せり、

外題左肩に「歌人不知蓋大名歟」とあり 九一七・二一三)

笑話

昨日は今日の物語 古活字本 一冊 闕

八九〇

和袋綴改装濃縹色表紙 原表紙なし 六寸八分 四寸三分 四十九丁
八行十七、八字 外題なし 内題なし
識語 (裏見返し墨) 延寶三年咄のほん

(下巻のみ、川瀬一馬「古活字版之研究」にいふ第一種本なり、巻末數葉の一部缺損あり 九一七・五—イ二九)

琉球文學

琉歌百控 寫 一冊

八九一

和袋綴裏紙表紙 六寸二分五十九分 唐紙四周雙邊十一行二段藍色野紙
百三丁 外題左肩「琉歌百控乾柔節流」 内題外題に同じ

(乾柔節流の歌は十七首のみにて別丁より他の種類の歌を録す、伊波普猷氏は「編者は朝昌として短歌一首を出させる人ならむか」といふ、佐佐木信綱「鏡草」参照 九一九・六—イ一)

中國文學

異稱錦繡段 二卷一冊

八九二

鈴木長頼(秋峯源子)編 寶永二年季夏自序 和袋綴改装丹色表紙 八寸
七分五寸六分 四十丁 四周單邊六寸六分五寸一分 九行 外題なし
版心(書名同)上(下)、「伊藤小三郎」「平出氏書室記」

刊記 寶永二歲^乙西七月吉日 書肆 山形屋傳兵衛梓行
(貞享二年乙丑自序刊本「桑華詩篇」の改題本、上卷十五丁 下卷二十
五丁を合本せるもの、増訂國書解題参照 九二一—イ五)

楚辭 朝鮮版 十六卷二冊

八九三

劉向(漢)編 朱熹(宋)集註序 朱熹(宋)後語序 嘉定壬申重九後一日鄒
應龍後語跋 端平乙未秋七月朔孫監後語跋 慶元己未三月戊辰辯證序
李皎然跋 朝鮮袋綴薄楡皮色表紙 一尺五分六寸四分 四周雙邊 七寸四
分五寸三分 有界十一行二十一字 註雙行 外題左肩墨書「朝鮮本共貳
冊 楚辭 卷前(卷後)」 内題「楚辭集註目錄」「楚辭卷第一(一八七)

「楚辭後語卷第一(一六)」「楚辭辯證上(下)」

刊記 (後序末に)建安虞信亨宅重刊「至治辛酉臘月印行
(全文末に)甲戌五月 月日密陽府開刊

(元至治年間刊本を以て甲戌—天正二年か—刊行せしもの、巻前表紙に
朱書「文祿年中此ノ本加藤清正朝鮮分捕本也」とあり、朱子の集註八卷
と楚辭後語六卷 楚辭辯證二卷を収む 九二一—イ一)

百二十詠詩註 寫 一冊

八九四

李嶠(唐)著 張庭芳序 任長筆 和袋綴焦茶色表紙 九寸六寸五分 四
周雙邊七寸一分五寸二分十行の迎陽館野紙六十七丁 外題左肩「百二十
詠詩」 内題「百二十詠詩註上」

奥書 (巻末「百二十詠終」の次に) 皆延德第二^上關茂^下沾洗下^上澆書之
右依仁融堅者之嚴命令曆書者也以無點^上之本加愚推之筆點之条後見被
改正者多^上 幸々々 松林

識語 (序の末朱) 一日觀昆陽漫錄々中有斯序文一校加朱字了

文久紀元小春中旬 朝散大夫任長

(佚存書の一、虫害の跡をも寫せる忠實なる寫、文久元年十月同筆にて序に加朱す、二卷を一冊に續け記す、神田喜一郎「李嶠百詠雜考」一ビブリア第一輯一參照 九二一・一三)

韻府羣玉

元版 二十卷二十冊

八九五

陰時遇(陰時夫勁弦)(宋)編輯 陰勿達(陰中夫復春)(宋)編注 滕賓序

至大庚戌姚雲序 趙孟頫題 大德丁未春陰竹椽序延祐改元甲寅秋鄉試後

五日陰勿達(復春)自序 陰時遇(勁弦)自序 唐袋綴栗皮色表紙 用紙裏

打裁斷あり 八寸三分五寸四分 四周雙邊七寸四分三分 每半葉十行十

六字注雙行二十九字 外題なし 内題(凡例)「增修韻府羣玉」序 本文

は書名同 柱刻「勻玉」、「元本」、「伊澤氏酌源堂圖書記」「炳卿珍藏舊

槧古鈔之記」「三姿齋圖書」

刊記 (目錄の末) 戊申春東山秀岩書堂刊

(卷二半丁、卷三二丁、卷五七丁、卷十六半丁の落丁を補寫す書入若干あり、「日本訪書志」卷四參照 九二一・〇七―一)

懷風藻

寫 一冊

八九六

天平勝寶三年歲在辛卯冬十一月序 和袋綴記錄表紙 七寸九分五寸五分

三十五丁 十行二十字 題簽左肩白紙書名同、「古川氏藏」「弘前賢官藏

江氏藏書記」「人中分陀利華」「伊佐岑滿」「小島寶素」

(江戸中期寫、同筆朱の校合は刊本によるが如し、末に羅山文集五十五懷風藻跋及び「道春又云」の文をか、げたり 九二一・一―一)

懷風藻

寫 一冊

八九七

天平勝寶三年歲在辛卯冬十一月序 和袋綴橙色表紙 九寸六寸七分 三十七丁 十行 外題左肩書名同

(近世中期寫、流布刊本と同じ奥附あれど文字のよつて改訂すべきものや、あり、目次の下に詩題を記すなどの書入、又墨朱にて文字に註する所もあり、但し同筆 九二一・一―一三)

嵯峨小稿

一冊

八九八

中島棕隱著 村田哲輯 劉石舟題詞 和袋綴黃色表紙 七寸九分五寸一

分 有界六寸一分三寸九分 十二丁 九行二十一字 外題なし、「溪仙

庵」「河野氏圖書記」

奥附 八木伊三郎鐫 「京師二條堺街東書林玄雲閣吉田治兵衛」(朱印)

識語 (朱) 唱妍亦酬麗俯仰但称嗟是韓昌黎句今移以爲此卷之總評 晚

生湖山卷敬題

(大沼枕山墨筆、小野湖山朱筆の批語上欄にあり 九二一・一―一五)

集千家註批點杜工部詩文集

元版 二十卷附錄一卷十二冊 八九九

杜甫(唐)著 劉會孟(元)評點 大德癸卯冬劉將孫序 和袋綴改裝縹色表

紙 用紙裁斷あり 八寸七分五寸四分 左右雙邊上下單邊匡廓七寸四寸

五分五厘 有界十四行二十五字註雙行 題簽左肩白紙後人墨「杜工部詩集 序目（以下卷數を示す）」「杜工部文集二」 内題「集千家註批點杜工部詩（文）集」 柱刻「杜詩」「杜詩文」（文集）「杜詩附錄」（附錄）「祖門」「樂志」等

刊記（目錄末に）雲衢會文堂 戊申孟冬刊
識語（卷二十末）洪武第九丙辰正月□日點了
（朱墨の書入あり、文集は二卷一冊なり 九二一・二一四五）

〔長恨歌并琵琶行抄〕 寫 一冊 九〇〇

白樂天（唐）著 仲恩房筆 和袋綴栗皮色表紙 八寸七分七寸一分 三十四丁 十四行 外題左肩「長恨歌并琵琶引私」 内題「長恨歌」「琵琶行并序」「寶珠院藏本」
奥書 分州仲音書之了
識語（表紙）寶珠院藏本 分陽仲恩房
（室町期寫、所謂抄物の一にして朱を加へたり 九二一・二一四七）

杜工部草堂詩箋 朝鮮版 四十卷七冊 九〇一

杜甫（唐）著 魯崑（宋）編次 蔡夢弼會箋 開禧紀元八月既望敝成元跋 宣德六年辛亥仲冬有日尹祥敬跋 唐改裝白茶色表紙 八寸四分五寸八分 左右雙邊上下單邊六寸四分三分五厘 有界十二行二十字注雙行 外題なし 柱題「杜詩」「寺」「杜寺」「高木家藏」
（宋版の高麗覆刻を更に李朝にて覆刻せしもの、古佚書の一 九二一・二一四五）

杜律詳解 寫 三卷三冊 九〇二

津阪東陽著自筆 文化十三年五月高根承序 文化十三年丙子五月津阪達序（二序同筆にて本に相違す）和袋綴瓶覗色表紙 八寸五寸六分 四周單邊六寸四分四寸五分 柱に「上編 稽古精舍版」と刻ある毎葉十二行 罫紙 註雙行 題簽左肩東陽筆墨「杜律詳解上（中、下）」 内題「書名同」卷之上（中、下）

識語（下末ニ附箋）此書東陽翁親筆原稿無疑洵可珍重也大正甲寅元旦「獲諸書肆其中堂」梅庵主人拱
（天保六年跋を附して津藩、有造館藏版にて出刊されしもの、稿本、離黄のあとしげく、その補修によりて刊本に殆んど近きにいたる、二序は刊本になし、その補修も東陽筆なり 九二一・二一四一）

李卓吾先生批點西廂記 眞本 明版 二卷五冊附一冊 九〇三

（元）王實甫・關漢卿撰 李贄（明）評 崇禎歲庚辰仲秋之朔醉香主人題 唐袋綴改裝藍表紙 用紙唐紙 一尺三分七寸八分 四周單邊七寸七分五寸九分 有界九行二十字 口繪二十一箇四十一頁分 外題なし 内題（題）「卓老批點西廂記」（本文）「李卓吾先生批點西廂記眞本卷上（下）」 柱心「西廂記」
見返し 新鐫李卓吾原評西廂記 畫做元筆 西陵天草園藏板
（附一冊は會眞記・園林午夢・錢塘夢・園棋闖局・西廂摘句散譜を收む 九二一・一四三）

漢武帝內傳・飛燕外傳・附雜事秘辛 一冊 九〇四

(內傳)班固(漢)著 章斐然(明)闕 (外傳)伶玄(漢)著 陳斗垣(明)闕 延享丁卯夏五月 芥川丹邱跋 (雜事秘辛)(明) 錢敬臣・徐仁中等闕 大槻盤溪筆 和袋綴改裝白花色行成表紙 九寸七寸(內傳)十七丁(外傳)八丁 跋二丁 (雜事秘辛)五丁 上下單邊左右雙邊六寸七分四寸三分 有界九行二十字 題簽左肩剝脫の跡あり 外題なし 柱刻「漢武內傳」「飛燕外傳」「大槻文庫」「盤溪珍藏」等 刊記 (外傳末に) 延享四年丁卯五月吉日

皇都書林 二條通柳馬場西に入町丸屋 田中市兵衛梓行

奥書 (秘辛末に墨書) 辛巳夏六月黃昏寫完 崇識

(崇即ち大槻盤溪手澤にして雜事秘辛を寫し加へしもの、本文には勝臣按などの書入あり、裏見返しには蘭語など墨書せり、辛巳は文政四年、但し班固・伶玄の著とするは後人の假托なり 九二三―一―一九)

三遂平妖傳 明版清修 四卷四冊 九〇五

羅本(明)編次 馮夢龍(明)増定 童昌祚重刊平妖傳引 唐袋綴白茶色表紙 七寸七分五寸 四周單邊六寸五分四寸二分 有界九行二十字(卷之一)七圖十三頁分(すべて補修但し一頁分落丁) (卷之二)七圖十四頁分(初二圖清修) (卷之三)八圖十六頁分 (卷之四)八圖十六頁分 外題なし 内題(引)「重刊平妖傳」(目錄、本文)書名同 柱題「平妖傳」見返し 馮猶龍先生増定「平妖傳」本衙藏板 刊記 (一・二・三の卷首に)錢塘王慎修校梓(四の卷首に)全陵世德堂校梓

(全二十回、卷之一及卷之二、十七丁迄は補修にて以下明版、圖卷之一の三丁裏卷之三の三丁表に「金陵劉希賢刻」卷之四の十二丁裏に「劉希賢刻」とあり、末に「皇和天保四年癸巳夏肆月之吉」の日附にて瀧澤馬琴(養笠漁隱)自筆の「讀三遂平妖傳題跋」三丁を附したり、卷一に二個所二丁の落丁あり 九二三―一―五)

三遂平妖傳評附題跋 寫 二冊 九〇六

瀧澤馬琴著 和袋綴縹色表紙 七寸五分五寸二分 三周單邊一周雙邊三寸九分三寸九分十行野紙五十丁 題簽左肩金砂子地「曲亭馬琴編輯所遂平妖傳評字解 全局」(「評」は朱「字解」には朱のみせけちあり五々剝脱せしを補筆す)、「中川氏藏」「朝倉藏書」「千葉文庫」 奥書 (本文末) 天保四年夏肆月十八日 曲亭蟬史稿

(次に「或問再評」「李魚奕姓名追評」あり「國字評終」と結文す) (次に「天保七年歲次丙申九月下浣龍松園有年跋」の一文あり) (末丁朱筆) 明治卅六年六月某日中川得基翁ヨリ讓受ク

附題跋寫(半紙假綴三丁) 内題「讀三遂平妖傳」題跋

奥書 皇和天保四年癸巳夏肆月之吉、把筆於著作堂、南簷石榴花開處、養笠漁隱撰并書

識語 (包紙の表自筆)

晋上 桂窓様 著作堂 拜具

拙文三遂平妖傳題跋 三頁

同 稟本一綴

稿本ハよみくせの爲に差添申御覽後ハ御不用の品ト奉存御序ニ御返し被成ひとももしハ篠齋翁所望被致ひ事もひハ、可被爲進ひしかし

〔張カ〕
□ちらしの稿本故生人に見せの事はいとはしく此義御心得可被下ひ

○跋文ハ紙かさね置ゆかさねゆま、御とち入可被成ゆ

(本書平妖傳書誌中に「同好の一才子松坂なる桂窓主人、京師の書賈に購て、不用意にこれを得たり、すなはち余に、その書の巧拙可否を問んとて、郵附して見せられしかハ、扱見ると見るまゝに、作者の隱微を探り得たり、と思ふよしなきにあらねは、忙間五七日の意志を費して、この筆すさみに及びひにき、借書のむくひにせんとて」と、桂窓は本居春庭門小津與右衛門、文中云ふ所の桂窓取得の平妖傳及び題跋は別項三遂平妖傳—九〇五—參照 九二三—一三)

至元新刊全相三分事略

元版 三卷一冊

九〇七

唐袋綴改装三冊を一冊に合綴茶色表紙 用紙唐紙 九寸二分六寸二分
六十二丁 四周單邊七寸五分五寸四分 上欄二寸は各葉挿繪 二十行二十字 外題左肩墨三分事略 元刻本 全 内題「至元新刊全相三分事略上(中)」照元新刊全相三分事略下 扉「新全相三國志」〔缺項〕「甲午新刊」「建安書堂」「英王堂藏書」「仁壽山書院記」「白川書院」他一印
卷末「照元新刊全相三分事略上(中)」「新全相三分事略下」

(「至治新刊全相平話三國志」の原據と見るべきもの「甲午新刊」の甲午は至元三十一年、「竹柏園藏書志」五六一頁及び鹽谷温「明の小説三言に就いて」—斯文八ノ六—參照 九二三—一七)

新刻全像三寶太監西洋記通俗演義

明版 二十卷十冊

九〇八

二南里人編次 三山道人繡梓 唐袋綴幹色表紙 用紙裁斷あり 八寸三分

五寸二分 序四周雙邊本文四周單邊七寸三分四寸三分 有界十一行二十
五字 圖每卷十箇二十頁 外題なし 柱題「出像西洋記」見返し「西洋
記」 「竹内文庫」 「海棠鄰人藏書」 「石齋圖書」 (二印)
(明羅懋登著にして一序あれど未缺、百回 九二三—一七)

西湖二集附西湖秋色

明版 三十五卷二十冊

九〇九

周清原(明)撰 湖海士序 唐袋綴改装紫地金砂子紙表紙 用紙唐紙に全
裏打 九寸七分六寸七分 四周單邊七寸五分五寸五分 十行二十字 挿
繪卷首に五十八箇五十八頁分挿畫末部五丁を缺くか 外題なし 柱心
「西湖二集」

(最後の二丁は補寫にして尙缺字あり、見返しには「精刻繪像」 「西湖
二集」 「内附西湖秋色一百韻 雲林聚錦堂藏板」とあり、湖海士の序に
明の太祖を高皇帝と稱して擡頭し本文中にも洪武爺その他明室の用語に
は一字あくるを以て明版なること斷定し得、魯迅「中國小説史略」參照
九二三—一七)

鐫李卓吾批點殘唐五代史演義傳

八卷八冊

九一〇

羅本(明)編輯 李贄(明)批評 周之標序 唐袋綴改装藍色無地表紙 用
紙唐紙裏打 八寸八分六寸七分 四周單邊八寸一分五寸二分有界 九行
二十字 外題なし 内題序は「點校殘唐五代史傳」目錄及び本文は「鐫
李卓吾批點殘唐五代史演義傳」柱題「殘唐五代傳」
(明末清初の刊行 九二三—一七)

忠義水滸全書 明版 百二十卷三十二冊

九二一

施耐庵(元)集撰 羅本(明)纂修 楊定見(明)小引 唐袋綴改裝藍紙表紙

用紙竹紙 九寸五分六寸六分 四周單邊七寸六分五寸六分 十行二十二

字 挿繪百二十箇百二十頁分(内最後の九葉は補寫) 外題なし

内題(發凡)「出像評點忠義水滸全書」(本文)「忠義水滸全書」柱題「水

滸全書」(挿繪の部「水滸全傳」)

(評點李贄なること楊定見の小引に見ゆ、所謂百二十回本水滸傳として

明末の刊行と思はる、卷頭に宣和遺事七枚を附す、幸田露伴「國譯漢文

○

解裝録 寫 一冊

九二二

法振律師編 和玉蜀黍色表紙 九寸六寸三分 六十六丁 九行 題簽中

央唐紙「(書名同)全」

(常陸の法振律師寬延二年奈良へ三藏古典を校修におもむきし際諸家の詩文を得しを輯せしもの、中に在滿真淵の和文をも混す、各文の實物を一冊に編せし折の草稿にて讀かたかりし所誤讀の所を後朱、青を以て正しあり 九二四・一・一(一))

淇園文集

後編共 活字本 九卷九冊後編三卷三冊

九二三

皆川淇園著 皆川算齋校 文化十三丙子夏四月日野資愛序 文化丙子孟

夏勘解由小路資善序 和袋綴淺葱表紙 八寸九分六寸三分 四周雙邊七

寸三分五寸一分 有界每半葉七行十七字 題簽左肩單邊書名同 柱題

「淇園文集」「淇園文集後編」、「前田氏尊經閣圖書記」

(圓光寺活字を用ひあり 九二四・一・一(五))

玉造小町子壯衰書一首并序附新猿樂記

群書類從本 一冊 九二四

和袋綴白茶色表紙 八寸八分六寸 二十四丁 十行二十字 外題左肩墨

「玉造小町子壯衰書 新猿樂記」、「青裳文庫」

(群書類從卷第三百三十六に狩谷掖齋の朱にて誤字衍字等を書入しもの

九二四・一・一(三))

○

文選六臣註

直江版 四十八卷附目錄 二十五冊 闕

九二五

蕭統(梁)編(唐)李善・呂廷濟・劉良・張銑・李周翰・呂向註 和袋綴

改裝鳶色表紙 一尺二分七寸二分 四周雙邊八寸二分五厘五寸四分 有

界十行二十二字注雙行 題簽左肩雙邊刻白紙墨書「文選(所收卷數)」雙

邊刻方箋ありて所收篇名を墨書す 内題「文選」目錄のみは「増補六臣註

文選」柱刻「文選」、「中邨藏書」

奥記 右文選板歲久漫滅殆甚紹興二十八年冬十月「直閣趙公來鎮是邦下

車之初以儒雅飾吏事首」加修正字畫爲之一新俾學者開卷免魯魚三家之

訛且欲垂斯文於無窮云右迪功郎明州司法參軍兼「監盧欽謹書

刊記 慶長丁未沾洗上旬八糞 板行畢

(直江兼續慶長十二年要法寺に於いて刊せしもの、卷一、二、十一、十二、十三、十四、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四及び五九の初七丁缺、所々に補寫あり、又墨にて訓を加へし所朱點等あり、

目録は普通のものとか、相違す目録のみ或は再刊せしことあるか 九二一
四・二一(一)

ギリシヤ文學

伊袋菩諭言 寫 一冊 闕

九一六

Aisopos 著 栗本鋤雲譯自筆 自序 和袋綴共表紙 八寸一分五寸七分
三十丁 八行 外題左肩書名同下に卷名「上」、「栗本文庫」

(漢譯イソップ物語中よりその二十七話を邦譯す、烏有山人は栗本鋤雲
の戲號 九九二一(三))

伊曾保物語 寫 三冊

九一七

Aisopos 著 和綴葉裝縹色布表紙 見返し黄色地金銀切箔散らし模様紙
八寸五寸九分 十行 題箋中央金泥模様入短冊書名同下に上、中、下の
卷名を示す

(萬治刊本に同系統、各冊卷頭に目録あり、箱に「中院大納言通茂卿筆
伊曾保物語三冊」とあり、新村出「伊曾保物語展觀目録」一〇頁佐佐木
信綱「百代草」三十八乙参照 九九二一(五))

伊曾保物語 寫 三卷一軸

九一八

Aisopos 著 西園寺實輔筆 卷子本縹色地金泥唐草模様表紙 六寸七分
外題なし 内題「いそほ物語上(中、下)」
識語 (見返しに附箋して) 此伊曾保物語ハ權中納言實輔卿ムカシ兼敦

ノ公ト」申シ時ニ延寶五年丁巳春コレヲ書レタリシガ」御家ニ傳ハリ
有リトテ西園寺權中納言寛季卿」入道覺道ノ君ヨリ賜之」 天保十三
年壬寅冬十一月 三浦茂樹誌
(本文萬治刊本と同系 九九二一(七))

伊曾保物語 寫 三冊

九一九

Aisopos 著 水谷不倒筆 和袋綴茶色表紙 八寸一分五寸五分 四周單
邊六寸二分四寸三分半頁十行二十字詰原稿用紙 卷下後半分十行二十三
字詰綠色罫「國書刊行會」用紙 題箋左肩双邊水谷不倒筆「伊曾保物語
上(中、下)」、「水谷文庫」

(マ、)

奥書 大野酒竹氏藏本」もと太田南畝藏本」朱にて書入あり
寛永十六年卯吉辰」嫌是西洋説好唯南畝章今辭牛牧裏方屬虎門藏
識語 (上巻扉) 此伊曾保物語は寛永版の活字本を底本」として萬治二

年版の繪入本と引合せ校訂」出版せんとし上巻だけ校訂を了し印刷」
に附せんとしたるが故ありて果さず次に」貼附したるは試みに畫かせ
たる表紙圖案」なり筆者ハ友人阪田耕雪君なり耕雪君は」尾形月耕の
門人にして大阪毎日新聞記者也

(巻頭に伊曾保物語表紙圖案一阪田耕雪筆一枚、萬治板挿繪一枚、寛
永活字本寫真一枚を貼附す、本文墨朱にて校訂活字割付の記事あり 九
九二一(九))

伊曾保物語 寫 三軸

九二〇

Aisopos 著 卷子本紺地金砂子山水模様表紙 見返し金紙 用紙金泥梅
花小紋散らし模様鳥の子紙 一尺二分 五三桐紋入金具付軸 題箋左肩

朱色地金泥模様短冊「伊曾保物語上（中、下）」内題なし 各巻頭に目録を記す 萬治本に比するに本書上巻は萬治本中巻第廿五より第四十及び下巻第一より第三、本書中巻は萬治本下巻第四より第二十、本書下巻は萬治本第廿一より第卅四話までを收む

（太田全齋及び日下部鳴鶴舊藏、新村出「天草本伊曾保物語」附録一）
○頁参照 九九二―イ一三）

伊曾保物語

古活字本 二卷一冊 闕

九二一

Aisopos 著 和袋綴合綴改装藍色表紙 八寸七分六分二分 十二行二十二字題簽左肩墨「伊曾保物語全」、「磯田屋印」「竹冷挿架」「三角文庫」識語（表見返し）此書むしはみたるを古かね店にて「買りて其後としふる事于今」に至るふと思ひよりて四十年「かくばかりむしのはみたを買求め尙あぢはいぞほめてよむなり 花押

こ、にかくむだ書きせられたるは藤堂家の儒官たりし奥田「三角先生の兄南勢櫛田に住居せられし奥田某なりかくむた」書せられしは今明治十八年より百余年のむかしなるべし」生川正香

（裏見返し）此書の事は繪入朝野新聞紙に細辛に記したることしされ「婆」今またいふべき支なしおのれ古き書を好むくせありて此後書林」にて見出て買ひ求めたる也

案するに元和寛永年間に出版せしものなるべし尤表紙は「もとえられし時なかりしを後にふる表紙をかけてかくは一冊に」せられしものと見ゆ元和寛永拾月に開板せしものは「上製木ハ丹表紙にて並本はしぶ表紙なり

明暦年間の書籍目録にいそほ物語といふ名見えたる婆ふるき物」なる

事また論なし 八十三翁「生川正香」しるす

（中巻を缺く、正香のいふ三角の兄は奥田龍溪なり 九九二―イ一一）

伊曾保物語

古活字本 三卷三冊

九二三

Aisopos 著 和袋綴改装焦茶色表紙 八寸七分六分 十二行二十二字外題なし 内題「書名同」上（中、下）柱題なし、「藤」刊記「寛永十」六卯月「吉辰」印の部分入木）
（九九二―イ一五）

索引

(表音的假名遣五十音順)

ア

アイソポス	九六、九七、九八、九九、一〇〇、一〇一、一〇三
愛猫ノ説(〇八一イ九)	九
饗庭篁村	八五三
亞歐堂田善	四〇一
青木信寅	九
青つゝら(九二・二六一イ五)	四三
青山水石	四三
青山爲兵衛	四
亞槐集(九二・二五一イ三)	四三
赤坂文庫書目土代(稿本)(〇七一イ)	三
あかしの三郎(九三・五一一イ七)	六六
明石の物語	七六六
赤染衛門集(〇八一イ五)	四
縣居翁書翰(二六九イ一五)	二七九
縣居落穂(稿本)(九二・二六一イ五)	四三
秋篠月清集	五九
秋田屋市兵衛	八三七
秋田屋九兵衛	四九
秋夜長物語(九三・五一イ五)	七六七
秋夜長物語(九三・五一イ三)	七八
芥川丹邱	四四

阿桂(清)	三五
明鴉墨繪補檔十二編(稿本)(九三・四一イ五)	八四八
阿黒王	七三
浅井了意	三三七
安積澹泊	二八八、二九四
あさがほのつゆ下(九三・五一イ六)	七九〇
あさがほのつゆ(九三・五一イ二五)	七九
朝忠集(〇八一イ五)	五〇
朝吹英二	六六六
浅見吉兵衛	八三〇
足利尊氏	一五九
足利義熙	四五
足引	七三
足代弘長	九
足代弘訓	四
足代弘訓著書目録(〇八一イ三)	四
蘆分船(二六、四一イ五)	三四
飛鳥井榮雅	五七七、四〇、六九
飛鳥井雅胤	四三
飛鳥井宗世	四三、五九
飛鳥井雅有	八五七
飛鳥井雅有日記(九二、四一イ)	八五七
飛鳥井雅威	八五七
飛鳥井雅親	五七、六三
飛鳥井雅綱	七〇
飛鳥井雅經	四三
飛鳥井雅縁	六九
東遊歌・風俗歌・野曲抄	六三

東錦繪(七二一イ九)	四四
足立天年	四〇一
あた物語(九三・六一イ三)	八元
あつもり	七九
篤好隨筆(〇六一イ三)	六六
篤好文詞(九二・二一イ二九)	四一
姉小路濟繼	五三
阿佛	八五八
阿佛假名諷誦(九二、四一イ三)	八五八
阿佛假名諷誦	八六
阿佛記并爲家追善作	八六
阿佛尼	八〇、八六
安倍直明	七〇一
阿部樸齋	四〇一
あまのかるも(九三、四一イ五)	七七
海士の嚙序詞(九二・二一イ五)	六八
海人手古良集(〇八一イ五)	五
天橋立	七三
雨やとり(九三・五一イ七)	七九
雨やどり	八〇五
雨夜三盃機嫌(七二一イ五)	四四
阿彌陀瀧遊覽記行(九二、二一イ七)	三〇
綾小路有俊	六九五
荒木田久老	一三六、一四、二二、六五
嵐三右衛門	七三
嵐百人覺(七二一イ)	四六
嵐無常物語(九三・六一イ九)	八六
有子内侍	七三

伊丹屋太郎右衛門……………八四
 一英齋芳艶……………四四
 市島春城……………二九五
 一壽齋芳員……………四四
 一條兼良……………三三、四三、四五、五六、六五、六九、六
 一日千首詠草(九二・六一・一五)……………六四
 一萬箱王(九二・六一・一四)……………七〇五
 一無軒道治……………三四、三九
 一勇齋國芳……………四四
 一陽齋豐國……………四四
 一荷堂……………三六
 一寸んほうし……………七五
 ゐつゝや庄兵衛……………七九
 伊藤圭介……………四〇
 伊藤玄朴……………四〇
 伊藤鯉尾……………四〇
 伊東昌之助……………四〇
 伊東南洋……………四〇
 伊藤方成……………四〇
 伊東立澤……………四〇
 糸割符銀方銀借用文書(三〇〇八一)……………三〇四
 田舎夕顔……………七三
 稻妻の巻(九二・七一・一七)……………六六
 猪苗代兼誼……………六三
 犬養木堂……………二六
 井上文雄……………五三、六、九、四八
 井上文雄母……………五九、四四、六八、七五、七六、七八、七五

伊能忠敬……………三四三
 井原西鶴……………八三、八七、八八
 井原豐作……………六六
 伊ふき……………七九
 衣服體裁考稿本(三八一)……………三〇
 今泉定助……………六六
 今川範政……………三八
 今村了庵……………四三
 今様集(九二・五一・一)……………七四
 忌部廣成……………六
 忌部正通……………三七
 入江爲守……………六六
 いるか……………七九、七〇
 伊路葉うたのしめし(九二・五二・一三)……………六四
 伊呂波字類抄(三二・一七)……………七
 以呂波物語(九二・七一・一六)……………七四
 岩井晚香……………四〇
 岩下貞融……………六六
 石見偉人傳(二六・五一・一)……………六六
 石見偉人傳……………三六
 石見國名跡考(九二・五一・一三)……………三六
 石見國名跡考……………三六
 石見國名跡考……………三六
 陰時遇(宋)……………八五
 尹祥(李)……………九〇
 韻府羣玉(九二・七一・一)……………八五
 陰幼達(宋)……………八五

宇比麻奈備……………五三
 ウエーム・ホップ……………四〇
 上杉房定……………五七
 右衛門樓……………七三
 右衛門督寄進狀(三〇・四一・一七)……………三四
 宇治加賀掾……………七四
 宇治薩摩……………七五
 宇治次郎大夫……………七五
 宇治半大夫……………七五
 宇治物狂……………七三
 薄雪……………七三
 謠抄(古活字本)(九二・六一・一五)……………七六
 右大臣師輔集(〇八一・一五)……………五三
 謠木(古活字本)(九二・六一・一五)……………七〇
 歌川國貞(二世)……………八八
 宇田川玄隨……………四〇
 宇田川興齋……………四〇
 宇田川棟齋……………四〇
 宇田川先醒……………四〇
 宇田川榕庵……………四〇
 歌之五級……………一〇三
 歌屏風……………七三
 調枕名寄(九二・二一・一七)……………四七
 歌讀大事(九二・二一・一七)……………四七
 内田恒次郎……………四〇
 うちでの小つち(九三・六一・一五)……………八九

打橋……………	三二	永恩……………	一五	画本豊臣勲功記(稿本)(九三・六五―一三)	五
内山眞龍……………	五四、五四三	榮花物語系圖(三〇・二一―一五)	三六	繪本見立假覽盡(九七・二一―一五)	八八
嵯田鈍太郎末孫白面書生	三五	榮元……………	五五	江馬細香……………	八八
空隠……………	七三	英弘……………	二五	江馬椿……………	四一
うつぼ物語(奈良繪本)(九三・三四―一五)	七五	英俊……………	四七	江馬蘭齋……………	二八
宇津物語卷次考(九三・三四―一五)	七五	永宣……………	六九	江見水蔭……………	八五
宇津保物語考(九三・三四―一五)	七五	榮増……………	三三	圓雅……………	五〇
うつぼ物語目安(〇八一―一五)	五	寂尊……………	一五	ゑんぎりしことば(八三―一)	四五
鶺鴒よの子……………	六三	英譯古事記序說辨明(三〇・二一―一七)	二七	圓珠庵雜記(〇九―一五)	八七
鶺鴒餘野子……………	三八	會山和歌集(九二・六―一五)	四七	延壽撮要(古活字本)(四九―一)	四八
味酒清人……………	一九	江島其磧……………	四八、四九	演段起源……………	四〇、四七
宇真志義道……………	三九	江島屋市郎左衛門……………	四九	役行者緣起……………	八〇
馬そろゑ……………	七九	慧心……………	一七		
梅田雲濱・頼三樹三郎、山根文之允宛書簡(二九―一三)	二八〇	蝦夷紀行(五二・七一―一五)	三五	オ	
梅田源二郎(雲濱)……………	二八〇	蝦夷國風圖画(三〇・三一―一)	三七	おいさかし……………	七九
梅谷市左衛門……………	六八	蝦夷道中記(二九・七一―一三)	三五	笈さがし(九二・六―一五)	七八
梅村鶯雅……………	五六	慧超……………	一五	おふおほす考(〇八一―一五)	三〇
梅村三郎兵衛……………	四〇七	悦目抄(九二・二一―一八)	四四	大磯……………	七三
烏有山人……………	九六	悦目抄(九二・二一―一五)	四四	大炊御門經名……………	七三
下部兼致……………	三四	悦目抄(九二・二一―一五)	四七	櫻雲記(〇八一―一五)	七六
下部兼右……………	一三〇、一三二	悦目抄……………	四九	櫻雲記(三〇・四―一五)	三三
うろこかたや……………	七七八、八三三	江戸圖鑑綱目(二九・二一―一)	三七	大江匡衡……………	八一
うろこかたや……………	七九	ゑぼし折……………	七九	大木扇徳……………	七九
うろこかたや加兵衛……………	三八四	ゑぼし折……………	七九	正親町公通……………	四九
於雲澤蒙求問書(八三・二一―一五)	三七	ゑぼしおり……………	七〇	正親町公明……………	四九
雲中語(稿本)(九三・七一―一三)	八五	繪本慶元浪速軍記(稿本)(九三・五―一七)	八四	大申元善……………	四三
		繪本慶元難波軍記(板下本)(九三・五―一五)	八五	大口鯛二……………	六六

大久保忠教……………三〇七
 大隈言道……………三〇四
 大藏省……………三〇五
 王實甫(元)……………三〇三
 奥州はなし・いそつたひ(〇九一―一五)
 鶯宿梅……………七三
 往生至要抄(二八三―一五)……………一七五
 王慎脩……………九〇五
 大少記(七七一―一)……………一三九
 歐西紀行卷三(二五〇・九一―一)……………三〇九
 太田牛一……………三二四
 大田南畝……………九三、三三六
 大槻支澤……………三〇七、四〇一
 大槻修二……………四〇一
 大槻如電……………四〇一
 大槻磐溪……………四〇一、九〇四
 大槻磬水……………三〇六
 大槻民治……………四〇一
 大塔宮……………七三三
 大中臣能宣朝臣集……………七三〇
 大沼枕山……………八九八
 大野木市兵衛……………四〇七
 大橋知良……………六七五
 大濱記行(元・〇八一―一五)……………三三三
 王弼(魏)……………一〇五、一〇五、一〇六
 大藤恂卿……………三〇五
 大藤高雅……………四〇六
 汪文盛(明)……………三二五

大町五城……………六六六
 大町壯……………六六六
 大森彦七……………七三三
 大山綱良……………六六六
 歐陽修(宋)……………六三三
 御神樂由來(七六一―一五)……………四〇〇
 御蔭參雜綴(七四一―一七)……………一三七
 岡研介……………四〇一
 丘岬栲園(俊平)……………五五九
 岡田啓(文園)……………四九九
 緒方洪庵……………四〇一
 岡田三郎右衛門……………八二九、八四四
 岡田正貴……………三三三
 岡村平兵衛……………四〇〇
 岡本真古……………一四三
 岡本保孝……………三三三、四七九
 岡本隆藏(經迪)……………二二二
 岡保義……………四〇一
 奥田龍溪……………九三三
 小國重年……………五〇六
 小國秀穂……………一四一
 小倉山莊色紙和歌(九二・二一―一四)……………四七六
 小倉百首嶺のみち葉總釋(九二・二一―一五)……………四七七
 御駒乗……………七三三
 おさき……………三二九
 尾崎紅葉……………四九九
 尾崎雅嘉……………七三三
 小山内薫……………四九六

小山内薫日記(九〇・六一―一五)……………四九六
 小澤蘆庵……………五九六
 白粉手鑑(五五―一)……………四〇〇
 小瀬又四郎(助信)……………三〇三
 尾高高雅……………四八六
 小田切春江(忠近)……………三三三
 小田切忠近……………三三〇、三三三、三九四
 落合直文……………八八三
 おちくぼ(九三・五―一七)……………七四九
 陽津篤……………一六六
 追懸時宗……………七三三
 小津桂窓……………九六六
 御伽草紙(九三・五―一五)……………七五五
 鬼一ほうけん(九三・五―一七)……………七六六
 小野湖山……………八九八
 小野務……………六四九
 小野小町都年玉……………七五五
 小野宮實頼……………七三
 小野蘭山……………四〇一
 小林歌城……………五六一
 大原詣……………七三三
 御文(八六・六一―一三)……………一八五
 御文(八六・六一―一五)……………一八七
 御文(實如證判本)(八六・六一―一七)……………一八七
 御文(證如證判本)(八六・六一―一九)……………一八八
 御文(證如證判本)(八六・六一―二一)……………一八九
 お弁……………九〇
 女郎花及蘭考(〇八一―一九)……………三三

思草考(九二・三一・一五)	五五
思出川	七三
おもかけ物語(九三・五一・一三)	七九
おらしよの翻譯(吉利支丹版)(九二・一七)	一四
折井正呂	四
おろかおひ(五六・一)	三七
女實語教・女童子教(七六・一)	四六
女童子教	四六
力	
何晏(魏)	二四、二五、二六、二七、二八
外患通論(三〇・四・一)	三〇
快興	一三〇
海國兵談(三九・二・一)	三九
懷山子	三三
解信	一五
快真	一三〇
改正神代紀異同平均(三〇・一・一)	三〇
改正大和國名所圖繪 卷之一(稿本)(二五・四・一)	三三
解裝錄(九四・一・一)	九二
貝原益軒	一三、三四
貝原東軒	一三
懷風藻(九三・一・一)	八七
懷風藻(澁江抽齋等舊藏本)(九三・一・一)	八六
解紛記(古活字本)(三九・二・一)	三九
會文堂(元)	八九
開法要旨(四九・一)	四三

海録(九一・一五)	八九
嘉永年間日記(三〇・六一・一)	二四
歌會次第(九二・二・一)	四八
河海抄(九三・三・一)	七五
下學集(三三・一)	八
香川景樹	六〇、六五、六八、六二
香川景周	六〇
香河辛波	三四
柿園太郎百首(九二・六・一)	六八
柿園舍良美	三三
柿沼廣身	二七
嘉久	三
臥牛山人	三三
歌經標式(九二・一・一)	四九
歌經標式	五四
郝敬(明)	二三
樂書(元版)(七六・一)	四
郭象(晉)	一三
覺融	一五
神樂催馬樂(九二・五・一)	六九
神樂催馬樂註秘抄(九二・五・一)	六五
神樂催馬樂譜	六九
神樂註秘抄	六五
樂律正俗	〇九
かけきよ	七〇
景清	七九
勘解由小路資善	九三
加減乘除門(四九・一)	四〇

笠間經	一〇、六一
花山院長親	五四
賀嶋正根	一三
河上公(漢)	二四
柏木	七三
春日權現驗記(七五・一)	一四〇
春日社御驗記	一四〇
春日潛庵(讃岐守)	八二
春日潛庵岡本隆藏宛尺牘(九二・一)	二八
歌仙家集類語(九二・二・一)	四八
歌仙集補(〇八・一)	五
荷田東麻呂	五四
片岡仁左衛門	七五
荷田信美	五三
花鳥日記(二九・一)	二八
花鳥風月(九二・三・一)	六九
花鳥風月(九三・五・一)	七九
花鳥風月	七三
戈直(元)	六
勝尾春政	八八
葛洪	一四
勝頼	七三
桂川國興	四〇
桂川甫賢	四〇
桂川甫周	四〇
葛城物語(九三・六・一)	八〇
桂の落葉(稿本)(九二・六・一)	六五
かつらの一葉(九二・六・一)	六五

加藤磯足	四五
加藤枝直	五八、五九
歌道解醒(九二・二一・一〇)	四八
加藤木の芽	六六
加藤雀庵(篠廼屋翁祖)	六三
歌堂醉語(〇九・一・一七)	九〇
加藤千蔭	二六五、二六五、二六九
歌道非唯抄附開國論(九二・二一・一〇七)	四三
加藤義清	六六
歌堂類語(九二・二一・一・二五)	四八
化徳門院新中納言局	七七
假字考證(八二・一・一五)	四九
金澤文庫	一六
哥難春藝二記(九二・二一・一・三)	三八
金屋平右衛門	三六
金谷北溟	七五
狩野快庵	四〇
歌舞(九二・一・一・一三)	六六
哥舞妓	七三
鎌倉山	七三
かまた(九二・六・一・一四七)	七九
鎌田	七三
上村平左衛門	八四
神谷永平	三三
神明憑談(九二・二一・一・九)	四四
賀茂氏孝	八九
蒲生君平	二六
鹿持雅澄	一四、五九

賀茂某私領田賣券(三〇〇八・一五)	三二五
かもの御木地	七九
加茂季應	三五、五九
鴨長明	四九、五三、五三、五九
賀茂保考	四三、四六
賀茂之本地(九三・五・一・一〇)	七九
賀茂真淵	九七
賀茂真淵書翰(三・三・一・一)	一六、二六、二九、三六、三六、四八、五三
加茂のみあれ考(二五・一・一)	四三、五〇、六六、六八、七四、八三
賀茂保憲女	一四
賀茂保憲女集(八・一・一五)	一
萱生由章	一
からいとさうし	三九
花洛細見圖(二九・四・一・三)	三六
璣訓蒙鑑草(七九・一・一)	四〇
烏丸光廣	四九、五三、六〇、七七
唐錦八寫繪(〇八・一・一五)	七
屬金屋庄左衛門	八七
狩場重光	七三
狩谷掖齋	一五、六五、九四
狩谷望之(真末)	一八
家隆卿集(九二・二四・一・三)	六三
川枝豊信	四五〇
河竹黙阿彌	二四
川村庄吉	二四
河村傳左衛門	二八

観阿	五〇
寛永飢饉物語	八五
寛永行幸記(古活字本)(三六八・一五)	三七
寛永漂流民記(三〇・九・一・一)	三〇
灌園齋	六六
關漢卿(元)	九三
観經正宗分散善義指定記附観經正宗分定善義指 定記(古活字本)(二八・一・一)	一四九
菅茶山	二八
閑室元倍	三九
勸修寺尹豊	六九
観心玄樞(二八・一・一七)	一五〇
神田常有	三九
鑑定雜記	四三
鑑定筆記(七〇・一・一三)	四三
漢武帝内傳飛燕外傳附雜事秘辛(九三・一・一九・九四)	四四
甘樂太夫	七三
甘露寺親長	六三、七〇

十

紀伊國根來寺聖天院傳法灌頂雜記(二八八・四・一・一)	一七
三	一七
淇園文集後編共(活字本)(九四・一・一五)	九三
紀海音	七五
親基	一六
紀記歌集(〇八・一・一五)	一六
紀記萬葉歌撰部類稿(九二・三・一・一四七)	四六
菊	七三

規矩亭崇山	四七
菊屋七郎兵衛	三八三
きくや長兵衛	八四三
蟹貝考(八一・一)	三三
奇山	三一
岸外記貞知	八七七
岸田吟香	四〇一
議事上院略規	三六三
岸本由豆流	四〇〇、四〇一、四〇二
義湘(新羅)	一七三
奇人國報	四六八
喜撰式	五三四
木曾願書	七九
木田千賀麿	四三〇
北野	七三
北島親房	一三〇、一七、三六、五八
北村季吟	五一
北村湖春	五五
木戸元齋	四九七
城戸千楯	五〇四
昨日は今日の物語(古活字本)(九七五―一、二九八、九〇)	四六八、六七、八六
木下幸文	五九
紀貫之	五七、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、六〇六
きふねの本地(九三・五―一五)	八〇〇
木村一步	二〇七
木村青竹	四〇一
木村正辭	三九

三〇、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八	木村正辭雜稿(八一・一)	二九一、六
三三	舊繪臺灣圖(元・八一)	三三
四四	九歸増損法(四九・一)	四四
三三	〔九州陣道の記〕(三九・〇八一)	三三
三五	舊幕府理財會要	三五
五八	堯惠	五八
七五	きやうけん本や九左衛門	七五
五八	堯孝	五八
五八	京極黃門贈衣笠内府消息	五八
二八	強仕(明)	二八
一六	教時評(八・三一)	一六
四四	挾書生	四四
三七	京雀(五二・四一)	三七
六七	堯然法親王	六七
八六	狂文 旅者道つれ	八六
八六	狂文 旅は道つれ(九四・六一)	八六
一七	行助法師	一七
三六	京童(五二・四一)	三六
四五	極數變形草(四九・一)	四五
二四	玉仲和尚入寺錢納下帳(三〇・五一)	二四
五五	玉葉集	五五
六四	玉葉和歌集(九二・四一)	六四
三八	虛光菴眞月居士	三八
八七	清貞	八七
一七〇	魚山蕨芥集(八六・一五)	一七〇
七〇	きよしげ	七〇
七九	きよしげ	七九

一〇、一五、一七、二〇	清原宣賢	一〇、一五、一七、二〇
五八、六五	清原元輔	五八、六五
六〇	清原元輔集	六〇
二八四	清正追遠祭讚詞(八九・一五)	二八四
七三	許由	七三
七〇	きりかねそか	七〇
七〇	キリカ子曾我	七〇
一五	希麟(唐)	一五
三五	金居斗(高麗)	三五
七五、八三	今古園龜壽	七五、八三
七六、七六	今古園主人	七六、七六
二四	近世紀聞(稿本)(三〇六・一七)	二四
一九	欽定詩經樂譜全書(三・三一)	一九
五	欽定四庫全書恭存目(〇二・一)	五
三五	欽定滿洲源流考(九三・一)	三五
三五	金富軾(高麗)	三五
五二	金葉和歌集(九二・三一)	五二
ク		
一〇八	孔安國(漢)	一〇八
一八	空海	一八
六七	空性法親王	六七
六五	九月十三夜詩歌卷(九二・六一)	六五
六五	九月十八日兼題歌集評(九二・六一)	六五
三六	愚管記斷簡(二〇・四一)	三六
四五	愚管抄(九二・三一)	四五
四五	愚管抄	四五
七〇	九けつのかひ	七〇

日下部高豊	六八〇
日下部百枝	四〇
草津私記(九四六一―九五)	八六六
具支灌頂口傳	一八四
櫛の垢(稿本)(九四六一―九五)	八六七
櫛の垢の辨(稿本)(九二・二―一七九)	四八六
楠長譜	三三三
葛の葉草(九二・二―一七)	三三三
曲舞小諷集	七〇
曲舞集(九二・六―一六)	七〇
示愚息乘因及同志學者教誡條章(七六一―一七)	四三
朽木隱岐守	四〇
くちきさくら(九三・五―一五)	八〇
具注曆	一七九
屈曲子	六二
國貞	四四
國貞(梅蝶樓)	四四
國芳(一勇齋)	四四
久能	七三
弘福寺大和國衙宛牒并國制(二八・四―一七)	一八〇
久保季茲	四九
熊谷直好	六四
熊谷直好詠草(九二・六―一五)	六四
熊谷直好家集(九二・二六―一五)	六五
熊澤一衛	六六
雲井の春(七三・一―一五)	四五
蛛のいかき(〇八・一―一五)	五九
孔穎達	一〇八

倉賀野長左衛門	三六
くらまいて	七〇
〔鞍馬寺勸進文〕(二八・三―一)	一七
栗田土滿	三六、七〇、三四
栗田土滿雜集(〇八・一―一五)	三六、七〇
栗田寛	一四二
栗原研究所	三六
〔栗原研究所報告書〕(二六・二―一)	三六
栗本鋤雲	九六
栗本丹洲	四〇
黒池龍神	七三
黒川春村	四九
黒瀬益弘	二九
桑原やよ子	七五
羣書類從二百五十(横山由清書入本)(〇八・一―一)	六
羣書類從二百七十八(横山由清校合本)(〇八・一―一)	六
羣書類從三百五十(横山由清書入本)(〇八・一―一)	六
群芳陳人	四〇
軍略秘書(三九・一―一)	三九
ケ	
經緯略弁	一〇二
桂陰小史	一六
桂園一枝	五三
荊州大堤石劔岸全圖(二九・二―一)	三七

奎章閣志(朝鮮活字本)(〇六・一―一)	一
慶政	一六
契沖	八七、三五、三三、五四、六六、七二、七五
契沖石橋新右衛門宛書簡(二九・一―一)	二五
契沖自詠自註歌(九二・六―一五)	六六
慶長年間江戸圖説(二九・二―一五)	三九
藝備街道瀧見笠(二九・五―一)	四九
桂林集(九二・二―一八)	六七
外宮儀式帳私考(七四・一―一)	二九
外宮北御門歌合(九二・九―一)	六八
外宮子良館祭奠式(七四・一―一)	二九
華嚴一乘法界圖	一七
華嚴法界圖(八・二―一)	一七
月庵	六七
顯意	一〇
源概抄(九三・三―一五)	七三
現在箴	七三
現在實盛	七三
現在千方	七三
現在道成寺	七三
弦史(三九・四―一)	四〇
〔源氏古鏡〕(九三・三―一)	七六
源氏物語(九三・三―一)	七六
源氏物語(河内本青表紙本)(九三・三―一)	七六
源氏物語(古活字本)(九三・三―一)	七六
源氏物語(須磨卷)(九三・三―一)	七六
源氏物語(常夏卷)(九三・三―一)	七六
源氏物語(花の宴)(三條西家證本)(九三・三―一)	七六

源氏物語類語(〇八一―一三)	七四	耕雲抄(九二・二一―四七)	四八	古歌抄(九二・二一―一三)	四八
嚴秀	一五	好榮	四三	後柏原院内侍	七七
源順集(〇八一―一五)	一五	栲園	四〇	古瓦譜(三〇七―一)	二〇三
源昭	四七、四九、五〇、五九、五五	行客袖珍(五〇・八一―一九)	三四	古歌類從(〇八一―一五)	六四
源承	四八、五三	黃河山川道圖(五二・二一―一七)	三五	後漢書(宋版)(三三―一三)	三五
女裝	一七	黃衢亭(明)	一六	後漢書(明版)(三三―一五)	三五
顯昭抄	五二	公慶	一七	古記拔粹(〇九―一九)	九
顯昭陳狀(九二・二一―一三)	四七	皇國醫道沿革考(稿本)(四九―一三)	四三	碁經(古活字本)(七五―一)	四六
源信	一七	光嚴院	六九	吳兢(唐)	六
賢尊	一六	〔光嚴院三十六番歌合(九二・二九―一三)〕	六九	古今集問書(九二・三―一五)	五六
現存卅六人詩歌(〇八一―一五)	一六	孔子通紀(古活字本)(二四・一―一)	一三	古今集抄の奥に書ける詞(九二・三―一五)	五六
源注拾遺(九三・六一―一五)	七五	好色一代男(九三・六一―一五)	八七	古今集序註(九二・三―一五)	五六
幻中類林第五(九三・六一―一五)	七六	好色一代女(九三・六一―一五)	八八	古今集註	五六
けんふくそか	七〇	好色三代男(九三・六一―一五)	八四	古今抄	五八
げんぶく曾我	七九	綱成	七	古今清濁聲句訓說等問書(九二・三―一〇)	五七
建禮門院右京大夫	五三	校正法曹至要鈔草稿(三六・一―一三)	三五	古今問答(九二・三―一三)	五六
建禮門院右京大夫集(九二・三―一六)	五三	光祖	四九	古今和歌集(九二・三―一三)	五六
コ		幸田露伴	八三、八三	古今和歌集(九二・三―一五)	五七
小あつもり	七五	香蝶樓豐國	四四	古今和歌集(九二・三―一四)	五七
古庵糸亦	三三	弘傳畧頌抄(八八・四―一五)	一八	古今和歌集(九二・三―一五)	五七
小池正直	四四	河野鐵兜	二九	古今和歌集(九二・三―一〇)	五七
小石元瑞	四〇	皇明詔制(明版)(三三―一五)	三五	古今和歌集(九二・三―一六)	五七
小石中藏	四〇	高野山通念集(五二・四―一五)	三三	古今和歌集(嘉錄本)(九二・三―一六)	五七
小石元俊	四〇	紅葉山人日記(九〇・二―一三)	四六	古今和歌集(清輔本)(九二・三―一三)	五七
戀妻	七三	鴻臚集(九二・二六―一四)	六八	古今和歌集(貞應本)(九二・三―一五)	五七
耕雲	四八、五四	湖海士(明)	九〇	古今和歌集問書(九二・三―一三)	五八
		古學要(二・三・六一―一)	一〇	〔古今和歌集註〕(〇八一―一三)	九

古今和歌集注(九二・三一一一五)	五七九
古今和調集註(九二・三一一四)	五八〇
古今和歌集註(九二・三一一八五)	五八一
古今和歌集論選(稿本)(九二・三一一六)	五八二
國學者書簡集(二八一五)	五八三
國學の説(〇八一五)	五八四
國史實錄(二〇一一二)	五八五
國字分類諺語(三九一三)	五八六
國史肇要(二〇一一三)	五八七
國風集(九四一一)	五八八
刻本續日本後紀復舊(〇八一五)	五八九
湖月抄(石川雅望書入本)(九三・三一一九)	五九〇
古言拾葉(八三一七)	五九一
胡廣(明)	五九二
古語拾遺(〇八一五)	五九三
胡互説(〇八一五)	五九四
後小松院	五九五
心のよるかた(九二・二一一五)	五九六
古今浮連歌序	五九七
古今歴代十八史略(元版)(三三一一九)	五九八
後嵯峨上皇院宣(二〇・四一一)	五九九
小佐治半左衛門靜榮	六〇〇
古事記(八雲軒本)(二〇・一一一九)	六〇一
古事記(村田春海書入本)(二〇・一一一七)	六〇二
古事記燈黄泉之件其三(二〇・一一一六)	六〇三
古事記傳(二〇・一一一七)	六〇四
古事記傳(二〇・一一一七)	六〇五

古事記之歌附古事記之歌線分(九二・三一一七)至九	五九〇
古事記之歌線分	五九一
古事記謠歌註(稿本)(九二・三一一一)	五九二
こしこえ	五九三
越前禪尼消息(九二・二一一二)	五九四
小島染野	五九五
小島屋長右衛門	五九六
御書(八・八一三)	五九七
後白河天皇	五九八
古事類苑目錄編次愚案(三一一九)	五九九
小杉榎邸	六〇〇
後撰倭調集(九二・三一一五)	六〇一
後撰和歌集(九二・三一一九)	六〇二
後撰和歌集(天福本)(九二・三一一七)	六〇三
小袖をか	六〇四
小袖曾我	六〇五
小曾根紅子	六〇六
五代集調枕(九二・二一一九)	六〇七
五代集類題(九二・三一一三)	六〇八
後太平記 津國女夫池(九三・六一三)	六〇九
古調	六一〇
胡蝶	六一一
胡てふもの語(九三・五一一五)	六一二
小槻子恒	六一三
小寺應齋	六一四
後藤登明宗印	六一五
後藤松陰	六一六
後鳥羽院	六一七

後鳥羽天皇	六九一
詞珠衣	六九二
小中村清短	六九三
近衛植家	六九四
近衛信尹	六九五
近衛道嗣	六九六
此度肥前長崎客兩人被參候ニ付手續書一件之扣(二〇・八一三)	六九七
木引善光寺	六九八
古風抄(稿本)(九二・三一一二)	六九九
小藤原定家	七〇〇
古本神樂催馬樂譜(九二・五一一三)	七〇一
古本催馬樂(〇八一五)	七〇二
小町少將道行(九二・七一一六)	七〇三
小町さうし	七〇四
駒牽	七〇五
後水尾天皇	七〇六
小森善兵衛清七	七〇七
今宵の少將	七〇八
こわたきつね	七〇九
渾蓋通憲圖説(明版)(四二一一)	七一〇
近藤久敬	七一〇
近藤重藏	七一〇
近藤久棟	七一〇
近藤芳樹	七一〇
昆陽漫録	七一〇

サ

三代集類題(九二・三三―イ五)	五九
三體和歌(九二・二一―イ五)	四九六
山茶やぶれ笠(三七―イ五)	三六三
讚嘲記時之大鞍(三七―イ九)	三八四
山東京山	四〇、八三
山東京傳	七三
殘唐五代史演義傳	九〇
三百箇條(七九―イ)	四四五
三部經音義(八三―イ五)	一五三
三分事略(元版)	九七
〔散木集註〕(九二・三三―イ九)	五九三
山陽翁奉萱尊手簡(二六九―イ查)	二八七
山陵考略(二八二―イ九)	二七〇
山陵叢書(二八二―イ二)	二七一―二七三
山陵叢書(二八二―イ二)	二七一
椎園	三九
シーホルト	四〇
市隱月令(三八四―イ五)	三六
慈雲	三八
慈園	四六
鹽田幸八	四六
慈恩會問答講草(三九―イ)	一三五
詞花和歌集(九二・三三―イ〇五)	五九
雌鑑抄(九一―イ)	三五四
史記(古活字本)(三三―イ二)	三五六
史記(古活字本)(三三―イ二)	三五九

職原鈔(三六二―イ五)	三六
四季戀雜日首詠草拔萃(九二・六―イ九)	三六〇
慈禧皇太后(西太后)(清)	四六
四季小譚集	七〇
色道胸三要(九三・六―イ七)	八四
詩經樂譜全書	一〇九
自行略記	一七八
竺源叟惠梵	一六一
竺亭仙果	三〇一
しくれのえん	八〇五
しくれのさうし(九三・五―イ七)	八〇五
しくれ物語	八〇五
滋野井公澄	二四四
滋野井公澄日記(三〇六―イ五)	二四四
慈眼	二八
至元新刊全相三分事略(元版)(九三―イ七)	九七
四國おち(九二・六―イ七)	七一
四國落	七九
四庫全書恭收存目	八五
時習新知抄(一四七―イ)	一三三
四書(今關版)(三三―イ)	一一〇
四書集註(活字本)(三三―イ三)	一一二
四書集註大全(三三―イ五)	一一三
師說撰歌和歌集(九二・二一―イ〇三)	四九七
四節八座抄(三三・七―イ)	三七
慈尊院傳受日記(二八・四―イ九)	一八二
した(九二・六―イ九)	七二
した	七三

した	七九
志田	七九
施耐庵(元)	九一
四體千字文書法(七六―イ三)	四九
糸竹初心集(七六―イ三)	四九九
七書(三九―イ五)	三九五
七島日記(九二・二―イ九)	三三〇
しつか	七三〇
實曉	一三
十訓抄(九三・四―イ二)	七九
實如	一八七
耳底記(九二・二―イ四)	四九八
篠崎小竹	二八九
信田	七三
篠田時化雄	六八六
篠廼屋翁昶	六七三
司馬江漢	四二五
司馬遷(漢)	三五六、三五九
司馬彪(晋)	三五五、三五六
澁井小室	四〇一
澁江抽齋	八六六
事文類聚(古活字本)	一五
慈遍	一三、一三三
茲峯	三五
嶋廻	七三
清水卯三郎	四六五
清水冠者	七三
清水三郎兵衛	七五

清水谷實久	五七三
清水珍一	六四三
しみづなほまろ	四九五
清水濱臣	三六五、六七
清水光房	三九、四、四、四、四、五九、七六、七
清水光房雜稿(〇八一―一)	三九―四三
慈妙	三三八
持明院基定	六七
下河邊長流	四九、五七、五九、七三
下辻(紙屋)又七	三九
しやかの御ほんち(九三・五一―一九)	八〇六
釋空	三三
寂蓮	六六、四九
寂蓮集(〇八一―一五)	六六
沙石集(古活字本)(九三・四―一七)	七八〇
拾遺愚草(九二・二四―一)	六七
拾遺愚草(九二・二四―一七)	六五
拾遺愚草(九二・二四―一九)	六六
拾遺愚草(和學講談所本)(九二・二四―一二)	六八
拾遺愚草	五九
拾遺愚草員外(九二・二四―一三七)	六九
拾遺愚草抄出聞書(九二・二四―一七)	六〇
拾遺愚草不審	五九四
拾遺集不審附拾遺愚草不審(九二・三三―一四)	五九四
拾遺抄(九二・三三―一四)	五九五
拾遺和歌集(九二・三三―一五)	五九六
拾遺和歌集註(九二・三三―一五)	五九七
拾遺和歌集標註(九二・三三―一七)	五九八

周易(三・二―一三)	一〇四
周易(三・二―一九)	一〇五
周易(古活字本伏見版)(三・二―一)	一〇六
周易傳義(古活字版)(三・二―一七)	一〇七
秀歌	一一三
秀岩書堂	八九五
蹴鞠秘傳(七六三―一)	四三
蹴鞠略記(七六三―一七)	四三
拾瓊算法(四九―一)	四七
拾玉集	五九
周采(明)	六五
十四經	七三
周之標	九〇
重修政和經史證類備用本草(明版)(四九四―一三)	四六
周書(宋版)(三三―一七)	三六〇
秀松軒	七三〇
周清原(明)	九〇九
集千家註批點杜工部詩文集(元版)(九二・二四―一九八)	七三
重鏤	七三
袖中抄(九二・二四―一三七)	四九
袖中抄卷第一(九二・二四―一三)	五〇
周超世譽	二九
御伽 瓊訓蒙鑑草	四〇
十二月歌(九二・二六―一九)	六一
十二段さうし(九二・二七―一九)	七六
十如是義私記・自行略記(古活字本)(一八・三―一)	一七

周伯濕(元)	四九
十八史略	三五七
十はんきり	七三〇
十番斬	七九
穉風閣	四一
周鳳	一九八
秋峯源子	八九三
朱熹(宋)	一〇七、一一三、二六九、八九三
祝穆(宋)	一五
宿蘆齋	四九
守護地頭考(三六・二―一三)	三六七
朱舜水(明)	二八、二九四
しゆてんとうし	七九五
種痘傳法(四九―一)	四三
聚樂物語(九三・六―一五)	八三
ジュールコーブ	四〇
俊恵	六二
舜清	一七一
順徳天皇	五三五
春波樓主人	四三
正訥	七〇〇
正運	一〇、一八
承兌	一〇六
聖音	五七四
證海	一四
松會	七五〇、八〇四、八九、八三
章懷太子賢(唐)	三五、三六
上覺	五三六

燒火山	七三
貞觀政要(古活字本)(三三一・一五)	六二
正教	八五
上京日記(九四六・一五)	八六
上古史綱要(〇八一・一五)	三
招差三要(四九一・一)	四八
招差三要(四九一・一)	四九
尙書正義	一〇八
尙書註疏(宋版)	一〇八
證真	一〇三
〔上奏文案文〕(三九一・一五)	二六八
消息文例下卷(九六一・一三)	八八
小竹先生書翰集(二九一・一五)	二九
掌中源氏物語年立(〇八一・一五)	六九
正徹	四九五、五八三、六五、六七
蕭統	九五
常德院殿集(九二・五・一五)	五五
聖德太子御傳記(九二・七・一五)	七七
聖德太子傳(二八一・一三)	二七四
證如	一八六、一八、八九
條野傳平	二四
紹巴	六八、八五
章斐然(明)	九四
正本屋九兵衛	四九
松林	八四
少林寺和尚和歌集(九二・六・一五)	六三
諸角蹈躑術(四九一・一)	四〇
書紀傍訓類聚	三〇

續紀目安(〇八一・一五)	七〇
〔蜀山雜稿〕(〇九一・一七)	九
續日本紀稱呼之事(〇八一・一三)	四
書言故事大全	一六
諸國好色三代男	八四
諸國風俗問狀附答書(三〇一・一三)	三七
徐子光(宋)	二六
書籍目錄(〇九一・一七)	六
徐仁中(明)	九四
初心導書(九二・二・一五)	五〇
諸神本懷集(八六六・一五)	一〇
諸尊法傳受日記第四(八六四・一)	一八
初潭集(明版)(二四一・一五)	二六
使琉球記(二六九・一三)	二五
詞林采葉抄(九二・三・一五)	五七
詞林采葉抄(九二・三・一五)	五八
詞林采葉抄(九二・三・一五)	五九
新刊明解音釋校正書言故事大全(明版)(〇三一・一)	一六
神祇講式(二〇一・一)	一四
神祇講之式(二六一・一)	一四
新彊征戰銅版圖(七三・一)	四
新きよく(九二・六・一五)	七三
しんきよく	七九
新古今集竟宴懷紙模本(九二・二・四・一)	六四
新古今和歌集(九二・二・四・一)	六三
新古今和歌集(烏丸本)(九二・二・四・一)	六三
新古今和歌集(隱岐本)(九二・二・四・一)	六三

新古今和歌集聞書(九二・二・四・一)	六六
新古今和歌集聞書(九二・二・四・一)	六五
新刻全像三寶太監西洋記通俗演義(明版)(九三一・一)	九
新刻役者綱目(七二・一七)	四七
新猿樂記	九四
新三十六人歌合(九二・二・四・一)	六三
壬二集	五九、六三
振思亭	六九
新釋小倉百首總釋	四七
神書漫錄(三〇一・一)	二五
神人名彙(三〇一・一)	二五
神宣解(七二・一)	二五
新撰姓氏錄(二六・一)	二七
新撰隨腦(九二・二・一)	五〇
新撰總界全圖并日本邊界圖(九二・一)	三〇
新撰萬葉集(九二・三・一)	五九
新撰六帖索引(〇八一・一)	七
新撰六帖類字(九二・二・四・一)	六八
新續古今和歌集上(九二・二・五・一)	六六
神代紀秘解(三〇一・一)	二四
新訂萬國全圖(二九・九・一)	三八
神道折紙類聚	三八
新唐書附釋音(宋版)(三三一・一)	六三
神皇正統記(三〇一・一)	一七
神風和紀	一三
秦汗(明)	八
新編江戸名所圖誌(二九・二・一)	三三

新編 事文類聚(古活字本)(〇三二―一五)……………二五
 古今 武藏風土記稿本(二九・二一―一七)……………三三
 新編 武藏風土記稿本(二九・二一―一七)……………三七
 新補 菴語(朝鮮活字本)(〇三二―一七)……………四
 新見 正路……………四
 信明集(〇八一―一五)……………七
 新葉集伊勢桐官作者略傳(〇八一―一三)……………四七
 森羅萬象……………八八
 新和歌集(九二・二四―一三)……………六九

ス

醉香主人……………九〇
 水滸傳(明版)……………九二
 水竹堂據了……………六五
 睡餘墨戲帖(七二―一三)……………四六
 鄒突孝(清)……………一〇九
 菅の根・續菅の根(九三・六―一七)……………八五
 菅原溫……………五四
 菅原孝標女……………七六
 菅原道真……………六二
 杉田勘兵衛……………八二、八三
 杉田勤……………三〇六
 祐氏……………七三
 鈴木重胤……………三七
 鈴木長頼……………八九
 鈴木眞實……………五〇
 鈴木穆……………四七
 鈴屋歌集堂之卷稿本(九二・二六―一七)……………六三
 鈴蟲……………七三

砂川政教……………二七
 須原茂兵衛……………四七
 須原屋市兵衛……………八八
 須原屋善五郎……………八八
 隅田川古圖考(葛の葉草)……………三三

セ

政……………三五、三六
 靜意……………一五
 清閑寺照定……………四一、四四
 清江書堂……………一一
 西湖秋色……………九〇
 西湖二集附西湖秋色(明版)(九三―一七)……………九〇
 靖社原從功臣錄券(朝鮮活字本)(二九―一七)……………三三
 西廂記(明版)……………九三
 清慎公集(〇八一―一五)……………七
 惺々翁……………七三
 正宗(朝鮮)……………一
 姓族志(二八・二―一三)……………二七
 聖堂祭器目錄……………四
 聖堂書籍目錄附聖堂祭器目錄(〇二七―一五)……………四
 世德堂……………九〇
 西番譯語(八元―一七)……………四三
 聖廟法樂百首(九二・二五―一七)……………三三
 清兵衛……………八元
 世雄房圓智……………三九
 西洋記(明版)……………九八
 西洋度量考……………四二

西洋品行論十一篇(四一―一三)……………二七
 性欲雜說(四九三―一七)……………四四
 赤縣太古傳(三三―一七)……………三三
 關孝和……………四五
 關松窓……………三五
 赤心錄(三一―一七)……………九
 碩鼠漫筆卷之二拔萃……………四九
 關寺小町……………七七
 關橋守……………三五
 石廬襲……………三四
 石和見聞志(七五―一三)……………一四
 世間胸算用(九三・六二―一三)……………一四
 世間胸算用(九三・六二―一三)……………一四
 節翁・文七與義方尺牘(二九―一七)……………八四
 節齋與鐵兜尺牘(二九―一七)……………九
 說文解字註附六書音均表(八三―一七)……………四三
 說文解字註……………四三
 節用集(草書本)(〇三二―一三)……………一〇
 節用集……………一〇
 瀬戸物屋傳兵衛……………四三
 瀬名貞雄……………三三
 瀬良田……………七三
 濬淵子……………四二、四三、四四
 禪海……………一九
 仙覺……………一八
 錢敬臣(明)……………九
 扇軒……………四八
 淺間宮和歌(九二・二五―一七)……………六三

撰五十番歌合…………… 六九
千載和歌集(九二・三―一五元)…………… 六〇
千載和歌集下(九二・三―一五九)…………… 六一
撰集佳句部類卷第廿九(九二・二―一五九)…………… 五三
撰集菅公歌鈔(稿本)(九二・三―一五七)…………… 六三
宣宗(清)…………… 四八
禪尼慈妙田地處分狀(三〇・四―一五九)…………… 三八
宜如…………… 一八
鶴李卓吾批點殘唐五代史演義傳(九三―一五三)九〇
善隣國寶記(三〇―一五九)…………… 一九

ソ

桑華詩編…………… 八二
宗祇…………… 四七
宋祁(宋)…………… 三六
曹孝忠(宋)…………… 四六
曹公亮(宋)…………… 三六
莊子…………… 一三
宗受…………… 二四
莊周(周)…………… 一三
宋世…………… 五七
宗砌…………… 四三
漱石遺墨(九〇・六―一五一)…………… 四七
宗禪…………… 一四
曹先之(元)…………… 三七
〔筆琵琶譜〕(七六―一五七)…………… 四三
増補松の落葉(九二・八―一五)…………… 七九
及入桑門楓山…………… 八〇

曾我物語(九三・五―一五八)…………… 八七
續一切經音義(高麗板)(八三―一五七)…………… 一五
續後歌林良材集(九二・二―一五九)…………… 五〇
續後拾遺集…………… 五五
續詞花和歌集(九二・三―一五七)…………… 六三
續菅の根…………… 八五
續千載集…………… 五五
續草經集(稿本)(九二・六―一五六)…………… 六四
續類要句(九二・二―一五九)…………… 五五
素戔鳴尊…………… 七五
楚辭(朝鮮版)(九二―一五)…………… 八三
楚辭後語…………… 八三
楚辭集註…………… 八三
楚辭辯證…………… 八三
祖秀…………… 一〇五
素性…………… 七三
素性集(〇八―一五)…………… 七三
染崎延房…………… 二四
尊圓親王…………… 一五

タ

大我…………… 一三五
大學…………… 一〇
大學章句(三三―一五一)…………… 一三
大儀殿庭裝束圖・同禮服冠圖(三六・六―一五九)…………… 六六
大嘗會悠紀主基二國蘇詞(三六・八―一五三)…………… 三七
大職冠(九三・六―一五)…………… 七三
大職冠(九二・六―一五四)…………… 七四

大しよくはん…………… 七〇
たいしよくわん…………… 七九
大内裏…………… 七三
大唐三藏聖教序…………… 一七
大納言經信卿集(〇八―一五)…………… 七五
大貳…………… 六七
大般若波羅蜜多經卷第二百七(八三―一五四)…………… 一五四
大般若波羅蜜多經卷第三百九十九(八三―一五七)…………… 一五
大般若波羅蜜多經卷第五百一十一(八三―一五六)…………… 一五六
大佛供養物語(九三・五―一五)…………… 八八
太平記卷一(三〇・四―一五二)…………… 二四〇
〔太平記拔書〕(三〇・四―一五三)…………… 三九
大平廣記(明版)(〇三―一五七)…………… 一八
大明地理之圖(九二・二―一五二)…………… 三五
待問雜記(〇八―一五三)…………… 三
平兼盛集…………… 六
平忠盛集(〇八―一五)…………… 七
平胤榮…………… 三四
平爲春…………… 八元
平(生嶋)宣盛…………… 五四
平(生嶋)治孝…………… 五四
台林…………… 七六
〔臺灣圖〕(三九・八―一五三)…………… 三四
田内秀眞…………… 六五
尊氏經…………… 一五
高倉永慶…………… 六七

高崎先生詠草(九二・七〇一)	六七
高崎正風	三九、六七
高崎正風日記(二九一)	三九
高階成章女	六〇
高島裕啓(烈)	三九
高田早苗	六六
高田慎藏	六六
たかたち(九二・六一)	七五
たかたち	七九、七〇
高千穂神樂歌	八〇
高千穂日記(九四・六一)	八〇
高豊をち集	六〇
高橋景保	三〇七、三〇八
高橋廣道	三〇一
高林方朗(道秋良)	一四
高屏風くだ物かたり(九三・六一)	八三
多賀谷環中仙	四〇
瀧川子龍(規矩亭崇山)	四〇、四七
瀧澤馬琴	八、九五、九六
武島又次郎	六六
武田久米吉	三五
武田郡兵衛	三五
武田敬孝	二七、二七、二七
武田耕雲齋	三三
武田耕雲齋日記(二九一)	三三
竹杖爲輕	八八
武綱さごと(九二・七一)	七六
竹取物語(奈良繪本)(九三・三一)	七六

竹中季有	三〇
竹村五百枝	四九
竹村茂雄	八七
田鶴	七三
只野眞葛	八
橋暉覽	五八
橋爲仲集(九二・三一)	六〇
橋守部	九、三〇、三三、三四、三五、五七、六二、六五
橋守部稿本集(〇八一)	一九一
立原翠軒	七五
立野春節	三
辰日略次第(三六・六一)	三六
伊達千廣	五一
田中光顯	六六
棚谷元善(桂陰)	一九
たなばた(九三・五一)	八〇
七夕之器考(三四・一)	三三
谷好井	三〇
谷千生	四九
たにのむれ木(九四・六一)	八七
田能村太一	四一
玉かつま	七四
玉川の水(九二・一)	三四
玉匣	九
玉造小町子壯衰書一首并序附新猿樂記(群書類 従本)(九四・一)	九四
玉の小櫛	六三
玉鉾百首解(八一)	七

田村此雄	八七
田村建顯	六七
田村草子(古活字本)(九三・五一)	八〇
たむらのさうし(九三・五一)	八二
田村與之助	三六
多聞寺	七三
たわら藤太物語(九三・五一)	八三
談愷(明)	一八
丹鶴類書(〇三一)	二
段玉裁	四六
短冊の縁(九三・六一)	八六
子	
智覺禪師	一五〇
近松門左衛門	七四、七四
竹逸	四二
竹苑黃花(二六・一)	七五
竹齋(九三・六一)	八三
逐日功課自實籙(二九・一)	二九
千葉葛野	三六、三六
千葉胤明	六六
西藏蒙古對譯經(八三・一)	一五七
チャンパレン	三、三〇
仲恩房	九〇
忠義水滸全書(明版)(九三・一)	九二
中庸	二〇
長惠	一七〇
長歌言葉珠衣(九二・一)	五八

長歌撰格稿本上(〇八一―一三)……………三
 長歌撰格(稿本)(九二・二一―一三五)……………五七
 趙岐(漢)……………一三〇
 澄月……………四七三
 朝衡……………四四四
 張鷟山……………三六九
 〔長恨歌并琵琶行抄〕(九三・二一―一七)……………九〇
 長壽院内府九十賀和歌(九二・三―一)……………三九
 長秋詠草……………五九
 長秋詠藻大賞會歌……………三七三
 〔朝鮮古地圖〕(二九・九―一)……………三五五
 朝鮮人來朝圖(三〇・六一―一九)……………二四六
 張庭芳……………八九四
 塵積……………三三二
 陳玩直(明)……………一六
 陳義貴(高麗)……………三五三
 陳斗垣(明)……………九〇四
 沈勉齋……………三五八
 陳暘(宋)……………四二

ツ

津久井清影……………二六
 津久井漂齋……………二七六
 江藻髮……………七三
 津阪東陽……………三三〇、三三二
 堤中納言物語(九三・三―一七)……………七三
 堤中納言物語(九三・三―一七)……………七三
 堤盛衛……………四〇
 都通物語(九三・六一―一三)……………八七
 九曲折考(〇八一―一五)……………九
 經術集(〇八一―一五)……………九
 津國女夫池……………七四
 椿椿山……………八〇
 坪井信道……………四〇
 坪内逍遙……………二九五
 坪内逍遙翁書翰(二九九―一四九)……………二九五
 都菩臣足嶋……………一五六
 津守國夏……………四九二
 露の宮……………七三
 露之屋……………七六
 貫之集(九二・三―一七)……………六六
 つるきさむたん……………七九
 鶴丸……………六三
 鶴峯戊申……………四
 露屋喜右衛門……………四九
 徒然草(古活字本)(九四・五―一三)……………六三
 徒然草(古活字本鳥丸本)(九四・五―一)……………六三
 つれく草(嵯峨本)(九四・五―一五)……………八四

テ

鄭懷魁(明)……………四二
 定家家隆調合(九二・元―一)……………六一
 定家卿消息……………五八
 定家樓……………七三
 程願(宋)……………一〇七
 庭訓往來(九六―一)……………八五
 庭訓往來鈔(九六―一五)……………八六
 庭訓私記(九六―一九)……………八七
 訂正增譯采覽異言卷之一(二九・九―一五)……………三〇六
 定富……………五七
 てくるまのもと(九四・六一―一三)……………八七
 鐵崖仙史人物冊……………四三
 寺々五人組判形帳(二〇・三一―一)……………一四八
 出羽辨集……………六
 田苑草露……………八五
 田家集(九二・二―一四九)……………六五
 天狗内裏(九三・五―一七)……………八三
 天倪……………三六
 天竺老人……………八八
 天神由來(奈良繪本)(九三・五―一三)……………八四
 天地初發之圖附經緯畧辨・歌之五級(二三・六一―一三)……………一〇三
 點取和歌類聚(九二・元―一三)……………六三
 天王寺屋市郎兵衛……………四七
 傳法灌頂口傳(二・六―一七)……………一八四
 天滿社宮居考ノ辨(一五―一五)……………一四三

轉用字訓例(〇八一―一)……………三六

棠陰秘事加抄(三三九―二一七)……………三四

棠陰比事諺解……………三四

東海道各驛狂歌(九七二―一五)……………八九

東家秘傳(七一―一五)……………三〇

當家着用裝束以下事(三六・六一―一七)……………三七

桃源集(三七一―一三)……………三六

道見法親王……………六七

東國紀行……………八〇

湯山遊觀路程記(九二・四―一三)……………三〇

唐詩(明)……………一八

重衡(宋)……………三三

童昌祚(明)……………九五

道誓法眼口傳……………四四

東素純……………四三

東素傳……………四三

東大寺大佛殿造立勸進帳(二六・二―一)……………一七

十市遠忠……………五〇

東常緣……………五六、六五、六六

藤貞幹……………二〇、四〇

道範……………一八

東藩文獻志稿(二六九―一四)……………二六

遠山英一……………六六

東遊記(二九二―一三)……………三五

東遊日記(二五〇・八一―一)……………三五

當用新撰往來(〇八一―一三)……………三三

登蓮法師……………八〇

登蓮法師集(〇八一―一五)……………八〇

兔園叟……………五七

とかし……………七九

ときはもんたう……………七〇

ときは問答……………七九

徳川齊昭……………五七

徳川齊修……………五七

徳川光圀……………一六、六〇

徳川頼房……………二六

〔徳川理財會要稿本〕(三三〇・三一―一)……………三五

讀三途平妖傳題跋……………九五

杜工部草堂詩箋(朝鮮版)(九三二―一五)……………九〇

俊頼口傳(九二二―一七)……………五八

戸田氏武……………四

戸田茂睡……………三七、三八、三九、六五、六六

舍人親王……………三三

杜甫(唐)……………八九、九〇

富岡鐵齋……………三七、四三、四六、六一

富谷徳右衛門……………六

富杜哥鑑……………六一

伴林光平……………二七、六三

伴林光平尺牘(三九―一七)……………二七

豊葦原神風和記(七一―一七)……………二二

豊葦原神風和紀(七一―一七)……………一三

豊國……………四四

豊國(一陽齋)……………四四

豊國(香蝶樓)……………四四

豊田文景……………四七

豊原統秋……………六〇

とりかへばや物語(九三三・三九―一五)……………七四

杜律詳解(九三三・三一―一)……………九三

度量考(六九―一)……………四三

頓阿……………五〇

仍覺……………五四

内藤安房守忠明……………三〇

直江兼續……………四七、九五

直江山城守兼繼……………四七

直毘靈(三・四―一)……………九

直靈考(七一―一三)……………一三

中井敬所……………四〇

長尾(平)景寛……………六九

中神守節(梅龍園主人)……………三九

中川喜雲……………三八

長崎港唐人屋舗並市中風俗圖(二六・六一―一五)……………三〇

中嶋久兵衛……………一〇七

中島棕隠……………八九

仲田顯忠……………六五

永田善吉……………三〇、三八

中院通顯……………六三

中院通勝……………七四、六九

中院通茂……………九七

中院通純……………六七

中院通冬……………六三

中院通村	六七
中野道伴	八四
中野柳圃	四二
中村敬字	一三七
中邨秋香	五五
中村宗三	四九
中山美石	一四
中山豊村	一四
長與專齋	四一
長柄	七三
なしこ草・辨なしこ草・辨々なしこ草(九二・二一・一五)	五〇
梨木祐爲	五〇
なすのよ一	七九
夏野の草(九四・六一・一三)	八七
夏目漱石(金之助)	四七
七くささうし	七五
難波狸々	七三
難波鶴跡追(五・四・一三)	三二
難波名所蘆分舟	三四
浪花遊所之賦・古今浮連歌序(二七・一五)	三六
楢葉和歌集(九二・四・一七)	三〇
生川正香	九二
成島龍洲	八七
南華真經	一三
南朝公卿補任僞撰考(〇八一・一三)	四
難波立愿	四一
南方紀傳	四

二

南浦文集(古活字本)(〇八一・一七)	六
西澤九兵衛	七三
西村市郎右衛門	四〇
西村茂樹	四一
西村新助	三三
西邨貌庵	三六
西山宗因	八九
二十一代集後談(九二・二一・一五)	五〇
二十四孝	七五
二條太皇太后宮大貳集(九二・三一・一五)	六〇
二條爲明	七三
二條爲氏	五九
二條爲冬	五七
二條爲道	五三
二條節用集(三一・一二)	一一
仁田四郎(九三・一七)	八五
二中曆(〇三一・一三)	一三
日要	一九
日蓮	一九
日蓮聖人註畫讃(古活字本)(〇八八・一)	一九
日周	六四
日澄	一九
蜷川親當	四九
二南里人	九八
日本外史俚諺抄(版下本)(三〇一・一五)	一九
日本記	七〇

日本紀私記(三〇一・一五)	三六
日本紀神代口訣(三〇一・一五)	三七
日本紀神代卷折紙(三〇一・一五)	三八
日本紀神代卷鈔(三〇一・一八)	二九
日本紀素戔嗚尊(九三・六一・一五)	七五
日本紀傍訓部類(三〇一・一八)	三〇
日本紀類聚解詠歌註(稿本)(九二・三一・一三)	四四
日本後紀(天文本)(三〇一・一五)	三九
日本書紀(三〇一・一五)	三三
日本書紀(卜部本)(三〇一・一七)	三四
日本書紀歌口解(九二・三一・一五)	五四
日本書紀纂疏(三〇一・一五)	三三
日本書紀卷第一(有日本)(三〇一・一五)	三三
日本書紀卷第二(岡本本)(三〇一・一七)	三五
庭田重經	五三
丹羽真(思亭)	一六
仁慶	七三
仁和堂(明)	一六
又	
野鷹集(九二・二六・一七)	六六
沼搜	七三
沼田頼輔	七五
ネ	
ねこの草紙	七五
鼠物語	八五
ね物がたり(三六・一)	三七

久松榮枝(穂積)	三〇三	非唯漫錄(九二・二一・一三)	五四	福井瀧口	七三
菱川吉兵衛	八九	ひやうこ	七〇	福齋物語	八五
菱川師宣	七五〇、八三三、八六六	兵庫合戦	七六	福田美楯	四八四、六四六
菱川師宣(吉兵衛)	八九	標題徐狀元補注蒙求(古活字本)(八三・二一・一七)	三六	福地樓痴	四三
日高川	七三	杓柄	三六	福地源一郎	四〇一
飛彈女	九五	馮夢龍(明)	九五	武家義理物語(九三・六二・一五)	八四
筆道(七六・一五)	四二	平岡富之介	九七	藤井高尚	八四
ひてひら入(九三・五・一五)	八八	平田篤胤	三三、四二	藤井紫影	八五
人穴	七三	平出延齡	七六、七六、八三	藤井竹外	三三
一柳越智千古家集(九二・六・一五)	六七	平出順益	七五	藤井宗雄	三六
一柳千古	六七	平野國臣	二九	藤木いち女	八七
一柳千古家集	六七	廣川糲	四〇	富士山御傳記	八〇
人見下齋宗次	三六	廣重	四四	富士山の本地(九三・五・一四)	八〇
人見流拔覺集上卷(三九・一七)	三六	廣島趨會記(三〇・七・一)	四九	藤孝公年譜(二九・一・一四)	三九
一もととき(九三・五・一五)	八九	廣瀨元恭	四一	藤田乘因	四三
日野資愛	九三	貧道集(九二・三・一七)	六八	藤田東湖	三〇〇
日比正廣	五九	風俗畫帖(七二・一・二)	四七	藤田東湖尺牘(三九・一・一)	三〇〇
秘本玉くしげ(三・四・一五)	九	風葉和歌集(九二・二・一三)	五五	不盡谷成元	六六
姫島日記(稿本)(九四・六・一五)	八四	ふえのまき	七九、七〇	富士谷御杖	一〇三、三五、四四、五七、五六、六四
〔百首和歌集〕(九二・四・一五)	六二	笛物狂	七三	富士谷御杖(成元)	三二、四八、五二、五四、五一
百二十詠詩註(九三・一・三)	六二	不學	七三	富士谷御杖(不盡谷成元)	六四
百人一首考(稿本)(九二・二・一三)	五三	深澤薫	三四	富士谷御杖(藤原成元)	四八
百人一首抄	四七	深澤通	三四	藤田友間	四三、四三、四四、四五
百人一首燈草稿(九二・二・一三)	五三	吹上氏かわすの介安方	三六	藤田友間(間睡庵)	四三
百番調合(九二・二・一五)	六三	福井棊園	四〇	藤田友間筆道傳書(七六・一・一七)	四三、四三
百萬塔放	一五			藤波言忠	六六
百萬塔陀羅尼附百萬塔放(八三・一・八)	一五			ふしの人穴	八五

ふしみときは	七六
ふし見ときは	七九
藤村源兵衛尉友久	四三
藤本箕山	三八八
附釋音尙書註疏(宋版)(三・二一)	一〇八
藤原顯輔	五九三
藤原明理	五四四
藤原朝忠	五〇
藤原維佐	五七
藤原家隆	四六、五六、六三
藤原清輔	六〇三
藤原公任	五三、七〇、七三、七三
藤原公尹	八二
藤原貞雄	五四九
藤原定能	三七二
藤原茂利	一五八
藤原俊成	五八、六〇、六一
藤原隆祐	六三
藤原爲明	六三
藤原爲氏	八四、六九、六三
藤原爲兼	六四
藤原爲定	六三
藤原爲重	六三
藤原爲周	六四六
藤原爲遠	六三
藤原爲藤	六三
藤原爲世	六三

藤原爲頼朝臣集	六二
藤原經信	五五
藤原經衡	七九
藤原定家	四九、四九、五〇、五三、六五、六六、六七、六八、六九、六二、六三、六三、六三
藤原時朝	一〇、一六
藤原俊方	三四
藤原長清	五六
藤原長親	四八
藤原業春	二五
藤原成元	四八
藤原信明	七
藤原宣胤	五九
藤原範兼	四九
藤原憲輔	五八
藤原教長	六八
藤原瀆成	四七
藤原冬嗣	三九
藤原冬光	六三
藤原雅世	六六
藤原道長	八二
藤原滿基	四九
藤原基道	一四
藤原師氏	五
藤原師輔	五
藤原能季藤原基通宛申文案(七五一七)	一四
藤原良經	四九
扶桑皇典(三・七一)	一〇三

扶桑略記(金勝院本)(三〇一三)	二〇〇
富大用(元)	五
二時百首(九二・三六一八)	六八
佛刹古瓦譜	三〇三
佛說一切如來真實攝大乘現證三昧大教王經卷十四(三十一六)	一九
佛說衆許摩訶帝經卷第十三(宋版)(三十一八五)	一六〇
佛說佛母出生三法藏般若波羅密多經卷第二十一(宋版)(三一五九)	一六一
佛足石之記(七一・一七)	一三四
武道傳來記(九三・六一七)	八四
舟辰	七三
夫木和歌抄(九二・二一九)	五六
文之	元
文臺屋次郎兵衛	四八
文林綺語抄(九〇・一一)	四六
文林摘葉集(九四・六一七)	八七五
平家物語(二〇・三一五)	三三〇
平家物語(灌頂卷成立楷梯本)(三〇・三一七)	三三一
平家物語(節附本)(六一・一九)	四三
平家物語第十二(東寺執行本)(三〇・三一七)	三三三
平家物語卷五(三〇・三一七)	三三三
丙午雜纂(〇九・一一)	九三
平亭銀鷄	六五
蔽苜館	四二〇

兵法雄鑑(三九一―一三)	三九七
平妖傳	九五
平妖傳題跋	九六
平妖傳評字解	九六
僻案愚點二百三十首(九二・五―一)	九六
辨才天本地	七九
へだてぬ中の日記(八九―一九)	三〇
辨意	一八
變化退治	七三
辨實	六三
辨なしこ草	五九
辨乳母集	六
辨々なしこ草	五九
木	
方圓奇巧(稿本)(四九―一)	四二
判官都咄	七六
豊國大明神臨時御祭禮記録(二〇五―一五)	二四三
法事靜	七三
防州日記(九四六―一)	八六
北條氏長	三九四、三九七
方丈記(九四・四―一)	八五九
法振律師	九二
蓬臆愚藻集(九二・三六―一)	九三
防長日記	八六
法妙童子	九二
ほうらい山(九三・五―一)	八三
北史(元版)(三三―一七)	三六

木笛庵瘦牛	四四五
北邊館二世富士谷	五六
北邊髓腦(稿本)(九二・二―一)	五七
保科氏之女紀行(九四六―一)	八七
星野恆	三六
細川幽齋	二九、六五
細野要齋	二七
法光山寺縁起(八五―一)	一六
法華疏私記(古活字本叡山版)(二八―一)	一六
穂向屋家集	八八
穂向屋文集(九四六―一)	八八
堀河(丹緑本)(九二・六―一)	七二
堀河(丹緑本)(九二・六―一)	七二
堀河次郎百首(群書類従本)(九二・三―一)	六〇
堀河夜討(九二・六―一)	七二
ほりかわ夜うち	七九
本因坊算砂	四六
本多利明	四八、四〇
本朝櫻陰比事(九三・六―一)	八七
本朝古今銘盡(古活字本)(三九二―一)	三九
本朝濱千鳥	八三
本朝筆道入學初門總論筆道志學警策章(七六一―一)	四三
本朝法家文書目録(三八―一)	三六
ほんてん國	七五
本間游清	三四
梵網經古迹記科(春日版)(二八―一)	一六

毎月抄(九二・二―一)	五八
舞の本(九二・六―一)	七九
舞の本(藤井本)(九二・六―一)	七〇
舞番日記(六一―一)	四四
前田綱紀	三〇
摩訶吠室羅末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀軌(八三―一)	一六
万木治兵衛	七九、七三〇
まくりでまふりて考(八一―一)	四
孫姬式	五四
匡衡集(八一―一)	八
まさりくさ(三七一―一)	三八
眞滋	六八
間島冬道	六五
眞末	一五六
松岡毅軒	三六
松岡時敏	三六
松陰中納言物語(九三・四―一)	七八
松風むらさめ(九三・五―一)	八三
松川半山	八四、八五、八二
松川(案川)半山	八五〇
松木智彦	一三九
松平定信	五
松平貞征	六六
松平忠福	六六
松平とみのり	六八
松平正剛	六八
松平康定	六八

松竹	七三
万多親王	三七七
松田道以	三九
松永貞徳	六七三
松永安右衛門	四〇五
松の落葉	七九
松の葉(九二・八一三)	七三〇
松の雪	七三
松室仲算事(九三・四一七)	七八四
松本良甫	四〇一
まつらのみや	七三
まつらのみや(九三・四一七)	七三
松浦宮物語	七三
松浦物語(九三・四一七)	七三
まとのとも(七〇〇一)	四三
曲直瀬玄朔	四八
真淵歌集(稿本)(九二・六一七)	六七〇
間宮(源)永好	五四
鞠の事(七三・一)	四五四
漫吟集(九二・六一七)	六七一
満州源流考	三五六
まんちう	七九七〇
萬葉考別記(九二・三一三)	五五〇
萬葉集(九二・三一三)	五五一
萬葉集(九二・三一四)	五五二
萬葉集(古活字附訓本)(九二・三一五)	五五三
萬葉集(近藤芳樹書入本)(九二・三一七)	五五四
漫醉集(九二・六一七)	六七三

萬葉集金澤文庫本斷卷(九二・三一三)	五五五
萬葉集歌林類聚(九二・三一四)	五五六
萬葉集註疏(九二・三一四)	五五七
以萬葉集之倭語詞詠之分(九二・六一三)	六五
萬葉集品物解(九二・三一五)	五九
萬葉類葉抄(九二・三一五)	五九
三浦(平)爲春	八六
三河物語(二〇・六一)	四七
みしま(奈良繪本)(九三・五一五)	八三
水谷不倒	八〇、九
みたまのふゆ(二〇・一八三)	三六
道の記	八〇
箕作阮甫	四〇
躬弦	七四
御手の糸下(九・四一五)	三四
御堂關白集(〇八一五)	八二
皆川淇園	九三
皆川篁齋	九三
湊川	七三
湊長安	四〇
南里有隣	四七、六五、八五、八五
〔南支那圖〕(九三・三一)	三六
源貞滋	六一
源順	一四八
源省美	八七
源孝行	五四

源忠富	三四
源利義	六一
源俊賴	五〇八、五三
源直朝(月庵)	六七
源永好	五四
源雅胤	三四
源道別	六八〇
源賴親	一八〇
三升平四郎	七五
宮川松堅	六四
貌庵旅日記(稿本)(九〇・八一七)	三六
妙顯寺	七三
妙法蓮華經安樂行品第十三(八三・一五)	一五
妙法蓮華經玄贊(八三・一五)	一六
みらいき	七〇
未來記	七九
三輪童子	七三
岷江入楚(九三・六一七)	七九
民選議院假規則(三三・二一)	三三
無逸樓集(三六・二一)	三七
向岡閑話(九・一)	三六
武藏野觀花記(九四・六一七)	八七
無住	七〇
結び松(九二・二一)	五〇
夢窓國師詠草(九二・二一)	四一
夢窓疎石	一

夢宅	六九
夢中間答集中(二八七—二九二)	一九一
六人部是香	四七、五三、六四、八五、八六
六人部是香歌集(九二・三六—一五)	六四
無二集(二〇—一五)	二〇
無名抄(九二・二—一八)	五二
無名抄(九二・二—一三)	五三
村岡春峯	二五
村上氏兵衛	七五
村上忠順	七五
紫式部	六〇、六二、七五、六二
紫式部集(九二・三—一八)	六〇
紫式部和歌集・和泉式部和歌集(九二・三—一八)	六二
むらさき日記(九四・三—一)	八五
紫の一もと(二五・二—一五)	三三
むらさきの一もと(二五・二—一七)	三六
むらさきの一もと(二五・二—一三)	三九
村さめ(九二・二—一〇)	五三
村雨日記(九四・七—一)	八二
村田春海	一四、二〇、四八、五九、六七、七五
村田了阿	二八、三一
室鳩巢	三〇
室鳩巢先生書翰(二九—一五)	三〇
名家野紙帖(七—一)	四七
名臣言行録(二二・二—一五)	三九

名例律(三—一)	三四
著屋傳兵衛	四〇
七	
蒙求	二六
蒙古諸軍記辨疑(八—一)	三五
孟子(二—三、四—一)	一〇
孟子	一〇
孟子攷(八—一)	七
茂睡真跡三十首并七首(九二・三六—一八)	六七
物集高見	一〇三
物集高世	五四六
望月三郎左衛門	四三
尤草紙(九三・三—一)	八四
本居一門筆跡(二—一)	五
本居有卿	五
本居大人遺墨展觀錄草稿(三、四—一)	一〇〇
本居内遠	五
本居大平	九五、一〇一、三三、五〇
本居大平書翰(二九—一五)	三〇
本居清島	五
本居清造(五—)	五
本居建正	五
本居豐頴	九五、一〇二
本居宣長	一四、六、九、三六、三二
本居春庭	二二、二六、五〇、五二、六三、六一、六八
本居兩大人門人姓名録(二—一)	六

警判官	七三
不求橋梨本隱家勳進百首(九二・三六—一五)	六六
もみ子家集(九二・三六—一四)	六七
桃澤夢宅	六九
模様屋太兵衛	三七
森鷗外	一五、四四、八五
森鷗外(林太郎)	四四
森田思軒	八五
森田節齋	二九〇、二九一
森田平次	三三
盛近	七三
もんかく	七九
文覺灌籠	七三
文選六臣註(直江版)(九四・二—一)	九五
ヤ	
夜鶴庭訓抄(七—一)	四六
薬師通夜物語(九三・三—一)	八五
役者二挺三味線(七—一)	四八
役者我身寶(七—一)	四九
八雲軒安元	六六
八雲のしをり(稿本)(九二・二—一)	五四
八雲御抄卷第六(古活字本)(九二・二—一)	五五
やしま	七九、七〇
八嶋	七九
屋代弘賢	三〇四
屋代弘賢書翰(二九—一)	三〇四
康定詠草(九二・三六—一)	六八

康資王母集	六一
安田躬弦	七四
也足叟	七四
柳井勇雄	七五
柳津	七三
梁川星巖	六三
柳原安子	六五、六九、六二
柳原安子詠草(九二・六一・一五)	六九
山岡浚明	七四
山岡綏忠	四八、四〇
山尾忠次郎	四〇
山尾庸三	四〇
山形屋傳兵衛	八三
山川真清	五
山川正宣	二七、五三
山本蘭亭	三七
山口素枝	三三
山口義方(董治郎)	二九
山崎五沃鬚人	三三
山崎宗鑑	四八
山崎美成	八九
山城名所記	三五
山田市兵衛	三七
山田常典	六
大和歌五穀色紙	七五
大和國地圖(五・四・一三)	三三
大和物語(九三・三三・一一)	七一
大和物語(九三・三三・一一)	七三

山根文之允	六〇
也未能狹知(九二・六一・一五)	六〇
款冬	七三
柩園類語(八三・一一九)	四一
山邊の虫(九四・六一・一三)	八〇
山村昌永	三〇六
山本九兵衛	七四、七五
山本泰順	三三
山本頓滴林	三三
山本幸民	四一
山本理兵衛	三三
山森六兵衛	三八
ユ	
由阿	五七、五八、五九
宥榮	一七
融覺	三七
宥日	三三
祐子内親王家紀伊集	六一
友禪ひいながた(五六・一一)	四九
祐範	三三
有璫	六九
幽靈楠	七三
瑜伽師地論附大唐三藏聖教序(八三・一八七)	一七
雪鬼	七三
ゆきかひ(九二・六一・一六)	六八
行方不明(稿本)(九三・七一)	八五
ゆく雁(九二・六一・一七)	六八

俞成元(高麗)	九一
夢あはせ(九二・六一・一四)	七二
夢あはせ	七九
夢かぞへ(九四・六一・一七)	八二
弓屋倭文字	六八
ゆりわか大臣	七九
ヨ	
楊榮(明)	一一
謡曲秘傳抄(九二・六一・一五)	七三
謡曲別集百番(九二・六一・一五)	七三
要集染汗意事(八八・一一)	七一
遙青子	六五
夜うちそか	七〇
夜討曾我	七九
楊定見(明)	九一
要法寺版	一八
浴恩園文庫書籍目録(〇七・一三)	五
浴呂記行(五・三一・一三)	三三
横川玄通	五八
横須賀安枝	九
横田千秋	二五
よこふえ	七五
横山保三	六五
横山由清	四九、五〇、五一、五三、五五、五四
五五、五七、五八、五九、六〇、六一、六三、六四	
六五、六六、六八、六九、七〇、七一、七三、七四	
七五、七六、七七、七八、八〇、八二、八三、八四	

横山由清雜稿(〇八一―一五)	四一八	來譽林香	一〇	隆源	一七
義興	七三	洛陽東五條松豐八幡宮草創記(七五―一五)	一四	龍公美	六一
芳員(一壽齋)	四四	洛陽名所集(二九―四一―一七)	四	隆濟	一七
吉田兼好	六三、六六、六四	亂舞狸々	七三	留春	七三
吉田治兵衛	八八	羅懋登(明)	九八	劉昭(梁)	三五、三六
吉田半兵衛	八八、八四	羅本(明)	九〇、九一	劉將孫(元)	八九
義經	七三	蘭香(四九―一)	四一	龍神七夕	七三
芳艶(一英齋)	四四	蘭奢薰(八二―一三)	一七	龍神橋立	七三
吉野拾遺(九三、四一―一)	七五			龍世華	六一
吉原はやり小唄そうまくり(九二、八一―一)	七一	リ		龍善昌	六一
吉原書籍目錄	三〇	李延壽(唐)	六四	隆達	七三
吉原天秤(三七―一七)	三九	李瀚(唐)	六八	隆達小歌集(九二、九一―一五)	七三
吉原よぶこ鳥(三七―一三)	三九	李嶠(唐)	八四	柳亭種彦	三九、三〇、四〇、八四
依田學海	八三	李嶠雜詠	八四	隆範	一五
四辻善成	七六	陸德明(唐)	一三	涼月遺草(稿本)(九二、三六―一五)	六八
よはのねざめ(九三、三六―一三)	七六	李衡	六九	廖言(明)	三六
呼名考(〇八一―一)	七三	李皎然	八三	了悟	三六
萬屋清兵衛	七九、八四、八六、八七	李贊(明)	一三、九三、九〇	領孝	一三
萬屋彦太郎	八四	李之藻(明)	四二	良濟	一八
ラ		李卓吾先生批點西廂記真本(明版)(九三―一三)	九三	了俊	一五
賴聿庵	二七	李鼎元(清)	三五	亮承	一八
賴杏坪	三五	李昉(宋)	一八	梁塵愚案鈔(九二、五―一五)	六九
賴杏坪尺牘(二九―一五)	三五	劉會孟(元)	八九	梁塵秘抄卷第二(九二、五―一)	七〇
賴山陽	二六、二七	琉歌百控(九九、六―一)	八九	梁塵秘抄口傳集(九二、五―一)	六九
賴梅颯	二七	劉希賢(明)	九五	〔陵圖〕(二八、二―一)	三三
賴三樹三郎	二〇	劉向(漢)	八三	陵地私考(二八、二―一五)	三六
		龍宮狸々	七三	李幼武(宋)	三六
				林宇冲(宋)	四一

林華堂	四〇三
輪官	七三
臨齋居士明	三五
林窓庵	四〇六
林葉和調集(九二・三三―イ三)	六三
ル	
類句(九二・三一―イ三)	五六
類字萬葉集(九二・三一―イ四)	五六〇
類聚歌苑卷第十三(〇八一―イ五)	八四
類聚要句(九二・三一―イ六)	五七
類題六帖(九二・三一―イ三)	五八
レ	
伶玄(漢)	九四
令狐德柔(唐)	二六〇
冷泉爲家	二六九
冷泉爲景	二六三
冷泉爲清	五九三
冷泉爲相	六三
〔冷泉爲相卿百首和歌〕(九二・四一―イ三)	六三
冷泉爲孝女	六二
冷泉爲久	五二
連歌沙汰聞書	五七
連空	七〇
連如	一八五、一八六、一八七、一八八、一八九
戀々山人半水	三六六

ロ	
老子道德經	一三四
老聃(周)	一三四
魯巖(宋)	九〇
六字呪王經(明版)(二六―イ九)	一六
六十日記(稿本)(九四七―イ三)	八三
魯西亞船渡來之節書狀之寫(三〇六―イ三)	二四八
六家類句和歌(九二・三一―イ九)	五九
六百番陳狀	四八七
論語(二三・三一―イ九)	二四
論語(正平版無跋本)(二三・三一―イ二)	二六
論語(天文版)(二三・三一―イ三)	二五
論語(天文版)(二三・三一―イ七)	二七
論語(要法寺版)(二三・三一―イ一)	二八
論語	二〇
論語抄(二三・三一―イ五)	二九
ワ	
和英對話集初編(八三―イ一)	四六六
商賈對話集	五六一
若泉水	五三〇
和歌會次第(九二・三一―イ九)	五三〇
和歌書樣和歌會次第(九二・三一―イ五)	五二
わかくさ(奈良繪本)(九三・五―イ九)	八四
和歌口傳(九二・三一―イ七)	五三
和歌口傳	四八五
倭調五十人一首・同追加(九二・六―イ七)	六八四
若駒考(〇八一―イ二)	四三

若狹國傳記(二五・三一―イ五)	三三
和歌座右(九二・三一―イ五)	五二
和歌三式(九二・三一―イ五)	五四
和歌三身大事(九二・三一―イ五)	五五
和調色葉集(九二・三一―イ六)	五六
和歌大綱附連歌沙汰聞書(九二・三一―イ五)	五七
和歌題林抄(九二・三一―イ三)	五六
和歌無底抄考(〇八一―イ二)	四
和漢朗詠集(九二・五―イ三)	七一
和漢朗詠集(九二・五―イ五)	七〇
和漢朗詠集(九二・五―イ七)	七〇
脇坂安元	四七
和國筆道三秘略鈔(七六―イ七)	四四
和國筆道十二字略鈔(七八―イ七)	四四
和算研究集錄	四七
和州南都之圖(二五・四―イ一)	三六
わたさかもり	七九、七〇
渡邊明	三五
渡邊重石丸	二五
渡邊(渡のへ)直磨	六一
度會公祐	三五
度會常長	六八
度會(松木)智彦	三九
度會(黒瀬)益弘	三九
和名集并異名製劑記(古活字本)(四四―イ一)	四七
和名類聚鈔(〇三一―イ五)	一四

昭和二十六年十月十五日印刷
昭和二十六年十月十八日發行

編輯兼
發行者
奈良縣丹波市町
天理圖書館

右代表者
富永牧太

印刷者
奈良縣丹波市町
天理時報社

右代表者
岡島善次

